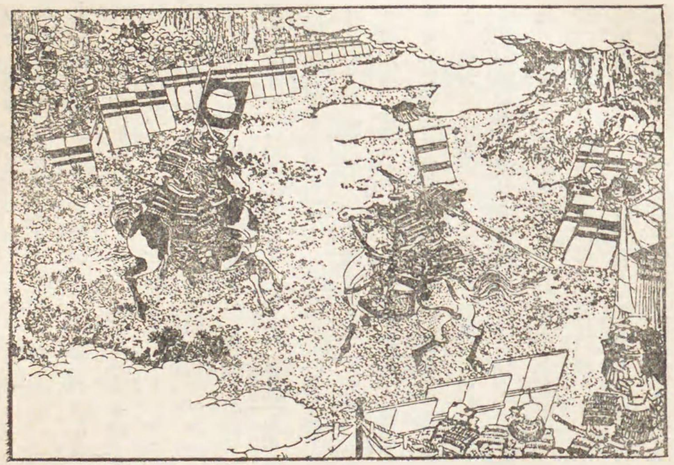
六年　六年、信玄、兵を上野に出し、蓑輪、松枝の諸城を取る。又飛驒を略し、其豪族江間常陸を降す。而るに白谷氏、款を謙信に納る。謙信、是に於て、信玄と飛驒を分領す。謙信自ら將として越中に入り、松倉、小出を抜き、嘗て爲景を殺したる者、江波氏を獲たり。其族十六人を合せて、盡くこれを誅し、首を桁橦野に梟して、爲景に祭告す。

是の歳、謙信、上野に入り伊勢崎を取る。四月、下總に入り、臼井を攻め、北條氏の援軍と戰ひてこれを走らす。

七年　上杉、武田、北條三氏相和す【四郡】高井水内、埴科、更科【一カ人】上杉氏は長谷輿吾を出だし武田氏は安馬彦六を出だす上杉武田力人を出して勝負せしむ

是より先、常陸の小田氏治、謙信に屬す。已にして款を北條氏に歸す。謙信怒る。七年正月朔、雪を冒して越後を發して、常陸に入る。攻めて小田城を陷る。二月、佐野昌綱を上野に攻む。五月、北條氏康來り援ふ。逆へ擊ちてこれを走らせ、昌綱を降す。會ま足利氏の使者來りて、勅旨を傳ふ。上杉、武田、北條の三家に諭し、和を講じ兵を息めしむ。八月、謙信、自ら信濃の境上を巡視す。信玄も亦出て營を對し、兩家の諸將、交ゝ其君に說きて曰く「君、四郡の故を以て、强敵と兵を構ふること十二年、多く士卒を喪ふ。祇四隣の幸たるのみ。爲す無かれ」と。二人、之を然りとし、乃一カ人を選みて鬪はしめて、勝つ者河中を取るを約す。上杉氏の力士鬪ひて勝つ、信玄乃獨貝津の一城を取り、其餘盡く謙信に屬す。謙信乃、村上義清、高梨政頼等に復し、其故邑を按ぜしむ。謙信、精舍を春日山に築きて、不識庵と號す。盡く將士の難に殉ぜし者を牌して、自之を弔祭す。

定行政景と共に溺る　是より先、謙信、長尾政景をして、上田を守らしめて、信玄に備ふ。已にして之を忌む。其叛を謀ると告ぐる者あり。諸親信を召し、密に之を誅せんと議す。宇佐美定行諫めて曰く「政景の叛狀未だ著れず。之を誅せば、恐らくは騒擾を招き、上田の要害折れて武田氏に入らん。君、又姉の夫を殺すの名を負はん」と。謙信聽かず。定行をして之を圖らしむ。定行、乃、其邑の野尻に歸り、政景を招きて漁を湖中に觀る。漏船を以て迎へ載せ、政景を捉へて同じく溺る。「私に憾みて相殺す」と宣言す。因りて定行の邑を沒入して、陰に其子に祿し、政景の子景勝を收養す。鐵安朝をして、代りて上田を守らしむ。



（兩陣勇士各一騎を出して河中島を定むる圖）

河中島の役に、謙信、武田義信に襲ひ敗られし時、曰く、「吾れ乃小兒に輸けたり」と。本莊繁長、長尾藤景救ひ援けし功あり。又竊に之を笑ふ。謙信、之を悪みて藤景を誅す。繁長自危み、叛きて其邑に據る。兵を遣して之を討つ。距堙を作りて圍み守る。數年にして降る。

義信、勇敢にして善く戰ふ。將士心を歸す。信玄、之を忌む。其已に倣ふを恐るるなり。勝頼、庶子を以て、陰に嫡を奪ふの志あり。乃飯富兵部の弟昌景と謀り、人をして、「義信は兵部をして、軍陣に就きて、信玄を圖らしむ」と誣告せしむ。昌景、之を證す。信玄、義信を囚へ、盡く其親信を誅す。兵部に死を賜ひ、其部兵を昌景に屬せしむ。氏を山縣と改む。終に義信をして自殺せしめ、義信の妻を駿河に歸す。今川氏、始めて武田氏と悪し。武田氏既に上杉氏を慮らずして、其兵を西に出す。

初め信玄、謙信、共に武を中原に伸べんと欲す。而れども兵、結び解けず。未だこれに及ぶに暇あらず。謙信の再京師に入るとき、三好長慶、權勢方に熾なり。家臣松永久秀、政を專にす。其吏徒、途に謙信に遇ひて禮せず。謙信決する

八年
將軍義輝弑せらる
九年
信長義昭を擁立す

信玄今川氏と絶つ

十一年

能はずと雖、心之に依頼す。久秀等、頗る之を聞きて懼る。
八年、義輝、密に使をして、謙信を召さしむ。久秀等、大に懼る。其未だ來らざるに及びて、大事を行はんと欲す。遂に義輝を弑す。義輝の弟義昭、逃れて近江に走る。
九年、書を以て來り、謙信に託するに興復を以てす。議輙く成らず。義昭、遂に織田信長に美濃に依る。信長、義昭を擁して京師に入る。遂に近畿を略定し、頓に强大を致す。顧て謙信、信玄が其後を議するを恐る。又自二人の敵に非ざるを知るなり　乃、意を傾けて信玄に結びて、謙信を控す。使幣、甲斐に相踵ぐ。信玄、其意を知り、動もすれば輙約を敗り、其兵を西せんと欲す。信長之を患ふ。乃其季子秀勝を送りて質と爲し、女を以て勝頼に妻す。信勝を生む。義信、死するに及びて、信勝を立てゝ嫡嗣と爲す。而して勝頼之を護る。信勝の母死す。信長、又其子信忠の爲に、信玄の女を娶らんと請ふ。信玄、織田氏と婚し、遂に今川氏と絶つ。
是より先、今川義元、信長と戰ひて敗死す。其子氏眞、暗弱にして、嬖臣三浦義鎭に任ず。國人服せず。我が德川公、嘗て今川氏に屬す。亦去りて織田之に屬す。兵力日に强し。是の時信虎猶在り、信濃に流寓す。人をして信虎に言はしめて曰く、「駿河亂る。將に德川氏の有つ所と爲らんとす。汝宜しく先之を取るべし」と。信玄答へず。
信玄の國、海に濱せず。鹽を東海に仰ぐ。氏眞、北條氏康と謀りて、陰に其鹽を閉づ。甲斐大に困しむ。謙信之を聞き、書を信玄に寄せて曰く、「氏康、氏眞、君を困しむるに鹽を以てすと聞く。勇ならず。義ならず。我れ公と爭へども、爭ふ所は弓箭に在り。米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我國より取れ。多寡は唯命のまゝ」と。乃賈人に命じ、價を平にして之を給す。
信玄、間者をして駿河を伺はしむ。曰く、「取る可きなり」と。陰に國人を招き、約して內應を爲さしむ。十一年十二月、兵を引き南駿河に入りて、八幡阪に軍す。氏眞、兵を擧げて淸見寺に拒ぐ。軍潰え、走りて府

薩埵山に陣す

馬場信房議を進む

十二年

【八王子】武藏

中に歸り、遂に掛川に走る。信玄隨ひて之を攻めんと欲す。而して氏康の來り救ふを慮りて、乃軍を府中に止む。諸降附の任子を取り、送りて甲斐に致す。菴原某、嘗て山本晴行と交ると聞き、召して要地の城く可きところを問ふ。久能及び興津を以て答ふ。乃之に城く。
氏康、果して大兵を以て來りて、駿河を爭ふ。氏眞を復するを以て名と爲す。信玄、兵を留めて府中を守らしめ、而して自興津に軍す。氏康、薩埵山に軍す。相持して未だ戰はず。信玄曰く、「氏康數兩上杉と戰ふ。兵を用ゐること遲緩與し易きなり」と。因りて將士に酒を飮ましめ、問ひて曰く、「猶寒きか」と。曰く、「寒し」と。信玄曰く、「我れ平地に陣し、酒を飮みても猶寒し。彼山上に陣す。寒きこと知る可し。必下りて其麓に在らん」と。人をして其陣を伺はしむ。陣、果して人なし。乃其糧仗を奪ひて返る。後、數、戰を挑めども決せずして、四月に至る。信玄、計を諸將に問ふ。馬場信房曰く、「臣嘗て啄木の蟲を啄むを見るに、蟲を前に出さんと欲すれば、先其後を啄む」と。信玄、默然として曰く、「然り」と。夜軍を收めて歸る。氏眞遂に相摸に走る。三浦義鎭、德川氏に誅せらる。
十二年六月、信玄、駿河に出づ。遂に伊豆に入り、鳴島に軍す。大雨に會ひ、流潦陣を浸す。引きて返る。是に於て氏康の兵、專西面を防ぎ、小田原に在る者は甚寡し。信玄諜して知り、之を攻めんことを議す。高阪昌宣諫めて曰く、「彼れ已に謙信に懲る。戰守を講ずる必悉さん。君深く之に入りて、一たび蹉跌あらば、前功悉く廢らん。而して謙信、將に其後に乘ぜんとす」と。聽かず。
九月、兵を八王子に下し、敵の城邑の下らざる者を攻む　過りて南小田原に入り、火を城下に縱つ。十月、引き返りて、北條氏の二萬の兵に三增嶺に遇ふ。諸將を召し、內藤昌豐に命じて、輜重を掌らしむ。昌豐辭す。信玄曰く、「前に謙信、輜重を失ふのみ。故に小田原に敗る。是れ重職なり」と。八伏を設け、兵の交るに及びて、夾み擊ちて之を破る。歸りて、昌宣に謂て曰く、「如何ぞや」と。昌宣曰く、「是れ僥倖のみ」と。信玄、忠讜を嘉す。相摸の兵駿河を戍る者、難を聞き守を棄てゝ返り救ふ。信玄、之を瞰ふ。

九城を抜く

【介弟】異父弟の久松義勝なり
織田氏
武田氏
北條氏
上杉氏

【三國嶺】上野

元龜元年
【飯盛城】信濃

厩橋に入る

十一月、急に駿河に出で、九城を抜く。獨、蒲原下らず。信玄、府中に赴くと宣言して、兵を城傍の山中に伏せて西す。敵、城を空くして、之を追ふ。伏、起りて城を取る。遂に府中及び諸城を陷る。德川氏と、大井河を割きて界と爲す。織田信長、書を以て、來り請ひて曰く「松平家康は、僕の最眷顧する所の者、公、幸に之を指教せよ。家康の介弟、今川氏に在り、公、宜しく取りて以て質と爲すべし」と。關東北陸の諸國、皆使をして戰捷を賀せしむ。

是に於て、信玄の國、南海に傳り、謙信の國、北海に傳りて、以て海内を横絶す。北條氏は其東に在り。織田氏は其西に在り。織田氏は援を信玄に求む。是の歲春、謙信攻めて武藏、下野の諸城を陷る。北條氏は援を謙信に求む。而して謙信未だ之を肯ぜざるなむる能はずして、能登亂るゝに會ふ。上杉義春を遣して、之を治めしむ。秋、越中に入り、神保長純を攻む。畠山義則、其下を治是の時に當りて、謙信、連に加賀、越中を略して、時に關東に出づ。兵行くこと神速にして、敵、測る能はす。毎に軍を懸け、八州に横行す。八州の諸城、其來るを聞き、震慴して、敢て出でず。其還りて三國嶺に上るを聞きて、然る後相告げて嚴を解く。雷雨の過ぐるもの、如し。

元龜元年、佐野昌綱の族、飯盛城に據りて、昌綱と鬪ふ。北條氏政、四萬騎を以て之を助け攻む。昌綱急を謙信に告ぐ。正月、謙信、卽、發して晝夜兼行す。氏政、將に其兵を分ちて己に當らしめて、急に攻めて、城を拔かんとするを聞くや、諸將に謂て曰く、「饒我戰ひて、氏政に勝つも、城の陷るを救はざれば益なし。吾れ當に獨身、城に入りて堅く守るべし、汝等、義春を推して將と爲し、繼ぎて進め」と。乃、獨、八十騎と、氏政の陣前を過ぎて城に入る。謙信、黑綿衣を穿ち鎧を被らず。十字槍を提げて騎行す。敵軍、指目して曰く「謙信なり」と。而して大に驚き、敢て遮り擊たず。諸將、尋いで至る。北條氏の軍潰え走る。謙信遂に飯盛を屠りて、下野、下總を徇へて、厩橋に入る。北條氏康、氏政の敗るゝを聞き、二萬騎を將ゐ出でゝ援く。河越に陣し、相持すること三月、使をして和を請はしめ、其季子三郎を質とす。謙信、諸將と

【質子】久松義勝氏政和を信玄に乞ふ

二年

三年

議して、之を聽す。富田の大中寺に會見して、三郎を携へて歸り　其故名を授けて景虎と曰ふ。

四月、氏康、駿河に入りて深澤を攻む。下らず、又謙信に請ひて、兵を上野、信濃の間に出して以て、信玄を麾ぐ。信玄、自、將として出でゝ拒ぐ。交絕して退く。

十一月、德川氏の質子遁れ去る。是に於て、信玄、德川氏と絕つ。而れども織田氏　聘問益厚し。時に氏康病みて卒す　氏政、和を信玄を請ふ。將士皆許す勿れと說く「喪に乘じ之を擊ちて、盡く其地を取る謙信と雖、支ふる能はざるなり」と。信玄曰く「吾れ夙に兵を東海に出し、海を並せて西し、旗鼓を京師に建つれば、則吾れ死すと雖も、憾みず。前に賢人あり。我が脉を診して謂く、『當に篤疾に罹るべし』と。吾れ關東を經營し、中道にして疾作らば、志成す可からざるなり。信長、吾が輩の西せざるに乘じ、家康を以て、我が西面に當りて、陰に之を助く。甚だ其計憎むべし。我れ氏政と和し、西、信長を治せんと欲す」と。十二月、遂に氏政の質を納れて、氏眞を逐はしむ。氏眞、走りて德川氏に倚る。時に信長、義昭と相隙す。

二年二月、信玄兵を引きて、東に出でゝ、遠江に至り、高天神城を攻む。四月、三河に入りて、八城を陷る。德川氏出でゝ援く。甲斐の陣、嚴整にして犯す可からざるを觀て、敢て接戰せず。信長、義昭の謙信、信玄を招くを聞きて懼るゝこと　甚し。乃、益々、信玄に媚事し、書を以て、謝して曰く「家康、貴國に密邇す。恐らくは違失あらん。僕、當に之を訓督すべし。幸に尤めらるゝ勿れ」と。信玄答へて曰く「老夫知らざるなり」と。德川氏、使を發して、好を謙信に通じ、誓書を載せて、信玄を夾み擊たんと請ふ。村上義清の子國清、越後に寓す。力めて之を贊成す。三年四月、謙信、萬人を將ゐて信濃に出で、火を長沼に縱ちて以て遙に德川氏の聲援を爲す。勝賴、伊奈に在りて、寡兵を以て我に當る。信玄の兒に愧ぢず。吾れ其勇を成さしむる也」と。兵を引きて還る。越中に入りて椎名、神保氏を夷ぐ。

三形原

【刑部】遠江

天正元年【野田城】參河

岩村城

信玄信長を屈す

信玄遺言

（武田信玄肖像）

十月、信玄、謙信の雪に阻められて出づる能はざるを計り、則ち復た遠江に出でて、二俣城を抜く。信長、潜に兵を遣して、徳川氏を援く。十二月、信玄進みて三形原に陣して、以て濱松城に薄る。火を城下に縦ちて戦を挑む。城兵出でず。信玄、伴り退く。城兵大に出づ。上原能登、小山田昌行に謂て曰く「徳川氏の陣は單なり。織田氏の旗動く。敗る可きなり」と。昌行以て信玄に告ぐ。信玄乃ち旆を返す。昌行、勝頼及び山縣昌景、馬場信房と、先鋒たり。昌行、昌景、先合して卻く。勝頼、信房、之を承けて、其麾下を衝く。信玄、乃米倉丹後を遣し、間道より横に撃ちて大に之を破る。諸將、遂に濱松を攻めんと請ふ。高阪昌宣曰く、「不可なり。我れ之を攻むること二旬にして抜けず。信長必ず大擧して來り援けん。相持すること數月にして、謙信、信濃に出でば、則我れ返り救はざるを得ず。信長、則ち曰はん、『我れ能く武田氏を卻く』と。是れ威名を損ずるなり」と。信玄聽さずして轉じて、三河に入り、平谷に次す。四月、疾復た作る。自其首を信長に送り、讓めて之を絶つ。信長猶分疏して已まざりき。天正元年正月、信玄、野田城を抜き、信長の五罪を數へ、信玄之を辭して、信長の使を留めて之を斬る。信長、將軍義昭に請ひて、信玄を諭して兵を弭めしむ。信玄信長を誘ひ降さしむ。城將の妻は、信長の姑なり。晴近、奪ひて之を納る。京師に入らんと。二月、秋山晴近をして、岩村城を抜き、疾作りて歸る。信長、將軍義昭に請ひて、信玄を諭して兵を弭めぐ。山縣昌景、八百騎を以て之に馳す。信長、戦はずして走る。和を乞ふこと益力む。信玄、聽さずして轉じて、三河に入り、平谷に次す。四月、疾復た作る。自起つべからざるを度りて、諸將を召して、後事を處す。勝頼に衆を攝して、以て信勝の長ずるを俟たしむ。之を誡めて曰く「汝、愼みて兵を住くして、以て我が國を亡す勿れ。吾れ死せば、天下獨一の謙信有るのみ。汝、援を請ひて國を以て

信玄卒す

【空頭華押】空紙に唯華押を畫するなり

【孫子の語】軍爭第七旋銘

（武田信玄華押）

謙信、信玄の死を聞て泣く

勝頼

【長篠】三河

【黒瀬】遠江

二年【二氏】徳川氏、織田氏

之に託せよ。彼れ一たび汝の託を受けば、必ず隣國と合して、以て汝を侵さざらん」と。言畢りて昏迷す。已にして山縣昌景を呼びて曰く「明日汝の族を瀬田に樹てよ」と。乃卒す。年五十三なり。諸將遺命を以て喪を秘す。信玄の弟信綱の貌、信玄に肖たるを以て輿に之を載せて歸る。曰く、「信玄疾あり」と。國に歸る」と。昏夜を以て、四方の使者を延見す。信玄又豫空頭華押數百紙を具へて、以て書問に備ふ。故を以て來り犯す者なし。信玄、居常、略書志に渉る。嘗て、孫子の語を以て、其族に書して曰く「動かざるは山の如く、侵掠するは火の如く、其靜なること林の如く、其疾きこと風の如し」と。馬場信房問ひて曰く「風疾しと雖、倏起り倏止む者に非ずや」と。信玄曰く「兵鋒は疾きを貴ぶのみ。苟も止めば則吾れ麾下を以て之に繼がん」と。信房曰く、「君は第二合の勝を要するなり」と。其君臣の武事を講究するは、皆此の類なり。四隣頗る信玄の死を聞く。北條氏政、使を馳せて之を謙信に告ぐ。謙信方に食す。箸を舍て、歎じて曰く、「吾れ好敵手を失へり。世復此の英雄男子あらんや」と。因りて潜然と涕を流すこと、之を久しくす。甲斐の宿將馬場信房、山縣昌景、内藤昌豊、高阪昌宣の四人、交勝頼に說きて、和を謙信に請はしむ。勝頼聽かず。勝頼、性剛愎にして自用ゐる。長阪調閑、跡部勝資、信玄の時より已に近幸せられ、勝頼、益々之を寵す。勝頼、兵を美濃に出さんと欲す。四將交々不可を言ふ。調閑、勝資、之を勸めて出さしむ。三河の軍、長篠を圍むに會ひて、乃止む。五月、勝頼、信房を遣し、長篠を援はしむ。將士之を追はんと欲す。信房曰く、「其煙白し。營を燒くに非ざるなり」と。騎をして往きて之を踐まむ。果して伏あり。乃退きて黒瀬に次す。城陷りて歸る。昌景、濱松に向ふ。亦利あらずして歸る。二年二月、勝頼、美濃に出でゝ、諸砦を陷る。五月、攻めて高天神を陷る。歸りて將士を宴す。昌宣、昌豊、相謂て曰く、「武田氏の滅ぶる、此宴に兆す」と。昌宣、說きて曰く、「君、勝に狃れて戦めず。怨を四

【二歩】調閑
勝資
【伊奈】信濃

信長款を謙信に通ず

謙信西伐す
【木船城】越中
七尾陥

謙信詩を賦す

隣に構ふ。長久の計に非ず。宜しく地を二氏に返し、之と連和し と 二歩、沮みて止む。已にして二歩、勝頼に勧めて遠江に出で、天龍河を濟りて敵に遇ふ。戦はずして還る。還りて伊奈に至る、信虎ここに在り、年已に八十なり。乃載せて歸らんと欲す。其狂暴を視るに故の如し。乃止む。

四隣、甲斐の兵數、競はざるを覩て、信玄定めて死したりと知り、稍之を窺ふ。信玄の死せしより、信長、意を謙信に專にす。辭を卑くし禮を厚くして、之に事ふること、猶信玄に事ふるが如し。其妹を以て神保長純に嫁す。長純は上杉養春の兄、謙信に屬する者なり。信長因りて陽に謙信に結びて、陰に之を圖るなり。又陰に計を以て、上杉氏の諸將を招き、款を己に歸せしむ。謙信、書して其反覆を詰む 信長、答書して陣疏す。謙信聽さず。會畠山義隆の將遊佐彈正等、義隆を毒殺し、七尾城を以て信長に降る。

七月、謙信、兵三萬を將ゐて西伐す。長純を木船城に攻めて之を拔く。遂に加賀に入り、金澤を屠る。兵を移して、七尾を攻む。義春を以て將と爲し、努力して、復、能登を取る。遊佐等援を信長に乞ふ。信長、方に長島を攻む。來る能はず。九月、城陥る。遊佐等を誅す。乃、兵を休むること二日、十三夕に屬し、月色明朗なり。謙信、酒を軍中に置き、諸將士を會す。酒酣にして自詩を作りて曰く「霜は軍營に滿ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山并せ得たり能州の景、遮莫家鄉遠征を憶ふ」と。將士の歌詩を善くする者をして、皆之を和せしむ。遂に政を國中に爲して歸る。

信長、大兵を遣して、來り援はしむ 城陥ると聞きて 引き去る。

信長、猶使をして、罪を謙信に謝せしむ。長篠を守らしめ、以て甲斐に備ふ。

是の歳、信長、三河の將奥平信昌を招き降して、內應を爲さんと約す。勝頼、往きて檜城に陣す。大賀三年四月 三河の計吏大賀某、陰に款を甲斐に送り、某 覺はれて誅せらると聞き、乃還る。

【汎】豊河

馬場信房戰死す

安土城

松任城

五月、勝頼、萬人を以て昌宣に附し、留りて越後を拒がしめ、自ら一萬五千を以て長篠を圍み、道虛寺に軍す。叔父信實をして、鳶巢の壘を守らしむ。徳川氏、援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。使者三反すれども許さず。使者請ひて曰く「援はざれば、則遠江を武田氏に納れて、之が爲に先驅して、以て尾張を取らん。且信玄、已に死せり。公、何ぞ怖るゝの甚しきや」と。信長、乃自將として來り援ふ。兵、凡七萬、猶甲斐の騎兵と衝突するを憚りて、柵を植つること三層、守るに萬銃を以てす。勝頼、戰はんと欲す。信房、昌景、昌豊等、皆諫めて曰く「敵衆、新に來る。其氣銳なり。且之を避くるに若かず。不らざれば則疾く城を攻めよ。我が兵を損ずと雖、猶拔きて歸る可きなり」と。二歩曰く「一戰して兩敵を夷ぐるは今日に在り。老怯の計を聽く勿れ」と。信房曰く「今日の戰、老怯なる者は、必死せん。公等の若きは乃遁走せんのみ」と。勝頼、遂に室賀行俊、小山田昌行を留めて、城を圍ましめ、自ら進み、河を濟りて陣す。旦日、敵、間道より鳶巢を襲ふ。信實、敗死す。我が陣顧て動く。敵衆、戰を挑む。昌景、左の先鋒たり。進みて敵の柵を犯し、丸に中りて死す。室賀行俊、來り請ひて曰く「圍解く可きや否や」と。信房、右の先鋒たり。眞田則幸、土屋直村と、柵を破りて進む。則幸、直村も亦、丸に中りて死す。室賀行俊、人をして馳せて勝頼に白さしめて曰く「君、速に去れ。臣請ふ、留まりて之に死せん」と。八十騎と止まり戰ひ、盡く其騎を失ふ。自高邱に登り、顧て勝頼を視る。已に遠ざかれり。乃、敵に號して曰く「我は馬場美濃なり。宜しく斬りて以て重賞を受けよ」と。敵、之を叢刺して死す。二歩先遁る。昌宣、豫、軍敗るゝを慮るや、兵八千を以て境上に迎へて歸る。因りて大に諫め、北條氏、婚し、以て二氏を信長、既に大に捷。謂く「甲斐は患ふるに足らず。患ふる所は、獨謙信のみ」と。乃大に安土に城きて之に移り、以て北進に備ふ。柴田勝家、其最驍將たり。因りて越前を守らせ、北莊に居らしむ。八月、謙信、兵を將るて加賀に入り、松任城を攻む。城將蕪木高秀、援を信長に乞ふ。信長、五萬人を將るて、

勝頼北條氏と婚す

四年

前田利家

來りて御幸塚に陣す。勝家、先鋒たり。謙信 疾く攻めて城を抜く。高秀を斬りて其首を齎し 信長に贈りて曰く、「頃、本城を攻む。相公、遠く來りて援けらる。幸甚なり。然れども城將已に首を授く。謹みて此に奉贈す。公、當に一戰、以て之を弔ふこと有るべし。明早、將に相見んとす」と。信長、許諾して、夜に乘じて軍を退く。八伏を設けて竢つ。諸將追撃せんと請ふ。謙信曰く、「信長、豈、徒に歸る者ならんや」と。亦引きて歸る。

是の歳、勝頼、使をして、和を謙信に請はしめ、織田氏に報ぜんと欲す。謙信、之を許して、其質子を徴す。肯ぜず。會〻徳川氏二股を攻む。城將依田幸成、固く守りて下らず。乃、諏訪原を攻め陥れて、遂に小山を攻む。勝頼、使をして、和を謙信に請はしめ、織田氏に報ぜんと欲す。謙信、之を許して、其質子を徴す。肯ぜず。會〻徳川氏二股を攻む。城將依田幸成、固く守りて下らず。乃、諏訪原を攻め陥れて、遂に小山を攻む。勝頼曰く、「彼れ、我れ復出づる能はざると謂ふか」と。乃、兵二萬を募りて之を援く。敵、圍を解きて去る。十二月、幸成死す。徳川氏、復來りて攻む。幸成の子信蕃、之を拒ぐ。勝頼、命じて城を弃てて退かしむ。岩村の城主秋山晴近、又降る。信長、手づから其姑を及す。是の月、勝頼、北條氏の女を迎へて、婚を成す。昌宣、退きて人に謂て曰く、「今夕、吾れ枕を高くするを得」と。

四年春、勝頼、兵を遠江に出して、徳川氏と横須賀に相持す。勝頼、戰はんと欲す。昌宣、諫めて曰く、「長篠の役に多く老將を失ふ。獨、臣の存する有るのみ。今又之を殺さんと欲するか」と。勝頼、乃退き、相良に城きて歸る。

越後の將士、謙信に說きて曰く「甲斐の兵、新に敗る。乘ず可きなり」と。謙信曰く、「我れ信玄と數十戰して取る能はず。其死するに及びて弱子を侮り、敗に乘じて之を取らば、何を以て天下に對へん」と。三月、謙信、越中に入る。蓮沼を取り、椎名蔀種を獲て、之を殺す。別將をして飛驒に入らしめて、江馬氏を夷げしむ。遂に自加賀に入りて、小松を攻む。織田氏の將前田利家等、來り援く。先鋒を以て擊ちて、之を破る。川田長親をして越中を守らしめ、柿崎景家に能登を守らしめて還る。

信長、謙信の西向するを患へて、日夜之を禦ぐ所以を謀る。柿崎景家、人を遣して、馬を上國に市らしむ。

【一向賊】一向宗の徒

【三城】穴水小松、安宅【石動橋】越中

金澤陥る

謙信書を信長に遺る（上杉謙信華押）

【八州】越後越中、加賀、能登、飛騨、信濃、上野、佐渡

信長返書す

信長喜びて曰く、「以て間す可きなり」と。乃直を給すること十倍し、自書して謝す。更に佳鷹を索む。景家、其直を貪りて數鷹を給す。後、其款を通ずと告ぐるものありて、終に殺さる。信長、陰に能登の人長重連、加賀の人松任彦紹を招きて、一向の賊を誘ひて北向せしむ。

五年、重連、兵を聚めて穴水城に據る。小松、安宅、大道山の諸城、並に起りて之に應ず。是の時に當りて、筒井順慶、松永久秀等、大和に據り、遙に款を謙信に送り、其西上を請ふ。又、西、毛利氏に約して、東西より信長を夾み攻む。九月、謙信自、將として攻む。信長、柴田勝家、前田利家等の五將を遣し、兵四萬八千を將ゐて來り援けしむ。而して己も、亦潜に來りて之を助く。謙信攻めて三城を抜き、進みて石動橋に至り、織田氏の軍を距ること十里にして陣す。使をして明暁の會戰を約せしむ。信長、夜に乘じて逃る。謙信、大に笑ひて曰く「信長、奔るに巧なる者なり。其をして猶在らしめば、當に盡く之を水に踈すべきのみ」と。遂に進みて金澤を攻めて、之を陥る。越前に入り、行織田氏の壘寨を攻め、盡く其守兵を驅り、焚掠して進む。煙塵天を蔽ふ。信長、退きて北莊を保ち、遂に退きて長濱に入る。

謙信、天寒く雪下らんことを以ひ、又久秀等、已に敗死せしを聞き、軍を班さんと欲す。乃警を信長に遣りて曰く、「信玄既に死す。公、則四郎を家康に委ねて、自安土に居るは、蓋し謙信に備ふるならん。公、數畿内の敵と樂戰す。未だ北人の技倆を觀ざるのみ。請ふ、明春三月十五日を期し、聊か八州の兵を擧けて西上して、公に相見えん。公、謙信を視ること、皮履を穿く都人士と同じくする勿れ」と。時に京師の人、喜みて皮履を穿く。故に云ふ。使をして、書を齎して因りて越後に還りて越後公に報ぜよ。信長、使者を延見し、言て曰く、「吾が爲に還りて越後公に報ぜよ。信長、何ぞ敢て公と角せんや。公來らば、將に盡く刀劍を脱して、獨扇を腰に挿み、單騎迎へ謁し、先導して以て都に入らんとす。公は義人なり。信長、辛苦して經營せ

信長勝頼に舊好を修めんとす

六年

謙信卒す

上杉謙信肖像

【景勝】長尾政景の子なり。政景、輝虎の姉を娶りて景勝を生む

し所は、必奪はれざるべし」と。使者復命す。謙信哂ひて曰く、「信長姦雄なり。甘言以て我を意らすのみ。聞く、長篠の役に、渠柵と銃とを以て、甲斐の四郎を困しむ。明年、復必此を以て我に擬せん。我れ豈其計に墮ちんや」と。十月、越後に歸る。間日、檄を傳へ、大に管内八國の兵を發せしむ。期するに三月五日を以てす。加賀以西の兵、沿道に附き從ふ。京畿大に震ふ。

信長、舊好を修めんと請ふ。曰く、「謙信、西上す。我れ家康と信長、使をして之を勝頼に告げしめ、前故を捐てゝ舊好を修めよ。事克たば、則其地は唯公の取る所」と。勝頼答へず。之を北道に拒がん。願くば公、直に越後を指せよ。

六年三月、北陸諸國の兵、檄に應じて、雲の如く集る。謙信、自臨みて簡閲し、將に發せんとす。發するに先だつこと二日にして疾作る。二日にして四十九。卒の信玄に後るゝこと五年なり。

約束を申ねて、遂に卒す。年四十九。卒の信玄に後るゝこと五年なり。

直江兼續、本莊繁長等の諸大臣、相共に謀りて曰く、「三郎は、上杉氏の胤に非ず。胤は乃景勝なり。且親姪なり。宜しく立つべし。三郎を立つれば、北條氏必因りて以て、北陸を併呑し、吾が輩、皆之が臣僕と爲らん」と。是に於て、上杉養春を遣し、命を矯めて、急に景勝を上田に迎ふ、來りて内城に入り、親信を分ちて諸門を守らしむ。

景虎、外城に在りて、日夜相鬩ぎ、弓銃交發す。織田氏の細作の越後に在る者、走り歸りて信長に告ぐ。信長大に喜び、掌を撫して曰く、「天下大に定まる」と。乃佐久間信盛を加賀に入らしめ、前田利家を能登に入らしめ、佐佐成政を越中に入らしめ、各自之を略取せしむ。

景勝、景虎、兵結びて解けず。故を以て拒ぐ能はず。景虎、終に敗走して、上杉憲政に北川に歸す。戸定の城主北莊丹後、變を聞きて馳せ至り、景勝に說きて曰く、「兩郎君、宜しく各四州を領して、共に信長を拒ぐべし。不らざれば、則彼れ覺に乘じて來り侵さん。先公百戰して取る所の者、一旦に之を敵人に附すは、豈惜しむ可からざらんや」と。景勝聽かず。北莊怒りて、去りて景虎を助けて、數景勝の兵を破る。因りて善光寺に軍す。景勝の母、上田に在り。肩輿に乘りて城に入り、諸將士を召して、面のあたり之を勗めて、謙信の遺業を保たしむ。將士感憤して力守す。

七年正月、景勝、夜、兵を潛めて、景虎の軍後を襲ひ、大に之を破る。北莊脫走す。景勝の將荻田主馬、之を識り、追ひて之を刺す。是に於て諸城多く景勝に歸す。景虎走りて鮫尾を保つ。北條氏政、之を聞き、兵萬餘を遣して、景虎を援く。又援を武田氏に請ふ。勝頼出でゝ飯山に軍す。景勝、與に戰ひて利あらず。齋藤朝信、景勝に說きて、東上野を以て勝頼に啗はせ、先金萬兩を以てす。又厚く其二嬖に賂ふ。二嬖、交勝頼に說きて曰く、「景虎は君の舅なり。然りと雖、之を援けて克たば、則、北條氏、東北を連屬して、將に君に及ばんとす。是れ東上野、金萬兩を得ると、孰か利なる」と。勝頼、乃景勝と兵を合せて、景虎を攻む。景虎、憲政と、皆自殺す。相摸の兵引きて去る。氏政、大に怒りて勝頼と絕つ。織田氏、德川氏と約し、勝頼を夾み攻む。七月、勝頼、其妹を以て景勝に妻す。貝津の戍を撤てゝ、沼津に移し、數兵を上野及び駿河に出す。時に高阪昌宣、既に死して、復諫むる者莫し。而して二嬖、益横なり。德川氏の世子信康、岡崎に居り、其母關口氏、罪ありて廢居す。甲斐の醫人減慶と通じ、減慶をして來りて款を送らしめ、內應を爲すを約す。勝頼、之を許す。事覺る。母子皆殺さる。九月、勝頼、沼津に次す。氏政、兵四萬を以て三島に軍す。十月、德川氏、嶮を踰えて駿河に入り、火を由井に縱つ。勝頼、別將をして氏政に當らしめて西す。二嬖、故に其行を遲くす。至れば則去る。

八年六月、德川氏、高天神を攻む。十月、城且に陷らんとす。城將岡部與行、援を勝頼に請ふ。稗將橫田尹松、言はしめて曰く、「城深く敵地に在り。君宜しく來る可からず。臣等分として當に城を守りて死すべし。卽ち免るゝを得ば、走り歸るも亦難からざるなり」と。將士皆其言を贊す。勝頼曰く、「坐して援はずば、以て口を藉るなし」と。乃出でゝ上野を徇へ、膳城を攻め、肉薄して之を拔く。

九年二月、氏政と伊豆に相持す。氏政の將松田憲秀、款を勝頼に送る。勝頼、戰はんと欲す。二嬖之を止む。

七年
【鮫尾】越後
【飯山】信濃

景勝、勝頼兵を幷せて景虎を攻む

信康

勝頼沼津に次す

八年
高天神城

九年

高天神陷る

【岩殿】甲斐
【久能】駿河
【吾妻】上野

韮崎城

【義昌】義仲十四代の裔なり

十年

【鳥居嶺】信濃

【桔梗原】信濃

三月、高天神陷る。與行獲はる。尹松、力戰して脫れて歸る。勝賴、之を賞せんと欲す。曰く、「脫れ歸りて賞せらるれば、君に在りては僭たり。臣に在りては冒たり」と。固辭して受けず。勝賴、疆土、日に削らる。二嬖、其和を信長に請はんと勸む。小山田昌辰曰く、「晩し。其侮を長ぜんのみ」と。聽かず。織田氏の質子を返して和を請ふ。信長、答書、辭甚倨る。穴山信良、又勝賴に說きて曰く、「先公の威、四隣に震ふ。故に居る所、城池を設けず。然れども、氏康、信長、好を謙信に通ずと聞き、則ち、岩殿、久能、吾妻の三城を築きて以て之に備へたり。謙信、從約を「盾」とせず。故を以て事無かりしのみ。今隣國、復、謙信の如き者なし。安ぞ備へざる可けんや」と。勝賴之を然りとし、乃ち韮崎に城く。號して新府と曰ふ。

信良、勝賴の女を聚りて婦と爲さんと欲す。武田信豐、二嬖に賂す。乃信豐に適ぐ。信良、之を咿みて、終に款を織田氏に通ず。諸公族、諸將も亦款を送る者多し。木曾義昌は義高の長子、勝賴の妹婿なり。其誅求に苦しみて、陰に信長に降り、其兵を導かんと請ふ。來りて之を告ぐる者あり。二嬖、斥けて虛言と爲す。已にして事覺る。

十年正月、勝賴、義昌を討たんと欲す。阿部忠高曰く、「其地嶮狹なり。輒く往く可からず。臣請ふ、先往き、說きて其計を紓めん。而して君の兵、稍其の後に從ひて、可なり」と。二嬖、之を沮む。遂に信豐に命じて、五千人を將ゐ、雪を冒して赴き討たしむ。義昌と鳥居嶺に遇ひて、大に敗れて歸る。

二月、勝賴、兵二萬を將ゐて、出でゝ諏訪に陣し、諸將を遣して要害を分ち守らしむ。而るに信長、已に長子信忠を遣し、兵十餘萬を引きて木曾より入る。瀧川一益、川尻鎭吉等、前部たり。德川氏、北條氏、各大擧して之に應ず。下條信氏、瀧澤を弃てゝ走る。小笠原信嶺、松尾を以て降る。信忠、入りて桔梗原に至る。勝賴、諸將を諏訪に召し、聚議すれども決せず。遂に信豐に命じて、五千人を將ゐ、雪を冒して赴き討たしむ。義昌と鳥居嶺に遇ひて、大に敗れて歸る。

信良、勝賴の女を聚りて婦と爲さんと欲す。武田信豐、二嬖に賂す。乃信豐に適ぐ。信良、之を咿みて、終に款を織田氏に通ず。諸公族、諸將も亦款を送る者多し。木曾義昌は義高の長子、勝賴の妹婿なり。其誅求に苦しみて、陰に信長に降り、其兵を導かんと請ふ。來りて之を告ぐる者あり。二嬖、斥けて虛言と爲す。已にして事覺る。

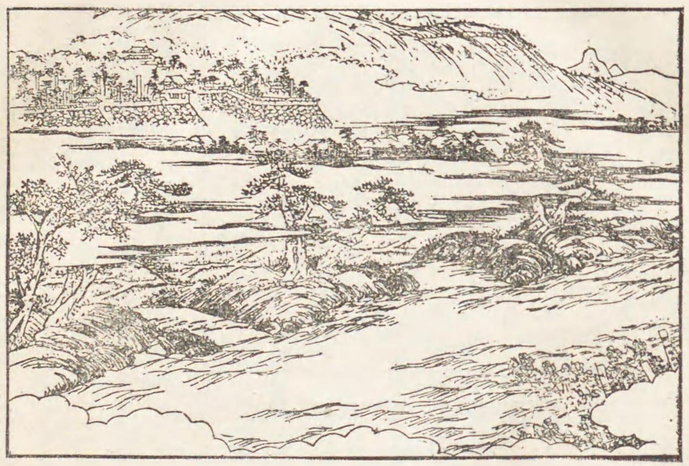
十年正月、勝賴、義昌を討たんと欲す。阿部忠高曰く、「其地嶮狹なり。輒く往く可からず。臣請ふ、先往き、說きて其計を紓めん。而して君の兵、稍其の後に從ひて、可なり」と。二嬖、之を沮む。遂に信豐に命じて、五千人を將ゐ、雪を冒して赴き討たしむ。義昌と鳥居嶺に遇ひて、大に敗れて歸る。

二月、勝賴、兵二萬を將ゐて、出でゝ諏訪に陣し、諸將を遣して要害を分ち守らしむ。而るに信長、已に長子信忠を遣し、兵十餘萬を引きて木曾より入る。瀧川一益、川尻鎭吉等、前部たり。德川氏、北條氏、各大擧して之に應ず。下條信氏、瀧澤を弃てゝ走る。小笠原信嶺、松尾を以て降る。信忠、入りて桔梗原に至る。勝賴、諸將を諏訪に召し、聚議すれども決せず。遂に信豐に命じて、五千人を將ゐ、雪を冒して赴き討たしむ。義昌と鳥居嶺に遇ひて、大に敗れて歸る。

信良德川氏に降る

【高遠城】信濃（信忠高遠城を圍む圖）

信盛死す十五歲



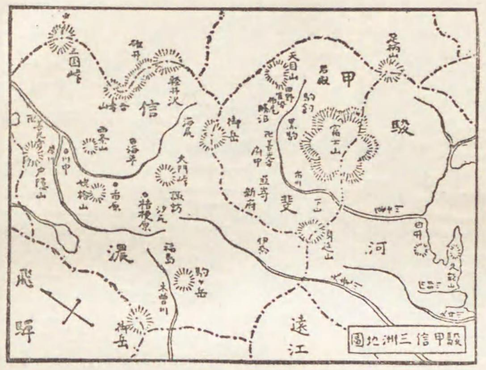
く、少年の者の言ふ所、用ゐる可からざるなり」と。阿部忠高曰く、「臣、間を遣して敵を覘はしむるに、敵深く客地に入り、離れて整はず。襲ふ可きなり。我れ夜、兵を合せて疾く進み、其前部を挫きて以て、其膽を破らん」と。二嬖許さず。已にして信良、叛きて德川氏に降る。駿河の諸城みな解きて走る。獨田中の守將依田信蕃下らず。是より先、德川氏、數信蕃を攻めて、志を得ず。是に至りて、人をして、說きて之を降さしむ。對へて曰く、「吾れ城を守るを知るのみ。外事を知らず」と。乃信良をして、書を以て之を諭さしむ。三月信蕃出でゝ甲斐に歸る。德川氏、招くに厚祿を以てす。辭して曰く、「吾れ國難に赴き、未だ家を謀るに暇あらず」と。諏訪の軍潰ゆ。在る者僅に三千。勝賴、乃走りて新府に歸る。信忠、兵を合せて高遠を圍む。城將仁科信盛、小山田昌辰と固く守る。信忠、辯士をして、入りて說かしめて曰く、「孤城、大敵に抗す。奮紛待つべし。苟も出でゝ降らば、以て將と爲し其邑を增さん」と。昌辰曰く、「吾れ先公に報ずるは、正に今日に在り。若し何爲る者ぞ。敢て來りて我を誘ふやと。使者を執へて、其耳鼻を截り、之を放還す。信忠、怒りて、信嶺を以て導と爲して、疾く攻む。昌辰力戰し、數出是に於て、敵兵四面より來

り薄る。

而して新府の城壁未だ全からず。勝頼、徒りて之を避けんと欲す。嫡子信勝、慷慨して曰く「事已に此に至る。何に之て免れんや。當に旗と無楯とを焚きて、徐に自裁すべきのみ」と。勝頼、未だ答へず。小山田義國、誘ひて勝頼を執へ、以て織田氏に市らんと欲するや、說きて曰く「臣の邑吾妻の嶮にして積粟あるに若かず。請ふ、死を以て君を奉ぜん」と。勝頼、乃と。眞田昌幸曰く「臣が邑吾妻の嶮にして積粟あるに若かず。請ふ、死を以て君を奉ぜん」と。勝頼、乃昌幸をして先歸らしむ。二嬖曰く「昌幸は新なり。義國は故なり。故を去て新に就く、奈何」と。勝頼、遂に岩殿に徒らんとす。義國をして先歸りて己を待たしむ。

是に於て、諸の叛臣の質三百人を焚き殺し、節に死したる者の質十人を召して、金各百兩を頒ち與へて、之を散遣す。其重器を收め、殘兵五百を以て岩殿に赴く。顧て二府を望み、君臣相顧て泣を下す。柏尾に至りて義國の來り迎ふるを待つ。七日にして至らず。走りて駒飼の民家に入る。卽夜、義國、人をして襲ひて其質を取らしめて、乃關を絕ちて勝頼を拒ぐ。勝頼、出づる所を知らず。乃走りて天目山に入る。

兵僅に四十人。土屋昌恒、秋山光次、其馬を牽く。阿部忠高、溫井常陸、槍を擔ひて之に從ふ。小宮山友信、單騎來り從ふ。友信、初め數〻勝頼を諫め、二嬖を除かんと請ふ。又小山田將監と事を爭ひて、並に訴ふ。將監、厚く二嬖と結ぶ。勝頼遂に友信を廢錮す。友信、是に於て、難に赴き、田野に追及し、昌恒に就き、言て曰く「君、嘗て我を擯く。而して我れ、君の難に赴くは、是れ君の明を傷ふなり。然れども赴かざれば、我が義を



【無楯】源氏傳家八勝の甲

勝頼岩殿に赴く

（駿甲信三州地圖）

天目山

友信

信勝

缺かん。我が義を缺かんよりは、寧君の明を傷はんのみ」と。因りて問ふ、「調閑何に在る」と。曰く、「亦逃る」と。勝資を問ふ。曰く、「亦逃る」と。勝頼死す武田氏滅ぶ

「嗟、吾れ今日あるを知ること久し」と。將監を問ふ。曰く、「逃れてより已に十日なり」と。友信曰く、【二嬖】長阪調閑、跡部勝資

已にして山僧、村民と謀り、敵を導きて勝頼を索む。勝頼、乃其配北條氏をして、相摸に奔らしむ。對へて曰く、「妾、何の顏ありて阿兄を見んや」と。又信勝をして、間道より陸奥に奔らしむ。信勝曰く、「大人、宜しく奔るべきのみ。兒、冢嗣を辱くす。義死なん。顧ふに、汝未だ擐甲の禮を行はず。當に禮を行ひて死すべし」と。乃秋山光次に請ひて賓と爲し、信勝に被するに無楯を以てす。禮畢る比、敵兵奄至る。衆、飢ゑて起つ能はず。勝頼、白布を以て髮を約し、刀を拔きて親戰ふ。信勝は鎗を以てし、昌恒は弓を以て之を翼く。敵を卻くること三次。山縣氏の卒辻某、叛人を聚めて後山より嘯射す。我が兵みな斃る。昌恒、矢盡き且に刀を拔かんとす。敵鎗を叢めて之に擬す。勝頼走りて昌恒を救ひ、敵の爲に喉及び腋を刺されて死す。年三十七。信勝も亦死す。年十六。昌恒、友信、光次等、皆之に死す。武田氏滅びたり。

織田氏、甲斐に入りて、令を懸けて曰く、「氏族の將士、出で〻降る者は邑に復す」と。勝頼の祖叔父信豊及び二嬖、義國等、相率ゐて出で〻降る。獨信光、叔父信綱、信龍、弟信貞、從弟信豐、上野の諸將、武田氏の世臣に非ざる者は、盡く瀧川一益に隷す。穴山信良、甲斐の一郡を領するを得たり。上杉氏を圖る。時に北陸訛言す。「信長信濃の諸將は、森長可に隷す。柴田勝家等と、掎角を相爲して以て、上杉氏を圖る。時に北陸訛言す。「信長の兵、大に甲斐に敗れたり」と。土寇群起す。景勝、兵を遣して之を助け、勝家等と越中に戰ふ。勝家、越後の兵を憚れ、拒ぐに塹柵を以てす。其他の諸將は景勝を侮り、柵外に出で〻戰ふ。輒く擊破せらる。瀧川一益、之を聞きて、兵を遣して越後に入らしむ。五月、景勝、益の兵を三國嶺に迎へ、擊ちて大に之を破り、自將として越中に入り、魚津を拔き、轉じて信濃に入り、森長可と戰ふ。勝家等、復魚津を取る。

景勝

秀吉光秀を誅す

十二年

十三年
秀吉越後に入る

五月、穴山信良、徳川氏と倶に京師に入る。六月、信長、其將明智光秀に弑せらる。信良走り歸りて、途に盜に遇ひて殺さる。一益、長可、勝家、變を聞きて皆西に走る。而して武田氏の故地大に亂る。諏訪頼忠、小笠原貞慶、村上國清、みな兵を舉けて、先業を復せんと欲す。景勝、自兵七千を將ゐて之を助く。七月景勝、貝津に入る。北條氏、徳川氏、數萬人を以て來り爭ふ。眞田昌幸、高阪源吾、初め景勝に屬す。已に北條氏に通ず。曰く、「臣、內應を爲す。景勝獲べし」と。景勝之を覺り執へて源吾を誅す。北條氏知らず。昌幸を以て先導と爲し、筑摩川を濟り、以て源吾の報を待つ。景勝、源吾の首を送りて戰を請ふ。北條氏、懼れて引き去る。已にして徳川氏、盡く甲斐、信濃を取る。景勝、河中の四郡を定めて歸る。景勝、幼より武幹あり。心に、謙信の恩を報じて以て、政景の罪を償はんことを誓ふ。謙信嘗て、深澤、九鬼と云ふ者を誅せんと欲す。景勝、年十四にして、手づから二人を斬る。謙信、政景の舊邑を賞賜す。數軍に從ひて功あり。謙信卒して三年、景虎に克ち、將士盡く伏す。獨柴田因幡と云ふ者、新發田に據りて下らず。景勝、常に內顧する所あり。故を以て專外事を營む能はず。織田氏の將筑前守豐臣秀吉、明智光秀を誅して、京畿を略定し、柴田勝家と戰ふ。勝ちて之を殺し、加賀、能登を取る。

十四年
景勝入朝す

【莊內】出羽

十五年
十七年

景勝又京師に入る
直江兼續

十二年、使を遣し來りて好を通ず。曰く、「吾れ素より成政と仇たり。而して越中は本吾が地なり。吾れ先之を取らんと欲するの事を計らんと欲す。須賀、兵を以て之を守り、馳せて景勝に告げて、執へて之を殺さんと請ふ。景勝、許れ」と。乃ち、自、兵を將ゐて越中に入る。十月、宮崎城を攻め、一舉して之を拔く。使者に謂て曰く、「越後の男子、武を用ゐる此の如し。退りて筑前守に語けよ。吾れ越中に於ける、取らんと欲すれば卽取る。而して取らざるものは以て子に讓るなり」と。十三年四月、秀吉、攻めて成政を降して、越中を取る。五月、秀吉、獨石田三成等、三十人を率ゐ、來りて越後に入る。自使者と稱して薄氷城に至りて、

十四年
景勝入朝す

【莊內】出羽

十五年
十七年

景勝又京師に入る
直江兼續

さずして曰く、「彼れ身、天下の權を司る。而して嶮を踰えて敵國に入る者は、蓋し前約を恃み、吾れ必言を食まずと以ひてなり。之を殺すは不義なり」と。卽日、直江兼續等六十餘人と、秀吉を見る。秀吉人を屏けて、與に語る。獨兼續、三成と侍するを得たり。已にして別れ去る。七月、上田の城主眞田昌幸、德川氏に睥きて、復景勝に屬す。質を送りて援を乞ふ。景勝、須田某、本莊某等を遣し、信濃の兵六千を將ゐて赴き援はしむ。兵、利少し。景勝、大擧して之に繼がんと欲す。德川氏の兵引き去る。十二月、秀吉、又使をして、厚く越後の君臣に贈らしめて、其入朝を促す。十四年五月、景勝入朝す。秀吉、路次に供帳す。爲に奏して正四位上に叙し、參議に任ず。七月、國に歸る。是の歲、新發田を陷れて、盡く越後を定む。

十五年、佐渡、莊內を定む。

十七年、景勝、又京師に入る。從三位に進み、中納言に遷る。直江兼續、四位侍從と爲る。藤田、泉澤、安田の三臣、皆四位に叙せらる。兼續は、父實綱より常に謀議に參せしが、仇人に刺死せられて、子なし。謙信、近士の樋口與六に命じて嗣と爲らしむ。是を兼續と爲す。文武の材能多し。景勝に事へて尤も寵任せらる。

十八年

【那古耶】肥
前
文祿元年
二年

十八年、秀吉、東、北條氏を伐つ。景勝、前田利家と東山道より進み、數十城を下す。北條氏滅びて、又利家と陸奥、出羽を徇ふ。

文祿元年、秀吉に從ひて、朝鮮を伐ちて、那古耶に陣す。二年、景勝、兵を將ゐて朝鮮に入り、釜山城を築きて歸る。

景勝を會津に徙す

是の時、上杉氏、領する所、歲入三百萬石可り。秀吉、心に景勝の能を畏惡す。又謙信久しく其國に訓へ、國人みな景勝を戴くを度りて、其封を徙さんと欲す。嘗て從容として之に問ひて曰く、「卿の國、歲入幾何ぞ」と。景勝、削らるゝを恐れて、實を以て對へず。曰く、「七八十萬石のみ」と。秀吉佯り驚きて曰く、「何ぞ少きや」と。因りて之を會津に徙し、百二十萬石を食ましむ。兼續に賜ふに米澤の地三十萬石を以てし、越後

慶長二年　を堀秀治に賜ふ。景勝、大に之を悔ゆ。是の歳、慶長二年なり。

三年、秀吉、疾あり。嗣子秀頼猶幼し。乃景勝と、徳川、前田、毛利、浮田氏とを以て、並に五大老と稱して、與に盟約を爲さしむ。秀吉薨じて、徳川公の威權獨熾なり。四年、石田三成、直江兼續と謀り、

五大老　景勝に勸めて兵を擧けしめんとす。曰く、「群牧共に公を推さんことを願ふ」と。諸將の載書を爲りて之を示す。因りて密に議を定む。七月、佐竹義宣と皆國に就く。香指原に城きて壘塞を修む。糧餉を峙みて、陸奥、出羽の士兵を誘ひて齊しく起らしむ。又人をして越後の遺民を招かしむ。遺民競ひ起りて之に應ず。堀氏、制する能はず。

四年

五年　五年正月、藤田信吉をして、正を大阪に賀せしむ。德川公、厚く之に賜ふ。信吉、歸りて驟に景勝を諫む。

德川氏十罪家康東伐を決す　兼續之を殺さんと欲す。三月、信吉、家を挈けて奔りて、德川氏に歸す。德川氏、伊奈圖書をして、來りて景勝に諭して西上せしむ。景勝聽かず。德川氏が盟に背く十罪を數ふ。德川公、終に意を決して東伐す。前田・佐竹、伊達、最上氏をして四面より來り擊たしむ。伊達氏は會津の東境に國す。衆に先だちて至る。其將伊達成實、片倉景綱、兵を將ゐて來り侵す。景勝、兵を遣し擊ちて之を卻く。

小山　七月、德川公、將帥百餘人を統べて小山に至る。景勝、長沼に軍す。兵を分ち險を守りて以て之を待つ。石田三成、乃秀賴の命を矯めて、毛利、浮田、島津、小西の諸將と、俱に兵を擧けて美濃に至る。八月、德川公、庶長子秀康をして、萬人を以て宇都宮を守らしむ。而して自兵を引きて西上す。直江兼續、兵を悉して之を蹂せんと請ふ。景勝聽かず。秀康、來りて戰を請ふに會ふ。景勝答へて曰く、「先人、軍を用ゐるに未だ嘗て人の危に乘ぜず。吾れ敢て違はざるなり。且公は年少なり。我が敵に非ず。吾れ內府の返るを待ちて、戰を決せんのみ。糧伕如し缺乏せば、當に相給すべし」と。乃收めて會津に歸る。

宇都宮　德川公の西するや、諸將に命じて曰く、「景勝は勁敵なり。愼みて與に鋒を爭ふ勿れ」と。是を以て、四隣環守して、敢て來り犯さず。九月、景勝、兵四萬を以て兼續に附し、最上義光を山形に攻めしむ。義光、二十

【先人】謙信

長谷城　五砦を設けて之を待つ。援を伊達政宗に請ふ。政宗、兵二萬を發して之に赴く。兼續二十一砦を拔き、進みて長谷城を攻む。樓櫓を起し、地道を鑿ちて、晝夜攻め擊つ。城主志村高治善く拒ぐ。景勝、又中村式部を遣し、上山城を攻めしむ。利あらず。義光、政宗、兵を合せて來り援ふ。兼續の軍中傳呼するものあり。曰く、「上國の軍敗る」と。已にして使者、會津より至りて、三成の敗聞を傳ふ。命じて軍を班さしむ。兼續曰く、「變を聞きて退くは怯なり」と。乃人をして城に入りて故を告げしめ、旦日、衆を鼓して齊しく登り、其外城を陷れて返る。義光、政宗、高治と、之を尾擊す。兼續返り戰ふこと、二十餘次にして米澤に至る。政宗、進みて福島を攻む。本莊繁長、城を守り、擊ちて之を卻く。

六年　六年二月、政宗又來り侵す。繁長、又擊ちて之を卻く。政宗、轉じて逢隈河を濟りて、梁川を攻む。城將須田大炊、四伏を設けて與に戰ひて之を破る。四月、政宗、兵を留め須田に備へて、返りて本莊を攻む。本莊出でゝ松川に拒ぐ。敵を侮りて備へず。政宗、曉に乘じて、濟り擊ちて之を敗る。本莊、走りて福島に入る。須田、之を聞き、逢隈川を濟りて其兵を破る。遂に政宗の軍後を襲ひ、本莊と夾み擊ちて、之を走らす。景勝、乃、自、將として出づ。政宗、驚き其軍を舍てゝ、獨十餘騎と間道より白石に走る。

逢隈川　德川公、既に石田氏に克ち、天下、之に歸す。景勝、秀康に因りて罪を謝す。德川公、人をして來りて其西上を促す。景勝、卽行を治む。將士、皆危みて之を止む。景勝曰く、「吾れ豈、再、負く可けんや」と。七月、伏見に至りて謁見す。八月、國除かれ、獨米澤三十萬石を食む。兼續の罪を宥して五萬石を賜ふ。

景勝罪を謝す　慶長十九年十一月、大阪兵起る。德川公、諸將を率ゐて之を攻む。景勝、佐竹義宣と先鋒たり。二十四日、大阪に至る。景勝の將杉原常陸、水干衣を鎧の表に尙ふ。衆、指して之を異とす。曰く、「彼れは越後の宿將なり。是れ其軍禮か」と。杉原聞きて笑ひて曰く、「吾が鎧、太、敝惡なり。故に此を尙ふるのみ」と。景勝は鷄野に陣す。義宣は今福に陣す。間日並び進みて敵の柵を破る。景勝、命じて柵を植て、塹を大和河の南に設け、隊將、鐵某をして、銃手六百を將ゐて之を守らしむ。將士竊に言て曰く、「此れ戰場に非ず。知らず、何

十九年　景勝國除せらる

大阪役　杉原常陸

の用ぞ」と。日午、城兵大に出づ。義宣の兵利あらず。銃手齊しく發す。敵兵乃卻く。已にして城兵七隊鶴野に出づ。我が先鋒須田大炊、與に戰ひて敗走す。杉原常陸、安田上總、長尾權四郎と、進み擊ちて其三將を斬る。德川公、鶴野の戰急なるを聞き、掘尾氏、丹羽氏をして、來りて景勝に代らしむ。景勝、槍手三百を以て自環りて陣を爲し、椅に憑りて動かず。使者十餘輩來りて敎旨を傳ふ。皆入るを得ず。景勝、聲を勵まして曰く「吾れ戰場に在り。敎命ありと雖、一步も退く能はず」と。兵を麾きて益々進み、遂に城兵を破る。城兵柵に入る。景勝の銃手、又柵內の兵を驅りて城に入らしめて、復出でしめず。須田、敗を愧ぢて五騎と馳せて敵中に入り、人毎に一首級を得て返る。德川公の軍監小栗又市、狀を具して以聞す。退きて同僚に語りて曰く、「今日の戰、既に解けしも、猶宜しく進擊すべきの機あり。吾れ之を言へども、景勝辭するに日暮を以てす。憾む可し」と。德川公、之を聞き、叱して曰く「景勝の武事、若が曹、敢て之を誹議するを得んや」と。次日、諸營を巡視して、遂に功狀を杉原、長尾、安田、須田、鐵、島津等に賜ふ。杉原、伏謝して曰く「臣等、何の力かこれ有らん」先寡君の家範猶存す。臣等奉じて以て之を周旋せしのみ」と。退きて人に謂て曰く、「吾れ先公に從ひて、數武田氏と戰ふ。今日の戰の若きは乃兒戲のみ。何ぞ功狀に載するに足らんや」と。

元和元年大阪再役甲斐の舊臣兵事を知る九年景勝卒す

【先寡君】謙信

景勝城兵を破る

凡兩役に用ゐる所の軍監、兵事を練れる者を選び、命を詰營に傳ふるに、甲斐の舊臣多し。而して眞田昌幸、子幸村、城中にあり。戰守最觀るべし。世以て武田氏の遺法に出づと爲す。九年三月、景勝病みて卒す。年五十九なり。子定勝、孫綱勝、相繼きて官秩を襲ふ。綱勝夭す。外甥の吉良義英の子綱憲を以て嗣と爲す。十五萬石を削らる。

上杉義春

上杉義春は、木畠山氏なり。謙信の爲に子として養はる。後以て上條の城主と爲す。故上杉定實の後を承ぐ。景勝を佐け、景虎を擊ちて最功あり。德川公命じて畠山氏を復せしむ。髮を削り入庵と號し、京師に老す。

大阪の冬の役に、之を二條城に召して、上杉氏行軍の法を問ふ。諸侯伯皆之に侍す。義春の人と爲り、短小にして善く辯ず。已嘗て謙信に從ひて聞見する所を陳ぶ。音辭流るゝが如し。公善しと稱す。諸將みな織田豐臣以來、兵に老いたる豪傑なれども、敢て聲を出す者なし。後、眼を病みて盲す。人をして近代の史乘を讀ましめて之を聽く。武田、上杉氏の事に至れば、往往其謬僞を指せりと云ふ。

行軍の事を辯ず

宇佐美定興

宇佐美定行の孤定興、數潛に軍に從ふ。功を立てゝ自ら贖はんと欲す。景勝、其父の故を以て許さざるなり。諸國に流寓して、鬪原の事作るに及びて、難に會津に赴く。封を徙さるゝに及びて、終に越後に隱れて身を終ふ。其子勝興、紀伊に仕ふ。亦越後の事跡に於て、綜覈する所あり。初め武田、上杉の二家、並に耕戰を務め、名法を以て國を治む。政、嚴刻を貴ぶ。而して上杉氏、事を作すに率、信義に伏る。是れ其獨存し今日に至れる所以なり。然れども世の兵を言へば二家を並稱せりと云ふ。

外史氏曰く。世に二家の兵書を傳ふ。後人の假託に出づる者あり。盡く信ず可からず。特に兵を我が邦に言ひて、二公に期する者は、其由を知らざる可からざるなり。夫れ勇悍趫捷にして、恥を重んじ、死を輕んずるは、我が國俗の自有する所、我が先王又之を養ふに恩を以てし、之を結ぶに信を以てす。之を撫摩鍊冶せしこと數百千年を經て、闔國の民、其上に親み、其長に死し、手足と頭目を扞るが如く、以て能く四隣を震攝し、魏、唐の强大と雖、加ふる能はざりしは、此俗を特めばなり。唐氏に通ずるに至るに及びて、乃之を捨てゝ彼を學び、樸を斲りて文と爲し、强を鍥ちて弱と爲す。平時は奔競して、急あれば遁逃す。朝舉げて皆婦人に幾し。而して先王の遺民、勇にして死を輕んぜし者は、皆將門の收むる所と爲る。此れ以て、王權を奪ひ、私利を營み、爲す所として成らざるはなかりき。承久、建武の事、輒、皆然りと爲す。故に先王の自護る所以、後王の自累ふる所以、均しく此れ兵なり。用捨何如を顧るのみ。降りて戰國に至り、此兵各群雄に分領せられ、日に淬ぎ月に厲き、愈々用ゐて愈々勁し。而して其撫摩鍊冶し、之を敎へて後戰ふ者、武田、上杉に過ぎたる莫し。故に我が邦の兵の精は、此時に極る。而して二家、又精の精なる者な

兵を養ふ由來あり

唐の文弱我俗を變ぜしむ

武田、上杉二家の兵法の由來

兵體變遷

り。且源平以還、其兵皆散じて自戰ひて、將勇に、卒銳なる者は勝つ。必束伍、結陣、坐作、進退の法ありしに非ず。これ有るは二家に始る。二家の兵法、傳へて我が邦の極則と爲す者は、此に由るのみ。然れども源氏、足利氏、每に東國より起り、其兵騎戰に習ふ。而して足利氏は、京畿に居て、馬政を恤へず。織田、豐臣、德川、並に侯甸に起りて、騎少く步多し。卽二家の如きは較騎多しと雖、亦其國の險にして、騎の便ならざるを以て、騎は率徒に遠きを致すに取る。戰ふに至りては、慨馬を舍てゝ步鬪す。故に騎戰遂に廢す。又火器と長槍とを用ゐて、以て軍鋒と爲す。而して弓矢の用稍衰ふ。是れ又我が邦兵體の變遷を知らざる可からざるなり。此の時、兵農別れしと雖、往々漁獵の者を收め、弓銃手と爲し、盜賊を收めて間諜と爲し、以て隊伍を補ひ、斥候に充てたり。二家皆是なり。二家の陣、大約、弓銃手、前に居り、長槍の步卒之に次ぎ、騎士之に次ぐ。牙旗、鼓螺、中に居り、左右拒ぎて之を夾み、輕重後に居り、游兵外に居る。戰ふ每に弓銃交發し、長槍之に從ふ。士は馬を下りて以て進み、或は卒傍より出で、或は中より跳盪して出づ。戰酣にして、或は麾下を以て之に乘ず。變化、準なしと雖、槩此を以て常と爲す。一時並に此法を同じくす。而して群雄環視して獨二家を畏る。其孰搏して解けざるを幸として、敢て觸れ犯さゞりしと云ふ。夫れ孫武、吳起、世を同じくして生れず。儻ひ世を同じくして生ぜしむるも、人の兵を借りて以て己が法を施す。大に其力を展べて、確鬪して勝敗を決する能はざるなり。今二公、孫、吳の能を挾み、趙魏の甲を擅にして、一時に比肩接踵せしは希世の遇と謂ふ可し。後の兵を言ふ者、二公相與にした る跡を觀て、其形勢機權の大なるを識り、然る後に之を其書に參し、眞僞を辨別せば、其法得て詳論す可し。余、是を以て二家を合叙す。昔者、吾が父嘗て行きて甲斐を過ぐ。甲斐の民、飮食するに必館君と稱ふ。館君は信玄なり。信玄の悖逆を以てしこと素あるを以てするに非らざらんや。謙信の事、世に傳はらざる所多し。余、畠山氏、宇佐美氏の說を并せ考ふ。又米澤の人士と交游す。余の爲に言ひしこと此の如し。

外史氏曰。世傳二二家兵書一。有下出二後人假託一者上。不レ可二盡信一。特言二兵於二我邦一期レ乎二公一者。不レ可レ不レ知二其由一也。夫勇悍趫捷。重レ恥輕レ死。我國俗所二自有一。我先王又養レ之以レ恩。結レ之以レ信。所下以撫二摩鍊一冶之上。經二數百千年一。圜國之民。親二其上一。死二其長一。如二手足之扞一頭目一。以能震二攝四隣一。雖二魏唐之强大一。不レ能レ加焉者。恃二此俗一也。及レ至レ通二唐氏一。乃舍レ此學レ彼。斲レ樸爲レ文。鍥レ强爲レ弱。平時奔競。有レ急遁逃。幾乎二擧朝皆婦人一矣。而先王遺民勇而輕レ死者。皆爲二將門所一レ收。以レ此奪二王權一。營二私利一。無二所レ爲而不レ成。承久建武之事。輒皆爲レ然。故先王所二以自衞一。後王所二以自累一。均此兵也。顧二用捨何如一耳。降至二戰國一。此兵各爲二群雄所一分領一。日淬月厲。愈用愈勁。而其撫摩鍊冶。數レ之而後戰者。莫二武田上杉過一焉。故我邦兵之精。極レ於此時一。而二家又精之精者矣。且源平以還。其兵皆散而自戰。將勇卒銳者勝。非二必有一東伍結陣坐作進退之法一。有レ之始レ於二二家一。二家兵法。傳爲二我邦極則一者由レ此焉爾。然源氏。足利氏。每自二東國一起。其兵習二騎戰一。而足利氏居二京畿一。不レ恤二馬政一。織田。豐臣。德川。並起二侯甸一。少レ騎多レ步。卽如二二家一。騎便不レ便レ騎。騎率徒取レ致レ遠。至レ戰概舍レ馬步鬪。故騎戰遂廢。又用二火器與二長槍一。以爲二軍鋒一。而弓矢之用稍衰。是又我邦兵體變遷不レ可レ不レ知也。此時兵農雖レ別。往往收二漁獵者一爲二弓銃手一。收二盜賊一爲二間諜一。以補二隊伍一。充二斥候一。二家皆是。二家之陣。大約弓銃手居レ前。長槍步卒次レ之。騎士次レ之。牙旗鼓螺居レ中。左右拒夾レ之。輜重居レ後。游兵居レ外。每戰。交二發弓銃一。長槍從レ之。士下レ馬以進。或自二卒傍一出。或自レ中跳盪而出。戰酣。或以二麾下一乘レ之。雖二變化無一レ準。概以レ此爲レ常。一時並同二此

法。而群雄環視。獨畏二一家一。幸二其噬搏不一レ解。不二敢觸犯一云。夫孫武吳起不二同レ世而生一。饒使二同レ世生一。借二人之兵一。以施二己之法一。不レ能下大展二其力一確鬪決中勝敗上也。今二公挾二孫吳之能一。擅二趙魏之甲一。而比二肩踵一接於二一時一。可レ謂二希世之遇一矣。後之言レ兵者。觀二二公相與之迹一。識二甚形勢機權之大一。然後參二之其書一。辨二別眞僞一。其法可二得而詳論一。余是以合二敍二家一焉。昔者吾父嘗行過二甲斐一。甲斐民。飲食必稱二館君一。館君。信玄也。以二信玄之悖逆一。而能抗二強敵一數十年。而不二相下一。豈非レ以二其敎レ民有レ素哉。謙信之事。多二世所一レ不レ傳。余幷二考畠山氏宇佐美氏說一。又與二米澤人士一交游。爲レ余言如レ此。

題下不識庵擊二機山一圖上　賴山陽

鞭聲肅肅夜過レ河。
曉見千兵擁二大牙一。
遺恨十年磨二一劍一、
流星光底逸二長蛇一。

邦文日本外史 卷之十二

足利氏後記

毛利氏

毛利氏略系（毛利氏系圖）

○野見宿禰―大江匡房―維順―維光―廣元―毛利季光―經光―時親―貞親―親茂―

師親―廣房―光房―熙房―豐元―弘元―

興元―幸松

就勝―元就―隆元―輝元―秀元―光廣

秀就―綱廣―吉就

就隆―元賢―元次

―吉川元春

―小早川隆景―秀秋

―元秋

―德田元清

―元政

―元知

毛利氏系統

匡房

廣元

季光毛利莊を食む

【三浦氏】寛治中、三浦氏北條氏と戰ふ季光三浦氏を援け終に共に敗死す

【嘉吉の役】赤松滿祐

—元康
—秀綱
—秀包
—女（宍戸隆家妻）

毛利氏は、大江廣元より出づ。廣元十一世の祖を本主と曰ふ。性は土師氏、備中介たり。本主、音人を生む。音人、仁明、淸和の間に歷仕し、從二位左大辨に至る。姓、大枝氏を賜ふ。後大江と更む。菅原氏と並に學政を掌る。音人、千古を生む。千古の後七世を匡房と曰ふ。文武の才略あり。源義家に敎ふるに陣法を以てす。

匡房の曾孫を廣元となす。廣元、源賴朝を關東に佐け、之をして天下に覇たらしめたり。其薦を以て安藝介となり。因幡守に遷る。正四位下大膳大夫に至り、陸奥守を兼ぬ。源氏、北條氏の際、幕府の元老たり。數大難を定む。五子あり。長子親廣、承久の役に官軍に屬して、終る所を知らず。第三子を季光と曰ふ。左近衞將監たり。相摸の毛利莊を食む。因りてこれを氏とす。三浦氏を娶り、其難に死す。

季光の子經光、鎌倉を出でゝ越後の南莊に居る。經光の子時親、復起ちて六波羅の評定衆と爲る。足利尊氏、六波羅を滅し、時親に加賜するに安藝の吉田、及び河內の和田を以てす。時親、貞親を生む。貞親、親茂を生む。親茂三子あり。師親、匡時、直衡と曰ふ。みな新田義顯に隷す。義顯は足利氏の將高師泰に滅さる。貞親以下猶官軍に屬す。獨師親、去りて師泰に屬す。師泰の石見を攻むるや、敵、劫川を阻む。師親高橋某と、衆に先だちて流を亂り、三城を拔く。功を以て盡く吉田の邑を食む。師泰敗るゝに及びて、山名時氏に屬す。親茂、及び二弟を迎へて共に之に居る。足利氏、武田氏、吉川氏をして、攻めて之を降さしむ。師親、廣房を生む。廣房、光房の生む、光房の子熙房、嘉吉の役に蟹坂を攻めて功あり。熙房の子豐

將軍義敎を弑して白旗城に據る

松壽

永正八年

元就【猿掛城】備中

十四年

大內義興

元、應仁の役に小早川氏と相國寺を守りて功あり。豐元、弘元を生む。弘元の子を興元と曰ひ、次を松壽と曰ふ。松壽、幼にして器量あり。其保、嘗て之を抱き、水を渡り躓きて溺る。保、惶懼して罪を謝す。松壽曰ぐ「道を行きて躓くは常なり。庸何ぞ傷んん」と。髣髴の頃嚴島神祠に詣づ。既に歸り、從者に問ひて曰く「汝が輩何を祈る」と。曰く「郎君の安藝に主たるを祈るなり」と。松壽曰く「汝、盡ぞ吾れ天下に主たるを祈らざる。夫れ天下に主たるを願ふ者は、能く一方に主たり。一方に主たるを願ふ者は、よく一國に主たり。今一國に主たるを願ふ。其成る所知る可きのみ」と。聞く者之を奇とす。興元、既に嫡嗣たり。松壽出でゝ、丹比氏に養はる。永正八年、首服を加へて、元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居り、邑七十四貫を食み、士卒三百を養ふ。會明の使者京師に來聘す。路に吉田を經る。善く相する者の朱良範從に自ら之を貧ふ。元就、往きて良範を見る。良範曰く、「公は漢祖、唐宗の相を兼ぬ。必ず威を四方に宣ぶべし」と。元就心これを聞ゆ。

十四年、安藝の守護武田元繁、佐東、銀山に據り、將軍の命を矯めて、國內を攻略す。十月、有田城を攻む。城は吉川經基に屬す。經基、興元と善し。是の時、皆京師に在り。元繁、中堰に柵し、熊谷元直をしてこれを守らしめ、別に千騎を遣して、猿掛の城下を焚く。元就、二百人を以て、出で戰ふ。利あらず。吉田の兵、急を聞きて來り援ふ。元就、乃ち兵五百を分ちて、元繁の援路に備へしめて、千人を以て疾く元直を攻め、破りて之を斬る。元繁、兵を遣して、來り援くれども、及ばず。乃ち一將を留めて有田に當て、自ら四千騎の將として來り戰ふ。元就、吉田の將志道廣好をして、兵を潛めて敵の背に出でしめ、夾み擊ちて之を破る。元繁、前み挺んで、水を濟る。我が兵射て其胸を洞す。其兵みな潰え走る。乃捷を京師に報ず。大內義興、足利の管領たり。爲に請ひて元就を褒賞す。元就、遂に武田氏の邑八千餘貫を幷領す。經基、妻すに其孫女を以てす。元繁の子光和、猶銀山に據りて下らず。

十七年
大永三年
【富田城】出雲
幸松死す
四年
七年
元就入京
享祿二年
【銀山】武田光和據る所
天文四年

十七年、興元卒す。子の幸松嗣ぐ。外祖父の高橋久光、元就と並に之を輔く。
大永三年、久光父子、備後の三吉某と戰ひて死す。元就赴き援く。其遺臣を撫して、其邑萬餘貫を幷す。六月、出雲の國主尼子經久、大內氏の將藏田信房を鏡山に攻む。元就、幸松を奉じて先鋒たり。陰に信房の叔父某を誘ふ。某、信房を斬り、出でゝ降る。誅せらる。
經久は、本六角氏なり。其祖父の持久、伯父高詮の爲に國事を幹す。經久に至りて鹽冶某を滅して、富田城を取り、轉じて山陰の諸國を略し、南に兵を出して大內氏を侵す。大內氏は世周防の山口に居り、太宰大貳と爲り、關西に雄長たり。是の時、大內義興、京師に在り。變を聞きて馳せ歸る。是より連年攻戰あり。石見、安藝の豪族、其間に介立して嚮背常なし。獨毛利、吉川、武田氏は、常に經久に附く。
七月、幸松病みて卒す。嗣なし。家臣聚議して群叔を選み、元就を以て嗣と爲す。八月、元就、吉田に入る。
元就の弟就勝、阪某、渡邊某と、元就を殺さん事を計る。元就之を覺り、襲ひて就勝及び阪、渡邊を殺す。阪は桂廣澄の兄にして、志道廣好の弟なり。乃、人をして廣澄、廣好を諭さしめて曰く、「吾れ阪の故を以て汝を疑はざるなり」と。廣好、拜謝す。廣澄、信ぜずして自殺す。其子元澄、族を聚め城に據る。元就、單騎、往きて諭し、之を降す。
四年五月、大內義興、其子義隆、其將の陶持長をして、二萬人を將ゐて、安藝の諸城の尼子氏に屬する者を攻めしむ。七月、尼子經久、兵を遣して之を援く。敗績す。八月、元就、部兵四千を以て、夜、大內氏の營を斫りて之を破る。持長解きて去る。
七年、元就、京師に入る。右馬頭に任じ、幕府の相伴衆となる。
享祿二年、熊谷信直、事を以て武田光和を怨む。高松城を以て元就に來り歸す。光和怒りて、之を攻むれども利あらず。憂憤して死す。香川光景も、亦八木城を以て元就に屬し、將に銀山を攻めんとす。銀山の餘衆終に若狹に奔る。天文四年、元就、光景、信直等の二千騎を率ゐて、東備後を略し、高野城を攻む。城將

【德】嚮に義興元就の爲に褒賞を天朝に乞ふ
天神山
十年

援を播磨の赤松晴政に請ふ。未だ至らざるに、元就、急に攻めて之を拔き、其兵を幷せて、又數城を徇へ下す。
是より先、尼子經久、子の興久を逐ひて、之を殺し、孫の晴久を立つ。晴久、元就を遇するに亡狀なり。大內義興、病みて享祿元年に卒す。義隆に遺言して曰く、「元就、晴久と卻あり。宜しく此時を以て奪ひて我が援と爲すべし。愼みて其驩心を失ふ勿れ。吾れ嘗て彼に德あり。彼れ豈之を記せざらんや」と。陶持長、遺命を奉じて、百方好を通ず。元就、終に之に應ず。國內の諸城の晴久に屬する者を攻め下す。晴久大に怒り親來りて之を討たんと欲す。經久曰く、「元就、材武ありて、善く兵を用ゐる。未だ力を以て取る可からざるなり。先備後、石見を定め、形勝を以て之を制するに若かず」と。經久の弟義勝も、亦諫めて之を止む。晴久みな聽かず。
吉田城の東北に胄山あり。元就、敵の山上に陣して、以て城を瞰ふを患ふ。會出雲の間來り入る。元就之を覺り、乃、議して曰く、「敵、胄山に陣せば、吾れ宍戸隆家と之を夾み擊たん。三猪口に陣せば、則、吾が利に非ざるなり」と。隆家は元就の女婿にして、五龍城を守る者なり。間者走りて晴久に報ず。
九月、晴久、騎卒五萬を將ゐて、來りて三猪口に陣す。武田氏の餘黨を助けて、銀山を復す。四近の將帥、晴久の兵威を怖れて、敢て我を援けず。獨、宍戸、竹原、小早川の諸族、兵數百を遣して城に入る。城兵、凡三千人、北軍焚掠す。城兵輒出で擊ちて、之を走らす。晴久の叔父國久、部屬精勁なり。新宮黨と稱す。北兵の數衄るゝを忿り、萬騎を以て、來りて戰を挑む。元就、二伏を設けて、出でゝ戰ふ。敵、我が寡單なるを見て、兵を縱ちて進む。路狹くして齊しく進むを得ず。伏兵夾み擊ちて之を破る。晴久、乃三柵を宮崎に作りて以て、城に逼る。大內義隆、陶隆房を遣し、兵を將ゐて來り援け、天神山に陣す。
十年正月、元就、隆房に請ひ、晴久に備へ、自、長子隆元と宮崎を攻む。元就、進みて二柵を破る。隆房尼子義勝と三猪阪に戰ふ。義勝死し、晴久、夜遁る。城兵尾して擊つ。斬獲多し。銀山の兵之を聞きて、亦

十二年【富田】出雲【祖】毛利師親

遁る。

十二年正月、義隆、大擧して富田を攻む。元就、兵二千を以て從ふ。周防の將秋山某と、川を夾みて陣す。四月、河水大に漲る。城兵急に秋山を攻む。元就曰く「吾が祖、劫川を騎渡す。況や此の一衣帶の水をや」と。流を亂りて援け擊ちて之を走らす。七月、義隆敗走す。元就、隊を整へ、徐に退きて南に還る。是の役や、吉川興經、北軍の將十餘人と、晴久に叛きて周防の兵を導く、已にして復之に附く。義隆故を以て敗る。

吉川氏【右馬】元就

吉川氏は駿河の人、吉川友兼より出づ。友兼、梶原景時を誅し、子孫、功を以て安藝の大朝を食む。後十二世を興經と爲す。興經、大鹽某を斃す。其下皆怨みて大鹽を殺し、興經を廢す。議して曰く「毛利右馬、先公と婚す。其子みな先公の外孫なり。養ひて以て、嗣と爲すべし」と。乃ち元就の次子、元春を請ひて、新莊城に入れて、奉じて以て主と爲す。元春の弟、隆景も、亦出でゝ、小早川氏の後と爲る。

小早川氏

小早川氏の先は、伊豆の人土肥實平より出づ。實平、源氏に仕へ、安藝の豐田を食む。後十六世を正平と曰ふ。正平の子繁平、幼にして明を失ふ。其族黨議して請ひて隆景を養ふ。妻すに正平の女を以てし、沼沼田に居らしむ。是に於て、吉川、小早川、並に毛利氏の羽翼と爲る。人呼びて兩川と曰ふ。元春は治部少輔と稱す。豪爽にして善く兵を用ゐる。隆景は左衞門佐と稱す。姿儀美しく、沈斷にして謀慮あり。皆元就に類す。元就、元春の未だ侻儷あらざるを以て、兒玉就忠をして密に其意の嚮ふ所を問はしむ。元春曰く「吾れ熊谷信直の女を得んと欲す」と。就忠曰く「郎君、其美を謬聞する無きを得んや。彼女の醜惡なること匹なし。君必之を悔いん」と。元春、哂ひて曰く「然り。吾れ素より其醜を知るなり。抑々古の名將、多くは女色を以て其勇を失ふ。人取らずして吾れ之を取らば、信直必感喜して吾が爲に死力を出さん。此間の將卒、孰か信直の右に出づる者ぞ。吾れ之と鋒を聯ねて以て家君の先を爲さば、向ふ所摧き破らざる無きのみ」と。就忠慙服し、元就に告げて之を娶る。信直、果して大に喜ぶ。毛利氏の兵鋒、益鋭なり。

元春醜婦を娶る

七年【廷臣亂を避く】稻紳家京師の亂を避けて山口に遊ぶ

十七年、元就、隆元、元春、隆景を携へて、山口に赴く。義隆、內藤興盛の女を養ひて隆元に妻す。陶隆房をして、元春と約して兄弟と爲さしむ。義隆、性文弱なり。山口に廷臣の亂を避くる者多し。而して明人、常にこゝに互市す。義隆、詠歌に耽り、梵譯を學び、復武事を問はず。陶持長、嘗て之を憂ふ。持長の子義清、幼にして聰敏なり。常に義隆を誹りて曰く「墮落の沙門、流竄の公卿のみ」と。持長、其不臣の志あるを視て之を藥殺し、更に妹婿の問田某の子を養ふ。是を隆房と爲す。隆房、悍厲にして頗る士心を得。持長既に死す。隆房、義隆の嬖臣相良武任と郤あり。杉重矩、青景隆時、內藤興盛と結び、武任を殺さんと謀る。武任、怖れて遁逃す。冷泉隆豐、義隆に勸めて速に隆房を誅せしめんとす。聽かず。隆房、佯り骸骨を乞ひて、其邑の若山に歸り、日に反逆を謀る。家臣深野康澄、宮川房勝、持長の遺囑を引きて、大に諫むれども聽かず。二臣交に刺して死す。

義隆京紳の風を喜ぶ

義隆京紳の風を喜ぶ

義隆自殺す

二十年

二十年八月、隆房遂に反して山口を攻む。義隆、法泉寺に走る。其兵み な潰ゆ。前關白藤原尹房、爲に和を講ず。隆房肯せず。義隆、航して筑紫に赴かんとして、風に阻められ、歸りて大寧寺に入る。賊兵來り圍む。

義隆元就に遺囑す

九月、義隆自殺す。隆豐等、之に死す。義隆の子義尊、及び尹房以下の公卿十餘人、みな殺さる。隆房、名を晴賢と更め、髮を削りて全薑と號す。豐後の國主大友義鎭の弟義長を迎へて主と爲す。曰く「重政、隆時、武任を妬み、吾に勸めて大事を行はしむ」と。乃ち兵を發して二人を誅す。初め晴賢の難を圖るや、人をして來りて元就に說き已に黨せしめんとす。咱ずに佐東郡を以てす。元就之を卻く。義隆、終に臨みて書を遺りて、元就に囑して曰く「吾れ不幸にして賊臣の爲に弑せらる。恨を呑みて地に入らんとす。元就に非ずば誰か能く我が仇を復せん」と。元就、書を覽て流涕して曰く「吾れ大貳の恩眷み受く。囑する所無しと雖、猶爲に仇を復さんと欲す。況や是れ有るをや」と。諸將曰く「彼の凶戮、方に熾なり。未だ與に衡

二十一年

二十二年

隆景進言

詔を元就に賜ふ【津和】石見

を爭ふべからず。宜しく內に威力を養ひ、外に柔弱を示し、釁を觀て動くべし」と。元就、之に從ふ。

二十一年秋、元就、攻めて槌山、志和の諸城を拔く。是の歲、備後の江田隆貫、叛きて尼子氏に歸す。元就之を攻めて泉橋に至る。尼子國久、數萬騎を將ゐて來りて隆貫を救ふ。元春、部兵二千騎を以て、擊ちて之を走らす。會霖雨にして川漲る。國久、隆貫、退きて山內に入る。元就も亦歸る。備中の人、三村家親來り屬す。二十二年、家親を以て鄕導と爲し、穗田爲資を攻めて之を降す。

初め我が將井上元兼、豪宗を以て法令を奉ぜず。竊に言て曰く、「主公、陶氏を誅せんと欲す。陶氏嘗て我を救ふ。恩背く可んや」と。元就、計を以て之を族誅す。是に於て、諸の族將を會して、晴賢を討つの計を議す。隆景進みて曰く、「宜しく之を天子に請ひ、大義に仗りて之を討つべし。則人心の嚮ふ所克たざること無けん」と。元就曰く、「善し」と。乃上書して曰く、「太宰大貳義隆、父祖の遺業を承ぎ、心を王室に存す。而るに賊臣晴賢と云ふ者に弑せらる。臣元就、微力を奮ひて討伐を圖れども、未だ其功を成すを得ず。伏して冀くは、晴賢を討つ一行の詔を得て、徒屬を糾合して以て西陲を靖んぜん」と。初め朝廷、晴賢の難を作すを聞きて、將軍、管領に命じて西伐せしむ。敢て詔を奉ずる者なし。元就の書至るに及びて、卽之を制可す。元就、詔を得て感喜し、書を遠近に移す。津和の城主吉見正賴、世、陶氏と讎す。首として之に應ず。晴賢怒りて津和を攻む。元就、兵を遣して之を援く。

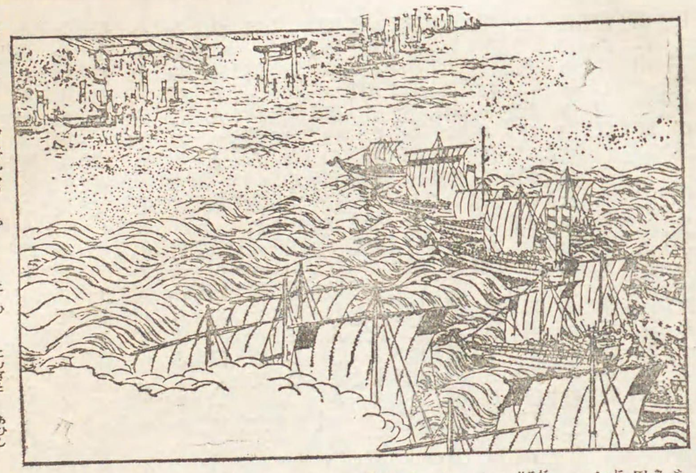
二十三年五月、元就、諸子と兵を將ゐて西に出でゝ、銀山、草津、櫻尾の諸城を取る。陶氏の兵に折敷畑に遇ふ。擊ちて之を破る。陶氏の骨鯁の將江良興房と云ふ者、琥珀城を守る。元就反間を縱ちて、「興房、款を送る」と言はしむ。晴賢、興房を族誅し、遂に周防、長門、豐前、筑後、石見に檄し、兵を發して東下す。元就、之を聞きて、諸子と密に謀りて曰く、「彼の兵三萬に下らず。必首に櫻尾、草津を攻めん。我れ衆を悉して之を援ふも、五千人に過ぎず。勢力懸絕す。與に平地に戰はば、克つ可からざるなり。今計を爲すには、宜しく嚴島に城き、誘ひて之を蹙むべし」と。

弘治元年

嚴島に城を築く

（嚴島合戰之圖）

嚴島を取らんとす



弘治元年五月、島の有浦に城く。諸宿將、皆其不可を諫む。元就聽かず。諸將相言て曰く、「此の公、常に諫を拒まず。今何ぞ乃爾るや」と。六月、城成る。己斐、新里の二氏に命じ、兵數百を以て之を守らしめ、草津、櫻尾、仁保の諸城をして互に策應を爲さしむ。既にして聲言すらく、「吾れ老將の言を聽かざるを悔ゆ。嚴島の地形守り難く援け難し。卽敵の有と爲り、諸城從ひて陷らん。吾が計此より失するは莫し」と。

九月、晴賢、其子長房を若山に留めて、自、騎卒二萬、戰艦千餘艘を統べて、岩國に至りて、戰の嚮ふ所を議す。大和興武曰く、「先づ櫻尾を拔かば、則諸城拔かずして陷らん」と。弘中、隆包曰く、「請ふ、兵を分ちて、一は櫻尾を攻め、一は其援路に備へば、彼れ敢て出でじ。出でば則之と相持し、輕兵を遣して吉田を擣かば、彼れ進退據を失はん。刄を血ぬらずして取る可し」と。晴賢曰く、「吾れ先嚴島を取らんと欲す。城脆く將孱し。而して援ふに不便なり。聞く、『元就甚之を悔ゆ』と。吾れ取りて以て根據と爲し、兵を分ちて諸城を攻めん。是萬全の策なり」と。隆包曰く、「彼れ眞に之を悔いば、必宣言せじ。宣言する者は、以て我に餌するに非ざるを得んや」と。晴賢、猶豫して未だ決せず。故の櫻尾の城主、降りて賊軍中に在り。己斐、新里と相識る。元就、二人をして書を貽らしめ、順逆を指陳し、晴賢の

嚴島を攻む

【先大貳】大内義隆

大立山

大風雨

罪惡を暴し、其醜詆を極む。晴賢、之を覽て大に怒る。元就、又桂元澄をして詐りて、款を送りて、元就の海を渡りて赴き援くるを竢ち、城を翻して內應を爲さんと約せしむ。晴賢、乃意を決して嚴島を攻む。十月牙を塔岡に建て、民舍を燒きて陣を布く。舟艦、櫛比し、喊聲、海に震ふ。城兵壁に嬰りて堅く守る。賊、鳥銃七口あり。櫓楯支へず。土豚を積みて之を扞ぐ。晴賢、書を元就に遺りて曰く、「公、先大貳の爲に誅を加へられんと欲す。敢て逃れ避けず。聊水陸の兵三萬を以て嚴島に陣す。公能く來らんか」と。元就、將士を聚めてこれを示す。將士みな惧るゝ色あり。元就笑ひて曰く、「賊の言ふ所をして信ならしめば、則吾れ大に克たん」と。衆故を問ふ。曰く、「其地迫狹、彼れ肩を側て足を躡み、進退に便ならず。兵愈衆くして、鋒愈鈍る。我れ死士數千を以て、之を衝かば、克必す可きなり」と。

乃宍戸隆家をして吉田を留守せしめ、自、精兵三千餘人を率ゐて、南行して草津に至り、晴賢と海を隔てて陣す。國內の諸豪其必敗れんことを意ひ、多くは病と稱して從はず。初め伊豫に能島、來島の二族あり。水戰に閑ふ。晴賢、元就、並に之を招く。二族三百艘を以て、來りて元就に屬す。元就、之を勞ひ、往きて城中の消息を問はしむ。賊、四に地道を鑿ち、樓櫓殆覆らんとす。大索を以て之を維持す。元就、陣を大立山に移す。晦日なり。盡く老弱輜重を草津に返す。纍纍として絕えず。賊、望み見て以爲らく、我れ兵を收むと。是に於て元就、諸將士をして人每に二條の布を以て袖に約し、一日の糧を佩ばしめ、暗號を約し、暮に比びて船に上る。大風雨に會ひて、士卒震怖し、風定まるを竢たんと請ふ。元就曰く、「天我を助くるなり」と。皆篝火を滅せしめて、一燈を牙船に揭ぐ。諸軍之を認め、浪を破りて渡る。既に濟りて舟を北岸に返し、以て必死を示す。遂に博尾崎に上りて、直に塔岡の背に出づ。隆景、別に伊豫の船兵を率ゐて其面に出づ。賊、風雨を恃みて、警邏する者なし。賊艦を穿ちて入る。賊、或は誰何す。浦宗勝、大聲に答へて曰く、「筑前の兵、徵に應じて來る」と。船を避けて達せしむ。稍々岸に上る。兩隊みな陣す。天將に明けんとす。元就、命じて螺を吹き皷躁して、高きに乘じて下り擊つ。賊の諸軍大に驚き、爭ひて其牙營に萃る。

晴賢自殺す

三年

【門司】豐前

營、塡咽して自ら相擊刺す。元就、大に呼びて曰く、「進め」と。諸將士、柵を破りて入る。賊兵終に大に潰ゆ。晴賢、咄嗟して走る者を遏むれども、遏むる能はず。賊舟を爭ひて遁る。溺れ死する者數千人。晴賢、肥大にして行步に便ならず。從者、扶掖して海岸に至り、舟を求む。復一隻を覩ず。遂に自殺す。隆包、殘兵百餘を以て嵓洞の中に棲む。元就、其才を惜しみ、人をして說きて、之を降さしむ。肯ぜずして死す。已にして晴賢の首を獲たり。元就、嚴に旗皷を建て、鞭を奮ひて其首を指して曰く、「弑逆の報、乃天誅に嬰る。今如何」と。諸軍、凱を揚ぐ。元就、嚴島に留ること十一日にして、兵を引きて小潟に返る。晴賢の首を洞雲寺に葬る。

元就、既に晴賢を誅して、威、關西に震ふ。周防の人相警めて曰く、「毛利の軍至れり」と。陶長房、義長をして援を大友氏に乞はしむ。大友氏、敢て應ぜず。十二月、元就、進みて岩國に陣し、隆景を遣して玖珂郡を徇へて、上關に至らしむ。杉重輔、內應を爲し、攻めて長房を殺す。將士相疑ひて、皆款を元就を送る。元就、尼子晴久の備後、石見を窺ふを聞きて、未だ深く入らざるなり。乃備後の豪族山內隆通を招き降し、又元春に命じて石見を守らしめ、自、軍を引きて山口に向ふ。陶氏の故黨、萬人を以て煤間城に拒ぐ。隆元之を攻む。城泥淖を帶ぶ。我が兵利あらず。

三年三月、元就、萬騎を將ゐて岩國を發し、士卒をして人ごとに簀と席とを持たしめて、以て城下に傅ひ、簀を淖に投じて、席を其上に布き、踐みて以て城に登り、其兵を鏖殺す。山口、騷擾し、甲を悉して右田岳に拒ぐ。元就、隆元と、兵二萬を合せて、攻めて之を降す。一將をして之を守らしめて進む。吉見正賴、來りて之に會す。義長、怖れて勝山に走る。是に於て、元就、諸軍を整へて山口に入る。內藤隆春等迎へ降る。元就、六千騎を遣し、長府、下關を扼して、以て大友氏の援路を絕つ。而して福原貞俊をして、勝山を攻めしめ、義長及び晴賢の季子鶴壽を殺さしむ。周防、長門の士民、山口に雲集す。豐前、筑後の諸城、又降を送る者多し。元就、盡く弊政を除き、租稅を免じ、邑を分ちて諸將を賞し、戍を下關、門司、三尾、鵠峰

凱旋

の四處に置く。

四月、安藝に凱旋す。是の時、晴久、備後に入りて、數隆通を攻むれども、下す能はず。轉じて石見に向ふ。敢て入らずして去る。

元就大內氏の地を取る

十一月、陶氏の餘黨起りて鵠峰を攻む。元就、萬人を將ゐて、往きて之を平け、轉じて周防の故將弘田藤包を三角城に攻む。元春、隆景、說きて曰く、「藤包の勇智、正頼に下らず。而して之と郤あり。宜しく兩ながら存し、相鈐制せしむべし」と。乃藤包を招き降す。

永祿元年

元就、是に於て、盡く大內氏の地を取り、遂に尼子氏を圖る。而して尼子國久の强悍を患へて、之を除かんと謀る。尼國經久は、吉川經基の女を娶る。而して元就も其孫女の婿たり。是を以て姻戚に託して、數使幣を國久に通ず。晴久、頗る之を疑ふ。義勝の死するや、其子經貞、猶幼なり。國久其邑を攝し、長ずるに及びて返し與へず。經貞之を啣む。是に於て元就、死囚をして、書を懷にし、出雲に入らしめて之を道上に殺さしむ。行人聚り觀て、其書を取れば、乃、元就と國久と內應を約する者なり。晴久、書を得て大に驚き、經貞を召し問ひて曰く、「新宮黨、陰に安藝に通ずるを聞く。汝豈之を知るや」と。經貞これを媒孽し「て曰く、「臣數、其密使の往來するを見る」と。晴久、卽甲を伏せ、要して國久父子を殺し其黨を殲す。北兵是より弱し。

三年

元就【天子】勤王正親町天皇

永祿元年二月、元就、元春をして出羽に陣せしめて、尼子氏の將小笠原長雄、本莊常光と戰はしむ。未だ決せず。神邊の城主杉原盛重、來り援けて之を破る。五月、元就、攻めて長雄を降す。晴久來り救へども及ばず。三年二月、攻めて杉山を取る。八月、誘ひて常光を降し、石見を定む。是の歲正月、天子卽位の禮を行ふ。元就、金を獻じて資を助く。詔して元就を以て從四位下に叙し、大膳大夫に任じ、菊桐の章を賜ふ。尋いで陸奥守に遷る。而して隆元之に代る。十月、出雲に入りて赤穴に軍す。迎へ降る者十餘族。常光、先鋒たり。火を岩阪に縱つ。常光、功を負みて

五年

汰虐なり。元就、元春、隆景と謀りて曰く、「彼れ服せば用ゐる可し。而れども叛かば制す可からず。已に尼子に叛く。何ぞ我に有らんや。速に除くに若かず」と。十一月、襲ひて之を殺す。隆將、之に因りて多く叛く。五年十月、元就白潟より入り、洗合山に城く。富田を距ること七里、建て、本營と爲す。連珠砦を築き、漸以て富田に逼る。京師の公卿、文儒を迎へ、書を軍中に講じ、以て持久の意を示す。因幡の山名氏、伯耆の南城氏、嘗て尼子氏に逐はる。元就之を復す。其義故を收めしめて、以て尼子氏を助け攻めしむ。

晴久卒す

義久

六年

山名祐豐も、亦伯耆を以て來り屬す。十二月、晴久、病みて卒す。其子義久嗣ぐ。大友義鎭、義久と好を通じ、數門司を攻む。乃、隆元、隆景を遣し、萬餘人を以て赴き援けしむ。神田城を取り、天野隆重を留めて、之を守らしむ。隆元、留りて岩國に屯す。六年二月、義鎭、二萬人を以て神田を攻む。下す能はず。會天使二人、京師より至る。我をして義鎭と和し、兵を弭めしむ。隆元、乃、和すべからざる者十條を疏して之を辭す。七月、隆元、守を撤て、歸り覲えんとし「て曰く、「家君衰老にして、風に櫛り雨に沐す。して之を憂ふ。疾作りて卒す。年四十一。隆元、性仁孝なり。元就、嘗て疾に罹りしとき、身を以て之に代らんことを祈れり。其岩國に在りし時、大友氏陰に周防、長門の將士を招く。將士之に叛くに忍びず。「元就」訃を得て、軍氣の沮まんことを慮り、令を出して曰く、「亡兒を弔はんと欲する者は、力戰せよ」と。白鹿城を攻む。城將松田兵部能く拒ぐ。乃、銀山の礦卒をして、地道を鑿たしむ。城兵も、亦鑿ちて之を迎へて、穴中に鬪ふ。城兵遂に穴を塞ぎて卻く。乃、其汲路を截つ。松田、米を斗に盛りて馬足に灌注す。我が軍士、之を視て以爲らく、水乏しからずと」と。九月、義久、白鹿の急を聞き、弟倫久を遣し、萬騎を率ゐて之を援けしむ。我が兵を動かして決戰せんと欲す。平旦、來りて戰を挑む。元就、應ぜず。

隆元卒す

白鹿城

七年　日晡、倫久、將に去らんとす。元就、乃、皷して進む。敵敗れ走る。之より先、元就、香川光景を遣し、三村家親を助けて備中を略く、吉田氏を滅す。七年三月、伯耆に入り、南條、行松氏の兵を幷せて、富田の糧道を絶つ。行松の死するに會ひて、杉原盛重、命を受けて其家事を掌る。初め盛重、杉原忠興の家臣たり。忠興、神邊に據りて我兵を拒ぐ。終に降る。其死するに及びて、元就、盛重に命じて之が嗣と爲らしむ。盛重、嘗て陣法を製し、弓を以て鎗る翼く。富田の兵と湖上に戰ひて、再之を克つ。又盜賊を收めて兵となす。佐田某と云ふ者あり。間諜に妙なり。故に盛重、善く敵情を知る。數功あり。後八橋城に徙る。

八年輝元、元長　八年二月、隆元の子輝元、元春の子元長と共に洗合に來る。四月、熊谷信直、元長を擁して、進み擊ちて龜井安綱を走らす。八月、盛重、江見を拔く。九月、家親、大江を拔く。元就、乃、石原、龍山等の十二寨を起てゝ、以て富田を環らし、其糧を竭さんと謀る。關を四外に置き、榜して曰く「必之を殲さん。一人をも遁れしむる勿れ」と。已にして糧盡くるを度りて、則關を撤して更に榜して曰く、「降る者は之を釋す」と。城兵逃れ降る者相踵ぐ。此の時に當りて、義久の寵臣大塚某、義久の嬖姬と相結び、以て諸將の款を我に通ずと讒す。

元就十三州を定む　九年正月、卯山久信誅せらる。諸將みな惧れ出でゝ降る。獨河副、森脇等三百人降らず。元就、疾あり。

九年　義久降る　義久を招き降す。七月、義久、遂に城を致して降る。之を安藝の長田に置く。元就、富田を圍みしこと前後七年にして之を降す。其守將を擇む。衆、天野隆重を推す。乃、隆重に命じてこれを守らしめ、振旅して還る。元就、既に大內、尼子二氏の地を幷せて、山陰、山陽の十三州を定む。元春に命じて山陰を掌らしめ、隆景に山陽を掌らしむ。遂に二將をして、地を南海、西海に略せしむ。是の時に當りて、南海に長曾我部、宇都宮、河野氏あり。西海に大友、島津、龍造寺氏あり。

十一年　十一年、宇都宮豐綱、河野通直を攻む。通直來りて援を乞ふ。二月、元春、隆景、兵數萬を將ゐて伊豫に入

十二年【立華城】筑前　りて、二城を拔き、豐綱を大津に圍む。戸隆家をして、之に當らしめ、諸軍、豐綱を攻め降す。元就、引きて去る。元春、隆景、六旬を以て伊豫を定めて還る。和智隆實を嚴島に誅す。隆元の死、蹤跡あるを以てなり。是の時に當りて筑紫の豪族高橋、宗像、秋月の諸族みな元就に屬す。大友義鎭、數之を攻む。十一月、元春、隆景、元長と五萬人に將として赴き援け、三岳を拔く。十二年四月、立華城を圍む。義鎭、方に龍造寺隆信を佐賀に攻む。之を聞きて隆信と和す。五月、其の二將をして、兵七萬に將として立華を援けしむ。我が軍塹壘を作り、再戰ひて之を破る。元就、輝元を携へて長門に往き、遙に聲援を爲す。尼子氏の遺臣山中幸盛、立原之綱等、京師に在り。之を聞きて、故尼子誠久の子の一僧となれる者を索めて主と爲す。名を勝久と更め、但馬の海賊を糾して隱岐に入る。六月出雲に入り、新山、末次を取り、富田を攻む。天野隆重、兵三百あり。伴り降りて、其兵二千を城下に誘ひ、擊ちて之を破る。七月、敵、伏を設けて隆重を誘ふ。隆重、諜して知り、伏中に雨射して又之を破る。元就、浮田氏、勝久に應ずと聞き、香川光景を遣し、美作を定めしむ。元春、隆景をして、疾く攻めて立華を下さしめ、城兵を西軍に送致せしむ。西軍、猶我と相持す。九月、故大內義興の庶兄輝弘、大友氏に寓す。兵五千を借りて、海路より周防に入り、鴟峰を戍む。元就、命じて外師を班す。十月、戍を置きて師を班す。吉見正賴を以て殿と爲して退く。若松の渡に至り、土人の質を取りて、船を具へしめて以て濟る。乃、戍兵をして城を致さしめて還る。兵を遣して鴟峰を援ひ、輝弘を逐ひて之を殺す。

元龜元年【布辨山】出雲　元龜元年正月、元春、隆景兵一萬五千を率ゐて、輝元を輔けて勝久を攻む。其城守せんことを恐るゝや、宣言すらく「兵寡く、將に糧を富田を納れて還らんとす」と。山中幸盛、これを聞きて、甲五千を悉し布辨山に出づ。我兵擊ちて大に之を破る。元春、末次を攻めて、夜炬を其面に列ねて之を襲ふ。勝久、幸盛、新山に走る。諸城連に陷る。

二年　八月、元就、病を患ふ。輝元、隆景、歸りて之を省す。二年六月、疾篤し。輝元、遺言を請ふ。元就曰く、

元就卒す

元就德望あり

【末石】出雲
【大山】伯耆
（毛利元就肖像）

三年

天正元年

二年

「汝二叔を視ること、猶我の如くして、其言に違ふことなくば、則以て我が業を守る可きなり。吾れ復何をか言はん」と。遂に卒す。元就、歌詠を善くし、遺集若干卷あり。嘗て酒酣なるとき慨然として言て曰く、「凡英雄は身を以て天下の治亂に繫くる者、友を千載の上に求む。卽世を同じくして生れ、志合へば則天下治り、志合はざれば則天下亂る」と。嘗て左右に問ひて曰く、「吾れ前世の人主に於ける、誰にか比す可き」と。一儒士あり。對へて曰く、「周の文武に比す可し」と。元就笑ひて曰く、「吾れ乃、文武に若かざるを知るなり。文武の臣、豈面諛すること汝が如き者あらんや」と。元就、一州を得れば則守將を擇び、輙之を戒めて曰く、「吾れ聞く、『其人を侮る者は、其土を有せず』と。汝此の言を服膺せよ」と。故に新附の士民、倍畔する者少なし。

元春、訃を得て哭泣して、將士に謂て曰く、「葬奠の任は隆景に在り。吾れ敵を勦して以て靈魂を慰むべし」と。是の時、幸盛、末石に在り。元春、乃、大山の僧徒を攻むと稱して、急に還りて末石を攻む。幸盛、出でゝ降り、疾と僞り厠の中より逃る。八月、元春、新山を攻めて勝久を走らす。勝久、京師に匿る。幸盛、盜を但馬、因幡の間になす。遂に勝久と偕に織田信長に歸す。初め信長尾張に起りて、近畿を略取す。武田信玄、上杉謙信、其東を割據し皆使を元就に通じ、夾みて信長を攻めんと欲す。謙信、特に將軍義輝に勸めて、元就を召致す。元就、疾に罹りて答へず。三年二月、元春、隆景、使を遣して之に答ふ。

天正元年、信長、將軍義昭を攻む。輝元、二叔と議し、安國寺の僧惠瓊を遣して爲に之を和解せしむ。義昭、免れて紀伊に走る。二年正月、尼子勝久、織田氏の兵を借り、因幡に入りて鳥取城を陷る。城、本、山名豐國に屬し、武田氏に奪はる。豐國、之を復せんと欲す。因りて勝久に黨す。其部將大坪一之、之を諫む。聽かず。一之、乃、來り奔る。八月、元春、隆信、大擧して伯耆に入り、豐國を降し、勝久を逐ふ。義

三年

元清

五年

黑田孝高

【上月城】播磨

昭の紀伊に走るや、遂に西、浮田直家に依る。直家、禮せず。乃、備後に來りて、自輝元に託る。輝元、二叔に謀りて、遂に織田氏と絕ち、義昭を京師に納れんと計る。

是より先、三村家親、盜の爲に殺さる。蓋し直家の使せしむる所なり。直家は浦上氏の將たり。終に其備前美作を簒ふ。浦上宗景、家親の子元親と、皆我が兵を請ひ直家を討たんとす。直家惧れ、亦僧の惠瓊に因りて二氏を滅さんと請ひ、備中を以て我に賂はんと約す。元親の族親成、「元親、織田氏に通ず」と告ぐ。宍戸隆家、隆景に勸めて之を討たしむ。三年夏、元親を松山に圍みて、之を滅す。元親の宗家穗田氏は、前に直家の爲に滅さる。是に於て元就の第五子元清をして穗田氏の後と爲らしむ。中山城に居りて、備中を鎭す。信長、方に一向の僧徒を大阪に攻む。大阪來りて援を乞ふ。元春、隆景、兵を遣して之を援く。又糧船六百を餽り、兵艦三百を以て之を護送す。七月、木津川に至る。能島、來島氏、織田氏の水軍と戰ふ。之を破りて其二大艦を奪ひ、糧を納れて返る。是より先、讃岐の香川氏、淡路の菅氏、皆來りて我に屬す。五年、香川氏、國人と戰ひ、來りて援を乞ふ。七月。穗田元清、浦宗勝を遣し、之に赴かしむ。土佐の援師を破る。宗勝還りて、播磨の海濱を掠め、國人黑田孝高と戰ひて還る。孝高、織田氏の將羽柴秀吉を導きて、別所氏を三木に攻む。尼子勝久、先鋒たり。山陽道に出でゝ、上月城を取る。城、浮田直家に屬す。直家、援を隆景に乞ひて、之を復せんと欲す。是の時に當りて、丹波、但爲の豪族、使をして元春に請ひ、來りて京師を襲はしむ。元春、兒玉春種を遣し、先往きて、之を詗はしむ。隆景の書至るに會ひ、與に俱に上月に赴かんと欲す。元春答へて曰く、「卿、直家の兵を合さば、四萬を得べし。必しも我を須たじ。我れ管內を收むるも亦三萬を得べし。其五千を留めて大友氏に備へ、其餘を以て、丹波、但馬の兵を援けて、愛宕山に上りて以て京師を瞰はゞ、信長、吾と相持して、上月を援くること能はじ。上月陷らば、則荒木村重、別所長治も必我を助けて以て、秀吉を逐はん。是に於て、卿は輝元を輔け、直に大阪に入り、我と京師を夾み攻めて以て、將軍を納れん」と。隆景曰く、「是れ危道なり。村重の意も未だ必す可からず。而して兄弟相離れ、之

六年

隆景

【甲部川】備中

を夾みて東せば、恐らくは變其間に起らん。先力を戮せて上月を陷れ、然る後道を分ちて東上するも、未だ晩しとなさゞるなり」と。因りて輝元をして元春を召さしむ。元春之に從ふ。

六年二月、元春、隆景、兵を合せて上月を圍む。直家、病と稱し、其兵一萬五千を出して師に會す。四月、秀吉、村重と、兵四萬を合せて來り援け、高倉山に陣す。我が軍塹柵を作りて自守る。杉原氏の間、夜、秀吉の陣に入りて首級を獲ること數なり。東軍惧る。

五月、信長、自來り援はんと欲し、先、長子信忠、及び諸將を遣し、秀吉を援く。兵凡十萬人なり。元長元春に請ひて曰く、「信長、自來らば、則兵衆く令一なり。敵す可からず。今、秀吉、村重等、功を爭ひて和せず。天雨ふり月黑し。宜しく夜之を襲ふべきなり」と。元春、之を隆景に謀らしむ。隆景曰く、「信長全兵を擧げて二十萬に過ぎず。東、武田、上杉に備へ、西、大阪、雜賀に備へて六七萬を減ず。而して見に此に在る者十萬、卽、自、來るは二三萬のみ。我れ七萬を以て之に當るに、何ぞ必しも恐れんや。且我れ北路より襲ふは地形便ならず。南路より襲はば、浮田氏の心測り難し。皆萬全の策に非ず。若かず、壁を固くして戰ふ毋きに若かず。彼れ、兵衆くして糧繼がず。將に自去らんとす」と。乃、止む。

六月、美作、出雲の兵、東兵と熊川に鬪ふ。秀吉、中軍より二萬騎を遣し、出でゝ援けしむ。元長、弟の元氏、廣家と萬人を以て流を亂りて逆へ戰ふ。東軍みな騎兵、馳突して來る。元長、士卒に令して曰く、「跪け」と。東兵入る能はず。逡巡して退く。元長令して曰く、「起て」と。此の如くすること再三、北ぐるを追ふこと二十餘町。荒木氏、敢て東兵を援けず。浮田氏、敢て西兵を援けず。西兵深く入りて退くに難し。天野隆重、手兵を引きて高岡に上りて陣す。西兵、乃、引き還る。秀吉、我の力爭す可からざるを知りて、信長に請ひ、城を棄てゝ去る。城陷る。勝久自殺す。山中幸盛復降る。之を甲部川の上に殺す。直家、已に潛に信長に通ず。是に於て疾愈えたりと稱して來り見ゆ。元長、元春に白して曰く、「直家、異圖あり。兒請ふ、席に卽きて之を誅せん」と。杉原盛重も、又之を請ふ。隆景曰く、「彼れ證なくして、我れ釁を啓

【二帥】隆景元春

七年

【渠荅】鐵蒺藜なり、水中に布きて人馬の足を刺す

【升形、祝山】美作

【種石城】伯耆

くなり。縱令を誅するを得るも、其國人みな嗣を立てゝ以て我に抗せん。爲す無れ」と。乃、止む。

已にして直家、惠瓊に因りて、二帥に、勢に乘じて播磨を徇へんことを請ふ。將軍義昭も、亦之を促す。元春、隆景、乃、進みて黑澤山に陣す。直家、二帥を八播山に享し、甲を伏せて之を擒にせんと欲す。直家の弟忠家、潛に來りて之を告ぐ。元春、隆景、乃、人をして直家に言はしめて曰く、「聞く、公、我が兄弟の首を以て織田氏に獻ぜんと欲すと。我が兄弟並に少主を輔く。尊意に順ふこと能はず。必之を獲んと欲せば、請ふ、旗皷を以てせよ。敢て辭せざる所なり」と。旦日、路を分ちて西に歸る。直家敢て追はず。

十月、荒木村重、信長に叛きて、兵庫、華隈の諸城に據る。別所長治と、みな援を我に乞ふ。我れ方に浮田氏を患ふ。又南條元續、東軍に通ずと聞く。未だ赴き援くるに暇あらず。獨糧を餽りて之を助く。丹生、淡河の二城を築きて、西は三木に達し、東は華隈に達す。

七年二月、秀吉、弟秀長を遣し、夜、襲ひ丹生を取る。淡河定範、塹を穿ち、渠荅を布きて以て待つ。秀長至る。梗りて進むを得ず。定範、牝馬數十匹を募り得て、驅りて敵軍に入る。軍馬、牝を爭ひて相踏む。什伍大に亂る。定範、兵を縱ちて之に乘じ、擊ちて秀長を走らす。其從子說きて曰く、「秀吉必怒りて來らん。窮して走るは、勝ちて退くに若かず」と。乃、收めて三木に入る。秀吉、來り、敵を見ずして去る。是の歲、二帥、輝元を輔けて東伐し、美作の五城を取る。家直敢て出でず。四月、南條元續、叛きて東軍に通ず。其の族山田直重之を諫む。元續聽かずして、之を殺さんと欲す。直重來奔す。八月、直家、升形、祝山の二城を攻む。下す能はず。元春兵を將ゐて赴き援く。其去るを聞きて、轉じて元續を種石城に攻む。杉原盛重、先鋒たり。敵將南條信正、長瀨川を夾みて陣す。兵を分ちて三と爲し、川を渡り大に戰ひて、信正を斬る。元春、乃、種石を環りて之に砦す。元續出でゝ戰ひ、輒敗る。

十一月、元春、隆景、復輝元を輔けて東伐し、備中の忍山を拔く。

十二月、我が饟を三木に餽る者、敵の壘將谷衞好を襲殺す。長治、兵を出して之に應じ、大に敗る。淡河定

八年　長治自殺
鳥取城
九年　丸山城

範、之に死す。八年春、三木陷り、長治自殺す。直家、秀吉の令を以て、八濱に築く。二弟忠家、基家を以て之を守らしむ。二月、元清を遣し、之を攻めて、基家を殺す。

四月、秀吉、但馬、因幡を侵して鹿野城を陷れて、山名氏の質を取る。元春赴き援くれども及ばず。七月、荒木村重來奔す。是の月、秀吉、山名豐國の鳥取城を圍み、質を城外に縛し、鎗を以て之に擬し、以て之を誘ひ降。城兵曰く、「我れ數毛利氏に叛きて誅せられず。今復叛く可けんや」と。秀吉怒りて質を殺し、次に豐國の女に至る。豐國、遂に降る。秀吉、其邑を削りて去る。城兵みな豐國に叛く。豐國、播磨に奔る。城兵、我が一將を請ふ。吉川經家を遣して之を守らしむ。又丸山に城く。

九年七月、秀吉、萬騎を以て鳥取、丸山を圍みて、其糧道を絕つ。吉岡質休、吉岡城に在り、夜、敵の營を襲ふ。又迎へて、敵兵を擊ちて之を走らす。秀吉の馬標を奪ひて、之を牓元に獻ず。秀吉、使を遣して、丸山城を招き降さんとす。城將、其使者を斬りて、尸を城外に投ず。秀吉、大に怒り、之を攻むること益〻急なり。輝元、之を援けんと欲す。而れども國兵四に疆上を戍る。在る者甚寡し。隆景、富田に至りて、召し募ること數日にして、未だ進まず。元春曰く、「鳥取は吾が管内なり。吾れ以て待つ可からず」と。九月六千人を以て馳せて伯耆に至れば、則ち城已に陷る。秀吉、國人を誅して經家を免さんと欲す。經家聽かず。丸山、鳥取の將領と、みな自殺して、以て其兵を免さしむ。元春、報を得て、切齒して曰く、「吾れ猶往きて經家の爲に一戰せん」と。將に發せんとす。又報あり。曰く、「秀吉伯耆に入る」と。乃、留まりて馬山に陣す。

十月、秀吉、至る。八萬騎と稱す。種石城の後に陣す。下に馬山を視る。馬山は湖山を左右にし、後は大川に迫り、纔に一橋を通ず。人々震怖せざるは無し。元春、命じて之を絕ち、舟楫を毀ちて、自走路を絕つ。二澤爲虎、益田藤包、私に議して曰く、「敵は衆にして新に勝つ。其鋭を避けて、再舉するに若かず。請ふ、入りて之を說かん」と。乃、與に偕に元春に謁す。元春、方に甲を釋きて坐して曰く、「天、大に雪ふる。諸

君且留り飲め」と。因りて爐を圍み、酒を命じ、醉ひて鼾睡す。二人敢て說かず。元長、廣家、父の命を以て諸陣を巡視す。塹を穿ち柵を植てゝ曰く、「敵、明日必ず來らん」と。曉に比びて、敵數千騎、糧を種石に納る。元春、銃手を遣し、其一將を斃す。敵繼ぎて出づる者萬餘なり。元長、廣家、二千人を以て馳に馳す。秀吉、急に其兵を收む。南條元續、請ひて曰く、「何ぞ一戰して之を禽にせざる」と。秀吉、哂ひて答へず。明日、兵を引きて去る。元長、之を尾擊せんと請ふ。元春、許さず。

十年正月、元春、因幡を復せんと欲す。二月、兵を將ゐて大崎を攻む。時に杉原盛重、既に死し、其子元盛、先登す。元春、遂に二城を復して鳥取を攻む。四月、秀吉八萬を將ゐて備中に入り、高松城を攻む。甲部川を引きて之に灌ぐ。守將清水高治、城内の染戸に募り、板數百枚を收め、舟を造りて出でゝ戰ふ。隆景急を聞き援を元春に乞ふ。元春、卽、發せんと欲す。山陰の將士みな曰く、「上月の役には佐公、我が師を率ゐて自援ひ、馬山役には富田に留りて來らず。今、鳥取幾ど復せんとす。何ぞ此を棄てゝ彼に赴くことを爲さん」と。元春曰く、「隆景、馬山に來らざりしならん。吾れ坐ながら其危を視ば、獨宗家を如何せん。諸君、往くを欲せずば、吾れ寧、獨身之に赴きて、隆景と共に死せん」と。將士、皆謝して從はんことを願ふ。乃、杉原元盛を留めて鳥取城に當たらしめ、南三里に陣す。相持して未だ戰はず。

五月、日幡城叛く。隆景、兵を遣して之を攻めて、東も亦、叛きて東兵を納る。元長、廣家、萬人を以て之に赴く。秀吉復兵を收む。我が兵數利を獲。而れども高松、旦夕將に沒せんとす。元春、信長の自來らんとするを聞くや、一戰せんと欲す。隆景曰く、「阿兄は何ぞ自輕ず。乃、一隊將の爲に傚ふか」と。元春曰く、「家君、一夜を以て陶氏に克ち、七年を以て尼子氏を滅す。蓋し小敵は宜しく緩く之を困ますべく、大敵は急に之を挫くべきなり。我れ北兵を以て、夜、其北を襲はん。而して卿、其南に應ぜば、必ず之に克たん。浮田氏は觀望して、戰はずして走らんのみ」と。隆

十年
【佐公】隆景
【篆君】元就
隆景、元春軍を議す

景曰く、「然り」と。會軍中、「三澤爲虎、款を秀吉に通ず」と流言す。六月二日、二師、元長と、密に廂山の絕頂に會し、議して曰く、「諸將の意、皆測る可からず。今、計を爲すは、宜しく牙營に棚し、敵を迎へて決戰すべし」と。既にして罷む。元長、徑に爲虎に詣り、其膝に迫り坐して曰く、「聞く、卿、秀吉に款を通ずと。信なるか。信ならば、則吾が頭を斫りて以て秀吉に送れ」と。爲虎、惶駭して曰く、「是れ讒口に出づるのみ」と。乃、誓書を獻ず。衆情稍定まる。終に再明、秀吉を襲はんと期す。僧惠瓊、素より心を秀吉に歸す。爲に和議を講ず。秀吉曰く、「苟も高治をして自殺せしめば、則我れ手を藉さて去るべし」と。惠瓊以て二師に告ぐ。二師肯ぜず。明日、惠瓊自ら城に入りて高治を諭す。高治曰く、「我れ一死して兩國を和す可くば、何ぞ敢て死せざらんや」と。乃、兄月清、軍監末近と、舟に乘りて城を出で、舟中に自裁し、以て城兵を出す。惠瓊還り報ず。二師、爲に哀を發す。遂に盟約を爲し、地を割きて和を講ず。南は甲部河を界とし、北は馬山を界とす。輝元の季父元綱を送りて質と爲す。秀吉、森高政を送りて之に答ふ。卽日、東軍解き去る。元長、山頂に在りて、之を視て曰く、「彼れ故なくして和を講ず。必ず内變あらん」と。旣にして告ぐるものあり。信長、明智光秀の爲に弑せられたり」と。元長曰く、「果して然り。吾れ盟に與らず。請ふ之を追擊せん。秀吉、生擒す可きなり」と。終に許さず。後、秀吉我が將士の款書數通を遺る。三澤氏の臣雲波の書あり。爲虎、乃ち之を誅す。

輝元質を送る

輝元秀吉と和す

【吉田】吉川氏

輝元、旣に秀吉と和し、猶八州を領す。歲入百二十萬石なり。

七月、隱岐の經清、其叔父清家を弑す。初め清家、兄に代り隱岐を領す。兄の子經清を養ひ、己が子甚五を出して、吉田に質とす。經清、款を信長に通ぜんと欲す。清家聽かず。信長死するに及びて、經清、之を誘ひ殺して、以て口を滅す。因りて啓す、「清家、敵に通ず。臣、之を誅せり」と。甚五、寃を訴へて、隱岐の士民、内應を爲す。終に經清を誅殺す。八月、山田重

十一年

十三年秀吉南海を伐つ

【兩川】吉川小早川

秀吉島津氏を伐たんとして元長、元春に請こととあり

小倉城

【二子】元長廣家元春卒す

直、誘ひて南條氏の糒兵數百を殺す。九月、伯耆の人相驚きて曰く、「秀吉、上國に戰死し、重直且來り襲ふなり」と。元續、怖れ走りて、京師に入る。重直且來り襲ふ戰はずして之を走らすのみ。元春の智、元續の怯、みな無雙の者なり」と。秀吉、明智光秀を誅し、遂に織田氏に代りて大阪に居る。秀吉、笑ひて曰く、「元春、甚語を設け、樂ます。家を元長に讓りて老す。十一年九月、隆景、弟秀包及び廣家を遣し、大阪に赴き、去歲の盟を尋ぐ。秀吉、秀包の姿容あるを悅びて、之を留む。

是より先、杉原景盛、兄元盛を殺し、誣ふるに叛を以てす。事覺る。七月、隆景、三弟の元秋、元政、元康を遣し、攻めて景盛を殺し、其弟次郎を以て、杉原氏の後を承がしむ。

十三年四月、秀吉、南海を伐つ。隆景、元長をして伊豫に入らしむ。元長、病と稱して歸り、廣家、之に代る。七月、伊豫を定む。秀吉、河野通信を三原に徙し、隆景をして、代りて其國を領せしむ。僧惠瓊、來島某に各萬石を賜ふ。

十月、隆景、元長、大阪に如く。秀吉、諸將をして郊迎せしめて曰く、「兩川をして約を變ぜしめば、則吾れ豈此に至るを得んや」と。因りて之を饗す。

時に秀吉、將に島津氏を伐たんとす。元長に囑して、元春を請ひて先鋒と爲し、之を筑前に封ずるを約す。元春、秀吉の爲に驅使せらるゝを羞ぢて肯ぜず。是の歲、秀吉、奏請して、輝元を以て從四位下に叙し、侍從に任ず。黑田孝高を遣して元春を促す。元春起たず。輝元曰く、「公、我が爲に一たび出でよ」と。元春、已むを得ず、乃、隆景と俱に發し、攻めて鬨津を拔き、障子岳を下し、進みて賀春岳を攻む。元春、瘧えて將に發せんとす。黑田氏、之れ爲して鮭を供す。瘡復劇し。乃、二子を遺囑するに後事を以てす。言、私に及ばず。終に卒す。年五十七。元長、廣家をして喪を奉じ、安藝に歸らしめて、自、隆景に從ひて、賀春の守將高橋種

元を降す。

（吉川元春肖像）

十五年三月、豊臣秀長、至る。我が兵を合して日向に入り、耳川に抵り、進みて高城を圍む。島津家久、夜、其營を襲ふ。秀長、其兵の慓悍を畏れて、敢て出でず。元長、逆へ戰はんと欲すれども許さず。秀吉、至る。龍造寺氏以下みな降る。五月島津氏、和を請ふ。秀吉、隆景を筑前に徙し、名島を治めしめて、秀包に筑後の三郡を賜ひ、來目を治めしむ。元長、道にして病む。六月、遂に卒す。元長、倔強なること父に類す。秀吉に畏惡せられ、常に退居の志あり。歌詠に見る。遺命して廣家を立つ。黒田孝高、素より廣家の美色なるを悦び、之と親み善し。爲に秀吉に言ひて之を立つ。隱岐を襲ぎ食む。廣家、初名は經信といふ。是に於て、今の名に改む。是の歲冬、肥後、豐前、盜起る。隆景、廣家命を受け、討ちて之を平ぐ。筑前の士民、隆景の賢聲を稔聞して、人人相慶ぶ。隆景、務めて其禁網を濶くす。漸く治教を修め、下野の足利學校に倣ひて、黌舍を建て、先聖を釋奠す。時に亂離、日久し。人始めて絃誦の聲を聞く。

先聖を釋奠す

十六年、輝元、參議に任ず。隆景、廣家、秀包、みな四位侍從となる。九月、秀吉、浮田秀家の女を養ひて廣家に妻す。初め廣家の父兄、みな西海の役に死す。秀吉曰く、「吾れ之に許すに筑前を以つてせり。其死するに會ひて、果さず。當に西海一州を以て其孤を恤むべし」と。石田三成、大谷吉隆、秀吉に說きて曰く、「輝元の領する所、既に中國に跨る。而して隆景、秀包、各一國を領す。備前の浮田氏、素より之と惡し。以て相禁ぜしむ可し。而るに亦、吉川に婚す。吉川、今又封を受けんとす。天下事無ければ則已まん。苟も事あらば、則關以西は、みな毛利氏に歸せん。今の計を爲す者は、輝元の封内に就きて、一二州を割き予ふるに若くは莫し。是れ名は封を賜ひて、實は其勢を分つなり」と。秀吉之を然りとす。乃ち輝元をして、出雲、伯耆の數郡を以て、廣家に加賜せしめて、富田に治せしむ。十八年、秀吉、東、北條氏を伐つ。

石田三成
大谷吉隆

十八年

輝元をして京師を守り、隆景をして清洲を守り、廣家をして岡崎を守らしむ。北條氏降らず。隆景を召して之を謀る。對へて曰く、「先人、富田を圍みし時、攻戰を休めて持久を示し、多く反間を縱ちて、其君臣をして相疑はしめ、其妻孥を索めてこれを招き下せり」と。秀吉曰く、「吾れ之を師とするなり」と。遂に其計を以て北條氏を平ぐ。

【先人富田を圍む】元就の尼子義久を攻むるを謂ふ

是より先、輝元、吉田の隘狹を患へて、己巢に城く。十九年、成る。これに徙る。更めて廣島と名づく。文祿元年、秀吉、兵を發して朝鮮を伐つ。毛利、吉川、小早川氏、後隊たり。諸將、朝鮮に在りて連署して事を稟る。隆景の花押、點畫甚繁し。福島正則傍觀して、之に謂て曰く、「押字は宜しく疎なるべし、宜しく密なるべからず。然らざれば、則死に臨みて遺狀を作るに、速に成すこと能はじ」と。隆景、笑ひて曰く、「大丈夫當に尸を原野に橫たふべし。何ぞ遺狀に以ることを爲さん」と。正則、愧色あり。是の時に當りて、浮田秀家、石田三成等の諸將、國都に在り。小西行長、先鋒たり。進みて平壤に據る。平壤以南、國都に至るまで、城砦相屬す。二年正月、明の將李如松、大兵を率ゐて、來りて朝鮮を援け、平壤を陷る。行長、敗れ走る。大友義統も、亦城を棄てゝ走る。如松、勝に乘じて南に下る。秀家等、諸城砦をして、皆解きて還り、國都に萃らしむ。隆景、開城を守る。獨、還るを肯ぜずして曰く、「諸君みな去れ。吾れ當に獨留るべし。吾れ命を受けて外征す。固より生を期せず。吾れ老いたり。願くは明人と一戰して、明人をして、日本に小早川隆景あるを知らしめん。卽敗死すとも、一老翁を喪ふのみ。何ぞ國に損せんや」と。秀家等、之を促すこと再三。隆景、已むを得ずして還る。秀包、元廣、及び立花宗茂の三將と、兵二萬を合し、未だ國都に至らざる三十里にして陣す。數日にして、候騎、報じて曰く、「如松の兵、既に弭蹄驛に至れり。蓋し十餘萬騎なり」と。隆景曰く、「以て我が武を試るに足らん」と。乃、兵を分ちて六隊と爲して、迎へ戰ふ。前軍の二隊利あらずして卻く。隆景、鎗を揮ひて大に呼びて進む。士卒みな奮ふ。一、百に當らざる莫し。三將、左右より夾みて之を擊つ。

【國都】朝鮮
京城
二年李如松、來り戰ふ

隆景開城を守る

碧蹄驛

和成る
秀元
【先君】[illegible]就
【參議】輝元
【韓を伐ちし年】文祿元年
慶長二年
隆景卒す

明軍、遂に大に敗れ、如松、馬より墜つ。隆景の將井上某、之を鎹す。中らず。其將李有聲と鬪ひて之を斬る。如松、厪に身を以て免る。北ぐるを逐ひて臨津に至る。首を斬る萬餘級。而して我が兵、死する者僅に百餘人なり。如松、開城に入り、其失亡せる所を視て、痛哭曉に徹す。遂に軍を退くること三次す。明軍大に沮む。明の和を我に乞ひたるは、此戰に本づくなり。

四月、和成る。國都の諸將、撤てゝ還らんと欲す。虜兵の追躡せんことを恐れて、群議決せず。隆景、柱に倚りて睡る。石田三成、喚び起して計を問ふ。隆景曰く、「火を縱ちて城を焚き、更殿して退くに、何の虞か之あらん」と。之に從ひ、軍を全くして還る。六月、輝元の義子秀元、海を濟りて、諸將と倶に晉州を攻めて之を拔く。秀元は、元清の子なり。其幼なるとき、元春、隆景、之を目して、相語りて曰く、「何ぞ酷先君に肖たるや」と。時に秀吉、其外甥秀秋を以て、毛利氏の後を爲さんと欲す。或人、以て隆景に告

隆景、素より秀吉の己を畏忌するを知れり。且其封を受くるを屑しとせず。之を返致せんと欲せしなり。是の言を聞くに及びて、竊に度りて曰く、「他人をして我が宗家を汨さしむ可からず。且秀秋は妄庸の人なり。之を養ふは、是れ禍を養ふなり。吾れ寧其弊を任ぜん」と。已にして秀吉、從容として之に問ひて曰く、「參議齡强にして嗣なし。如何」と。隆景、卒に對へて曰く、「既に穗田氏の子を養ふ」と。秀吉、撫然として曰く、「吾れ未だ之を知らざるなり」と。隆景、人をして馳せて輝元に告げ、秀元を立てしむ。遂に秀秋を請ひて、己が子と爲す。秀吉喜びて之を許す。乃、之に筑前を讓り與へて、自三原に老す。

秀吉、始めて韓を伐ちし年、肥前より航して大阪に歸る。時に大浦を過ぐ。舟人、逆を謀り、故に舟を礁に觸れて、殆溺る。秀元、走舸を以て之を救ふ。秀吉舟人を梟し、秀元を挈げて京師に入り、奏して四位侍從となす。其德に報ぜしなり。遂に外征の命あり。年甫めて十五。

慶長二年輝元、隆景、並に從三位中納言となる。秀家と皆淀河の堤を修む。秀元、輝元の官爵を襲ぎ、秀吉の女婿と爲る。是の年、復朝鮮を伐つ。秀秋、秀元を以て諸將を統べしむ。六月、隆景、病みて卒す。年

（小早川隆景肖像）
三年
廣家
蒲穗の背幟
秀吉薨ず
五年
【嗣名】秀頼

六十二なり。

隆景、秀吉に重ぜられ、其大計に參す。而して己を持すること愼密にして、讒間入らず。秀吉、嘗て足利氏を九州に徙し封ぜんと欲す。隆景、辭して曰く、「八州己に多し。況や一を增すをや。恐らくは勝ふる能はざるなり。且先人の百戰して取りし所之を棄つるに忍びず」と。秀吉、乃、止む。退き老するに及びて、誦吟を以て自適して歿するに至る。

十二月、明の兵、我が將加藤清正を蔚山に圍む。三年正月、秀秋、秀元、赴き援く。廣家、其騎に謂て曰く、「明の兵、衆くして整はず。汝、其後軍を注視せよ。今將に走らんとする也」と。既にして果して走る。廣家、千餘騎を以て先之を追ふ。明の騎將吳惟忠、茅國器、返り戰ふ。廣家、縱横に奮擊す。二將みな奔逃す。清正、之を望み見て曰く「彼の蒲穗を以て、背幟となす者は誰ぞ」と。左右對へて曰く、「吉川なり」と。清正曰く、「勇なる哉。其幟の較著ならざるを恨む。當に吾が號を贈るべし」と。乃、手づから其背幟の馬藺を取りて、之を贈る。廣家、驍名益著る。秀吉大に之を賞せんと欲す。僧惠瓊素より吉川氏と惡し。乃、石田三成と倶に其議を廢沮す。

八月、秀吉薨ず。子秀頼嗣ぐ。毛利、德川、前田、上杉、浮田氏、並に五大老と稱して、共に之を輔翼す。三成等、諸老を離間す。

五年二月、輝元、德川公を其第に饗し、好を修めて交盟ふ。四月、德川公、上杉氏を伐つ。輝元、廣家、惠瓊を遣して、兵に將として之を助けしむ。三成、惠瓊をして、輝元に言はしめて曰く、「德川氏、將に嗣君に利あらざらんとす。嗣君これを憂ふ。將に公の力に倚りて以て之を討たんとす」と。輝元、乃、兵四萬を將ゐて、大阪を守る。增田長盛これを副く。三成、自兵を引きて、進みて美濃に入る。秀元、輝元を諫めて曰く、「秀頼は幼孩なり。何ぞ臧否を辨ぜんや。大人愼みて其言に惑ふ匆れ。且君、德川と盟ひて、未だ幾

ばくならずして之に背く。可ならんや」と。聽かず。秀元曰く、「然らば則ち大人、秀賴を擁して以て東伐せよ。兒請ふ、先鋒とならん。則諸將の德川に從ふ者は、皆來りて我に屬せん。我勝つこと必せり。坐ながら此の地を守るは計に非ざるなり」と。又聽かず。命ぜられて廣家と瀨田に陣し、伊勢を徇へ、攻めて津城を拔く。東西の軍美濃に會すと聞き、則北して南宮山に屯す。惠瓊は長曾我部盛親、長束正家と、山下に陣す。兵凡三萬、秀秋、西軍に會す。首として款を德川氏に送りて、約して內應を爲す。廣家も亦、福原越後と議を定めて、秀元に勸めて款を送らしめんとす。秀元曰く、「吾が家、託を幼弱の人に受く。之を棄てゝ、强國に歸するは、義に非ざるなり。且家君の命なし。安ぞ自專にす可けんや」と。廣家曰く、「豐臣氏の恩澤の諸侯すら且叛きて東軍に歸す。況や我が家に於てをや。宜しく速に去就を決せよ。是れ納言を利するなり」と。秀元、未だ決せず。廣家、密に黑田長政に因りて款を納れ、福原某、粟屋某を送りて質と爲す。長政、之をして衆を率ゐて來り屬し、西軍を擊ちて以て信と爲さしむ。秀元曰く「我が山下の軍は吾に從ひて降る者に非ず。吾も亦之を擊つに忍びず。唯當に甲を按めて動かざらしむべし」と。輝元、大阪に在り、「京極高次、大津を以て東軍に應ずと」聞きて、元康、秀包を遣し、立花宗茂等と、之を攻めしむ。人をして說かしめて曰く、「諸將、嗣君の爲に義を擧ぐ。公は嗣君の姻戚なり。何ぞ獨從はざる」と。高次、肯ぜずして曰く、「今日の事は、毛利と德川と雌雄を爭ふのみ。嗣君、何ぞこれに關らんや」と。是に於て攻擊すること益〻急なり。高次、遂に城を致して去る。諸將將に遂に美濃に會せんとす。是の時に當りて、西軍は輝元を挾ち、東軍は德川公を挾つ。相持して未だ戰はず。九月、德川公、至る。而して輝元未だ至らず。三成等遂に大垣に聚議し、浮田秀家を推して將と爲し、秀元を以て先鋒と爲す。正家惠瓊、往きて其議に參ず。還り報ず。廣家、怒りて曰く、「宰相、納言に代りて師を統ぶ。秀家の前驅と爲る能はず」と。已にして三成、自來り請ひて曰く、「毛利、豈輕重あらんや」と。廣家、終に聽かず。三成曰く、「然らば則公は止此に軍して、我が烽を擧ぐるを見ば、則直に東軍の後を襲へ」と。

【幼弱の人】秀賴
【納言】毛利輝元　黑田長政
【嗣君の姻戚】高次は秀賴の庶母松城君の弟也、淀君の妹を娶る高松
【宰相】毛利秀元

明日、兩軍みな關原に陣す。德川公、猶我が意を疑ひ、兵を分ちて南宮に當て、而して進みて桃配野に陣す。惠瓊、來りて秀元を見て之を勗めしむ。秀元曰く、「軍事は廣家に委ぬ」と。惠瓊曰く、「公は太閤の義子、斯須も秀賴を忘る可からず。何ぞ此の推諉の言を得んや」と。秀元曰く、「吾れ必約の如くせん」と。惠瓊去る。秀元、人をして廣家に謂はしめて曰く、「東軍の諸將、其實みな大阪に在り。棄てゝ顧ず。吾も亦福原の輩を棄てゝ以て西軍に應ぜんと欲す。如何」と。廣家、肯ぜず。已にして兩軍大に戰ふ。石田氏の陣、烽起る。正家、廣家、宍戶元續と先鋒たり。其兵みな冑を免ぎて坐す。秀元進むことを得ず。乃傳餐に託して、故戰期を失す。世人傳笑す。遂に已むを得ざるの計を謂ひて、宰相の傳餐と曰ふ。

【宰相の傳餐】秀秋戰を觀望す

是の時、秀秋、松尾山に在りて、兩端を觀望す。德川氏之を促す。乃、後より西軍を襲ふ。其家老松野主馬怒りて曰く、「主公、何ぞ此不義の擧を爲す。小早川氏に未だ曾て有ちざる所なり」と。終に戰ふことを肯ぜず。西軍大に敗る。我が山下の軍、戰はずして潰ゆ。廣家、長政に因りて德川氏に謝して曰く、「秀元、宜しく速に謁すべし。願ふに輝元、大阪に在り。敢て先だゝざる也」と。乃、山を下りて西に歸る。長政、福島正則と、其前路に出でゝ帳を設け、要して之を饗す。秀元、膂力あり。伴ひ醉ひて正則の手を拗りて曰く「近日公を大阪に見ん」と。袂を奮ひて去る。二人敢て止めず。立花宗茂、草津に至り、關原の敗聞を得、返りて大阪に至り、輝元を助けて城守せんと欲す。輝元聽かず。秀包も亦返り至る。宗茂、與に俱に東軍に歸せんと欲す。秀包曰く、「吾は納言に從ふ者なり」と。乃、大阪に入る。疾を以て、安藝に歸り、尋ぎて卒す。輝元、城を避け木津の別第に居る。髮を削り宗瑞と稱し、德川公に降らんことを請ふ。德川公、其親信の井伊直政と密議して曰く、「毛利氏は右族、遽に讓削を加ふ可からず。而れども廣島は其治所なり。此を奪はざれば、以て典刑を正すなし」と。議未だ決せず。會輝元、

【立花宗茂】
【輝元髮を削て宗瑞と稱す】

輝元萩城に入る

十三年
十九年
【二婿】秀元
秀就

元和元年
寛永元年

【台德公】秀忠（毛利輝元の筆蹟）
二年輝元卒す
【大猷公】家光

使者をして來らしめて曰く、「生死、唯命のまゝなり。若大仁を垂れて、周防、長門を領するを得ば、望外の幸なり」と。德川公、大に喜びて、之を許す。盡く其餘の六州を收む。惠瓊、伊吹山に匿れ、出でゝ秀元に依る。其東軍に通ずるを聞き、去りて鞍馬に匿る。吉川氏、來り索むと聞きて、又出でゝ本願寺の子院に匿る。近江の僧樂鎭、素より之と惡し。以て東將の奧平信昌に告ぐ。信昌、兵を遣し之を捕ふ。從者、輿載して東寺に走る。追兵已に迫る。從者、脫す可らざるを度りて、輿を隔てゝ之を刺し、返り鬪ひて皆死す。惠瓊未だ殊せず。遂に縛に就く。十月朔日、石田、小西、長束と、みな京師に梟首す。

輝元、長門に徙り、萩城を治す。三十萬石を食ひて公役に與らず。其子秀就を送りて質と爲す。輝元、既に秀元を養ふ。而して秀就及び就隆を生む。德川氏、長門を秀元に分たんと欲す。秀元、之を辭して、退きて長府に居り、以て國政を攝す。會其室卒す。德川公、松平康元の女を養ひて之に繼ぐ。

十三年、又其孫女を以て秀就に妻す。秀就、時に四位侍從たり。十九年冬、德川公、大阪を攻めて二婿を江戸に留む。秀元、水野忠元に因りて請ひて曰く、「既に姻婭を辱くす。猶何ぞ疑はるゝや。願くは先鋒と爲りて力を效さん」と。之を許す。兵解けて國に歸る。

元和元年夏、兵再起る。秀元、西道の諸將に先だちて大阪に至る。首を斬ること三百級。賞あり。秀就、海道を取り、風に阻められて、後れて至る。罰なし。寛永元年、秀元、江戸に在り。輝元、使をして之に告げしめて曰く、「我れ二國の新封を以て、十州の舊臣を養ふ。上下共に困しみ、公役に給するを得ず。念ふに封を受くるも益なし。二國を返致せんと欲す。汝、善く之を計れ。我が家をして滅亡に至らざらしめよ」と。

秀元、大に驚きて土炊利勝に因りて、之を臺德公に白す。公、輝元をして、これを計らしむ。秀元、二國の田を檢して、七十八萬石を得。輝元、之を聞きて大に喜ぶ。二年、輝元卒す。次年、秀就、左近衞少將と爲る。八年、秀元、政を秀就に還す。大猷公曰く、「秀元は成童にして外征の元帥たり。門望みな隆し。眞に我老友なり」と。數延き

長府
德山
清末

秀秋卒す
小早川氏絶ゆ
【兄弟】隆景
元春

【安藝の人】山陽先生は安藝の竹原の人なり

元就義戰

て與に語る。子孫仍長府に居りて五萬石を食む。就隆、周防の德山に居りて亦五萬石を食む。秀元の次子元知、長門の清末に居りて一萬石を食む。豐臣氏の質、森高政、森と毛利と國音相近きを以て遂に毛利氏を冒す。豐後の佐伯に居りて六萬石を食む。關原の役に大阪に在り。四萬石を削らる。此四家、宗家とみな存して今に至る。宗家は世侍從に任じ、少將に遷りて從四位下、大膳大夫は、其常銜たり。廣元、元就の故事を襲ぐなり。吉川氏は宗家を存せし功を以て、世岩國の六萬石を食む。秀秋、內應の功を以て、備前、美作を食む。松野主馬、其碌を食むを羞ぢて、去りて京師に匿る。何も無くして、秀秋卒す。嗣なくして國除かる。小早川氏は、遂に祀られず。元春、終に臨みて、書を遣し、輝元を戒めて曰く、「往日、吾が兄弟並に先鋒たり。子を推して元帥と爲す。今、天下已に主あり。子、愼みて自視ること往日の如くする勿れ」と。隆景の將に歿せんとするや、亦、之を戒めて曰く、「天下將に亂れんとす。子、第退き守りて、進み取る勿れ。我が家をして雄資先君の如きもの有らしめば、則可なり。否らずして權を天下に爭はゞ、是れ自禍を速くなり」と。輝元、二叔の言を忘る。毛利氏、故を以て削り黜けらると云ふ。

外史氏曰く。余は安藝の人なり。其都邑城池を俯仰して、輙毛利氏の盛時を懷ふ。嚴島を觀るごとに、未だ嘗て元就の賊を鏖にせしことを想見せずんばあらざるなり。夫れ室町の時、天下紛紛として、日に兵爭を事として、群兒の暗中に鬪ふが如し。喧呶毆擊、一仆一起誰か其曲直を知らん。孟子の謂ゆる義戰なき者とは是のみ。唯元就の陶賊に於ける、北條早雲の堀越に於ける、羽柴秀吉の明智に於けると、其事みな稱道すべし。故に其功効みな此の如きを致せしなり。而して元就、最其難き者なり。夫れ亂臣賊子は、人、これを討つを得。然れども戰國の俗は、唯利を見て義を聞かず。陶賊の事の如きは四隣の牧伯、熟視して敢て齟齬する莫し。甚きは、相率ゐて之に歸し、以て倚賴を爲すに至る。獨元就微力を以て誅討を圖り而して又之を天子に請ふ。名正しく言順ふ。義旗の指す所、堅きも破れざる無し。炬を暗室に揭ぐるが如く、衆目駭き觀る。以て大義を天下に伸べ、天下をして響應して、之に歸せしむるに足れり。而るに何ぞ十三州を、これ圖るに

善戰善謀

足らんや。大凡英雄の事を成す、みな以て其智略の致す所となす。而して其事の義に合ひて、能く人心を服する者あり。而して自知らざるなり。後の追論する者も、亦徒に、成敗を視て、盡く其智慮に成ると謂ひ、而して天下の事、知慮の及ばざる所に出づるあるを知らず。況や夫の危疑の際に當りて、機會の來る。間髪を容れず。苟も區々の計算を以て、之が萬全を要するは、吾れ其身を終へて、事に及ばざるを見るのみ。故に彼の治世の論は、以て亂世の英雄を揣る可からざるなり。吾れ元就を論じて、其智略を言はずして、其果斷を言ひ、其果斷を言はずして、其事の義に合へるを言ふ。之を天子に請ひしに至りては、又義の大なる者なり。且つ其貢賦を效して、朝儀を助擧せしを觀れば、則心を王室に存する、一日に非ざるなり。昔者、孫堅は英雄の姿を以て、志、漢室に嚮ひ、奮ひて強賊を討ち、身を出して顧ず。又策、權といふ子あり。遂に能く江東を據有し魏武の勢を以てして之を取る能はず。毛利氏の關西を以て織田氏に抗するは、之に類するに庶幾し。元春の善く戰ひしは策に類し、而して隆景の善く謀りしは權に類す。みな絶人の才にして、力を戮せ、心を協へ、輝元に臣事し、之をして舊業を失はざらしめき。是れ其義最も之に及ぶ可からずとなす。輝元、孫皓の虐なかりしと雖、而れども力を度り、德を量らずして、衡を中原に爭ふ。宜なるかな、其削弱せらるゝや。然れども其封土、屹然として猶西陲に雄たるは、豈、元就、父子の高義に由るに非らざらんや。

外史氏曰。余安藝人也。俯仰其都邑城池。輒懷毛利氏盛時。每觀嚴島。亦未嘗不想見元就之麾下賊也。夫室町之時。天下紛紛。日事兵爭。如群兒鬪暗中。喧呶毆擊。一仆一起。誰知其曲直。孟子所謂無義戰者。是已。唯元就之於陶賊。與北條早雲之於堀越。羽柴秀吉之於明智。其事皆可稱道。故其功効皆致如此。而元就最其難者也。夫亂臣賊子。人得討之。然戰國之俗。唯見利而不聞義。如陶賊之事。四隣牧伯熟視。莫敢齟齬。甚至相率歸之以爲倚賴。獨元就以微力圖誅討。而又請之天子。名正言從。義旗所指。無堅不破。如揭炬暗室。衆目駭觀。足下以伸大義於天下。使天下響應歸之。而何十三州之足圖也哉。大凡英雄成事。皆以爲其智略所致。而其事之合義。有下能服人心者上。而不自知也。後之追論者。亦徒視其成敗。謂盡成於其智慮。而不知天下之事有出智慮所不及。況當夫危疑之際。機會之來。間不容髮。苟以區區計算。要之萬全。吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論。不可以揣亂世英雄也。吾論元就。不言其智略。而言其果斷。而言其事之合義。至於請之天子。不言其果斷。而言其事之合義。則存心王室。非一日也。昔者。孫堅以英又義之大者矣。且觀下其效貢賦。助舉朝儀上。則存心王室。非一日也。昔者。孫堅以英雄之姿。志嚮漢室。奮討强賊。出身不顧。又有策權之子。遂能據有江東。以魏武之勢。而不能取焉。毛利氏之以關西抗織田氏。庶幾類之矣。元春之善戰也類策。而隆景之善謀也類權。皆絶人之才。而殞力協心。臣事輝元。使之不失舊業。是其義最爲不可及焉。輝元雖無遜皓之虐。而不量力度德。而爭衡於中原。宜乎其削弱也。然其封土屹然猶雄西陲者。豈非由元就父子之高義哉。

吉田驛感毛利典厩事作

舍舟夜投吉田驛。心記江公創業跡。猛雨打輿暗箭集。河漲聲鬨萬刀戟。朝起山河列眉明。策杖獨尋公墳塋。塋上老木槁不死。隧道深嚴華表峙。仰瞻城墟連雲起。山開鳥翼襟河水。胄山在背猪山面。果信北軍墮計裏。援軍孤壘在其間。形勢頗殊舊閲史。當時眼已無二家。終使十州拱旗牙。河堤西指嚴嶋路。想見出師誅豕蛇。風濤雷雨助號令。百怪惶惑避義戈。請詔復仇眞偉擧。黃金撑斗擎日車。乃祖酷肖荀文若。此公卻類孫討逆。大兒如虎小兒龍。亦如江東權與策。休比輿櫬入洛陽。頗似納籍歸汴梁。錢氏福與趙家長。公才什倍武肅王。洒掃不廢裔胄在。恨無碑文託雪堂。來拜者誰外臣襄。家世生長公舊疆。少修私史暗公事。今日墳前始瓣香。土非衍沃民力薄。經營四外餘裕綽。勤儉富國無磽埆。鼓舞强兵無羸弱。玉帶名馬好不存。一生唯有用士樂。嗟哉眞英雄主不可作。

改版 邦文日本外史卷之十二終

改版 邦文日本外史 卷之十三

德川氏前記

織田氏上

外史氏曰く。封建の勢を我邦に成すや、其來ること遠し。在昔、王家、七道を郡縣にして、治むるに守介を以てし、田は、口分を以てし、租調を四徵す。而して朝の職位、皆田あり。食封あり。功田あり。其食封は多き者も三千戸に過ぎず。功田に四等あり。之を世襲する者は大功に止まる。是の時に當りては、未だ封建の勢有らざりしなり。

莊園起る

相門、權を世にせしより、所在、封戸、日に多し。不輸の地、不課の民、天下に半せしなり。

後三條帝、其弊を矯めんと欲して、遂ぐること能はず。是より以後、各國の莊園、其十の九に居り、守介の治むる所厘に一なり。甚しきは則國司、終に任に赴かずして、權に其地方の豪族、武人を延きて、以て自代らしめたるなり。之を目代と謂ふ。而して源氏起るに至りて、國司に守護を置き、莊園に地頭を置き、糧粟を分領して、以て盜賊に備へたり。則嚮に謂はゆる目代の類、六十州に碁峙して封建の勢始れり。

封建の勢始る

北條氏、其遺制に因りて、守護の任、猶考課易置すること、古の國司の如きを得たり。然して往々因襲して、之を子孫に傳へ、漸く封建の勢を成せり。

而して建武中興の時に至りて、朝廷、特恩を以て武臣の心を收めんと欲し、新田、足利の諸族を以て、諸國の守護に充てたり。概一姓を以て二三州を連ね、名は守護たりと雖、其實は之を封建にしたるなり。

封建の勢成れり

【勢】將士の勢

織田氏

豐臣氏

德川氏

足利氏の叛くに及びて、其成績を奪ひて、之を其子弟功臣に與へ、仍守護と稱して之を世襲せしむ。土地、兵馬、儼然たる諸侯にして、封建の勢成れり。足利氏、初め務めて大封を以て、將士に啗はせて、以て朝廷の權を撓むるを得たり。既に天下を得て、勢削る可からず。其政、既に衰ふるに及びて、其權臣、難を京師に構ふ。而して謂ゆる諸侯は、群起して、之が鷹援を爲し。又互に相呑滅して益々強大を成せり。而して最後に、織田氏、其陪臣を以て、崛起して之を幷す。部下みな一時の英豪なり。攻撃四出し、城を取り地を略する者は、因りて之を賞す。其志盡く天下の故國を鋤きて、其功臣を以て之に代ふるに在り。未だ成らずして踣れぬ。

而して豐臣氏、其將校を以て踵ぎて起り、織田氏の志しし所、甚難くして成らざりしを見る。是を以て舊國の降附する者は、存して之を撫で、大なる者は、或は八九州に蟠踞せるも殺削を加へず。是を以て速に混一を致すを得たり。而れども歿して未だ幾ならずして、海内分崩せり。此に由りて之を觀れば、封建の勢は源氏に始りて足利氏に成る。足利氏は未だ其利を享けずして、其弊に勝へず。織田、豐臣は其弊を承けて之を裁するの術を知らず。蓋し皆我が德川氏に待つ有るなり。

夫れ外諸侯あり。内功臣あり。内功臣の封は、外諸侯に抗する能はず。然して後、以て其内を親戴衛護して、其外を折衝禦侮するに足る。否らざれば則功臣も、亦諸侯と等しきのみ。我を戴くの心無くして、我と爭ふの意あり。是れ織田氏の禍を被りし所以なり。能く外諸侯を存すと雖、而も長を斷ち短を補ひ、勢力をして略敵せしむるを知らず。又大に宗族を封じて、其扼塞に據り、犬牙相制し、以て其邪心を鎭壓することを知らず。是れ豐臣氏の嗣を絶ちし所以なり。織田氏は唯之を取るに難し。豐臣氏は之を取るに易ず。故に之を分つに輕ず。之を輕ずると、之を重ずると、其情異なりと雖、其天下英雄の心を收むる能ざるは一のみ。故に曰く、二氏封建の弊を承けて之を裁するの術を知らざりしなりと。

我が德川氏に至りては、二氏の失を鑑みて、其衷を秉り、之を矯むるに漸を以てし、其内外輕重の際を

柳宗元の論

封建は勢なり勢を制するは人なり

權りて、以て萬世に維持す。封建の勢是に於て一定して、復之を撼す可からず。

唐の柳宗元、封建を論じて曰く「勢なり」と。余、曰く、封建は勢なり。勢を制するは人なりと。彼れ郡縣の世に生れて、利弊を千載の上に揣る。其をして我が邦の今日を目せしめば、以て何如と爲すか。蓋し德川氏の大平を致せるは、參遠勳舊の力に由ると雖、而も新附の將帥の功之に與る。今の外藩列國の、邦を足利氏以前に成せし者は、島津、佐竹、伊達、上杉、毛利、鍋島の如き是のみ。其餘は、皆二氏に由りて家を興せし者なり。

應長庚子以後、封土を定賜し、之を更始すと雖、而も猶彼漢の侯王の陳項に於ける、唐の將相の周隋に於けるが如し。其前代に源ねざれば、其建置の本末、得て詳にす可からざるなり。余、故に先二氏を叙して、其勢の從ひて來る所を論ずること此の如し。

外史氏曰。封建之成二勢於我邦一也。其來遠矣。在昔王家。郡二縣七道一。治以二守介一。田以二口分一。四二徵租調一。而朝之職位。皆有レ田。有二食封一。有二功田一。其食封。多者不レ過二三千戶一。功田四等。世二襲之一者。止レ於二大功一。當二此時一。未レ有二封建之勢一也。自二相門世レ權。所在封戶日多。不輸之地。不課之民。半レ於二天下一。後三條帝欲レ矯二其弊一。而不レ能レ遂。自レ是以後。各國莊園。居二其十九一。守介所レ治厘一焉。甚則國司終不レ赴レ任。而權延二其地方豪族武人一以自代。謂二之目代一。而至二源氏起一。國司置二守護一。莊園置二地頭一。分二領糧粟一。以備二盜賊一。則嚮所レ謂目代之類者。碁二峙六十州一。而封建之勢始矣。北條氏因二其遺制一。守護之任。猶得二考課易置一。如二古之國司一。然往往因襲。傳二之子孫一。漸成二封建之勢一。而至二建武中興之時一。朝廷欲下以二特恩一收中武臣之心上。以二新田足利諸族一。充二諸國守護一。概以二一姓一遂連二二三州一。雖二名爲一守護一。其實封二建之一也。及二足利氏叛一。奪二其成績一。而與二之其子弟功臣一。

仍稱二守護一。而世襲之一。土地兵馬。儼然諸侯。而封建之勢成矣。足利氏初務以二大封一啗二將士一。得三以撓二朝廷之權一。既得二天下一。而勢不レ可レ削。及二其政既衰一。其櫛臣構二難京師一。而所レ謂諸侯。群起爲二之黨援一。又互相呑滅。益成二强大一。而最後織田氏。以二其陪臣一崛起而幷レ之。部下皆一時英豪。攻擊四出。取レ城略レ地者。因而賞レ之。其志在レ於下盡鋤二天下故國一而以二其功臣一代レ之。未レ成而踣。而豐臣氏以二其將校一踵起。見二織田氏所レ志甚難而不下成也。是以舊國之降附者。存而撫レ之。大者或蟠二踞八九州一。而不レ加二殺削一。是以得二速致一レ於二混一一。而歿而未レ幾。海内分崩。由レ此觀レ之。封建之勢始レ於二源氏一。而成レ於二足利氏一。足利氏未レ享二其利一。而不レ勝二其弊一。織田豐臣承二其弊一。而不レ知二裁レ之之術一。蓋皆有レ待レ於二我德川氏一也。夫有二外諸侯一。有二内功臣一。予其内。而折乙衝禦丙侮其外甲。否則功臣亦與二諸侯一等耳。無二戴レ我之心一。而有二爭レ我之意一。是織田氏所二以被一レ禍也。雖三能存二外諸侯一。而不レ知二斷レ長補レ短。使二勢力略敵一。又不レ知下大封二宗族一。據二其扼塞一。犬牙相制。以鎭中壓其邪心上。是豐臣氏所二以絕一レ嗣也。織田氏。唯難レ於レ取レ之。故重レ於レ取レ之。豐臣氏。唯易レ於レ取レ之。故輕レ於レ分レ之。輕レ之與レ重レ之。其情雖レ異。其不レ能レ收二天下英雄之心一一耳。故曰。二氏承二封建之弊一。而不レ知二裁レ之之術一也。至二我德川氏一。鑑二二氏之失一。而秉二其衷一。矯レ之以レ漸。權二其内外輕重之際一。以維三持於二萬世一。封建之勢。於レ是一定而不レ可二復憾一焉。唐柳宗元論二封建一曰。勢也。余曰。封建勢也。制レ勢人也。彼生二郡縣之世一。而揣三利弊於二千載之上一。使三其目二我邦之今日一。以爲二何如一哉。蓋德川氏之致二太平一。雖レ由二參遠勳舊之力一。而新附將帥之功與焉。今之外藩列國。成二邦於二

足利氏以前一者。如二島津佐竹伊達上杉毛利鍋島一。是已。其餘皆由二二氏一興レ家者。雖下慶長庚子以後定二賜封土一、與レ之更始上。而猶下彼漢侯王之於二陳項一。唐將相之於二周隋一上。不レ源二其前代一、其建置本末不レ可レ得而詳一也。余故先叙二二氏一而論二其勢之所一從來一如レ此。

織田氏略系【織田氏系圖】

○平重盛―資盛―親眞―親基―親行―行廣―末廣―基實―常昌―常任―勝久―久長―

敏定
- 敏信―常祐―彦五郎
- 信安―信武
- 信定
  - 信康―信清―信益
  - 信光―信成―於千
  - 信次
  - 女（遠山内匠助妻）
- 信秀
  - 信廣―（女六角義秀妻）
  - 信長
    - 信行―信澄
    - 信包―信重
    - 信治
    - 信時
    - 信興
    - 信孝
    - 秀成
    - 長益―長正―尙長
    - 女（淺井長政妻）
    - 女（柴田勝家妻）
  - 信忠―三法師
    - 女
    - 秀則
  - 信雄
    - 秀雄
    - 信良―信昌―信久
    - 信久高長
    - 信孝
    - 秀勝
    - 勝長
    - 女（佐々木義秀妻）
    - 女（前田利家室）

織田氏系統

織田氏を冒す親眞斯波義重

敏定　信安　信秀

織田氏は、平重盛より出づ。重盛の次子を資盛と曰ふ。元暦中、平氏、源氏と西海に戰ひ、大に敗れて舉族死亡す。資盛、孤兒あり。其母之を懷きて、近江津田鄕に匿る。鄕長、其母の色を悅びて之を納る。兒、從ひて其家に育はる。越前織田莊の祝人、數〻京師に入り、每に鄕長に過りて宿るに會ふ。嘗て之に謂て曰く、「吾れ老いて子なし。願くは公の一子を得て、之を養はん」と。鄕長、乃、與ふるに平氏の孤兒を以てす。兒、終に織田氏を冒す。親眞と名づけ、權太夫と稱す。子孫世祝人たり。

足利氏、天下を定むるに及びて、越前、尾張は斯波氏の管國となる。斯波義重、嘗て出游して、織田祝人の子を見て、之を美とし、載せ歸りて、以て近臣となす。義重、大吏六人あり。其一人、罪ありて放流せらる。乃、織田氏を以て之に代ふ。是に於て、織田氏終に斯波氏の重臣となり、尾張に徙る。

親眞よりして後十五世を、敏定と曰ふ。敏定の時、斯波義敏、族の義廉と立つを爭ふ。敏定、間に居りて和を講じ、義敏に請ひて、義廉の子、義良を養ひ、自之を輔けて淸洲城に居る。尾張凡八郡、分ちて上下となす。各〻四郡なり。敏定は下四郡を領し、族の信安をして、岩倉城に居り、上四郡を領せしむ。敏定、敏信を生む。敏信、常祐を生む。相繼ぎて淸洲に居る。敏定の庶子信定、彈正忠と稱す。信定の子を信秀と曰ふ。備後守と稱す。信秀、支庶なるを以て、降りて勝幡城に居り、族二人と宗家の吏となる。分ちて四郡を治む。信秀、武を嗜み士を喜ぶ。士多く之に歸す。

女（岡崎信康妻）
女（丹羽長秀妻）
女（二條關白某室）
女（武田勝頼妻）
女（中川秀政妻）
女（蒲生氏鄕妻）

今川氏
天文十一年【小豆阪】參河

十六年齋藤秀龍

土岐頼藝

道三

十七年

【宋廣城】尾張

二十年信秀卒す

林通勝　平手政秀

信夏二十一年

信長の幼時

信行

時に齋藤氏は美濃に在り。今川氏は駿河に在り。織田氏と日相攻擊す。信秀、徙りて古渡城に居る。天文十一年八月、今川義元、兵を將ゐて來り攻めて、小豆阪に軍す。信秀、逆へ戰ふ。衆寡較せず。日暮將に退かんとす。敵兵尾擊すること甚急なり。信秀、弟信光、死士六人と返り戰ひて、之を卻く。十六年九月、信秀、常祐に從ひて、齋藤秀龍を稻葉山に攻む。火を城下に縱ちて將に返らんとす。秀龍、出でゝ戰ふ。我兵大に敗れ、常祐以下八人みな之に死す。十一月、秀龍、遂に大垣城を攻む。信秀、卽赴き援け、擊ちて秀龍を走らす。秀龍は山城西岡の人、歌謠を善くす。東美濃に遊び、土岐頼藝の將長井某に仕へ、遂に長井を殺して、直に頼藝に仕ふ。終に其重臣となり、山城守と稱す。髮を削り名を道三と更む。遂に頼藝を逐ふ。十七年、頼藝來り奔る。信秀之を遇す。因りて美濃の將士を招く。將士應ずるもの多し。八月、信秀、往きて秀龍を討ちて、火を多藝口に縱つ。秀龍、和を請ふ。信秀、比年、兵興り、上下疲弊するを以て、遂に之を許す。秀龍、乃、頼藝を復し、女を以て信秀の子信長に妻す。

是の歲、信秀、末盛城に徙る。

二十年三月、信秀、疫を患へて卒す。信秀、幼字は吉法師、信秀自古渡に居り、別に那古野に城きて吉法師を置く。林通勝、平手政秀等をして、之に傅らしむ。甫めて十三なり。首服を古渡に加へ、名を信長と命ず。字は三郎。明年、信長、始めて兵を將ゐて參河に入り、今川氏の屬城吉良、大濱を攻め、火を縱ちて還る。

信秀、十二男四女あり。庶長子信廣、其次を信長と爲す。信長、幼字信長、幼にして跌蕩、武事を喜ぶ。被服奇偉、喜びて大刀を帶ぶ。其街市に出行するに、或は人の肩に憑り、餠菓を啗ふ。傍に人無きが若し。常に馬を調し、弓銃を習ひ、泅を學ぶ。近士を聚めて、竹鎗を以て鬪はしむ。曰く、「鎗は長きに利あり」と。乃、一丈二丈の鎗を造る。鬪として立つに及びて、上總介と稱す。次弟信行、勸十郎と稱す。嘗て信秀の爲に法會を設く。信長、信行と偕に往きて位前に拜す。觀る者甚衆し。信長先進みて、香を攫みて鑪內に投じ、一拜して出づ。信行容を整へて香を拈み、拜伏之を久しくす。觀る者窃に

西海の僧
二十二年
秀政自殺
政秀寺

【婦翁】信長秀龍の女を娶る故に婦翁と曰ふ　正徳寺【富田】美濃（信長異體にて美濃に入る圖）

信行を譽む。西海の僧あり。衆中に在りて、信長を相して曰く、「此子、乃、英雄なり」と。然して信長、放縦日に甚し。平手政秀、驟之を諫む。政秀の子、名馬を有す。信長之を請ふ。辭して獻ずるを肯はず。信長怒りて、遂に政秀を惡みて其言を聽かず。政秀、憂懣して曰く、「吾れ保傅の託を受けて、之を匡し救ふ能はず。何を以て人間に視息せんや」と。二十二年正月、政秀、遂に自殺す。信長、驚惋して自咎め、屏居して出でず。爲に佛院を建て、名づけて政秀寺と曰ふ。忌日には必詣づ。輒、自矢ひて曰く、吾れ徒に悔ゆるも益なし　當に過を改め行を勵み、大功を天下に立てゝ、以て前失を償ふべきのみ一と。是に於て、益武事を講じ、隣國に警備す。

齋藤秀龍、其婦翁なるを以て、一たび見えんと欲す。四月、富田の正徳寺に會す　秀龍、豫、將士をして、盛服して列座せしむ。信長を延きて其前を過らしめ、以て其動止を試んと欲す。期に至りて秀龍、微行して道傍の民舍に潛みて以て、信長の過ぐるを覘ふ。信長、茶筅髻を爲し、瓜袖を着し、虎皮の袴を穿ち、繩纔刀、及び大瓢を佩ぶ。健士八百人、弓銃、朱幹鎗の者、各五百を其前後に從ふ。秀龍以て信長を蠭野と爲して、其行人に命じて、草具を以て之に供せんとす。信長、寺に至り、屏風の中に入り、髪を結ひ衣を更へて出づ。儀容閑雅、從者と雖、皆驚く。秀龍、其二宰春日、堀田をして、出でゝ迎へしむ。信長、與に言はず。羣士の前を過ぎて堂に上り、柱に倚りて坐す。頃ありて秀龍出づ。信長、見ざる者の如くす。堀田進みて曰く、「是れ山城守なり」と。信長、乃、秀龍を顧て曰く、「適道傍の民舍中にありて見し所の者、何ぞ酷だ公に類するや」と。乃ち之に接見す。是に於て、秀龍、復命じて、酒饌を具ふること儀の如くす。既に畢りて、自、信長を送ること數里。既に別れ、目送することを久しくして曰く、「吁乎、美濃の一國、吾れ終に之が斃を爲さざるを得ず」と。信長、時に年二十なり。是より先、常祐、戰に死す。其遺臣織田三位、阪井大膳、河尻左馬等、常祐の子彦五郎を擁して、信秀、信長と兵を構ふ。斯波義統と云ふは、義良の孫なり。清洲城中に居て、竊に信長を右く。彦五郎等、之を覺りて、自安ぜず。二十三年七月、阪井、河尻等、義統を襲ひて之を弑す。毛利秀高、義統の孤兒を以て脫走し、那古野に來る。信長、之を天王坊に奉じ、將士に謂て曰く、「清洲は我が宗家なり。而るに我が累世の主を弑す。乃、誅せざる可からず」と。柴田勝家等の七將を遣して、清洲を攻め、三位、左馬と、城外に戰ひて之を斬る。大膳、人をして援を守山の城主織田信光に乞はしむ。信光、陰に之を信長に謀る。信長、伴りて之を許さしむ。

弘治元年四月、大膳、信光を城内に延き、自、兄の大炊と來り見る。信光、兵を率ゐて往く。大炊を見るに及びて、立所に刀を拔きて之を斬る。大膳出でゝ奔る。信長、馳せ至りて彦五郎を圍み、其弑逆を數へて之を誅す。終に清洲を取り、徙りて之に居る。信光をして那古野に居り、河東郡を食ましむ。已にして信光の家、內變あり。其下の害する所と爲る。信長、林通勝を以て、那古野の留守と爲す。通勝、信長の慓悍を患へて、弟光春、柴田勝家と、之を弑して信行を立てんことを謀る。信長、之を覺る。二年五月、信長、獨、四弟信時と卒に那古野に往きて、之を誅ふ。光春、通勝に耳語して曰く、「是れ天幸なり。宜しく速に大事を行ふべし」と。通勝、忍びず。信長、返りて名塚に砦し、佐久間大學をして之を守らしむ。八月、勝家、

山城守
信長、秀龍に面す
濃州は途に贅幣
斯波義統
二十三年
柴田勝家
弘治元年
信長清洲に徙る
林通勝

森可成

【信行】信長の弟

永祿元年

二年

信長、信清と共に岩倉を攻む

光春、各千騎を將ゐて急に名塚を攻む。名塚、急を清洲に告ぐ。信長、卽、見兵七百を率ゐて赴き援く。織田造酒丞等をして、勝家に當らしめて、自ら光春と戰ふ。我が軍克たん」と。信長、問ふ「何を以て之を知るや」と。光春「今日の戰、我が軍克たん」と。信長、問ふ「何を以て之を知るや」と。已にして光春、愈勝に乘じて、其麾下の兵を縱つ。可成曰く「以て馳す可し」と。信長、乃、馳せて、擊ちて之を破る。手づから鎗を揮ひて光春を鏦し殺す。遂に轉じて勝家の軍に赴き、大に呼びて曰く「我れ已に光春を獲たり。勝家をして逸せしむる勿れ」と。勝家、大に怖れ、終に走りて未盛城に歸す。信長の母六角氏、信行を愛して之と俱に未盛に居る。是に於て六角氏、信行をして誓書を作らしめ、勝家、通勝、みな僧服を被て、來りて其罪を謝す。信長、通勝に謂て曰く「是れ吾の罪のみ。吾れ前に德に背き諫に忤ひて、平手をして自殺せしめたり。汝、今より平手に代りて我を匡せよ」と。乃、遣りて那古野を守らしむること故の如し。信行、仍悛めず。龍泉寺に城きて、岩倉の兵と合し、東郡を略取せんと欲す。其將都築藏人をして、兵士を招聚せしむ。勝家、數諫む。信行、之を疎斥す。永祿元年正月、信行、諸將を饗して、勝家に及ばす。勝家、怒り、夜、清洲に來りて信行の反を告ぐ。信長、乃、疾と稱し、村井貞勝をして六角氏に告けしめ、家を信行に讓らんと欲す。六角氏、悅びて、信行に告ぐ。信行、卽至り、將に信長の臥内に入らんとす。信長、豫め力士三人を伏して、之を斬らんとす。成らず。信行、走り出つ。池田信輝、要して廊下に擊ちて之を斃す。

二年四月、齋藤秀龍、長子義龍を廢して、少子某を立てんと欲す。義龍、少子を誘殺し、秀龍と鬪ひて、遂に之を弑す。信長、兵を率ゐて秀龍を援く。及ばずして還る。義龍、之を蹂す。信長、自ら殿して退く。岩倉の城主、遙に義龍を援け、兵三千を以て丹原野に軍するに會ふ。時に我が見兵、厘に八十三騎なり。乃、清洲の市人を驅り、竹を伐りて鎗と爲し、軍後に列せしむ。敵以て大兵來ると爲して、乃、退き去る。七月信長、犬山の城主織田信清と兵三千を合せて岩倉を攻む。岩倉の兵出で、浮野に戰ふ。信長、弓銃手をして

岩倉城を拔く

【期年】一年

今川義元

鷲津丸根三年

信長宴飲

熱田祠に詣づ

横擊せしめて之を走らせ、追ひて城下に至りて返る。信長は南行し、信清は北行す。城兵、信清の兵寡を視るや、出でゝ之を尾す。信長、返り援け、夾み擊ちて大に之を破る。遂に城を圍み、三月、之を拔く。是に於て、信長、盡く尾張を取る。獨、智多一郡は今川氏に屬す。

是より先、鳴海の城將山口某、畔きて今川氏に附き、又大高、沓懸の二城を取り、更に村木に城く。信長、村木を攻め下し、又笠寺城を攻む。城將戶部某、驍勇にして下す可からず。信長、兵を收めて歸る。戶部、書を善くするを以て、侍史をして之を學ばしむ。期年にして得たり。乃、戶部が織田氏に通ずるの書を僞作し、森可成をして、僞りて賈人と爲らしめ、齎して駿河に赴き、之を義元に上らしむ。義元、怒りて、戶部を召して之を殺し、又山口父子を殺す。義元、既に駿河、遠江、參河を定め、將に大擧して尾張を攻めんとす。信長、諸城壘を修む。佐久間大學をして、鷲津を守らしめ、飯尾定宗をして、丸根を守らしむ。大高、笠寺の兵と數戰へども決せず。三年五月、義元、自二國の兵、四萬五千を將ゐて來り攻む。十八日、大擧、定宗、使を淸洲に馳せ、告けて曰く、「義元、昨日沓懸に至る。今夜、將に糧を大高に運びて、且、兩城を攻めんとするなり」と。信長、將士を召し言て曰く、「我れ赴き救はんと欲す。如何」と。林通勝等、說きて曰く、「敵衆は五萬に垂とす。而して我が兵は三千に過ぎず。宜しく其來銳を避け、本城に據りて之を待つべし」と。信長曰く「不可なり。吾れ天下の英雄を視るに、其地の利を恃みて以て事機を失ひ、自滅亡を取る者少しとせず。先君言あり、『隣國の來り犯す時は、苟も遲疑するあらば、我が將士且志を變ず。當に亟に出でゝ迎へ戰ふべし』と。吾れ敢て先君の敎に背かず。明日、將に一戰して、勝敗を決すべきなり。吾と志を同じくする者は努力せよ」と。諸將、敢て諫むる者なし。信長、因りて酒を命じて、與に飮む。酒酣にして天明く。信長、自、起ちて舞ひ、古謠を諷ひて曰く「人世五十年、乃夢幻の如し。生あれば斯に死あり。壯士將何ぞ恨みん」と。舞ひ畢りて、卽、甲を被り馬に上り、單騎額を擧げて出づ。騎、能く屬する者十餘人、熱田祠に及ぶ比、千人を得たり。自戰勝を祈り、陰に祠官をして甲を龕中に鳴らさし

信長聲を勵まして曰く

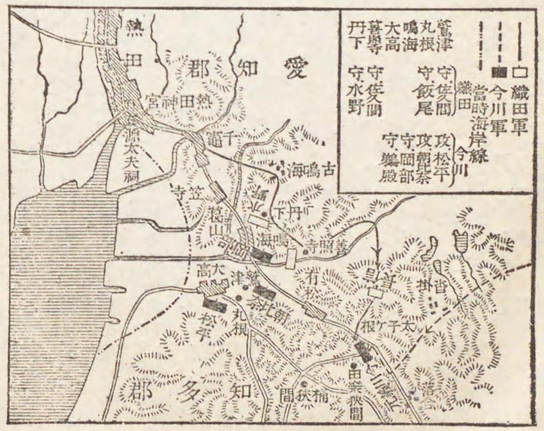
（桶狹間合戰地圖）

梁田出羽

毛利秀高義元を斬る

む。信長、軍士を顧て曰く、「神、我を助くるなり」と。乃、山路を取りて、行々諸城の兵を收む。兵凡三千騎、東を望みて兩城に火起るを見る。將士逡巡す。信長、益其馬に鞭ちて、進む。林通勝、柴田勝家、池田信輝、毛利秀高、馬を控へて諫めて曰く、「彼れ大衆にして新勝なり。寡兵を以て之を犯す。立所に覆沒せん」と。信長、聲を勵して曰く、「汝が輩、且、我が言を聞け。吾れ妄意に進みて、敵を犯すに非ざるなり。敵、糧を大高に納れて、終夜息まず。今亦兩城を拔く。其兵罷極まる。而して義元、我を侮る。復、備を設けじ。吾れ是の時に乘じて、其不意に出で、一戰して擒にすべきなり」と。梁田出羽、進みて其計を贊して曰く、「敵、兩城を拔きて、未だ其陣を更へず。中軍は必後に在らん。我れ直に之を覆はゞ、義元、獲可きなり」と。信長、乃、皷旗を伏せ山に循ひて馳せ、桶狹に至り、義元の營を瞰視す。

信長、馬を下りて接戰せんと欲す。森可成曰く、「衆寡、敵せず。宜しく騎して之を突くべし」と。信長曰く、「善し」と。乃、馬上に鎗を揮ひ衆に先だちて馳せ下る。會大雷霧雨にして昏黑なり。我が兵皷譟して、營を斫りて入る。敵衆、大に驚きて擾亂し、出づる所を知らず。服部小平太、進みて幕中に入り、義元に薄る。義元、刀を拔きて其膝を擊つ。毛利秀高、義元を鋸し、其首を斬りて出づ。駿河の軍、遂に大に潰ゆ。信長、追擊して、其精騎二千餘級を斬り、乃、熱田に賽して返る。士女、路を夾みて迎へ觀る。信長、義元の首を馬前に掲げて清洲に凱旋す。



立入宗繼

藤原惟房

（桶狹間合戰の圖）

五年

信長奉勅

大高、沓懸の諸城みな解き走る。信長、此を以て聲名天下に聞ゆ。是の時に當りて、足利氏、大に衰へ、三好氏、松永氏、京畿の政を專にす。而して七道の將士、各其國に據りて迭に相爭奪す。信長、慨然として天下を戡定せんとするの志あり。初め尾張の人道家某、京師の人立入宗繼と云ふ者と相識る。宗繼、左京亮たり。父祖より京郊に居て、田業多し。供御乏絕して毎に給を取る。嘗て中納言藤原惟房に說きて曰く、「方今、天下大に亂れて宮闕頽敝し、供御の邑、盡く武人の占むる所と爲る。而して臣を以て之を視るに、其勢、天下の豪傑を得るに非ざれば、以て天下の亂を定むるに足らず。聞く、尾張に織田信長と云ふ者あり。年甫めて二十、東國の咽喉に割據して能く少を以て衆を摧くと。是れ其人必絕世の才あらん。君盍ぞ奏して綸旨を請ひ、信長に囑するに撥亂反正の事を以てせざらん」と。惟房內外を畏憚し、敢て決せず。宗繼、再入りて、之に說きて曰く、「事如漏泄せば、臣、獨、其責に任らん」と。帝、鬮を鏡室に探りて計を決す。

五年十月、惟房、宣言す、「天子、異夢に感じて將に熱田祠に奉幣せんとす」と。乃、宗繼及び磯貝久次をして密旨を齎し、尾張に赴かしむ。因りて信長に賜ふに御用合香を以てし、道家氏に館す。信長、獵より歸りて道家を過る。道家、告ぐるに故を以てす。信長、乃、沐浴して衣を更へ、出でゝ宗繼を見る。宗繼、敕旨を宣達す。信長、宗繼に謂て曰く、「吾れ聞く、天子は天下の君と。宜しく我より職に共すべきに、今反りて使命を辱くす。加ふるに寵貺を以てす。吾れ何を以て之に堪へん。當に天威を藉りて以て、凶徒と夷げ、不日、入朝して、力を竭し報を

【苅谷】參河徳川氏

武田信玄

【舅氏】齋藤秀龍

齋藤龍興

四年

五年

圖るべし」と。因りて自食を調へ、以て二使を享し、森可成、柴田勝家、丹羽秀長、木下秀吉、瀧川一益、菅谷長頼、堀秀政を召し、諗ぐるに敕旨を以てす。是に於て、日夜、西上の策を議す。

苅谷の城主水野信元、說きて曰く、「參河の徳川氏は舊今川に屬す。公、宜しく之と結納し、之に東事を委ねて、西面して以て天下を圖るべし」と。信長之に從ふ。

甲斐の國主武田信玄、國富み兵强し。信長、厚く之に贈遺して、約して婚姻をなし、以て其意に順適す。而して、西、齋藤氏を圖る。

齋藤秀龍の未だ死せざる時、二驍將あり。信長、之を除かんことを計る。乃、夜に乘じて、外出すること數す。夫人齋藤氏、其私する所あるかを疑ひて、頗る妬色あり。信長曰く、「吾れ他心あるに非ず。乃、秘計を成さんと欲するのみ」と。夫人其計を問ふ。曰く、「汝に言ふ可からざる也」と。固く問ふ。信長、乃、之を訛きて曰く、「美濃の二將、陰に款を我に通じて、舅氏を圖る。曰く、『事成らば則燧を擧げん』と。吾れ每夜、出でゝ之を望むに、未だ擧らざるなり」と。夫人憂恐して、密に書を爲りて、之を秀龍に告ぐ。秀龍驚きて、卽其二將を誅す。齋藤氏の兵力、遂に是より削弱す。義龍、既に秀龍を弑し、子の龍興に傳ふ。龍興、暗弱にして、其將士多く心を信長に歸す。

四年五月、信長、兵千五百を率ゐて、西美濃に出づ。洲股の城將長井某、日根野某、六千騎を以て之を迎へ、我が兵の寡を覩て、淖を徑りて來る。信長、兵を分ちて三隊と爲し、一隊を以て自衞り、一隊は其前を蹙し、一隊は之を橫擊して、二將を斬る。是に於て、九條、洲股に城く。織田勘解由をして、九條を守らしめ、木下秀吉をして、洲股を守らしむ。

五年五月、齋藤龍興、井口城に在り。其將士に謂て曰く、「洲股河漲る。信長、未だ來る能はず。吾れ此の時を以て、九條の城を攻めんと欲す」と。乃、將稻葉、牧村等を將ゐて、九條を攻む。九條急を信長に告く。信長、赴き援け、河の側に至る。渡る可からず。信長曰く、「吾れ寧溺れ死すとも、豈坐ながら視て救はざる可

【小牧城】尾張

七年

【三將】通朝經國、範俊

【瑞龍山】美濃

岐阜城

十年

戰袍を賜ふ

【吉】臨の六五爻の辭なり

や」と。乃、馬に鞭して流を亂して渡る。全兵之に從ふ。時、既に夜なり。九條の城將、先鋒となり、擊ちて牧村を走らし、稻葉と鬪ひて死す。池田信輝、佐佐成政、稻葉の聲を識る。交暗中に刺して之を斃し、其首を讓りて取らず。柴田勝家、之を取りて、獻じて曰く、「信輝、成政、首を讓りて取らず。臣、謹みて之を獻ず」と。信長三士を褒賞し、凱して歸る。終に徙りて小牧城に居り、以て美濃に逼る。丹羽長秀を遣して、二城を攻め下す。龍興の將稻葉通朝、氏家經國、伊賀範俊、龍興の失政と諫む。聽かず。

七年八月、三將、款を信長に送る。信長、之を許す。乃、三河を攻むと聲言して、以て兵を聚む。兵既に聚る。乃、率ゐて西行し、瑞龍山に上りて以て井口を瞰ひ、火を縱ちて疾く攻む。城兵惶駭して降る。乃、龍興を逐ふ。三將來り謁して曰く、「君、來る、何ぞ速きや」と。信長、既に尾張、美濃を定め、徙りて井口に居る。更めて岐阜と名づく。會佳鷹二つを獻ずる者あり。信長、之を卻けて曰く、「吾れ方に四方に事あり。だ遊獵に暇あらず。吾れ天下を定めて、然る後受くるも、未だ晚からずと爲す」と。

十年十月、天子、復立入宗繼をして、詔を齎し來らしめて、信長に詔して曰く、「朕、四方を顧るに、卿の武に如く者莫し。曩に密敕を降し囑するに征討を以てす。卿、心を王室に存し、跋涉を憚からず。聞く、『已に長濃を平げ、庸を奮ひ威を宣ぶ』と。朕、深く之を嘉す。宜しく益果毅を抽で、以て朕が望を副くべし」と。因りて戰袍一領を賜ふ。信長、村井貞勝を召し、詔を讀ましめて、旨を領して感激し、其袍を受けて曰く、「臣、師を督し闕に詣るの日は、當に服して以て賜を拜すべきのみ」と。

是より先、三好氏將軍足利義輝を弑す。義輝の弟義昭、走りて六角義賢に依り、其力を借りて難を靖んぜんと欲す。三好康長、三好政康、岩成左通を、三好の三黨と稱す。京師の政を專にし、陰に義賢をして義昭を圖らしむ。義昭、惧れ走りて、武田義統に依る。義統辭す。又朝倉義景に依る。義景諾して果さず。又其愛子を喪ひて、志氣頓に沮す。義昭、外に流寓すること三歲。信長の威名を聞き、往きて之に託らんと欲す。卜人太華をして之を筮せしむ。臨の節に行くに遇ふ。曰く、「知にして臨む。大君の宜しきなり。吉。

十一年

立正寺

信長西上

義賢義弼遁る十八城を下す

三好の三黨去る

信長京師に入る

是れ之を柔の剛に任ずと謂ふ。剛に任ぜば、則、勞せずして治まるなり」と。義昭、意を決す。十一年七月遂に使をして、來りて信長を諭さしむ。信長、方に西上を計る。卽ち之を諾す。將吏を遣して之を迎へて、立正寺に館せしむ。義昭、信長を見て、託するに興復を以てす。信長、答へて曰く、「是れ信長、度内に在るのみ。幕下此に臨めり。當に館を築きて以て之を奉ずべし。然れども信長、幕下の爲に京師を定むる、兩月を出でじ。館を以て爲す莫からん」と。

八月五日、大に將士を岐阜に會し、之に謂て曰く、「吾れ將に京畿に事あらんとす。汝衆、各、兵備を修めて、以て我が令と俟て」と。乃、盡く之を散遣し、自數十騎を率ゐ、澤山に至り、使を六角義賢に遣し、說くに順逆を以てす。義賢、及び子義弼、業已に三好の三黨に與す。三黨、信長の義昭を助くるを聞きて、則、益、義賢、義弼に咱はすに利を以てす。曰く、「力を竭して以て信長を拒げ。日を曠くする久しきに彌らば、我れ大軍を以て後援を爲さん」と。信長、澤山に在ること十日、使者三反す。義賢、竟に聽かず。信長乃、美濃に歸り、近江の地圖を索め、諸將と之を計畫す。令を管内に下して曰く、「九月五日を以て岐阜に會せよ」と。會する者、凡三萬人なり。七日、信長、諸軍を將ゐて西す。

義賢、義弼、觀音寺の城に居り、箕作、和田山等の十八城を修む。和田山を以て美濃の衝に當て、最も其壘壁を固くして、守るに精兵を以てす。我が軍の之を攻むるを待ちて、首尾相救はんと欲す。信長、其計を諜知し、乃、宣言すらく、「美濃の三將をして、和田山に備へしめ、而して觀音寺に向ふ」と。因りて兵を引きて箕作を襲ふ。城兵、出でゝ戰ふ。木下秀吉、丹羽長秀等、先鋒たり。故に緩くして之を攻め、漸く城下に至り、則、奮擊して突入し、卒に之を拔く。和田山の城、風を望みて解き去る。義賢、義弼、夜、城を棄てゝ遁る。信長、三日にして十八城を下し、自觀音寺に入り、政を國中に爲し、逃亡を招き來め、人をして義昭を迎へしめ、守山に相見る。明日、湖に濟り、園城寺に陣す。湖山の間、兵に非ざる者なし。三好の三黨、驚惧して、京師を棄てゝ去る。是に於て、信長、其暴掠を慮り、相

清水寺

東福寺

菅谷長賴

岩成左通降る【芥川越水】攝津

【池田】攝津池田勝政降る【高槻芥木】三好康長阿波に歸る

松永久秀

筒井順慶

迎へて之を栗田口に勞はしむ。信長、稽首して、惟房に謂て曰く、「臣、屢、過寵を辱くし、悚懼に勝へず。幸に臣の爲に謝せよ」と。立入宗繼、又惟房に從ひて至る。信長の服する所の戰袍を指して、之に謂て曰く、「是れ嚮に賜ひし所なり」と。是に於て、義昭をして清水寺に居らしめて、自東福寺に陣す。美濃を出でゝより、此に至るまで、蓋し十有二日なり。京師の士民、固より信長の威武を聞き、其暴掠を慮り、相驚きて曰く、「信長、至れり」と。皆荷擔して降る。信長、至るに及びて、號令嚴明にして秋毫も犯さず。菅谷長賴をして、街市を巡幸せしむ。織田氏の養卒、賈人と價を爭ふ者あり。輒ち執へて之を樹に縛りて、以て行道の者に視す。是に於て、士民相告げて歸る。物情大に安し。

信長、三黨の山城、攝津、河内の諸城に據るを聞き、卽日、柴田勝家、森可成等を遣し、萬人を將ゐて、桂川を涉り、岩成左通を靑龍寺に攻む。明日、自五萬騎を以て之に繼ぐ。左通、望み見て大に懼れ、城を以て降る。乃、左通を以て先導と爲し、三好政康を芥川に、篠原長房を越水に攻む。二城みな潰ゆ。乃、義昭を越水に奉じて、自芥川に入る。

十月、自、池田勝政を池田に攻む。勝政、善く拒ぐ。我が兵、火を縱らて奮戰し、關を奪ひて入る。勝政、終に降り、質子五人を獻ず。乃、之を宥す。二千貫の邑を加へ賜ふ。高槻、茨木の諸城、之を聞きて、みな降る。三好康長等、河内を弃て、走りて阿波に歸る。信長、事の成りしを義昭に告ぐ。是に於て、信長をして自邑に擇ばしむ。信長、辭して取らず。請ひて之を幕府の功臣に分つ。

是より先、伊丹親興、畠山高政、三好義繼、松永久秀、數、三黨と戰ひて、先款を美濃に送る。故を以て、河内を高政、義繼に分ち、攝津を親興、勝政、及び和田惟政に分つ。久秀をして志貴城に居らしめ、以て大和を定む。筒井順慶を攻む。順慶降る。信長、自、使を界浦、大津に置きて、乃、京師に歸り、清水寺に陣す。是の時に當りて、京畿の將士、謁を信長に執りて、軍門市の如し。朝廷、信長の功を論じて、從四位下に叙し、左兵衛督に任ず。信長、辭して曰く、「臣、天の道を以て、强賊に克を得たり。敢て攘みて功と爲

信長顯爵を辭す

し、以て顯爵を辱くせんや」と。乃、從五位下に叙し、彈正忠に任ず。義昭、私に信長を以て管領となし、號を副將軍と賜ふ。皆辭して受けず。義昭、成事を賀して、散樂十三曲を其第に張らんと欲す。信長諫めて曰く、「方今、凶賊纔に服するも、四方未だ平ならず。此れ優游の秋に非ざるなり。且、諸軍士、歸るを思ふ者多し。宜しく式の如くにして止むべきなり」と。乃、省きて五曲となす。卽日、兵を釋き、畿內の關寨を撤して、以て行旅に便す。遠近悅服す。義昭、信長の功ありて賞なきを病ひ、書を爲りて之を褒め、信長を呼びて父と曰ふ。信長、乃、岐阜に歸る。

十二年

十二年正月、三黨、齋藤龍興等と、義昭を本國寺に圍む。信長、警を聞き、單騎、赴き援く。至れば則已に平ぐ。諸國の兵、後れ至る者五萬と云ふ。信長、初め畿內の豪戶に令して金を足利氏に納れしむ。獨界浦、命を奉ぜず。又三黨を資く。信長、界浦を屠らんと宣言す。浦人、號哭して哀を乞ふ。乃、贖金二百貫を上らしむ。二條の武衞陣の故址に就きて、幕府を拓修す。四月、成る。義昭をして之に居らしめ以て寇賊に備ふ。

幕府を拓修す

宮闕を修理せんとす

是に於て、信長、村井貞勝、島田秀滿、僧日乘等を召して、之を議して曰く、「應仁以來、天下大に亂れ、王室衰微し、宮闕墜廢す。凡王土に居り、王臣たる者、誰か嗟悼せざらん。信長、夙に修擧の志あり。兵亂倥傯、延きて此に至る。今や畿內粗定まる。當に禁內を修めて、以て帝座を安くすべし。然りと雖、亂後の役を興すこと、急迫にす可からず。恐らくは民情を擾さん。宜しく漸を以て之を成すべし」と。乃、木下秀吉を留めて、京師を守らしめて歸る。遂に近畿の諸國を略す。七月、兵を遣し、伊丹親興、池田勝政を以て先鋒と成し、但馬を略し、山名氏を攻む。八月、自ら兵五萬を將ゐて伊勢を略し、北畠具教を大河內に攻む。旬餘にして、具教の將柘植某、款を信長に送り、具教を殺して、以て我が兵を啓く。信長、柘植を縛し、之を數めて曰く、「汝、人臣と爲りて、其君を弑して以て敵に降る。容る可からざるなり」と。乃、斬りて以て徇ふ。次子、信雄を以て、北畠氏の後となし、大河內に居らしめ、十萬石を食ましむ。三子信孝を神戶氏の後となし、幼名は茶筅といひ、信孝、幼字を三七といふ。皆庶出なり。

信長近畿を略す

北畠具教を攻む

【大河內】伊勢

信雄

信孝

信包

十一月、信長、徑に京師に入り、皇宮の工事を戒む。是の歲、赤黑の母衣各十騎を置き、將士の子弟にして材武なる者を以て之に充つ。

皇宮の工事を戒む

赤黑の母衣

元龜元年二月、京師に入る。四月、散樂を將軍の新第に張りて、大に德川氏以下の諸將領を會す。義昭、爲に奏し請ひて、信長の官爵を進めんとす。信長、固く辭す。朝倉義景、命を拒むを以て、自ら往きて之を討ち、敦賀に至り、手筒城を攻め、一晝夜にして、拔きて之を屠り、進みて金崎を攻む。守將朝倉景恒を降し、以て先導と爲し、遂に國內を定めんと欲す。會ゝ淺井長政、六角氏の餘黨を招き、義景と約し、夾みて信長を擊つ。長政は小谷の城主にして、信長の妹婿なり。信長、報を得て信ぜず。警聞益ゝ至る。信長、乃、若狹より京師に入らんと欲して、義景の追蹤を恐る。木下秀吉、自ら留りて備へんと請ふ。信長、壯なりとして之を許す。諸將をして、人每に三四十騎を出し、以て秀吉を助けしめて、兵を引きて西す。德川公、殿たり。朽木谷に至る。朽木元綱、甲を被り兵を率ゐて迎ふ。信長、其異心あるを疑ふ。松永久秀曰く、「臣請ふ、往きて之を質さん。卽他あらば之を刃して死せん」と。乃、馳せ往きて元綱を諭す。元綱、甲を脫ぎ兵を撤して、以て信長を饗し、送りて京師に至る。秀吉も亦至る。信長、乃、義昭の爲に、京畿、將士の質を徵す。近江の地を割きて、森可成をして、志賀、宇佐山を守らしめ、木下秀吉をして長濱を守らしめ、美濃に歸る。佐久間信盛をして、長原を守らしめ、敵兵、鯰江、市原に要すと聞きて、乃、蒲生賢秀等を以て嚮導と爲し、千種路に由りて歸る。六角義賢、銃を善くするもの、杉谷善住をして山木の中に伏せしめ、信長の過ぐるを狙ひて連に二丸を發し、其衣の袖に中つ。從兵愕き之を索めんと欲す。信長、許さず。金森長近、密に信長と衣を易へ、其輿に乘りて歸り。終に岐阜に達る。

【朽木谷】近江 朽木元綱

佐久間信盛

蒲生賢秀【千種路】伊勢 杉谷善住

六月、六角義賢、土寇を糾合して野州川に出づ。勝家、信盛、遽へ撃ちて之を破る。各三萬貫を加賜せらる。淺井長政、朝倉義景、比長、刈安に壘して、近江の驍將堀某、樋口某をして、釜ノ口の城を守らしむ。信長、誘ひて之を降さんと欲す　美濃の人竹中重治、信長の爲に二將に說きて曰く「子、城を守る者は、何をか爲さんと欲す」と。曰く、「功を立てんと欲す」と。曰く、「功を立て、以て何人の爲にすべきや」と。曰く、「淺井、朝倉氏の爲にす」と。曰く、「織田君は、天子、將軍の爲に義兵を起す。然るに二氏之を助けずして、其危に乘じて之を圖らんと欲す。是れ天下の切齒する所なり。而るに子之が爲に功を立てんとす。士たる者は固より此の如きか」と。二將、乃、重治に因りて降り、各質子を獻ず。信長、以て先導と爲し、自ら將として之に繼ぐ。諸壘みな解きて走る。乃、長政を小谷城に攻む。城甚だ險なり。森可成、阪井政尙等、城兵と雲雀山に戰ひて之を破る。信長、諸軍を引きて虎姬山に上り、城を攻むるの策を議す。佐久間信盛、進みて曰く、「之を拔くこと難からず。恐らくは我が兵を損せんや」と。信長、乃、城の四面を焚きて返る。主君、身を以て天下に任ず。何ぞ此に必せむ可からず。故に此三人に命ず。且吾れ自留りて之を號令せん。卿等先去れ」と。乃、自近臣二百騎を引きて、返りて三人を助く。三人之を辭す。淺井牛助、進みて曰く、「臣、嘗て美濃に遊びて稻葉氏の客と爲り、信長の將略を覩たるに驚擾する者に非ざるなり。公の計中らざるを恐るるのみ」と。遠藤某奮ひて曰く、「彼れ何ぞ畏るゝに足らん。公、第進み戰へ。吾れ敵兵に雜り信長と決せんのみ」と。議、乃、決す。信長、夜、大寄山を望み、顧て宿直の諸將を呼びて曰く、「柴田、木下、佐久間、在るか」と。皆答へて曰く、「在り」と。信長、乃、召して之を前ましめ、指示して曰く、「北軍、炬火、徹宵す。是れ將に曉に乘じて、我を襲はんとするなり」と。乃、令を下し軍を勒し、十三隊と爲す。阪井政尙、池田信輝等、先鋒となりて、以て長政を當り、德川公、獨其兵を將ゐて朝倉氏に當り、稻葉通朝、之を助く。丹羽長秀を留めて城兵に備へしめ、而して兵を引きて西向す。天明、北軍に姉川に遇ふ。北軍大に驚く。政尙、信輝、進み戰ひて利あらず。信長、氏家經國、伊賀經俊をして、其横を擊たしむ。通朝、顧て之を助け、大に長政を破る。而して景健も亦大に敗れ走る。其驍將遠藤、眞柄等の十餘人を獲たり。首を斬ること三十餘級。横山以下の諸城みな解きて走る。秀吉、勝に乘じて、小谷を取らんと欲す。信長、許さず。母衣騎をして、令を傳へ、軍を收めしむ。戊を置きて捷を京師に獻じ、遂に岐阜に歸る。

八月、三好の三黨、齋藤龍興と、兵一萬を糾して天滿林に陣す。義昭、中島に陣す。濠を埋め、壘を築く、「彼の長袖なる者、何ぞ能く爲さん」と。佐々成政を遣して、赴き拒がしめて、自之に繼ぐ。成政等、矢石を冒して進む。將領多く死す。我が兵潰え走る。賊軍之に乘ず。前田利家、鎗を揮ひて、大に呼びて手づから數十人を殪す。賊、辟易して去る。利家、幼より信長の近士と爲り。旨に忤ひて逐はる。私に軍に從ひて先登して、首級を獲ること數なり。信長、乃、之を復し、擢でゝ尾張荒子の城主と爲す。是に至り、力戰して、以て信長の軍を全くす。信長の軍、方に三城の間に困しむ。淺井長政、朝倉義景、之を時とするや、兵三萬を合せて、比叡衝に軍し、將に阪本を焚かんとす。宇佐山の城將森可成、出で拒ぎて、之に死す。信長の弟信治、及び屠藤某、道家某、みな死す。北軍遂に宇佐山を攻む。留後の武藤等、能く拒

堀、樋口降る
小谷城を攻む
佐佐成政 梁田出羽 中條將監
【大寄山】
淺井牛助

遠藤
淺井、朝倉敗走す
姉川役
三好の三黨 一向の僧徒
前田利家
【三城】福島、野田、大阪
森可成戰死す

北軍叡山に陣す
六角義賢、降る
北軍和を謂ふ
二年
一向宗徒【長島小木江】伊勢

ぐ。北軍、乃、大津を過ぎ、火を醍醐、山科に縱つ。信長、警を聞きて曰く、「吾れ藉三城を拔くを得るも、奴輩をして、京師を蹂躙せしめば、則我が恥なり」と。乃、攝津、河内の諸將をして、三城に備へしめて、還りて之を救ふ。三城の兵、大に起りて之に尾し、舟を江口渡に奪ふ。諸軍之を患ふ。信長、自岸より視て曰く、「水淺し。渡る可し」と。乃、流を亂して皆濟り、軍を整へ、徐に退く。敵敢て逼らず。遂に京師に達す。旦日、北軍に向ふ。北軍驚きて、叡山に上りて陣す。信長、志賀、宇佐山に陣し、兵を分ちて叡山を攻め、每夜襲ひ擊つ。而して人をして、其僧徒に說かしめて曰く、「汝等能く彼を捨てゝ我を助けば、則ち他日汝の寺封をして、故の如くならしめん。否らずば、則ち中立して倚らず、助くるある莫れ。二者聽かずば、他日必ず火を縱ちて山を赭し、僧徒を鏖殺して一人をも釋さじ」と。僧徒、聽かず。十月、信長、菅谷長賴、佐佐成政を遣して、北軍に言はしめて曰く、「吾れ公等と相持して日を曠しくす。士卒の勞倦を若何せん。請ふ、一戰以て勝敗を決せん」と。長政等、答へず。六角義賢、近江の土兵を糾し、將に夾みて信長を攻めんとす。木下秀吉は橫山より、丹羽長秀は澤山より來り援ひて、行土兵を破りて、志賀に至る。信長、樓に登りて之を望みて、驚きて義賢、至ると爲す。至れば則、秀吉、長秀なり。二人、首を以て、謁して曰く、「北人深く入りて此に至る。自死を送るのみ。請ふ、之を獨擊し、一騎をも還らしむる莫れ」と。信長、大に喜ぶ。長政等、和を請へども許さず。六角義賢、來り降る。十一月、堅田の人猪飼甚介等、信長に屬し、一將を得んと請ふ。阪井政尙、自請ひて往く。北軍來り爭ふ。政尙、力戰して之に死す。會大雪ふる。北軍、歸路の梗るを慮り、數和を請ふ。許さず。乃、之を義昭に請ふ。義昭、親、信長小營に來りて之を言ふ。信長、乃、之を聽す。各兵を解きて國に歸る。二年二月、磯山秀昌、澤山を以て長秀に降る。五月、淺井長政、二萬騎を以て、箕浦を攻む。秀吉、赴き援け、擊ちて之を卻く。是より先、一向の賊、長島に起りて、信長の弟信興を小木江に攻めて之を殺す。五月、信長、長島に入り、

【兩城】【福島】野田

叡山を燔く
明智光秀
皇宮成る
三年
信長卿昭元、左通降る

火を縱ちて退く。賊、風雨に乘じ嶮に迫りて要擊す。氏家經國、之に死す。八月、柴田勝家を以て先鋒と爲し、近江に入る。小谷、山本の間に出で、火を縱ちて退く。兩城の兵八千出でゝ之を蹂す。勝家、返り戰ふこと三次。敵、復出でず。信長、再發して、攻めて新村を拔き、小川常樂寺を下す。

九月、勢田に陣す。諸將に命じ、火を縱ちて叡山を焚かしむ。諸將みな色を失ふ。佐久間信盛等諫めて曰く、「桓武帝、此寺を創建してより、此に幾千年、王城の鎭たり。敢て或は犯す者なし。今にして之を滅す。其れ之を如何」と。信長曰く、「吾れ國賊を除くのみ。汝か輩、何ぞ我を沮むや　吾れ四海を定め、王道の衰へたるを興さんと欲し、筋骨を勞し軀命を輕んじ、未だ嘗て一日も安居せず。去歲、攝津を略し、兩城將に陷らんとす。長政、義景、兵を擧げて我が後を窺ふ。吾れ兩城を舍てゝ返る。之を山上に棲ましめて、將に之を殲さんとするなり。人を遣して、僧徒に諭すに禍福を陳說す。而れども彼れ竟に服せず。務めて凶徒を右けて以て王師を梗ぐ。此れ國賊に非ずや。今にして芟除を行はずば、乃、患を天下に貽さん。且聞く。彼れ其律を犯し、葷を茹ひ妾を蓄へ、誦呪を束閣す。安ぞ其王城を鎭むるに在らんや。園みて之を燔き、僧徒、婦女、老少となく皆之を斬る。志賀郡を以て明智光秀に賜ひ、阪下に城きて之に居らしめて、岐阜に歸る。丹羽長秀をして、高宮某を澤山に誅せしむ。其大阪に通じたるを以てなり。是の歲、皇宮成る。信長、金を京畿の豪戶に貸し、每月息を縣官に納れしめ、以て供御に充て、且爲に廷臣の家計を計畫し、廢れたるを興し、絕えたるを繼ぐ。

三年三月、火を小谷、山本の城下に縱ち、徙りて志賀に軍す。木戶、田中の二城を攻めて、戍を置き、遂に京師に入り、妙覺寺に陣す。義昭、信長を貞勝をして第を武者小路に置かしむ。固く辭すれども許さず。乃、村井して役を董さしむ。日ならずして成る。細川昭元、岩城左通、來り降る。大阪の僧徒も、亦物を贈り

【交野】河内交野を攻む
信忠
虎姫山
長尾、謙信
武田信玄
平手汎秀死す
義昭、信長を圍る
信長の上書
【光源】義輝
惡御所

款を納る。三好義繼、松永久秀、私に畠山氏と鬪ひ、城を交野に築く。信長、素より二人を疾む。事に因りて之を誅せんと欲す。是に於て、兵を遣して交野を攻む。城兵夜遁る。久秀、竟に降る。

七月、信長の長子信忠、幼字を奇妙と曰ふ。始めて鎧を被り、信長に從ひて淺井長政を小谷に攻む。木下秀吉をして、別に山本を攻めしむ。朝倉義景の來り援くるを聞きて、虎姫山に壘して之を待つ。義景、二萬騎を以て至る。信長曰く、「其未だ陣せざるに及びて之を襲ひ、營を安ぜしむる莫れ」と。將士、夜に乘じて更に之を襲ふ。北人、之を患へて來り降る者多し。會義昭の使來り諭し、兵を弭めしむ乃、秀吉をして虎姫山を守らしめ、宮部某をして宮部の壘を守らしむ。山を鑿り道を開き、以て往來に便す。

是の時に當りて、長政、義景、越後の國主長尾謙信と好を通じ、以て信長に抗す。而して武田信玄も亦、甲斐、信濃の兵を以て、西に出づ。信長、佐久間信盛、平手汎秀を遣し、德川氏を援け、信玄を東海に拒ぐ。利あらずして、汎秀死す。義昭、時に信長を圍る。是より先、信長、義昭の失行多きを病へ、上書して諫めて曰く「幕下の京師に入るや、信長首め、朝參敢て怠ること勿きを請ふ。幕下之を諾して、後、乃、之に違ふ。夫れ光源公、王事に忘れ、天譴立所に至る。信長窺に幕下の爲に之を惧る。忠臣賞なく、而して佞夫官を得、以て下民を虐す。下民何の罪かある。罪人、金を納るれば、卽便之を宥し、僞りて窩山の賦稅と稱して、以て民財を掠め、或は陽に征課を責めて、陰に之を竊き、以て私恩を賈る。此れ皆幕下の爲すべき所に非ず。朝議、元龜の號を改めんと欲す。而るに幕下、特に費用を愛しみ、果して從はず。遠近、惡御所の目あり。信長、窺に幕下の爲に之を羞づ。信長、二條城を築きて以て、寇賊に備ふ。而るに舍て、他所に徙らんと欲し、城内の粟を糶して以て金銀を蓄ふ。諸國の將士、多く金を貴び、粟を賤しみ、其武備を遺れて、遯隱の計を爲す。皆幕下の爲に做ふなり。信長、納るゝ所の紀綱の僕、罪無くして俸を奪はれ、來りて哀を乞ふ者數〻なり。請へども復するを得ず。信長、面目以て此輩に對ふる無し。且聞く、『教を諸國に下して、馬及び金を徵す』」と。憂に白す。凡百の需索

天正元年
義昭信長を攻めんとす
毛利輝元
石山、堅田
細川藤孝
信長二條城を圍む
義昭信長と和す
丹羽長秀
【毛利氏】義昭
梶川
義昭兵を擧ぐ
槇島

は、宜しく信長に囑すべしと。信長、將に立所に之を辯ぜんとす。今陰に此教あり。信長、之に惑ふ。信長、志、幕下と心を協せ力を戮せ、倒信ずるなく、以て終吉を保ち、侯を斥け忠を進め、先業を恢弘せられんことを願ふ。儒人の如きに至りては最宜しく之を親近し、以て古今の興衰を鑒るべし。信長、兵亂の間に生長して、文學に嘗く、自度る所以なり。妄に所見を疏す。唯幕下、意を留めよ」と。

に、事を處する、多く故典に違はん。常に愧恥を懷く義昭、納れず。遂に相嫌隙す。

天正元年、義昭、潛に使を發して、信玄及び謙信に諭し、來みて信長を攻めんことを約す。又安藝の國主毛利輝元を諭して、以て後據と爲す。

義昭。自石山、堅田に城き、山岡、磯貝、渡邊等を以て之を守らしめ、兵食を徵發す。信長之を聞きて曰く、「吾れ終に兵を用ゐざるを得ず」と。村井貞勝をして、和を義昭に請はしむ。義昭、聽かず。二月、山〻の兵を招きて、之を降す。勝家、乃、三月、信長、自、將として大津に至る。細川藤孝、荒木村重、迎へ降る。乃、進みて京師に入り、兵を觀て和を請ふ。義昭、聽かず。乃、二條城を圍む。義昭、窮蹙して、人をして出でて言はしめて曰く「今より後盡く命の言ふ所を聽かん」と。信長、拜謝して、成を行ひて返る。守山に至りて諸將を遣し、六角義賢を鯰江に攻めしむ。丹羽長秀を召し、耳語して曰く「室町氏必再擧せん。再擧せば必勢多、矢橋を阻まん。汝、澤山の木を伐りて、兵艦十餘艘を造れ」と。乃、岐阜に歸る。尾張の人梶川某と云ふ者あり。博奕を喜みて衆に擯けらる。信長、其勇を愛し、與ふるに善馬を以てす。曰く、「緩急あらば、此を以て功を樹てよ」と。梶川、感喜して退く。

七月、義昭、再、兵を擧ぐ。伊勢某、三淵某、廷臣二名とを留めて、二條を守らしめ、自槇島に據り、宇治河を阻みて固と爲す。報、岐阜に至る。信長、卽起ちて、直に馳せて澤山に至り、其兵艦に乘りて、夜

二條城陷る

（足利義昭槇島籠城の圖）

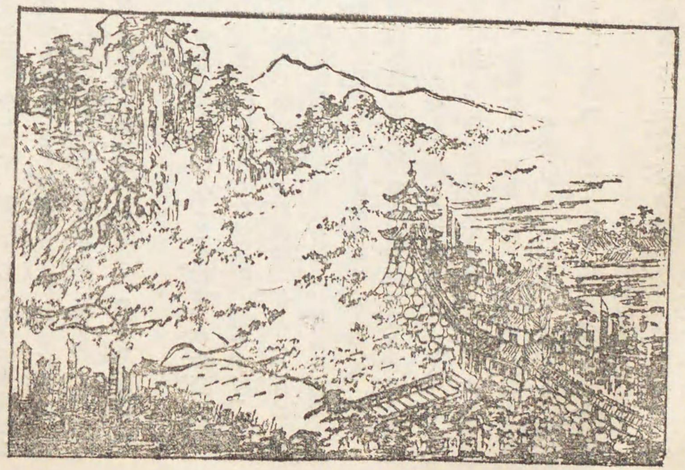
梶川先登

義昭降を乞ふ

織田氏足利氏に代る所司代

朝妻渡を濟り、旦日、阪下に達りて、直に京師に入り、火を縱ちて呼躁す。煙焰天に漲る。義昭の兵勢多、矢橋を拒ぐ者、返顧て潰ゆ　京師の人、大に懽きて曰く、「織田公、豈飛來せるか」と。信長、疾く二條を攻めて之を陷れ、三淵を斬る。城兵みな降る。以て先鋒と爲し、槇島に向ひ、自ら柳山に陣し、稻葉通朝、伊賀範俊等を遣し、二萬人に將として平等院を渡り、佐久間信盛、木下秀吉等、五萬人に將として五箇莊を渡る。是に於て、梶川某信長の賜ひし所の馬に騎り、曉に河岸に出で、大に呼びて自名のり、流を亂して渡る。通朝、兵を麾きて之に從ふ。信盛、秀吉と合擊して、柵を奪ひ、火を縱ちて入る。信長、柳山に在り、左右煙の起るを望みて、相謂て曰く、「我が軍方に渡れり。誰か先登する者ぞ」と。信長曰く、「必梶川ならん」と。槇島既に破る。義昭、降を請ふ。信長、信盛、秀吉をして之を處置せしむ。二人、乃、義昭を奉じて若江に徙り、細川昭元をして槇島を守らしむ。通朝、來りて白して曰く、「臣、梶川に先せられ、意甚之を憾む。然れども其軍進、死を致さんことを懇る。故に之に繼けり」と。信長三人を幷せ賞す。

是に於て、織田氏、遂に足利氏に代りて、令を京師に出す。戶租を蠲き、徭役を免じ、窮民を賑し、節孝を旌す。村井貞勝を以て所司代と爲し、兵を收めて還る。遂に



左通を斬る

荒木村重

清秀和田惟政を斬る

信長復兵を出す

義景遁る

【刀根山】越前

兵艦を以て、攻めて木戶、田中の二城を拔き、之を明智光秀に賜ふ。秀吉、藤孝をして淀城を攻めしめ、岩成左通を斬る。荒木村重をして和田惟政を芥川城に攻めしむ。村重、素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚偉なり。會ゝ獻頭を獻ずる者あり。信長、佩刀を拔きて、饅頭を蜂に貫きて、以て村重に咯はしむ。村重、進みて、口を開きて之を受く。信長、笑ひて曰く、「好男子、攝津の十三郡は汝が之を剪取するに任ず」と。是に於て、命じて惟政を攻めしむ。賞格を榜して曰く、「主將を獲る者は萬金、褊裨を獲る者は千金、士卒を獲る者は百金を予へん」と。村重の將中川清秀之を熟視し、墨を以て其首條に匀す。觀る者其意を測るなし。既にして惟政、曉に城を出でゝ、士卒に雜りて守備を修む。清秀、濠の側に伏し、跳り出でゝ其首を斬る。信長、乃、清秀を賞するに萬金を以てす。池田勝政、觀望して至らざるを以て之を高野に逐ふ。和田、池田氏の邑を以て、盡く村重に賜ふ。八月、岐阜に歸り、居ること三日、淺井氏の將阿閉某來り降る。信長、復發して月瀨城を下し、山田に軍す。淺井氏の兵、燒尾を守り、朝倉氏の兵、大嶽を守り、山田と相持す。信長、勝家、信盛を遣し、高月に陣し、越前の援路を絕たしむ。朝倉義景、之を聞き、二萬騎を以て、來りて田邊に軍す。信長、又稻葉通朝を遣し、勝家を助けしむ。燒尾の守將阿閉に因りて款を納れ、以て我が兵を導く。我が兵遂に大嶽を圍み、夜、雨を冒して疾く攻む。守將、乃、降る。信長、信忠をして虎姬山を守らしめ、不破光治をして大嶽を守らしむ、而して進みて丁野を下す。使を高月に遣し、諸將を戒めて曰く、「今夜、北軍必走らん。宜しく尾擊して之を虜にすべし」と。諸將皆信ずる無し。且應へて曰く、「謹みて諾す」と。夜半、義景果して營を焚きて遁る。信長、大に呼び、起ちて曰く、「敵走る」と。先馳する者あり。信長、之を誰何す。答へて曰く、「利家、成政」と。其他十餘人皆迭に對ふ。信長、歡れて曰く、「吾れ先登せんと欲して、諸君に先ぜられたり」と。乃、轡を聯ねて疾く馳す。敵に刀根山にて及び、其褊裨二十三人、雜兵二千を斬る。金松某、甲首を執りて謁す。跣にして血を蹈む。信長、之を勞ひ、手づから芒鞋一兩を取りて、之を賜

十四城を下【一乗谷】越前の治所

義景自殺す

前波長俊

久政、長政自殺す

義弼降る

錦挽義繼を殺す

ひて曰く、「吾れ戰に臨む毎に、之を刀欄に懸けて、以て闕亡に備ふ。今にして用ゐることあり」と。信長、兩日に十四城を下し、敦賀に留ること三日、降將の質子を徵し、進みて龍門寺に軍す。義景、一乘谷を弃てゝ、大野に匿る。勝家、通朝等、兵を分ちて搜索す。平泉の僧徒懼れて嚮導せんと請ふ。通朝、土人に貨して、義景の在る所を得、誘ひて其族景鏡を降す。景鏡、義景に迫りて自殺せしむ。信長、黨類を誅し、降附を撫し、政を國中に爲す。人をして義景の首を齎し之を京師に梟せしむ。降將前波長俊を以て、越前の假守と爲し、明智光秀等、之を監す。引きて虎姫山に返る。淺井長政、父の久政と兩城を保守す。信長、秀吉を遣し、粒羅岡に登りて、兩城の間を絕ち、久政、長政を自殺せしめ、其地を秀吉に賜ふ。九月、勝家を遣し、鯰江を攻め、六角義弼を降し、杉谷善住を獲て、生ながら之を地に埋め、竹鋸を以て其首を鋸す。十一月入朝す。佐久間信盛を遣し、攻めて三好義繼を殺さしむ。是に於て、淺井、朝倉、六角、三好氏、みな滅ぶ。

詠史十二首其十

蚌鷸竟ニ歸漁父牧。　屠牛順レ理ニ識ル才優一。
始見衣冠拜ニ冕旒一　齊國ノ規摸開ニ後覇一。
不レ終ニ志業一知誰罪。　遺恨君無レ忘ニ射鉤一。

信長佐々成政と政治を談ず

武田氏と斷つ

天正二年

改版 邦文日本外史 卷之十四

徳川氏前記

織田氏下

天正二年正月元日、近畿の將士、盡く正を岐阜に賀す。信長、之に酒を賜ふ。酒三行して、衆に謂て曰く、「我れ佳肴あり。請ふ、こゝに飲を侑めん」と。左右をして一函を取り來らしめ、之を座上に置く。衆、これに目を屬す。信長、柴田勝家に瞰して、手づから其蓋を開けば、則義景、長政の首なり。塗るに金粉を以てす、諸將皆笑ひて曰く、「此の好下物あり、何ぞ滿酌を辭せんや」と。信長曰く、「吾れ京畿を經略するに、二患の爲に礙へらるゝこと數年、卿等、吾か爲に勞を積み、苦を累ね、以て誅斃を致すを得たり」と。因りて各刀劒を賜ひ、讌を極めて罷む。佐佐成政、留りて白して曰く、「臣、無似にして諸將の後に從ひ、叨に洪恩を被りて報ずる所を知らず。唯願くは君、自ら足れりとせず、遂に四方を定められんことを」と。信長、大に悅び、成政の手を握りて室内に入り、與に政治を談ず。侍史武井夕菴、傍より之を贊して曰く、「圖らざりき、成政、能く此言を爲さんとは。君、これを忽にする勿れ」と。信長、厚く二人に賜ふ。

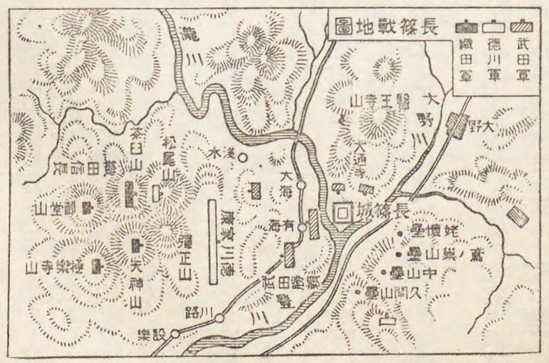
二月、甲斐の兵、東美濃を侵し、明地城を圍む。信長、信忠と、出でゝ之を距ぐ。城内に叛く者ありて城陷る。乃ち、高野、遠利の二城を修め、川尻鎭吉、池田信輝をして之を守らしむ。時に武田信玄、既に死し、長尾謙信、猶存す。信長、武田氏と絕ち、好を長尾氏に通じて、厚く之に贈る。

臣の采田を檢し、其人に賣る者は、爲に償ひて之を還す。四月、信長、聞く、「大阪、長島の遁逃を納れ、又三好氏の遺黨を糾合し、以て遙に武田氏に應ず」と。乃、兵を引きて南伐し、新淦・高尾の二城を下して返る。五月、武田勝頼、大擧して參河に出で、長篠城を圍む。德川氏、復、使をして援を請はしむ。信長、信忠、騎卒六萬を以て之に赴く。其軍を戒めて曰く、「人ごとに杙と絚とを持て」と。勝頼、大に喜び、兵を分ちて城に備へ、壘を鳶巢山に築き、一將を留めて之を守らしめて、自進むこと二十餘町、瀧澤川を渡りて陣す。信長設樂郷に至り將士をして戰を議せしむ。德川氏の部將酒井忠次、進みて曰く、「臣請ふ、今夜、間道より敵背に遶り出で、火を敵營に縱ちて其氣を褫はん。而して大軍之に乘ぜば勝たざる莫けん」と。信長、佯り罵りて曰く、「咄、田舍兒、何を知らん」と。諸將皆退く。信長、人をして陰に忠次を招かしめて曰く、「汝が計用ゐるべし。吾れ其漏泄を恐れ、故に佯りて之を叱せしのみ。汝宜しく速に發すべし。願ふに鄉導なきを如何」と。忠次曰く、「臣、郎鄉導を爲さん。請ふ、監吏を賜へ」と。信長、乃、金森長近等四人を遣して、之に從はしむ。是の時に當り、信長、極樂寺に陣し、信忠、新御堂に陣し、兵を勒して十五隊と爲す。德川公、右先鋒と爲りて前に居り、佐久間信盛、木下秀吉、瀧川一益、左先鋒と爲りて、少しく卻く

民政を布く

長篠の戰

鳶巢山（長篠戰地圖）



信長參議に任ぜらる【名香】貺者待

德川氏を輔く

長島城

大鳥井城
長島城

三年

三月、信長、入朝し、相國寺に寓す。詔して從三位に敍し、參議に任ぜらる。足利義政の故事を以て奏して、東大寺に藏むる所の名香を乞ひ、之を三分し、自多門城に至り、使を遣して香一寸八分を截らしめて、自其一を取り、分ちて其二を諸將に賜ふ。

四月、京師に還る。大阪の賊、出でゝ之を要す。擊破して過ぐ。五月、岐阜に歸る。六月、武田勝頼、兵を遠江に出して高天神の城を圍む。德川氏、使をして援を請はしむ。信長、信忠、兵二萬騎を將ゐて荒井に至る。德川公、來り謝して曰く、「公の餘威を藉りて、國を保ち、此に至るを得たり」と。信長、之を勞ひて曰く、「卿は我が爲に東面を守り、以て武田氏を拒ぎ吾をして東顧の患なからしむ。吾れ以て速に京畿を定むるを得たるは、卿の功なり」と。乃、左右の四人をして二の革囊を擔はしめ、盛るに黃金を以てして、之を賜ひて曰く、「薄以て將士の勞に酬ゆ」と。乃還る。

七月、長島を征す。信長、淺井・朝倉氏を滅し、遂に長島を攻め、二城を屠り、戍を置きて還る。雨に遇ふ。賊、險に據りて夾み射る。林新三郎、殿戰して之に死す。信長怒りて曰く、「草賊の故を以て、多く吾が良を亡ふ。吾れ必其巢窟を覆し、其醜類を殲し、以て死者を弔はん」と。已にして長島、武田氏に應ず。信長、之を覺りて益怒る。是に於て、信忠と兵數萬を將ゐて、三道より赴き討つ。信雄、瀧川一益、九鬼嘉隆と、舟師を以て之に會し、行賊兵を破りて進む。賊入りて五條を保つ。

八月、大鳥井城の賊、夜、風雨に乘じて遁る。柴田勝家等、追擊して男女二千人を殲し、其耳鼻を截りて之を一船に盛り、長島に送致す。篠橋城降る。九月、長島の賊、城を出で、船に乘りて去る。我が弓銃手、豫堤の側に伏し、擊ちて之を盡にす。餘衆八百可り、突きて我が中軍に入る。信長の叔父信次、庶兄信廣、弟秀成、從弟信成、迎へ戰ひて之に死す。賊大阪に奔る。遂に三城の男女三萬人を燒き殺す。臭數里に聞ゆ。乃、長島を以て瀧川一益に賜ひ、北伊勢の五郡を食ましむ。

三年正月、吏四人に命じて、近畿の諸國を巡り、橋道を修めしめ、關征を弛く。三月、信長、入朝し、廷

しむ。杙と絇とを用ゐて立所に成る。乃、諸隊の銃手を抽きて、三千を得たり。佐々成政・前田利家等を以て之を司らしむ。曰く、「勝頼、勇を恃みて謀なからん。而して其兵、騎戦を喜ぶ。吾れ之を沮むに柵を以てし、銃もて之を斃さん。彼れ即馳せ至るも、遽に銃を發する勿れ。其已に逼るに及びて、千毎に迭に發せよ」と。二十一日、昧爽、鳶巣に火起る。敵軍、顧て援動す。信長、自ら司銃五人を率ゐて、柵を出づること十町、巨銃を敵中に發し、戦を挑みて退く。敵の四将、更進みて、我が右先鋒に逼り、轉じて左先鋒を犯すとき、銃丸亂發す。敵兵沮靡す。敵の三將敢死して、繼ぎ進み、直に左先鋒を犯して、柵を破ること一層。我が銃、乃、齊しく發す。右先鋒、鎗を以て横さまに之を撃つ。成政、馳せて信長に白して曰く、「敵の中軍の旗幟搖動す」と。信長、先鋒をして兵を縦ちて之に乗ぜしむ。敵軍敗走す。乃、諸軍に令し、鼓譟して齊しく進ましむ。敵軍、大に潰ゆ。走るを追ひ、北ぐるを追ふ。斬首一萬三千級、餘兵を川に擠し、其宗族の將領二十餘人を獲たり。勝頼、僅に身を以て免る。參河の諸城の武田氏に屬する者、皆解きて走る。信長、軍を收めて敢て窮追せず。徳川公、來り、軍門に謝して曰く、「今日の役、謝する所を知らず」と。信長曰く、「卿の兵、最力戦して、此捷を得たるのみ」と。徳川公、因りて勢に乘じ、遂に甲斐に入らんと請ふ。前田利家、木下秀吉も亦、以て言を爲す。信長可かずして曰く、「我が兵疲れたり。吾れ且力を養ひて再擧せん」と。乃ち、振旅して還り、熱田に賽し、其祠宇を修めて美濃に歸る。

是に於て、信忠をして岩村城を攻めしむ。越前の假守前波長俊、政を失ふ。朝倉景健等、一向賊と亂を作し、龍門、虎杖、木理、火燧、水津、河野の諸城に據りて、遙に大阪に應ず。

八月、信長、信忠、乃、公族、諸將の兵凡八萬を統べ、北伐して敦賀に至る。會雨大にふる。信長、潜に木下秀吉を召して曰く、「敵必備を設けじ。汝、潜に舟師を以て河野浦を取り、其不意を撃ちて遂に龍門を破らば、則木理の諸城、攻めずして自破れん」と。乃、明智光秀等を以て之を助けしめ、夜、敦賀を發す。已にして河野、龍門、火起る。木理の諸城、顧て之を視、皆守を棄て、潰走す。諸將、邀へ撃ちて大に之を

信長戦を挑む

武田の軍潰走

信長北伐

を敗る。柴田勝家等、鳥羽城を抜き、加賀に入る。金森長近等、徳山口より入りて三城を屠る。而して丹波、若狭の將士、兵艦數千艘を以て來り會し、火を沿海に縦つ。信長、乃、進みて木理嶺を踰え、龍門に至る。景健、賊師下間和泉等を斬りて、降らんことを乞ふ。許さずして之を誅す。景健の從士三人、又に伏して之に殉す。信長三人の妻孥を恤み、兵を分ちて賊黨を索む。斬獲五萬人。進みて加賀を略す。加賀、越前、十餘日にして定る。

北荘に至る

勝家に命じて越前を領せしむ

【賦斂】租税

【游田】獵などして遊ぶ

【皇人】公家

九月、信長、返りて北荘に至り、大に戦功を論じ、梁田出羽をして檜屋・大聖寺の二城を守りて、加賀を鎮せしむ。越前の三郡を分ちて前田利家、佐々成政、及び金森長近・原不破・武藤等に賜ひ、其餘の八郡を以て、盡く柴田勝家に賜ひ、北荘に城きてこれに居らしめ、身自之を經畫せしむ。因りて勝家を敕めて曰く、「越前は北陸の要扼にして、長尾氏の衝に當る。吾れ諸將より選びて汝に命ず。汝其れ之を勉めよ。夫れ國を守るの道は徳武をのみ恃むべからず。當に恩威並び施し、以て人心を服すべし」と。乃、條制を申べて曰く、「賦斂を厚くする毋れ。關市を征する毋れ。士民を侮る毋れ。訟獄を偏する毋れ。武備を遺る、毋れ。游田を喜ぶ毋れ。皇人の邑にして、亂賊の爲に掠められる、者は、當に印券に據りて還付すべし。國内の閒地、我が倉廩に歸する者は、以て功勞の士を待し、當に徒に費すべからず。凡我が令ずる所にして、便ならざる者は、輒來りて之を爭へ。我れ將にこれを改めん」と。因りて不破、佐々、前田等に命じて、勝家と相檢察し、以て國政を爲さしむ。而して後、師を岐阜に班す。

信長右近衛大將に任ず

大阪の僧徒降る

岩村城

十月、入朝す。廷臣二名來りて澤山に迎へ、詔して昇殿を聽し、超えて右大臣に拜せらる。信長、固辭す。即權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねしむ。信長、弓部百人を從へ、入りて拜謝す。因りて宴を御前に賜ふ。東西の諸國、交使をして之を賀せしむ。大阪の僧徒、降を乞ひて、珍玩を獻ず。之を許す。會美濃の使者至り、武田勝頼、來りて、岩村を援ふと告ぐ。信長、馳せ還りて之に赴く。是より先、岩村の城將出でて戦ふ。信忠、擊ちて之を卻く。城將、遂に出でゝ降る。而して信長、至り、城將を磔して徇へ、川尻鎮吉

を以て、岩村の城主と爲す。勝頼、之を聞きて引き去る。朝廷、信忠の功を嘉し、擬するに高爵を以てす。信長、固く辭す。乃、秋田城介に除せらる。信長、因りて奏請して曰く、「臣の將校、臣の爲に力を效し、臣をして功を奏せしむ。今臣の父子獨顯爵を辱くす。而して此輩に及ばず。臣の意竊に之を愧づ」と。木下秀吉を以て筑前守に除し、明智光秀を日向守に除し、川尻鎭吉を肥前守に除す。是より先、西海の豪姓、多く絶えて嗣なし。信長、諸功臣をして、之を繼がしめんと欲す。乃、命じて各其姓を冒さしむ、明智光秀は惟任氏を冒し、塙直正は原田氏を冒し、梁田出羽は別喜氏を冒し、丹羽長秀は惟住氏を冒す。秀吉は丹羽、柴田氏の威名を羨み、請ひて羽柴氏と稱す。信長、信忠、及び諸將に謂て曰く、「我れ他日海内を混一するを得ば、則汝が輩をして實に其名に稱せしめん」と。是の時に當りて、織田氏の國、天下の衢路に横塞し、東國の鷹馬を以て、西國に贈遺し、西國の虎豹の皮を以て、東國に贈遺す。贈遺を得る者、各以爲へらく、信長、已に其地を略有すと。

四年正月、信長、治を近江の安土山に徙し、以て天主閣を起す。閣凡て七層、高さ七丈、邸第を山下に布き、尾張、美濃、若狹、越前の十一州の卒に課して、天下の工に命じ、之を作らしむ。是の歳、信忠、從四位下に叙せられ、尋いで上に進めらる。四月、信長、入朝す。詔して、二條の城趾を修めて館と爲さしむ。數年にして成る。敢て自館せず。請ひて之を皇太子に獻じてこれに居らしむ。

時に大阪復叛きて、武田、長尾、毛利氏と相結ぶ。信長、細川藤孝、荒木村重、惟任光秀、原田直正、筒井順慶を遣し、兵三萬を將ゐて赴き討たしめ、佐久間信盛等をして天王寺の壘を守らしむ。賊、木津、難波に壘して、舟船もて往來す。信長、諸將を戒めて曰く、「必木津を取れ」と。直正、降將三好康長、及び根來寺の兵を率ゐて之を攻む。難波の賊、銃手を以て之に死す。五月、賊、遂に萬餘人を以て天王寺を圍む。信盛、光秀、順慶等と、堅く守りて之を拒ぐ。梶川彌三郎、從ひて

信長將校の爲に爵を乞ふ

信長功臣に名家の姓を冒さしむ

四年安土城天主閣

二條城修築

大阪攻撃

城内に在り。數出でゝ力戰す。溝壁未だ成らず。乃、牛馬を刺し殺して、其皮を張りて壁に代へ、以て矢石を扞ぐ。信長、急を聞く。方に浴す。浴衣のまゝ馬に上り、百餘騎と赴き援ふ。若江に至り、兵聚る者三千。分ちて三隊と爲し、先鋒を村重に命ず。村重、辭す。信長曰く、「然らば則乃公之を爲すのみ」と。乃、自輕卒に雜り、指麾して進む。敵の矢丸雨の如し。信長、足を傷づけ、怒りて益進む。城兵、其旗を望見して、大に喜び、門を開きて出で戰ふ。夾み擊ちて賊兵を破る。賊兵、猶陣を布きて退かず。信長再戰ほんと欲す。諸將諫めて曰く、「機失ふ可けんや」と。兵を合せて二隊と爲し、復擊ちて大に之を破り、北ぐるを追ひて大阪の城門に至る。斬首二千餘級。乃、軍を整へ、以て敵の返襲に備へ、壘を十所に築きて、大阪を環し、若江に凱旋す。六月、安土に歸り、兵を休むること二十日にして、役に就かしむ。七月、天主閣成る。十一月入朝す。詔して、正三位に進め、内大臣に拜せらる。固く辭すれども許されず。十二月、尾張、三河に獵す。

五年正月、入朝す。二月、紀伊の賊雜賀孫一、亂を作し、大阪に應ず。信長、賊將雜賀三緘、根來杉房を招き降して、二道より入りて、貝塚及び中野を拔く。三月、孫一、降り、南伐【貝塚、中野】和泉

能登越中

松永久秀

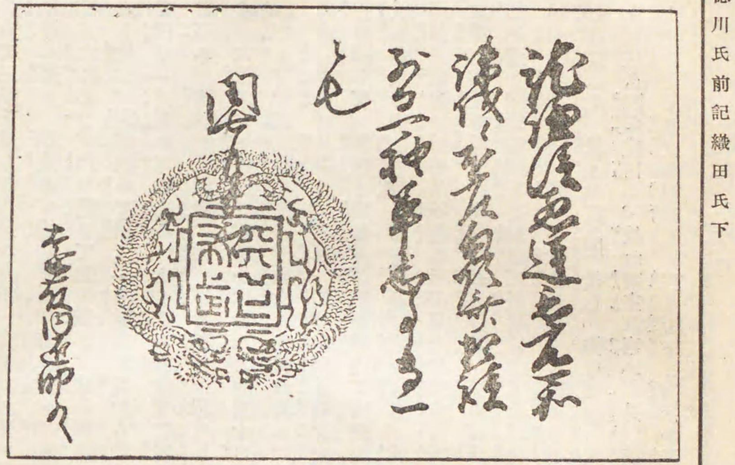
【城内】天王寺

戒を佐野に置きて還る。

八月、松永久秀、叛きて大阪に應ず。初め久秀の降るや、信長許さずして曰く、「彼れ智勇餘あり。而れども奸佞比なし。飢うれば則伏し、飽けば則ち起る。彼れ已に足利氏を亂す。亦我が家を亂さんと欲するか」と。佐久間信盛曰く、「彼れ暗主に事ふ。乃、能く此の如きのみ、主公之を駕馭するを得ば、何をか能く爲さん。宜しく且之を撫納し、以て天下に廣きを示して可なるべし」と。信長、之に從ふ。

信長、之を聞き、能登の人、長重連等を招き降し、機に乘じて地を略す。七月、長尾謙信、來りて重連を攻む。重連の弟連龍、來りて急を告ぐ。乃、羽柴秀吉等を遣し、柴田勝家を助けて赴き救はしむ。秀吉、告げずして返る。信長、譴めて見ゆるを許さず。

【茶鐺】茶釜
（織田信長撒）
【片岡】河内
志賀城陥る
信忠三位中



徳川公、嘗て信長に謁し、一老人の側に侍するを見て、其は誰なるかと問ふ。信長笑ひて曰く、「此れ松永弾正なり。此夫、人の能し難き所を爲すもの三あり。公方を弑する一なり。三好氏に叛く二なり。大佛殿を燒く三なり」と。久秀、俯伏して汗を流し、意自安からず。久秀、茶鐺あり。平蛛と名づく。信長、之を得んと欲す。久秀、靳しみて獻ぜず。是に於て、諸將と倶に大阪を守り、遂に叛き去りて志貴城に據る。信長、侍史楠友閑を遣し、往きて其意を問はしむ。久秀答へず。九月、乃、信忠をして、數萬騎を將ゐて、之を討たしむ。細川藤孝、惟任光秀、筒井順慶等、別に其屬城片岡を攻む。藤孝の二子忠興、興正、猶幼なり。先登して首級を獲たり。諸軍之に從ひ、遂に之を拔き、信忠と合して志貴を圍む。久秀、潜に使を遣して、雜賀、大阪と期を約して夾み攻めんとす。使者、誤りて佐久間信盛の營に入る。信盛、捕へて之を獻ず。信忠、喜びて曰く、「是れ天授なり」と。乃、死士二百をして雜賀の援兵と僞りて、夜、城門に至らしむ。門開きて入る。二城に及ぶ比、信忠、衆を驅して齊しく登る。二百人呼躁して之に應ず。久秀、火を縱ちて愛する所の茶鐺を抱き、自ら燒殺す。其子久通以下、皆捕誅せらる。信忠、入朝す。廷臣、詔を傳へて從三位に叙し、左近衞中將に任じ、昇殿を聽さる。

信長右大臣となる
毛利氏を斷つ

秀吉
六年
【兩畿】右大臣右近衞大將
越中丹波丹後
毛利氏

將に任ぜらる

信忠、稽首して曰く、「天恩の隆渥、物の比す可きなし。然りと雖、臣敢て輒く受けず。請ふ、之を信長に告けて、然る後奉受せん」と。之を強ふれども肯ず。使者還り報ず。天子、容を動して嘉賞し、其言ふ所を聽す。信長、答書して曰く、「久秀は老猾なり。汝、一舉にして之を斃せ」と。信忠、乃、入朝して拜謝す。安土に覲して、岐阜に歸る。是の役に、箇井順慶、最功あり。信長、之に大和を賜ふ。

十一月、信長、入朝す。從二位に進み、右大臣に轉ず。信長、幾內を略定すれども、獨、大阪未だ服せず。毛利氏、前に足利義昭を納れて、終に我と絶つ。又大阪を援け、爲に糧食を餽る。備前の浮田氏、毛利氏に屬し、東播磨を窺ふ。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職、黑田宗圓、皆援を我に求む。宗圓の子孝高、使者と爲りて、羽柴秀吉に因りて信長に通ず。信長、秀吉の北陸に敗るゝを譴めたり。是に於て、西征大將を命じ、山陽、山陰を略して、以て其罪を償はしむ。秀吉、感奮して播磨に戰ひて功あり。十二月、信長、參河に獵す。菅谷長賴をして安土を留守せしむ。名刀、寶器を以て之に授け、戒めて曰く、「秀吉來らば、則之を與へよ」と。既に歸りて秀吉、至る。

六年正月、信忠及び秀吉等の十二人を若室に饗し、親之に饋る。終に率て以て天主閣に登りて曰く、「此城を就す所以は、卿等の力なり」と。又秀吉を遣して丹波を略し、細川藤孝に丹後を惟任光秀を遣して西征せしむ。四月、兩職辭す。時に長尾謙信、已に死す。信長、乃、北陸の降將齋藤氏、神保氏をして、飛驒の國主姉小路氏と、力を幷せて越中を定めしむ。五月、毛利輝元、大兵を發して熊川に至る。秀吉、急を告ぐ。信長、自赴き援はんと欲す。諸將之を止めて曰く、「臣等先往きて、其地形の險易を詳にして、然る後駕を迎へん」と。乃、荒木村重をして赴き援けしむ。又信忠、信雄、信孝、信包を遣し、諸將を率ゐて之に繼がしむ。六月京師大水あり。信長、入朝す。秀吉、來り謁して具に軍狀を白す。信長、之に命じて曰く、「敵兵多くして食足る。我が軍之と日を曠しくして

城

荒木村重

【昆陽】攝津

七年

久しきを持するは、特に力を疲すのみ。兵を引きて播磨を按定し、時を待ちて進み取るに若かず」と。秀吉、乃ち、去りて、令を諸將に傳ふ。信忠、兵を還し、攻めて神吉、志方の諸城を下し、秀吉をして之を守らしめ以て三木城を攻む。三木と大阪とは海路、相通ず。信長、乃ち、九鬼嘉隆に命じて、大艦數十艘を以て伊勢より紀伊を廻り、擊ちて雜賀の賊船を破らしむ。三十餘艘を奪ひて、界浦に傳く。

九月、信長、入朝す。南大阪を巡り、阿部野に獵す。十月、嘉隆を召し、水戰を習はして之を觀る。是より三木、大阪に轗する者あり。監吏以て告げて曰く、「村重、大阪と私あり」と。信長、信ぜずして曰く、「村重は微者なり。吾れ擢でゝ、攝津の守護と爲す。何を苦しみて反くや。乃ち訛傳なる毋らんや」と。明智光秀、村重の新進を以て、聲績己が右に出つるを嫉み力めて之を媒蘗す。信長、人をして村重を詰らしむ。村重、驚愕して面のあたり之を陳謝せんと欲す。家臣皆諫む。聽かずして往く。光秀、書を馳せて之を途に止めしめて曰く、「主人怒れり。足下何ぞ自虎口に投ずることを爲すや」と。村重、乃ち、還り、伊丹城に據りて叛き、毛利氏に應じて、三木城と夾みて秀吉を攻めんと欲す。

十一月、信長、自將として村重を討つ。信忠、以下皆從ふ。郡山に至る。高槻の城主高山友祥、茨木の城主中川清秀、皆、村重に屬す。信長、友祥の天主教を崇ぶと聞くや、教主伴天連なる者を召して、友祥を諭さしむ。友祥、乃ち、降る。信長、自、衣を脫して之を衣せ、芥川郡を賜ふ。清秀、之を聞きて亦降る。進みて昆陽に至り。兵庫を屠る。秀吉、來りて村重に說きて、圖を改めしむ。村重、聽かず。

十二月、伊丹を圍みて克たず。信長、其兵の損ぜんことを恐れて、長圍を築きて、池田信輝、瀧川一益、浦生氏鄕等をして、之を守らしめて還る。

七年二月、入朝す。三月、信忠と俱に伊丹に如き諸將を慰勞して、簀尾に遊ぶ。八月、大に三木、伊丹、天王寺の屯戍の將士に賚ふ。九月、信長、復伊丹に如く。村重、族人を留め、城を守らしめて夜逃れ、華隅、尼崎に如き、援を毛利氏に求む。毛利氏、辭するに海路梗塞を以てす。十月、一益、密に城兵の中西某を招

伊丹城

池田信輝

丹波を定む

八年

別所長治

山名宗仙

大阪本願寺

降る

き之に謀して曰く、「而が主、怯惰なり。若が璽を棄てゝ去る。若、怯主の爲に死を致すは、曷ぞ織田公に降りて、功名を樹つるに若かんや」と。中西、乃、辛長五人と、我兵を啓かんと謀る。我が兵、乃、入る。留守せる者請ふ、「其琴を釋さば、則往きて村重に說き、尼崎、華隅の二城を致さしめん」と。乃、其琴を贳として之を遣る。二城、拒みて納れず。乃、散じて走る。信長、命じて其を、尼崎の西北に磔して、以て二城の兵に示す。

十二月、荒木氏の族三十餘人を京師に徇へて之を誅す。攝津を以て池田信輝に賜ひ、其二子、之助、輝政と俱に華隅を攻めて、終に之を拔く。

是の歲、羽柴秀吉をして兵を分ちて、惟任光秀を助けて丹波を攻めしめ、國主秦秀治を招き降す。秀治、肯て降らず。光秀、母を送りて質と爲す。秀治、乃ち降る。光秀、誘ひて之を執へ、安土に押送して之を磔殺す。丹波の人之を聞きて光秀の母を磔す。信長、丹波を以て光秀に賜ひ、龜山城に居らしむ。

八年正月、三木の城將別所長治、城を致して自殺す。信長、三木を以て中川清秀に加賜し、女を以て其子に妻す。秀吉をして但馬を攻めしめ、其國主山名宗仙を降さしむ。浮田氏既に降りて、毛利氏と兒島に相距ぐ。

大阪、連に强援を失ひ、勢力日に衰ふ。天子、廷臣三輩を遣して、就き諭して之を降らしむ。信長も亦、楠友閑をして往かしむ。是に於て、僧光佐、徒屬を聚めて之を議す。其老下間刑部等、皆其降を贊して曰く、「我れ宜しく降るべき者四あり。我れ織田氏と兵を交ふること十一歲、諸國の門徒並び起りて我に應じて、皆誅殺せらる。其幾千萬を知らず。憫まざる可けんや。一の宜しく降るべきなり。本城の諸將久しく圍中に在りて、粉骨糜身せり。藉之を賞する能はざるも、猶其肩を息はしめん。二の宜しく降るべきなり。織田氏の武を用ゐるや、當る所の者皆破れ、擊つ所の者服す。別所、荒木、秦氏の若きも、其根を絕ち其類を殲さゞる莫し。我れ地の利に因り、人の和に憑り、以て今日に至ると雖、而も竟に亦此の如くならん。是れ自我が

光壽大阪を去る
佐久間信盛を責む
【二兒】之助輝政
【平手】平手汎秀

を致へ絶滅するに非ずや。三の宜しく降るべきなり。天子の詔は奉ぜざる可らず。四の宜しく降るべきなり。且夫れ天下の英雄豪傑、織田氏に抗衡する者、孰か我の久しきに耐ふるに若かんや。我が武多し。誰か我を嗤ふを得ん」と。光佐、之に從ひ、盟を請ふ。信長、青山虎をして、蒞ましめて光佐以下に金を賜ふ。差あり。四月、光佐、衆を散遣して、自紀伊の鷲林に遜れ、子光壽を留め、七月を以て城を致す。信長、矢部善七をして之を受けしむ。門徒、陰に光壽に說きて曰く「信長、人と爲り詐にして忍なり。我れ一旦、據る所を失はゞ恐らくは其計に陷らん」と。光壽、乃、再守備を修む。光佐、惧れて人をして之を止めしむ。肯ぜず。信長、之を聞きて、怒りて曰く「我れ終に之を剪滅せざるを得ず」と。兵を遣して、勝曼、尼崎の二壘を陷る。光壽、惶恐して罪を謝す。信長曰く「我れ徐に之を圖らんのみ」と。乃、之を宥す。七月、光壽、大阪を致して去る。

八月、信長、入朝す。宇治より舟行して。大阪に至り、城郭を巡視す。書を以て佐久間信盛、其子正勝を數めて曰く「汝父子、天王寺を戍ること五年、寇を以て三國を定む。惟任光秀は、丹波を定め、池田信輝の二兒は、幼齒を以て華隈を拔く。柴田勝家は、此數人の功を樹つるを聞きて、自如かざるを愧づるや、力戰して加賀を定む。獨汝父子、尺寸の功なし。士卒を養はずして金錢を蓄へ、賞罰を論ぜずして茗飮を品す。是れ胡爲ぞや。前に朝倉の敗るゝや、汝懈りて肯て追はず。吾れ麾下を以て獨進む。汝、乃、曰く「爾く懈ると雖、信盛の若き者、焉ぞ復得べけんや」と。審に言ひし所の如くば、則五歳の戍に、何ぞ前に汝をして家康を援けて、信玄を拒がしむ、家康して、吾が羞辱を貽したり。何の顔ありて返りて吾に至る。汝終に悛めずして、日に罪戾を累ぬ。吾れ復汝を用ゐる能はず。汝猶過を悔い咎を引き、功を立て自贖はんと欲するか。不らずば、則宜しく髮を削りて去るべし。吾れ汝を法に置くに忍びず」と。人をして書

佐久間父子高野に入る
柴田勝家を賞し名釜を賜ふ
馬を閲す
長尾景勝
越中能登丹後を定む
伊賀を定む

を齎し、往きて之を視しめて曰く「吾が言ふ所非ならば、則直に之を爭へ」と。信盛、正勝、答ふる能はず。髮を削りて高野に遁る。部將皆散じ、獨、山口重政之に從ふ。初め水野信元、信盛に讒殺せらる。是に至りて白すを得たり。信長、乃、信元の弟忠重を召して、其邑を復せしむ。信長、大阪より京師に至り、乃、林通勝、伊賀範俊を流す。通勝は嘗て逆を謀りしを以てなり。後二歳、信盛、高野に死す。

九年

二月、柴田勝家、謙信、既に死して、北陸稍定りしを以て、乃、來り謁し、金銀及び土物を獻ず。信長、其功を褒め、親之を饗す。初め織田氏に傳家の茶鐺あり姥口と名づく。勝家嘗て之を請ふ。信長曰く「先君、終に臨みて、之を我に授けて曰く、『愛護して失ふ勿れ、必大勳勞ある者を得てこれを予へよ』と。汝之を勉めよ」と。是に至りて、勝家、請ひて曰く「臣、足らず。然りと雖、四方漸く平ぐ。臣等、復以て功を得ん」と。信長、欣然として出して之を賜ふ。是の月、信長、大に馬を京師に閲す。埒を皇宮の東に爲り、天子に請ひてこれを蒞み視しむ。四方の將士皆會す。會〳〵長尾景勝、虛を窺ひて越中を侵し、小出に至る。而して加賀の賊起りて之に應ず。是の時、越中の守將佐々成政、降將神保某と來りて安土に在り。信長、警報を得て、成政等をして、馳せ還りて之を距がしむ。柴田勝家の義兒佐久間盛政、加賀の尾山に在り。賊を擊ちて之を殲し、景勝を走らす。成政、至れば則事已に平ぐ。乃、進みて悉く越中を定む。信長、越中を以て成政に賜ふ。是より先、前田利家、能登を定む。能登、加賀を以て之に增賜す。是に於て、細川藤孝、丹後を以て之に賜ふ。

八月、信雄をして筒井順慶と與に伊賀を定めしむ。伊賀を信雄、信包に分賜す。乃、秀吉をして大舉して毛

因幡を定む

利氏を伐たしむ。十月、鳥取城を抜き、因幡を定む。織田氏、既に足利氏に代り、近畿の十餘國を定む。法令嚴峻にして、一錢を竊む者と雖、斬に處す。奸盜息を屛め、路に遺ちたるをも拾はず。行旅橐を委して睡る。是の時に當りて、大阪以下、强賊、已に攘除に屬す。而れども西に毛利氏あり、東に長尾、武田の二氏ありて、我と境を接して、未だ服從せず。德川氏、數武田氏を攻めて之に克つ　北條氏、關東八州を以て內屬を求む。東北の豪傑、皆使をして方物を獻ぜしむ。武田勝頼、大に懼る。

木曾義昌

是の歲十一月、勝頼、勝長を送致す。勝長は信長の季子にして　甲斐に質たりし者なり。信濃の人木曾義昌、美濃の人苗木某に因りて、信忠に言て曰く、「臣、勝頼の誅求に勝へず。願くは前導と爲りて甲斐を伐たん」と。信忠、之を信長に告ぐ。信長曰く、「吾れ甲斐を伐たんと欲するも、未だ釁の乘ず可きあらず。今此報を得て我が事成る。然りと雖、吾れ聞く、『木曾の地は險隘にして、人心測る可からず」と。宜しく其質子を徵して、然る後其地を踐むべし」と。信忠、乃、義昌に任子を徵す。十二月粟二萬石を吉良に輸し、德川氏を誡めて曰く、「明春、將に甲斐に事あらんとす」と。

十年武田氏を伐つ

十年二月信忠既に義昌の任子を收め、五萬騎に將として木曾に入る。信長、自ら歩騎七萬に將として之に繼ぐ。德川氏は、三萬餘騎を以て駿河よりし、北條氏は、三萬騎を以て相模よりし、金森長近は、三千騎を以て飛驒よりし、並び進みて之に應ず。信忠、瀧川一益、川尻鎭吉を以て先鋒と爲し、伊奈に入る。伊奈の人降りて、鎭吉の兵を導き之を納る。我が兵進みて、松尾、飯田、小山の三城を陷る。木曾義昌、擊ちて甲斐の前軍を鳥居嶺に破り、捷を信忠に獻ず。信忠、兵五千を遣して之を助け、自進みて桔梗原に陣す。復進みて飯田に陣し、大島城を陷る。甲斐、信濃の士民、素より勝頼の弊政に苦しむ。先を爭ひ、來り降る。信忠、兵を留めて大島を守らしめて、進みて飯島に陣す。勝頼、諏訪に在り。走りて甲斐に歸る。信忠乃、高遠の城を圍む。城、衝要に當り、守將仁科信盛、力戰す。下す可からず。三月、信忠、諸將に其前を攻めしめ、自其後を攻め、城を凌ぎて登り、信盛、昌辰、以下の將領十七人を獲、首を斬ること二千餘級。信盛の首を齎して、信長に呈す。信忠、進みて高島、深志の二城を陷れ、遂に甲斐に入る。勝頼、以下已に山谷に逃れ匿る。信忠、古府に陣し、其留る者を誅し、弟勝長、及び森可成、子長可を遣し、上野を徇へて之を圍み、勝頼、及び其子信勝を獲て、首を齎して信長に波合に獻ぜしむ。信長、大に喜びて曰く、「師を出して三十日、乃、四國を定めて、其巨魁を獲たり。此兒、眞に大奇なり」と。信秀より傳ふる所の佩刀を以て之に賜ひ、人をして勝頼の首を京師に梟せしめて曰く、「乃父の一生、京に入るを以て志と爲す。吾れ豎子をして其志を繼がしむるなり」と。是に於て、信長、進みて諏訪に陣す。兵の諏訪に聚る者凡十餘萬なり。令を甲斐、信濃、駿河、上野に下して、降附を撫納す。武田氏の奸臣數十人を收め、其罪を數めて之を誅す。北條氏、黃金、梁米を獻じて、戰捷を賀す。德川公、既に駿河を定め、來りて諏訪に謁す。信忠も亦來り會す。信長、之を謀りて大に功を論じ、賞を行ひ、駿河を德川公に、甲斐を川尻鎭吉に、上野を瀧川一益に、信濃の四郡を森長可に、岩村の地五萬石を長可の弟蘭丸に賜ふ。諸降將穴山信良、眞田昌幸等は、舊邑に因りて之を增損す。四月、信長、二府を巡視し、武田氏の弊政を革め、諸將をして罷め歸らしむ。信長、二府を巡視し、武田氏の弊政を革め、諸將をして罷め歸らしむ。而して自駿河に入り、富士嶽を觀る。德川氏、道を除きて供帳す。信長、之に吉良の粟二萬石を賜ひて曰く、「今用なし。以て乃の將士を賞せよ」と。乃、西に歸る。瀧川一益に遺命して曰く、「吾れ汝を以て關東の管領と爲す。凡關八州より陸奥、出羽に至るまで、皆汝之を處分せよ。獨決する能はざる所は、之を家康に謀れ」と。之に名馬を賜ひて曰く、「宜しくこれに騎りて以て封に入るべし」と。因りて柴田勝家等をして、一益と應援を相爲し、以て長尾氏を圖らしむ。遂に尾張を經て安土に歸る。南海未だ定まらざるを以て、信孝に命じ、織田信澄、丹羽長秀、蜂屋頼隆等と、南征せしむ。曰く、「事平がば四國を分賜せん」と。五月、信孝等、大阪に軍す。信澄は信行の子なり。十五日、德川公、穴山信良と入りて謝す。信長、之を待するに甚渥し。惟任光秀をして之を饗せしむ。旦日、羽柴秀吉の書を得。曰く、「秀吉、高松城を圍む。吉

武田氏亡ぶ

【四國】甲斐、信濃、上野、駿河

論功行賞

【四郡】更級、高井、水內、埴科　【二府】甲斐、信濃の府中

瀧川一益

信孝南征

自毛利氏を伐たんとす

明智光秀

信長宴席にて光秀を辱かしむ

川元春、小早川隆景、毛利輝元を擁して、數萬騎に將として來り援ふ。請ふ、援軍を得ん」と。信長曰く、「彼れ其巣穴を擧げて來る。是れ自覆滅を速くなり。吾れ自往きて之を掃殄し、元春、隆景の首を梟し、勢に乘じて遂に九州を定めんのみ」と。乃、堀秀政を遣し馳せて秀吉を誡めて曰く、「汝之と相持して、歸り入らしむる勿れ」と。是に於て大に兵を徵す。池田信輝、細川忠興、高山友祥、中川清秀に命じて、先鋒と爲し先發せしむ。光秀も亦これに與る。

初め光秀、土岐氏の疏屬を以て、諸國に流寓す。遇ふ所なし。終に信長に干む。信長、擢でゝ阪下の城主と爲し、終に丹波を賜ふ。信長、將士を待つに禮節を設けず。嘲謔嫚罵、以て常と爲す。而して光秀、人と爲り文深く、喜びて自修飾し、材藝を以て自高しとす。是より先、稻葉通朝の家臣齋藤、那須、罪あり。去りて光秀に仕ふ。通朝、之を信長に訴ふ。信長、光秀をして那須を還致し、齋藤に死を賜らしむ。光秀、命を奉ぜず。信長怒り、光秀を召して之を罵詈す。嘗て將士に酒を飲ましむ。光秀、酒を逃る。信長、親追ひ捉へて之を伏せ、其項に騎り、刀を拔きて擬して曰く、「酒を飲まずば則之を飲め」と。光秀素より飲むに勝へず。强ひて一觥を嚼す。信長、乃、光秀を掖みて、手づから其頭を擊ちて曰く、「好禿顱以て、鼓に代ふべし」と。光秀、慙憤して、自揣る、「信長、己を殺さんと欲す。故に言動に形る」と。信長、森蘭丸を寵す。嘗て珍翫を陳ねて、之に謂て曰く、「汝得んと欲する所は、吾れ輙之を予へん」と。蘭丸曰く、「臣、得んと欲する所は、此に在らず。近江の志賀郡は、先臣可成の舊領なり。願くは還賜するを得ば、幸甚し。敢て望む所に非ざるなり」と。信長曰く、「暫く之を俟て、三歲の後當に汝が願を充すべし」と。光秀、屛後に在りて、之を聞き、自疑ひて曰く、「志賀は今我に屬す。我の誅せらるゝ、其れ三歲の後に在るか」と。既にして、信長、光秀に命じ、蘭丸を以て女婚と爲し、之に志賀を予へしめんと欲するなり。光秀、復命を奉ぜず。是に至りて、命を受けて德川氏を饗す。盛に帳具を治め、周旋甚勤む。俄にして出征の命あり。他人來りて之に代る。光秀、大に恚りて曰く、「我をして徒に勞せしむ」と。悉く其具を湖中に投じて去る。

光秀反心あり信長本能寺に館す

愛宕連歌

（織田信長本能寺にて奮鬪の圖）

光秀腹臣に叛を議す

【右府】信長

是に於て、遂に反心あり。而れども、信長、之を覺らず。乃、津田益信及び蒲生賢秀等をして、安土を守らしめ、而して自近臣百餘人を以て、京師に入り、本能寺に館す。信忠、弟勝長等と妙覺寺に館す。光秀の安土を發するや。阪下に治行し、遂に丹波に入り、愛宕山祠に詣で、鬮を拈ること再三、夜、祠下に宿る。寢ねて寐らず。數嘆聲あり。從者問ふ「何故に嘆ず」と。光秀、叱して曰く、「汝が輩の知る所に非ざるなり」と。其明、西坊に會し、連歌を爲す。或人、粽を供す。光秀、苞を脫せずして食ふ。卒然、傍人に問ひて曰く、「本能寺の隍の深さ幾尺ぞ」と。衆之を異しむ。既に罷めて龜山に歸る。

六月朔、光秀、從子光春、及び其將齋藤利三等五人を召し、之に謂て曰く、「汝等能く我が爲に死するか。則一事の與に議す可きものあり。議、苟にも合はずば、則速に吾が頭を斫れ」と。五人相目して答ふる能はず。光春曰く、「臣等業に質を委せり。詎ぞ必しも問はんや。抑議する所の者は何事ぞや」と。光秀曰く、「吾れ、殆ど右府に殺されんとすること、數なり」と。因りて具に語るに故を以てす。曰く、「今、事已に迫れり。吾れ將に先之を發せんとす」と。五人諫めて之を止めんと欲すれども、光秀の意色既に決し、諫む可からざるを視て、乃、其謀を贊成す。光秀、五人に誓を納れ、質を効さしむ。是に於て、丹波の兵を悉して即

發す。宣言すらく、「命を奉じて、西、秀吉を援ふ」と。夜、大江山を度り、老阪に至る。右折すれば則備中に走く道なり。光秀、乃、馬首を左にして馳す。士卒驚き異む。既に桂川を渉る。光秀、乃、鞭を擧げて東を指し、髯言して曰く、「吾が猷は本能寺に在り」と。衆始めて其反を知る。

光秀反し本能寺を圍む

昧爽、本能寺を圍み、呼譟して入り、弓銃交發す。信長、臥内に在り。驚き起きて曰く、「反く者は誰ぞ」と。蘭丸をして、出でゝ其旗幟を視しむ。反り報じて曰く、「惟任光秀なり。」と。信長曰く、「豎子敢て爾るか」と。乃、弓を手にして出づ。蘭丸、以下宿直の者、みな内薄して拒戰す。信長、親射て數人を斃す。紘絕ゆ。槍を執りて鬪ひ、右肱を傷く。乃、走り入り、姬妾を揮して逃れ去らしめ、火を縱ちて自殺す。年四十九。蘭丸、及び二弟坊丸、力丸、及び金森長則、高橋寅松、矢代勝介、伴正林等、百餘人みな力戰して之に死す。

信長薨す

（織田信長肖像及筆蹟）

信長の首を索むるに、得ず。意甚懼

齋藤利三、其衣の焦爛する者を得て之を示す。光秀、尙安ぜず。大に之を索む。信忠、變を聞きて大に愕き、馳せて之に赴き、途に本能寺の烟起るを望見す。村井貞勝、路左に跨きて報じて曰く「右府已に弑に遇へり。君宜しく急に二條第を保つべし」と。信忠、之に從ふ。貞勝をして、皇太子を禁内に徙さしめ、入りて之を保つ。衆、或は議して曰く、「賊未だ來らざるに及びて、馳せて安土に歸り、我が旗皷を建てば、則數萬騎立所に至らん。賊を討ち仇を復せんこと、一擧にして辨ずべし」と。信忠曰く、「彼れ旣に此大事を謀る。豈兵を置き、路を塞がざる者有らんや。其れ屍を道に暴さんよりは、寧此に自裁せん」と。衆以て然りと爲す。日中、賊二萬餘騎を合せて來り圍む。吾が兵僅に二三百人、鋒を連ねて奮戰し、庭に相逐ふ。猪子兵介、小澤六郎、逆旅に在り。警を聞きて之に赴く。主人之を止む。聽か

信忠二條城に籠る

光秀二條城を圍む

【逆旅】旅宿

すして入る。梶原松千代も亦、入りて援けんと欲す。家僕又右衞門之を止め、代りて入る。信忠、之を褒めて長刀を給ふ。數十人を斃して死す。賊、我が兵の力戰するを患へ、乃、弓銃手を遣し、近衞第の屋上に登り、瞰して亂發す。我が兵死傷略盡く。信忠、乃、腹を割きて死す。毛利秀高、福富貞次、菅谷正頼、齋藤新五、みな之に死す。其餘の從兵一人も逃るゝ者なし。

信忠死す

松野平助

（織田信忠肖像）

初め安藤範俊の家臣松野平助、材名あり。範俊敗る。信長、之を祿す。是に於て、八幡祠に宿る。難に及ばす。齋藤利三、素より之と善し。書を以て之を招く。平助伴り應じ、隙を窺ひて光秀を刺さんと欲す。其意を覺り、敢て親近せず。平助、乃、自殺す。光秀、大に織田氏の臣寮の京師に在る者を索めて之を殺す。獨、前田玄以、信忠の遺命を帶び、逃れて岐阜に至り、信忠の子三法師を抱き、走りて淸洲に入る。

【浮屠氏】佛敎

僧あり、自神通を得と稱し、愚民景附す。信長、召見して詰問し、人をして、其兩手を捉らしめて、親刀を擧げて其頭を斫る。曰く「猶神通を得るか」と。柴田勝家、一向賊の首級を獻ず。信長、喜色あり。楠友閑、側に在りて、諫めて曰く「誰か天下の民に非ざらんや」と。因りて仁暴の是非を極論す。信長、之を嘉納す。時、室町氏嬾惰の後を承け、刑殺を以て威を立つ。得る所の地は、必其主を誅し、以て家臣に予ふ。性も亦猜忍にして、諸將の舊惡を追咎す。光秀の若き者、みな自安せず。其志を終へざる所以なり。光秀、旣に京師を定め、安土を取らんと欲し、卽日、馳せて瀨田に至り、書を城主山岡景隆に遺る。景隆、使者を斬り、橋を燒きて逃る。光秀、卒た發して橋を修む。初め安土城中、變を聞きて未だ確報を得ず。物

安土城

蒲生賢秀
光秀、忠興順慶を招けども來らず
信雄
【椎山】近江
秀吉
光秀を山崎に破る
中川清秀

悁悒然たり。日暮、數騎あり、馳せて京師より歸る。士民、路に要して之を問ふ。騎曰く、「兩公薨ず」と。城中大に擾る。蒲生賢秀、衆を鎭めて拒ぎ守らんと欲す。衆、一夜に四五たび驚く。諸將士、逃亡する者多し。賢秀、乃ち、其子氏鄕をして、輿馬數百を具へしめ、夫人以下を迎へて日野に逃る。姬人、或は賢秀に天主の貨寶を取りて之を火き、以て賊に予ふる毋れと勸む。賢秀曰く、「先君の心を盡して經營する所、燒く に忍びざるなり。光秀、其れ或は之を燒き、もしくはこれを取りて以て自殖するも、豈能く久しからんや。今、吾れ、其貨を取らば、人、之を何と謂はん」と。木村某をして之を守らしめ、去りて日野を保守す。光秀至り、其將士と貨寶を分ち取る。會天使來り之を勞ふ。光秀、意益驕る。使を遣して其女婿細川忠興を招く。忠興、其使者を追ふ。其友人筒井順慶を招く。順慶、至らず。光秀、乃、懼れて、京師に入り、務めて惠政を行ひ、以て人心を收む。復、安土に適き、賢秀を攻めんと欲す。

信雄、危欵して發せず。賢秀、乃、質を送りて信と爲す。信雄、賢秀、使を伊賀に遣し、援を信雄に求む。信孝、初め大乃ち、出でて椎山に次す。光秀、敢て動かす。會伊賀に盜起る。信雄、故を以て進む能はず。信孝、阪に在り、信長の密旨を奉じ「艦を紀伊に修む」と宣言し、因りて急に驚森を襲ひ、幾ど光佐を殺さんとす。而して變報至り、信孝、信澄、長秀と、圍を解きて退き、大阪に至る。信澄も亦、光秀の婿なり。叛きて光秀に應じ、其子城に據る。信孝、長秀之に迫りて自殺せしめ、遂に光秀を誅せんと欲す。而れども兵潰え て收む可からず。會羽柴秀吉、敵數萬を以て備中より至る。信孝、大に喜び、乃、尼崎に會議す。諸將先を爭ひて決せず。乃、信長在時の法に因りて、次するに城邑の前後を以てす。高山友祥、先鋒たり。中川清秀、之に次ぎ、池田信輝、丹波長秀、又之に次ぐ。信孝は、自四千人に將として其後に在り。秀吉、後拒たり。光秀を山崎に討ちて、大に之を破る。光秀、詭に伏す。明智光春、安土を守る。敗を聞き、城を燒きて阪下に走り、其妻子を殺して自殺す。齋藤利三等、みな捕誅せらる。清秀、俗字は瀨兵衞、山崎の役に、戰最力む。信孝、馬より下り、其手を握りて曰く、「吾子の力戰、吾れ德を忘れず」と。秀吉、輿中より呼びて曰く、

柴田勝家
瀧川一益
【鉋川】上野
河尻鎭吉
清洲の會議
秀信

「瀨兵、勞せり」と。清秀曰く「筑前守、氣貌已に天下を呑めり」と。信輝、秀吉等、信長の屍を本能寺に收めて之れ葬り、遂に清洲に之き、三法師に謁す。柴田勝家、佐々成政、長尾景勝と、越中に相持し、魚津を拔く。變を聞きて兵收く、入りて光秀を討たんとす。柳瀨に至り、捷聞を得て直に淸洲に之く。瀧川一益、甽、橋城 在り。是の月七日、變聞を得、鄕部下の將士說きて曰く「變故の際、人心測られず。且之を秘し、更に諸客將の質を取りて、然る後事に託して發するに若かず」と。一益曰く「是れ豈秘す可けんや。我より之を發 するに若かず」と。乃、急に令を傳へて、諸客將を召し、變事を告げて曰く「事已に此に至る。吾れ此地に在ると否とは、諸君の計る所に在り。吾れ、且諸君の質を還さん」と。客將、皆相謂て曰く「管領、誠を推して我が轟を遇す。我が轟誓ひ 相負かず」と。乃、重ねて質を納れんことを請ふ。一益、謝して之を遣歸す。明日、變報四もより至る。北條氏直、變に乘じて一益を擊たんと欲す。一益、乃、部下八千人を率ゐて、鉋川に軍す。諸客將、萬騎を以て來り援け、擊ちて敵の一將を走らす。氏直、全軍を以て繼ぎ至る。一益、客將に曰はしめて曰く、「諸君、惠然一戰す。以て休ふべし。一益、請ふ、代り進まん」と。乃、進み戰ふ。利あらず。其將篠岡某等二百人、止り死す。一益、甽橋に歸り、盡く質子を返し、信濃に徑りて西す。使を遣して沿道の城主に告ぐ。眞田昌幸、木曾義昌、みな質を送り、兵を出して護送し、尾張に達せしむ。河尻鎭吉、甲斐に在り。甲斐亂る。會德川氏の使者至る。鎭吉、其異あるを疑ひ、之を殺す。鎭吉も亦、國人に殺さる。森長可、信濃に在り。諸質子を挾み、馳せて美濃に入り、盡く之を斬る。前田利家は、能登を定め、丹羽長秀は、若狹を定め、皆兵を收めて秀吉と淸洲に會議し、三法師は、信長の嫡長孫たるを以て、立てゝ嗣と爲す。名を秀信と更む。安土に居らしめ、奉ずるに近江三十萬石を以てし、其餘は之を分領し、以て秀信の長ずるを俟つ 信雄は尾張を領し、信孝は美濃を領し、勝家は長濱を領す。信輝は、兵庫、尼崎を幷領す。而して秀吉は、播磨、丹波、但馬、因幡を領す。幷せて志賀を高島を領す 秀吉、勝家、長秀、信輝と更、吏を京師に置く。已にして專秀吉に決す。秀吉、國最富みゝ、兵最强し。矜貴

信孝秀吉を除かんとす

自持す。而して秀信は幼孩、信雄は暗弱、皆之を制馭する能はず。信孝、英氣あり。曰く、「我が家、變故に遭遇す。而して我が家の奴輩、長を舍て、幼を立て、以て爭ひて遺地を攫る。且吾れ信雄と同年に生る。特月日の少し後るゝを以て、故に兄弟の名あるのみ。吾れ讐を復せし功あれども、秀吉、乃、攘みて之を沒す。其簒竊の勢已に成れり。速に之を誅せずば、後復制す可らず」と。乃、密に勝家、一益、と秀吉を討たんことを謀る。又人をして長秀に說かしむ。長秀、肯ぜず。秀吉、之を聞きて、乃、信雄に結び、兵を發して信孝を岐阜に攻む。岐阜、兵少し。長秀、信孝を勸めて、其母及び乳母を出し、質と爲して之を和せしむ。十一

十一年

秀吉信孝の母を殺す【三七君】信孝

年正月、信雄、信孝の黨、北畠具親を篠山に攻めて之に當る。四月、信孝、復兵を起して、勝家、一益に應ず。秀吉、勝家、軍を柳瀨に出す。秀吉、自赴きて之に死す。

賤ケ嶽の戰

信孝の母を安土城下に殺す。乳母の子幸田某、岐阜に在り。母之に書を遺りて曰く、「臣の身を君に致すは大義なり。汝は三七君に事へて其大義を行ひ、常道を以て自釋き、我が幸田を招けども至らず。乃、乳母を磔殺す。秀吉、遂に岐阜を圍む。

毛受勝介

故を以て貳心を懷く勿れ」と。秀吉、幸田を信孝、戰ひ敗れ、幸田兄弟、力戰して之に死す。是の時に當りて、長秀以下の諸將、みな秀吉に屬し、之が爲に勝家を距ぐ。勝家、佐久間盛政をして、中川淸秀を襲殺し、兵を收めて速に歸らしむ。盛政、勝に狃れて歸らず。秀吉、堀尾吉晴、及び降將稻葉通朝、氏家行廣等をして、信孝に備へしめて、馳せて盛政を擊ちて之を擒にす。勝家曰く「盛政、我が言を用ゐず。果して此敗を取る。吾れ自往きて決戰せん」と。乃、其兵を檢す。兵已に逃亡して、在る者僅に三千。諸將皆退かんことを勸む。勝家曰く「吾れ嘗て少を以て衆を擊ち、勝を獲しこと數なり。諸君何ぞ我を扼むるや」と。家臣毛受勝介曰く、「往時、君の將ゐし所は、皆濃尾の驍卒なり。今は北兵を領す。素より拊循の者に非ず。逃亡する所以なり。摧敗の餘、何ぞ折衝するに堪へんや。臣請ふ、君の背幟を假り、僞りて君と稱して死なん君、逃れて北莊に入り、徐に自計を爲せ」と。勝家、之に從ふ。秀吉、兵を縱ちて追擊す。其背幟に遇ひ、大

【府中】越前

柴田勝家死す

に驚き、急に隊を整へて之を圍む。勝介、大に呼びて曰く、「柴田勝家、此に死せん」と。其兄と皆力戰して死す。勝家、間を得て走る。府中を過り、入りて前田利家を見て曰く、「子、我が爲に力を出す。謝する所を知らず。吾れ命極りて此に至る。復何をか言はん。吾れ飢ゑたり。請ふ、飯を供せよ」と。利家、之に供す。勝家、食畢りて、善馬を借りて出づ。利家、之に從はんと欲す。勝家、之を揮ひて曰く、「子は秀吉と善し。我を以て爲す毋れ」と。終に北莊に歸り、其將領の敵と姻ある者に謁して、皆之を遣る。留らんことを願ふもの九人。秀吉、至り、城を圍むこと數重。勝家、夜、將士と天主閣に宴し、慷慨して曰く、「吾れ先君の恩を報ぜんと欲して、終に猴面藤吉に困しめらる。豈天に非ざらんや」と。其妻は、信長の妹なり。勝家、之をして逃れ去らしむ。妻、泣きて曰く、「妾、去秋、岐阜を出でゝより、業已に身を良人に委ね。今日の事、固より心に期す　何ぞ必しも逃れんや」と。是に於て、夫妻、訣飮して曉に徹す。終に双に伏して駢び死す。侍臣文荷といふ者、火を閣に縱つて之に殉ず。是の時に當りて、信雄、岐阜を圍む。城兵潰ゆ。信孝、出でて內海に奔る。信雄、人をして之に迫りて自殺せしむ。

信孝自殺す

五月、秀吉、佐久間盛政、柴田權六を京師に斬る。盛政、素より撻武、戰ふ毎に鐵楷を用る、躬自陣を陷る。人呼びて鬼盛政と曰ふ。刑に臨みて言ひて曰く、「我れ、悔ゆらくは修理の言を聽かざりしを。苟にも修理の言を聽かば、則秀吉をして我が如くならしめん」と。修理は勝家なり。

佐久間盛政等殺さる

六月、一益、秀吉に降る。秀吉、之を近江に放ち、信雄をして其地を取らしむ。長秀は己を助けしを以て、之に柴田氏の地を取らしむ。池田、堀、森氏、みな分地あり。

一益降る

既にして秀吉、信雄を激して之を除かんと欲し、飛語を設けて曰く、「羽柴、將に北畠氏に不利ならんとす」と。

秀吉信雄を除かんとす

十二年

十二年正月、諸將、正を安土に賀す。皆過りて信雄に見ゆ。獨、秀吉、大津に至りて入らず。信雄、怒る。諸將之を和解して、三井寺に盟はしむ。信雄の將岡田重吉、津川義冬、淺井多宮、瀧川雄利、みな驍勇なり。

秀吉、盟に先たちて四人を招き、誘ふに厚利を以てす。三人之を聽す。獨雄利伴り聽し、盟に臨みて信雄に告ぐ。信雄、驚き馳せて長島に歸り、遂に秀吉を討たんことを議す。三人以て不可と爲す。信雄曰く「吾れ猴奴を誅せんこと易々たるのみ。汝が輩、何ぞ我を沮むを得ん」と。三人、疾と稱して出でず。

三月、信雄、甲を伏せ、三人を召して之を誅し、分ちて其邑を攻め、松島を拔きて、之を雄利に予へ、援を徳川公に求む。徳川公の安土に來るや、信長、之をして界府に遊ばしむ。信長の害に遭ふを聞き、走りて其國に歸る。是に於て兵を發して信雄を助く。

徳川家康雄を助く【先考】信長

信雄、又池田信輝、及び其二婿森長可、堀秀政を招く。秀吉も亦、信輝を誘ふ。信輝の子輝政、長島に質たり。信雄、之を還して曰く「先考、卿を待すること最厚し。卿必我に負かじ。我れ其質を持するは、是れ卿を疑ふなり」と。信輝、既に其質を收め、乃、秀吉に應じ、瀧川一益を誅して、亦秀吉に應ぜしむ。兵を聚めて木造に據りて舊封を復す　織田信包、蒲生氏鄕、關萬徹、皆一益に應じて、嶺城を政む　城將佐久間正勝、部將山口重政等と、固く守りて之を防ぐ。敵、援兵至ると聞き、圍を解きて去る。正勝、則、長島に還り、又蟹江を守る。信雄、清洲に在り。徳川公と兵二萬を合せて小牧に軍す。秀吉、十二萬人を以て犬山に軍す。

小牧の戰【二將】信輝長可

四月、秀吉、信輝、長可をして參河を襲はしむ。信雄、徳川公と、遽へ擊ちて二將を獲たり。秀吉、亦、筒井定次、丸鬼嘉隆をして、松島を政めしむること月餘。雄利、徳川氏の將服部正成と、固く守りて之を防ぐ。定次の和を講ずるを以て、城を致して卻く。秀吉、嶺、神戸、利井、竹鼻の數城を拔き、退きて大垣に軍す。

山口重政

六月、信雄、正勝をして嘗生に城かしむ。一益を誅して、亦秀吉に應ぜしむ。兵を聚めて木造に據りて舊封を復す　織田信包、蒲生氏鄕、關萬徹、皆一益に應じて、嶺城を政む　城將佐久間正勝、部將山口重政等と、固く守りて之を防ぐ。敵、援兵至ると聞き、圍を解きて去る。正勝、則、長島に還り、又蟹江を守る。信雄、清洲に在り。徳川公と兵二萬を合せて小牧に軍す。秀吉、十二萬人を以て犬山に軍す。

四月、秀吉、信輝、長可をして參河を襲はしむ。信雄、徳川公と、遽へ擊ちて二將を獲たり。秀吉、亦、筒井定次、丸鬼嘉隆をして、松島を政めしむること月餘。雄利、徳川氏の將服部正成と、固く守りて之を防ぐ。定次の和を講ずるを以て、城を致して卻く。秀吉、嶺、神戸、利井、竹鼻の數城を拔き、退きて大垣に軍す。

漏る。八月、秀吉、北、成政を攻む。成政、遂へ戦ひ、克たずして降る。秀吉、乃、越中を前田利家に予へ、越前を堀秀政に予へ、長重に返すに若狭を以てす。

十五年 長重松任に移さる

十五年、秀吉、長重の軍法を犯すを以て、若狭を奪ひ、撰けて松任の城主と爲し、五萬石を給す。家臣成田某、憤懣して、其同僚に謂て曰く「吾れ事を擧けんと欲す。誰か吾に與する者ぞ」と。衆敢て答ふる莫し。成田、罵りて曰く「皆人に非ざるなり」と。秀吉、之を聞き、人をして成田を殺さしむ。是の歳、秀吉、成政に予ふるに肥後を以てす。肥後に盜起る。秀吉、怒る。明年閏五月、成政、自大阪に赴きて之を謝す。秀吉、人をして之を尼崎に迎へしめて死を賜ふ。信雄、從二位内大臣に陞る。秀吉、其咽喉の地に據るを以て之を徙さんと欲して、未だ果さず。

十八年 北條征伐 信雄封地を失ふ

十八年、秀吉、北條氏を伐つ。信雄、兵一萬五千を以て之を助け、韮山を攻む。事平ぐに及びて、秀吉、徳川氏を關東八州に封じ、其舊國五州を以て、信雄に致さんと欲す。信雄、辭し曰く「尾張、伊勢は吾が故地なり。仍これに居るを得ば足れり。敢て大封を取て大封に膺らんや」と。秀吉、其己が封を受くるを屑しとせざるを怒り、乃、二州を奪ひて、之を己が甥秀次に予へ、信雄を出羽の秋田に遂ふ。明年、之を伊豫に徙す。山口重政等、みな徳川氏に事ふ。

文祿元年 秀雄 秀勝

文祿元年、秀吉、信雄を召して、大阪に至らしめ、其子秀雄に予ふるに、大野五萬石を以てす。信雄、退きて伏見に居り、髪を削りて、常眞の稱す。常眞の弟次丸、信長の在時より秀吉に養はる。更に秀勝と名づけて、之を丹波に封ず。左近衞少將と爲る。

四年 蒲生氏鄉卒

四年、秀勝卒す。嗣なくして國除かる。是の歳、蒲生氏鄉卒す。氏鄉幼より英敏なり。信長、之を識拔し、十餘萬石を予へ、女を以て之に妻す。秀吉、又任ずるに方面を以てす。累に封を加へ、百萬石に至り、會津に鎭せしむ。已にして之を悔ゆ。石田三成、因りて其異心ありと譖りて、之を毒す。疾作り、起たず。孤子秀行嗣ぐ。秀吉、其寡婦織田氏の美を聞き、之を取らんと欲す。織田氏、肯ぜず。秀吉、之を脅す。家臣交

慶長三年 秀信

慶長三年、事に託して其八十三萬石を削り、之を岐阜に徙す。食邑故の如し。秀吉、薨じ、子秀賴嗣ぐ。徳川公、天下の政を攝す。

五年 三成亂を成す

上杉景勝、石田三成と、公を除かんと謀る。

（蒲生氏鄉肖像）木造具康

五年六月、徳川公、諸將を率ゐて上杉氏を攻む。秀信、佚遊奢侈にして、國用窮竭す。故を以て軍に從ふこと能はず。七月、石田三成、兵を關西に擧げ、徳川公を追躡す。秀信を脅さしめて曰く「岐阜は東下の衝に當る。從はずば乃韮粉せん」と。秀信、疑懼して三成に附かんと欲す。老臣木造具康、諫めて曰く「公は右府の嫡孫を以て、顧りて豐臣氏の家奴に役せらるゝか」と。秀信、猶豫して決せず。具康等、之を前田玄以に謀らんと請ふ。玄以、是の時、京都の所司代たり。秀信、玄以を請ふ。聽さず。終に西軍の爲に岐阜を守る。尾張、美濃の諸城、是に依りて多く西軍に屬す。既にして東軍還りて清洲に至る。秀信、兵を出して木曾川に拒ぐ。具康曰く「寡兵分つ可からず。請ふ、專、内城を守らん」と。具康曰く「寡兵分つ可からず。請ふ、專、内城を守らん」と。又聽さず。城遂に陷る。具康、力戰して創を被る。秀信、降りて高野に逃れ、數歳にして卒す。東將福島正則、人をして具康を勞問せしむ。既にして前田氏、之を聘せんと欲し、延くに厚祿を以てす。辭して曰く、「福島公、已に臣を知る」と。遂に正則に就き、其國老と爲る。

秀信西軍に應ず

秀信西軍に應ず

信雄西軍に應ぜんとす

信雄、伏見に在り。徳川公の東征するや、秀雄、疾を以て從はず。三成、信雄を誘む。信雄、辭するに兵な

秀信卒す

秀信卒す

柴田勝家の三女

十九年片桐且元淀君信雄に大事を圖る

信雄大阪を去る

きを以てす。乃、約して金千枚を給し、以て兵を募らしむ。曰く「事成らば復尾張に封ぜん」と。信雄乃、之に應じ、金を請ふ。乃、銀千枚を予ふ。信雄曰く「尾張知る可し」と。秀雄を召して之を謀る。秀雄、力諫して止む。秀雄卒して嗣なし。德川氏、封を收めて、信雄を問はず。信雄、徙りて京師に居り、遂に大阪に徙る。秀賴の母と中表の親有るを以てなり。初め信長の妹、淺井長政に適きて三女を生む。再、柴田勝家に適く。勝家、死に臨みて、人をして三女を一乘谷に匿さしむ。秀吉、收めて之を育つ。昔容色あり。秀吉、自ら其長女を娶る。次女は京極高次に嫁ぎ、三女は少將秀勝に嫁ぐ。秀勝卒す。更に德川氏の婦と爲す。長女、秀吉の寵を專にす。秀賴を生み、母子共に大阪に居る。乃、信雄を迎へて天滿第に居らしむ。

十九年、秀賴の傅片桐且元、關東に使して歸る。或人、之を淺井氏に讒す。淺井氏、乃、信雄を延き、人をして之に說かしめて曰く「且元、關東と謀を通じて、吾が母子を圖る。吾れ將に其歸るを待ち、甲を伏せて之を誅し、遂に兵を擧げんとす。內兄、我が爲に將となれ」と。信雄、驚きて曰く「是れ大事なり。且彼の叛狀未だ見れず。請ふ、之を熟思せよ」と。淺井氏、之を聞き、懌ばずして曰く「再請ひて從はずば、當に先此翁を除きて漏泄を防ぐべし」と。一侍女、信雄と故あり。茗を捧げて出で　其耳に附きて之を告ぐ。淺井氏、再請はしむ。信雄、伴り諾して曰く「事已に此に至る。吾れ豈固辭せんや。吾れ少きも、亦一萬に將たり。指揮の方は固より慣熟する所なり。今老いたりと雖、猶能く方面に當るを得ん」と。淺井氏、大に喜び、歸りて報を竢たしむ。信雄、第に歸り、其下に謂て曰く「吾れ豈再、德川の德に背く可けんや」と。乃、京師に走り、人をして馳せて且元を要し、之を警めしむ。且元、故を以て免るゝを得たり。信長の弟長益、秀吉に屬し、大和二萬石を食む。從四位下侍從たり。髮を削りて、有樂と稱す。淺井氏の外叔なるを以て大阪に在り。大野治長等と、並に秀賴を輔けて、東軍を拒ぐ。城中これに倚賴す。和議起るに及びて、先質を東に納れ、淺井氏に勸めて和を成さしむ。和成る。長益、乃、駿府に赴き、請ひて曰く、「僕園中に在り。拔けて東軍に歸せんと欲す。而して和適に成り、以て今日あるを得たり。僕復願ふ所なし。

元和元年長正

長正、尙長長益卒す信雄卒す信友、信良

織田氏の勤王

【告身】受官の符信長の志

獨願くは、京師、界府の間に於て、一隊地を得て、終老の計を爲さん」と。德川公、優旨慰藉す。元和元年、兵再起る。長益、少子尙長と、京師に出奔し、遂に關東に赴さ、德川公に尾張に遇ひて、悉く城中の虛實を告ぐ。其長子長正、雲正寺、と稱す。猶大阪在りて、元帥たらんと請ふ。衆、之を許さず　長正曰く、「吾れ信長の從子にして秀賴の從父なり。乃、元帥と爲るも、何ぞ不可ならん。今此の如し　復何をか望まん」と。亦京師に出奔す。事平ぐに及びて、德川氏、長益の地を分ちて、芝村を長正に、柳本を尙長に賜ふに、幾何もなくして長益卒す。信雄に賜ふに、大和宇多郡五萬石を以てす。寬永七年、卒す。第五子信友嗣ぐ。第四子信良　兄秀雄の國除かるるに及びて、召されて關東に至り、上野の小幡を賜ひ。二萬石を食む。信友の後、故ありて一萬石を削り、丹波の柏原に徙さる。信良の後、故ありて二萬石を削り、出羽の高畠に徙さる。此四家並に立ちて今に至る。位、從四位下に過ぎず。然して豐臣氏既に亡びて、織田氏の祀は、永く德川氏と俱に存す。識者以て其流澤遠く重盛の忠孝に出で、近く信長の功德に由ると爲すなり。

外史氏曰く。往時、平安の故老、元龜間の事を說くに及びて、始めて觀るべき有りと云ふ」と。入り、土を摶ちて戲を爲す。織田公、來るに及び、夫れ應仁以還、海內分裂し、輦轂の下、每に兵馬馳逐の場と爲る。右府に非ずして、誰か能く草萊を闢除して、王室を再造せんや。朝廷其功を酬ゆるに及びて、擬するに征夷の拜を以てす。則辭して受けず。蓋し將家と王室と、俱に衰頹を極め　名重く實輕し、猶謂ゆる大將軍の告身、僅に一醉に直する者の如くならざらんや。右府の志、海宇を混同するに在り。遽に虛名を冒すを欲せざるのみ。之を彼の關東管領を假りて、以て隣國に誇る者に視ぶるに、其器量固より問より間あり。

抑朝廷の名器、天下の豪傑を輕重するに足らざること、此の如きに至る。これを挾みて以て天下に令するも、天下未だ必ずしも動せざるなり。而して右府、之が爲に扶植經紀し、懃々として置かず。是れ其高義、齊桓を凌ぎて、晉文を駕すと謂ふと雖、可なり。是の時に當りて、郡雄の方隅に割據する者、環視傍觀して、能く此

外史氏曰。往時平安故老。有レ及レ親二元龜間事一言。其時宮闕隳廢。群兒入二頽垣中一。搏レ土爲レ戲。及二織田公來一。始有レ可レ觀云。夫應仁以還。海內分裂。輦轂之下。每爲二兵馬馳逐之場一。非二右府一誰能闢二除草萊一。以再二造王室一哉。及三朝廷疇二其功一。擬以二征夷之拜一。則辭不レ受。蓋將家與二王室一。俱極二衰頹一。名重實輕。不レ猶下所レ謂大將軍告身厘直二一醉一者上耶。右府志在レ混二同海宇一。不レ欲二遽冒二虛名一爾。視下之彼假二關東管領一以誇二隣國一者。其器量固有レ間焉。抑朝廷名器。不レ足レ輕二重天下豪傑一。至レ於レ如レ此。挾レ焉以令二天下一。天下未二必聳動一也。而右府爲レ之扶植經紀。懃々不レ置。是其高義雖レ謂下凌二齊桓一而駕晉文上可也。當二是之時一。群雄之割二據方隅一者。環視傍觀。而莫二能出レ於レ此。其日夜所二務以代一眠食一者。曰。戰而已矣。而其所レ謂戰。徒較二勝負於銖兩之間一。拏攫搏噬。以爭二尋常一。如二武田上杉北條毛利一。概無レ不レ然。獨右府以二超世之材一。籠蓋而取レ之。其視二武田上杉一。猶二我藩籬一。使下其相持不レ決。日費二其財賦一。月敝二其甲兵一。適足二以隔閡我東面一。而我得二以專レ力經二略畿甸一。畿甸已定。西面以臨二毛利氏一。如二拉レ枯摧レ朽耳。於レ是我疆土益大。兵力益強。以二強大之我一。加二費敝之敵一。上杉武田固不レ能レ支レ我。而北條氏孤立矣。則東國皆可レ圖也。是其成算。夙定レ於二胸中一。奚必較二區區勝敗一哉。猶二夫奕碁一也。天下群雄。方守レ角依レ傍。而右府獨以二全局一制二其勝一。可レ不レ謂二之超世之才一歟。然定二數百年分裂之世一。如レ治二盤根錯節一。必以二鋤歷斬斷一見レ功。其間必有下大矯二拂人心一者上。而取レ之甚難者。持レ之必太急。待二將帥一。御二臣民一。不レ能レ無二猜忍刻厲之病一。所二以中道遭一レ禍。亦勢之必至。不レ足二深咎一也。昔周世宗以二英明之資一。而抱二混一之志一。不レ牽二衆言一。厲レ精進取。雖二半途而沒一。而能開二趙宋之業一。右府之迹蓋似レ之矣。而豐臣氏以二右府將校一。繼二其成緒一。能就二其志一。而至レ於下尊レ王之義一。

織田氏の強大になりし因緣

超世の方

織田氏の短所

に出つる莫し。其日夜務めて眠食に代ふる所は、曰く、戰のみと。而して其謂ゆる戰は、徒に勝負を銖兩の間に較べ、拏攫搏噬、以て尋常を爭ふ武田、上杉、北條、毛利の如き、概然らざる無し。獨右府、超世の材を以て、籠蓋して之を取る。其武田、上杉を視ること、猶我が藩籬の如く、其をして相持して決せず。日に其財賦を費し、月に其甲兵を敝れしめ、適以て我が東面を隔閡するに足れり。而して我は以て力を專にして、西面して毛利氏に臨む。枯を拉ぎ朽を摧くが如きのみ。是に於て、我が疆土益大に、兵力益強し。強大の我を以て、費敝の敵に加ふ。上杉武田、固より我を支ふる能はず。而して北條氏、孤立なれば、則東國皆圖る可きなり。是れ其成算、夙に胸中に定まれり。奚ぞ必しも區區の勝敗を較べんや。猶夫の奕碁の如きなり。天下の郡雄、方に角を守り傍に依る。而して右府、獨全局を以て其勝を制す。之を超世の才と謂はざる可けんや。然して數百年分裂の世を定むるは、盤根錯節を治むるが如く、必鋤鏖斬斷を以て之を取るに甚難き者は、之を持つに必太急なり。將帥を待ち、臣民を御するに、猜忍刻厲の病なき能はず。中道にして禍に遭ふ所以、亦勢の必至にして、深く咎むるに足らざるなり。昔、周の世宗英明の資を以て、混一の志を抱き、衆言に牽かれず、精を勵まし進取し、半途にして沒せりと雖も、而も能く趙宋の業を開けり。右府の迹、蓋し之に似たり。

而して豐臣氏、右府の將校を以て、其成緒を繼ぎ、能く其志を就せり。而して王を尊ぶの義、四方を經營するの略に至りては、一として右府を師とせざる者なし。卽德川氏の興るも、亦此に因らざる能はず。以て王室、將家、並に今日の盛を見るを致す。大業を佐成し、四方に藩屛たる者は、概、右府の置きし所に係る。則之を右府の業と謂ふも、亦何ぞ不可ならんや。これを室を築くに譬ふれば、其蘇穢を治め、其高卑を鏟り、而して又之が爲に其材木を鳩め、後人をして之に繩墨斧斤を加へ、成して之に居らしむ。嗚呼、其功寧ぞ沒す可けんや。

經營四方之略。無一不師右府者。卽德川氏之興。亦不能不因此。以致王室將家並見今日之盛。佐成大業。藩屛四方者。概係右府所置焉。則謂之右府之業。亦何不可。譬之築室。治其蕪穢。鏟其高卑。而又爲之鳩其材木。使後人加之繩墨斧斤。成而居之。嗚呼其勞寧可沒也。

本能寺　賴山陽

本能寺溝深幾尺。　吾就大事在今夕。　菱粽在手併菱食。
四簷梅雨天如墨。　老阪西去備中道。　揚鞭東指天猶早。
吾敵正在本能寺。　敵在備中汝能備。

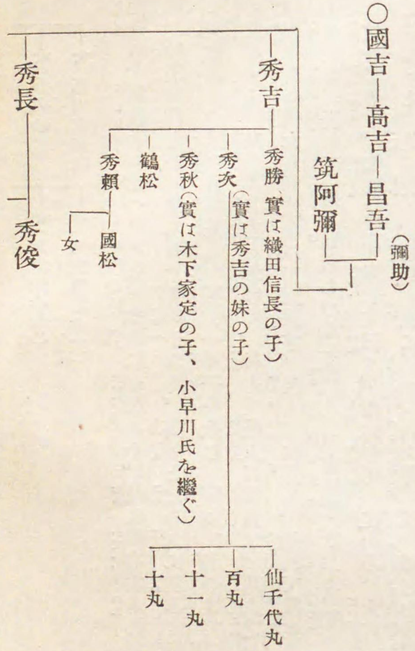
改版 邦文日本外史 卷之十四 終

改版 邦文日本外史 卷之十五

德川氏前記

豐臣氏上

豐臣氏略系



豊臣氏の出處
日吉丸
日吉丸僧たるを恥づ
日吉丸人の奴と爲る
與助

—女（秀次母）
—女（徳川家康室）
—女（森美作守室）
—女（毛利甲斐守室）

豊臣氏は、尾張より出づ。尾張愛知郡に中邑あり。邑に銀杏樹多し。困りて或は銀杏村と呼ぶ。享保、天文の際、村民彌助といふ者あり。彌助子なし。其妻と之を天に祈る。妻、日輪の其懐に入るを夢みる。已にして身むあり。天文五年正月朔、一男子を生む。因りて名づけて日吉と曰ふ。日吉生れて英異なり。八歳の時父を失ふ。其母、日吉を撃けて、轉じて邑人に寄食す。邑人之を患ふ。同閭に筑阿彌といふ者あり。國主織田信秀の僕たり。疾を以て歸耕す。邑人爲に議し、納れて繼父と爲す。一男一女を生む。乃日吉を邑傍の光明寺に託して、僧と爲らしめんと欲す。日吉機敏にして誦梵を曉らず。人の武事を談ずるを聞く毎に、輒之を傾聽す。慨然として歎じて曰く、「僧は乞丐の徒のみ。大丈夫、亂世に生れて、安ぞ乞丐を學ぶことを爲さん」と。是に於て、遊嬉、意に任せ、人と諍へば、輒之を毆擊し、僧をして己を厭苦せしめんと欲す。僧、遂に逐ひて其家に歸さんと議す。日吉、繼父の己を怒るを恐るゝや、大言して曰く、「果して我を逐はゞ我且寺を焚き、悉く群僧を擊殺せん」と。僧頗る惧る。乃事に托して辭謝し、衣物を與へ、禮して之を歸す。日吉、時に甫めて十歳なり。父素より貧しく、共に存する能はず。復遣りて人の奴と爲す。至る所皆數月にして去る。尾張、美濃の間に轉徙して二十歳に比ぶ。遂に遠江に如き、土豪松下之綱の家奴と爲る。之綱、其才幹を愛し、事毎に之を使ふ。名を與助と命ず。之綱、一日從容として、問ひて曰く、「汝は尾張の人なり。織田氏の用ゐる所の鎧の何様なるかを知るか」と。與助對へて曰く、「天下の鎧は皆桶皮なり。尾張獨胴圓を用ゐる。縢を右肋に施して、屈伸意の如し」と。之綱曰く、「吾れ胴圓一領を得んと欲す。汝、吾が爲に往きて買ひ來れ」と。則黄金六兩を付して之を遣る。與助行き自計りて曰く、「此金を攘みて以て仕進を資けん」苟も意を得ば、他日之を償ふも易きのみ。小節拘るに足らざる也」と。乃尾張に入り、其叔父に就きて之を謀る。叔父之を可とす。因りて勸めて織田氏に仕へしむ。是の時に當りて、信秀既に沒し、信長嗣ぎて立ち、四疆を攻略す。與助亦以爲らく、「長信に非ざれば、共に功名を成すに足る者なし」と。是に於て、其金を用ゐて、刀劍衣服を辨じ、自ら姓名を造りて、木下藤吉と曰ふ。信長の出づるを聞ひ、道の側に跪謁して曰く、「臣の父筑阿彌は、嘗て君の先公の奴たり。願くは君、復臣を收めて奴と爲せ」と。信長熟視て、笑ひて曰く、「汝が面、猿に類たり。其心必捷からん」と。乃收めて奴となす。常に鞋を拳りて以て從ふ。其筑阿彌の子なるを以て、呼びて小筑と曰ふ。藤吉、奉仕甚勤む。近臣に依託し、其使令に給す。信長嘗て晨を冒して獨出づ。從者未だ屬せず。而して藤吉輒之に從ふ。此の如きこと數〻にして信長寢く之を親近す。

織田氏に仕ふ
木下藤吉
小筑
藤吉清洲城壁の壞敗を憂ふ
藤吉清洲城の工事を督す
永祿二年

其明年、信長居る所の清洲城、壁壞るゝこと百歩可り。吏に命じ、卒を發して之を補はしむるに、月を彌りて成らず。藤吉從ひて城下を過ぎ、仰ぎ視て歎じて曰く、「噫、危し」と。因りて獨語之を久しくす。信長、微に之を聞き、藤吉を呼びて面詰して曰く、「小筑、汝、何を言はんと欲す」と。藤吉、左右を畏憚して、敢て答へず。信長伴り怒りて、其手を拉りて之を近づく。藤吉乃曰く、「方今、君の國は、東に今川、武田あり。西に齋藤、淺井、六角あり。日我が隙を窺ふ。然して備を弛むる此の如し。有司、君の爲に謀りて忠ならず」と。信長默然たり。既にして舍に歸り、藤吉を召して曰く、「汝をして工事を司らしめば、則汝能く速に之を竣へんか」と。藤吉曰く、「能ふ」と。信長曰く、「吾れ今日、汝に命じて工事を司らしむ」と。藤吉拜謝し、徑に吏に詣りて告げて曰く、「主公、僕に命じて工事を司らしむ。願くは徒屬を諭して、僕が令を聽かしめよ」と。吏、意に之を憎みて曰く、「子好く之を爲せ。吾れ復管せざる也」と。藤吉乃、盡く役徒を會するに君命を以てし、之に酒食を賜ひ、乃分ちて十隊となし、一隊を以て十歩に充て、自之を奬勵督促す。兩日にして成る。信長適獵より歸り、見て大に驚きて曰く「猴奴乃能く此の如し」と。因りて俸を加へ、升せて吏と爲す。是の歳永祿二年なり。

三年

藤吉婚す

六年

藤吉に百貫の邑を賜ふ

三年、藤吉、又上言して曰く、「清洲城は水に乏し。小牧に徙るを便とす」と。信長已に之を欲す。而して勞費を憚り、未だ果さず。且人の水に乏しきを知るを惡む。乃叱して曰く、「猴奴何ぞ知らん。敢て妄言を進めば、罪、死に當つ」と。凡藤吉、事を言へば、輒叱斥せらる。衆之を目笑して曰く「彼の面皮、何ぞ厚きや」と。藤吉以て意と爲さず。獨、深く信長に結ばんと欲す。信長の士前田利家、淺野長勝、藤吉と善し。淺野、中邑の人杉原某の二女を養ふ。利家、其長女を悅び、之を娶らんと欲す。女肯ぜず。之を强ひて已まず。淺野之を患ふ。藤吉、權に利家に利家に謂て曰く、「子、之を舍めよ。吾れ已に之に通ず」と。利家笑ひて曰く、「吾れ未だ之を知らざるなり。苟も然らば、子盍ぞ速に婚媾せざる。吾れ子の爲に之を媒せん」と。藤吉も亦甚辭せず。遂に柴田勝家に因りて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藁を簀に布きて坐す。瓦缸敗盞を以て相酬ゆ。妻、其常人に非ざるを知るや、之に仕ふる甚謹む。後に淺野、近江の人安井長政といふ者を養ひて子となす。妻に其少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

六年夏、信長、兵を河洲に閱し、戲に藤吉をして將となす。藤吉、之を部勒指麾す。兵法に老いたる者の如し。其九月、信長出でゝ洲股に舍す。近臣福富某、其刀笄を失ふ。藤吉を意ふ。藤吉、急を津島の市に赴き來りて刀笄を粥ぐ。藤吉、之を驗するに、乃刀笄を盜みし者なり。密に金を懸けて之を購ふ。一卒あり、來りて之を縛し、信長の歸るを候ひ、卒を擔へて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藁を簀に布きて坐す。瓦缸敗盞を以て相酬ゆ。妻、其常人に非ざるを知るや、之に仕ふる甚謹む。後に淺野、近江の人安井長政といふ者を養ひて子となす。妻に其少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

六年夏、信長、兵を河洲に閱し、戲に藤吉をして將となす。藤吉、之を部勒指麾す。兵法に老いたる者の如し。其九月、信長出でゝ洲股に舍す。近臣福富某、其刀笄を失ふ。藤吉を意ふ。藤吉、急を津島の市に赴き來りて刀笄を粥ぐ。藤吉、之を驗するに、乃刀笄を盜みし者なり。密に金を懸けて之を購ふ。一卒あり、來りて之を縛し、信長の歸るを候ひ、卒を擔へて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藁を簀に布きて坐す。瓦缸敗盞を以て相酬ゆ。妻、其常人に非ざるを知るや、之に仕ふる甚謹む。後に淺野、近江の人安井長政といふ者を養ひて子となす。妻に其少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

藤吉に百貫の邑を賜ふ

卽之を就縛し、信長の歸るを候ひ、卒を擔へて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藁を簀に布きて坐す。瓦缸敗盞を以て相酬ゆ。妻、其常人に非ざるを知るや、之に仕ふる甚謹む。後に淺野、近江の人安井長政といふ者を養ひて子となす。妻に其少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

「臣唯貧し。故に人に意はる」と。信長、之を憐み、之を部勒指麾す。兵法に老いたる者の如し。其九月、信長出でゝ洲股に舍す。近臣福富某、其刀笄を失ふ。藤吉を意ふ。藤吉、急を津島の市に赴き來りて刀笄を粥ぐ。藤吉、之を驗するに、乃刀笄を盜みし者なり。密に金を懸けて之を購ふ。一卒あり、來りて之を

藤吉に三千貫の邑を賜ひ秀吉と改めしむ
信長大澤を殺さんとす
竹中重治
十一年
十二年
秀吉義昭將軍に謁す
大内を修む
元龜元年朝倉義景を擊つ

藤吉に一旗を賜ひ、曩傍に就きて三千貫を賜ふ。名を命じて秀吉と曰ふ。美濃の豪傑、大澤某、宇留間城に據る。信長の患ふる所たり。秀吉、計を以て之を降し、携へて信長に謁す。信長大に喜び、其夜、密に秀吉を召して曰く、「大澤は叛服必す可らず。速に之を殺すに若かず」と。對へて曰く、「叛かば則之を誅せんのみ。今にして之を殺さば、復來る者なけん」と。聽かず。秀吉、舍に歸り、刀を佩びずして、大澤を召して曰く、「吾れ子の身に於て、安ぜざる所あり。子第速に亡けよ。吾れ子の爲に留りて質と爲らん」と。大澤、卽亡け去る。諸豪傑、之を聞きて、多く秀吉に屬せんと願ふ。竹中重治といふ者、奇計を好む。齋藤氏に從ひて遇せられず。亦來りて屬す。

十一年、信長に從ひて六角義賢を擊ち、先鋒たり。諸將と箕作城を攻めて之を拔く。信長、將軍足利義昭を京師に擁立す。三好氏の兵、屢之を犯す。

十二年、義昭、信長に謂て曰く、「吾が爲に一將の智勇兼備なる者を置きて、以て京師を鎭せよ」と。信長曰く、「諾」と。將に擇びて以て進めんとす。衆、意に柴田勝家、丹羽長秀、佐久間信盛の三人を擬す。命發するに至れば、則、木下藤吉なり。衆、大に驚く。秀吉既に命を拜し、卽日、足利氏に詣りて、義昭に面謁す。京師の事を裁決するに、立どころに辨ぜざるなし。三好氏も敢て犯さず。衆、之を妬み、其自用太過ぐるを譖る。信長斥けて納れず。尋いで大内を修むを擊ち、淺香城を攻めて、先登す。

元龜元年四月、從ひて朝倉義景を越前に擊ち、先鋒となりて、手筒城を拔く。會淺井長政、兵を發して後を斷つ。信長、軍を班さんと欲すれども、義景の尾擊せんことを恐る。曰く、「誰か留りて義景を拒ぐ者ぞ」と。衆、敢て答へず。秀吉進みて曰く「願くは臣に命せよ」と。乃三千人を以て留りて義景に當る。義景背て出です。遂に兵を引きて西す。參河の國主德川公、客將を以て信長の軍に殿たり。秀吉之と兵を合せて、行々土窟を擊ちて、京師に達る。功を以て愛知川の三萬石を食む。木村、生駒、前野の諸人、之に屬す。六月、

姉川
二年
三年
天正元年義昭を若江に徙す
秀吉淺井の故地十八萬石を食む
長濱城を築く
三年
長篠
羽柴筑前守となる
千瓢
廿二萬石
【矢部】秀勝
秀勝

從ひて淺井、淺倉の二氏を姉川に擊つ。因りて橫山を守る。九月、淺井長政、朝倉義景、兵を合せて信長を大津に圍む。秀吉赴き援け、圍解けて歸る。

二年五月、淺井長政、兵を發して鎌羽城を攻む。城、橫山を距ること頗遠し。秀吉、輕兵を以て馳せて山の背を遶り、旗を城の後に立つ。敵、驚きて潰走す。八月、從ひて淺井氏の山本城を攻む。

三年七月、又之を攻む。朝倉義景來り救ふ。逆へ擊ちて之を破る。

天正元年、信長の命を以て、將軍義昭を廢し、之を若江に徙す。淀城、義昭の爲に守りて下らず。往きて說きて之を降す。八月、朝倉氏滅ぶ。秀吉、攻めて小谷を拔き、淺井長政の父子を獲たり。秀吉の二氏を拒ぐ、年あり。信長をして、北顧の憂無く、以て畿內を經營するを得しむ。功を以て淺井氏の故地十八萬石を食む。明年、長濱に城きて之に居る。

三年五月、信長、德川氏を援け、武田勝頼と長條に戰ふ。秀吉、左先鋒と爲りて功あり。八月、朝倉の餘黨大に越前に起る。信長これを攻めて、敦賀に至る。秀吉、命を受けて、舟師を以て、遶りて敵の後に出で、岸に上り舟を毀ち、河野を襲ひてこれを取り、遂に龍門を拔く。諸城皆潰ゆ。是の歲、筑前守に叙せられ、氏を羽柴と更む。秀吉、桐を以て號となし、金瓢を以て馬表と爲す。一捷ごとに一瓢を加ふ。曰く、「吾れ必積みて千に至らん」と。因りて千瓢と稱す。織田氏の軍を出すや、桐號瓢表、敵望みて之を避く。前後封を加へられて、總て二十二萬石。秀吉、私に其謀臣と議して曰く、「主公は、外優裕にして、內猜吝なり。吾れ大封を受くれども、必終を保つこと能はじ」と。因りて容從として信長に白して曰く、「臣、敢て請ふ、次郎を養ひて子と爲し、之に讓るに臣の祿を以てせん」と。信長、喜び、因りて問ひて曰く、「汝の祿は如何」と。曰く、「君、臣に西征を命ぜば、西國の二三州は、日を指して取るべし。取らば輒君に獻ぜん。臣、其餘を請はんのみ」と。信長、乃其少子秀勝を以て、秀吉の義子と爲す。是の時に當りて、毛利輝元、山陽、山陰十餘州に割據し、浮田直家、備前、美作を以て之に附く。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職等、其

兵を被んことを恐れて、款を織田氏に送る。政職の使者黒田孝高、器略あり。秀吉に因りて毛利氏を撃つべき狀を說きて曰く、「臣請ふ、之が嚮導をなさん」と。秀吉、具に之を信長に語る。信長、終に意を決して西征す。

黒田孝高
西征に決す

五年、秀吉を以て西征大將となす。播磨を取りて以て自封せしむ。十月、秀吉、入りて辭す。信長、授くるに記幟を以てし、曰く、「功成らば、則中國を舉げて汝に與へん。汝、遂に進みて九州を取れ。其援師の若きは、當に請に依りて之を遣すべし」と。秀吉、拜して對へて曰く、「君、臣の鄙陋を捨てず。勳舊の諸將を舍きて、大任を臣に命ず。臣、敢て力を竭さざらんや。臣、記幟の賜を辱くす。是れ君、臣をして專制を得しむるなり。叛くを討ち、服するを撫で、機に臨み變を制して、以て中國を定めんこと、臣の度内に在り。君の近臣森、矢部、福富の諸人、功を積み、勞を累ぬれども、未だ報ゆる所あらず。中國既に定まらば、願くは以て此輩を封ぜよ。臣は則直に進み、勢に乘じて遂に九州を下さん。九州下らば、則願くは其一歲の入を賜へ。糧伏を蓄へ、舟艦を造り、海を濟りて朝鮮に入らん。君、臣の功を賞せんと欲せば、願くは朝鮮を以て請と爲さん。乃、朝鮮の兵を用ゐて、以て明に入らん。庶幾くは君の威靈に倚りて、明國に席卷し、三國を合せて一と爲さん。是れ臣の宿志なり」と。信長笑ひて曰く、「秀吉又復大言するか」と。遂に便宜、事に從ふを許す。

秀吉宿志を陳ぶ

【御著】播磨

是に於て、秀吉、兵數千を將ゐて、播磨に入り、御著に至る。政職、中悔いて、走りて毛利氏に歸す。黒田孝高、其父安圓と姫路に居る。迎へて秀吉に說きて曰く、「臣の居る所は形勝の地なり。君宜しく據りて根本と爲し、西面しを以て毛利氏を圖るべし」と。秀吉之に從ふ。孝高に予ふるに宍粟郡を以てす。

上月を取る

十一月、秀吉、兵を將ゐて、播磨に入り、上月を取る。糧乏きを來り援く。孝高逆へ戰ふ。秀吉赴き援け、隊將堀尾吉晴をして、進擊せしむ。我兵少しく卻く。秀吉、後より呼びて曰く、「今日始めて中國の兒と戰ふ。濃美の羞を貽す勿れ」と。我兵奮ひ進み、擊ちて直家の兵を走らせ、遂に一月を拔きて還る。已にして直家、襲ひて之を復す。

六年
姫路城

六年六月、秀吉、大に姫路に城く。故の出雲の國主尼子勝久、兵を以て來り屬し、上月を取る。糧乏きを以て退き還る。城、復直家の有と爲る。二月、秀吉赴き攻めて、盡く其兵を焚き殺し、城を以て勝久に予ふ。

別所長治
三木城

三月、別所長治、叛きて毛利氏に附く。族黨八千を聚めて、三木城に據る。城甚險なり。而して野口、志方、神吉、櫛橋等の諸寨、皆之に應ず。秀吉地圖を按へ議して曰く、「彼れ我が三木を攻むるを俟ちて、其後を襲はゞと欲するなり。吾れ當に其計に反して、以て勝を制すべし」と。乃、野口を攻めてこれを下す。

吉川
小早川
【高倉山】播磨

四月、毛利氏の族將吉川元春、小早川隆景、直家と兵七萬を合せて上月を攻む。秀吉、兵を留めて三木に備へ、而して自ら起きて之を援け、高倉山に陣す。信長、播津守荒木村重等をして來り助けしむ。五月、更に其三子信忠、信雄、信孝を遣し、來り援けしむ。相持して戰はず。秀吉以爲らく、敵は兵多く食足る。未だ勝つべからず。若勝つとも吾か功に非ざるなりと。乃、信長に請ひて師を班し、書寫山に陣し、攻めて神吉、志方を拔く。八月、秀吉、二萬人を將ゐて三木を攻む。直家、秀吉の終に抗す可らざるを知りて、款を送らんと欲す。會〻堺港の藥商の子小西彌九郎といふ者、岡山の賈人に養はる。其生父は京師に老す。秀吉、微なりし時、數〻其家に館し、彌九郎と親み善し。直家、因りて用ゐて使者に充てて、三木に赴かしむ。秀吉、爲に信長に請ふ。之を許す。伯耆の國主南條元續も亦、國を以て降る。而して荒木村重は、明智光秀の爲に讒せられ、罪を得て、叛きて毛利氏に應ず。

【書寫山】播磨
三木を攻む

荒木村重

十一月、信長、自ら將として村重を討つ。秀吉、往きて信長に見えて曰く、「臣、村重は叛く者に非ざるを識る。是れ必故あらん。臣請ふ、說きて之を降さん」と。乃、輕裝して伊丹に赴き、村重に面諭す。村重謝して曰く、「織田公、豈終に我に釋然たらんや」と。秀吉泣きて、別れて出づ。伊丹の人、之を殺さんと請ふ。秀吉、更に黒田孝高を遣して、之を說き

七年

かしむ。村重之を囚ふ。孝高屈せず。秀吉、乃、三木に歸り、戰を休め、長圍を築きて、之を困しましむ。長治、村重と通じ、間道より私に出でゝ、秀吉を襲ふ。

七年正月、長治出でゝ、淡河、丹生に築きて互に應援を爲す。

二月、秀吉、風雨の夜を以て、襲ひて丹生を取り、秀長をして五百騎を以て淡河を攻めしむ。利あらず。守將も亦收めて三木に入る。乃、加藤光泰に命じ、寨を築きて其糧道を絶たしむ。九月、村重、伊丹、棄て、走りて花隈を保つ。孝高、乃歸るを得たり。是より先、竹中重治死す。孝高、獨、謀主たり。村重、長治と、皆急を毛利氏に告ぐ。毛利氏、援ふ能はず。獨、糧食を送る。襲ひて平田の寨を破る。長治、兵を引き出でゝ、其糧を取る。秀吉麾下を以て、大村に邀へ擊つ。近士脇坂安治、敵の驍將魚住源吾を斬る。秀吉、因りて大に之を破り、別所氏の族十人を獲たり。壘を徙し、城に逼る。八年春、遂に之を陷る。長治をして

八年

【兒島】備前

但馬因幡を取る

自殺せしめ、以て城兵を免れしむ。

是に於て、盡く播磨を定む。乃、浮田直家をして、備前、美作の兵を以て、西、毛利氏を圖らしめ、兒島に築く。小早川隆景、數之を攻む。乃、淺野長政を遣し、舟師を率ゐて赴き援け、擊ちて之を走らす。

時に山名氏は、但馬、因幡に據りて、毛利氏に屬す。是に於て、秀吉、自、將として、山名祐豐を但馬に擊ち、竹田城を攻む。四月、山名豐國を因幡に擊つ。因幡の質子、鹿野城に在り。秀吉攻めて之を取る。七月、再但馬に入りて、諸城を拔く。山名祐豐、出石城を以て降る。遂に但馬を定む。再因幡に入りて、鳥取城に至り、取る所の質子を城外に縛し、諭して之を降す。豐國、乃、出でゝ降る。而して城兵未だ下らず。兵を引きて還る

九年

九年春、海賈をして金數千兩を齎して、因幡に赴きて、粟を索め價を倍して之を糴せしむ。因幡の人大に喜び、爭ひて糶す。

七月、秀吉、乃、兵五萬を以て鳥取を攻む。秀長をして、丸山を攻めしむ。二城食乏し。我が牙兵加藤清

伯耆に入る

【五國】丹波、但馬、因幡、播磨、攝津

正等、日夜攻擊す。清正は、杉原氏の戚屬なり。襁褓にして母を喪ふ。秀吉の妻、取りて之を育つ。是の役に甞めて十八なり。城兵と戰ひて、多く首級を獲たり。

十月、吉川元春、兵を發して來り救ふ。未だ至らずして、城陷る。秀吉、進みて伯耆に入り、南條元續を助け、鵯山に軍して元春と相持す。天、已に寒し。因幡を定め、降將宮部繼潤をして之を守らしめて還る。秀吉　五歲以て、五國を定む。十二月、安土に赴きて、卽夜、信長に謁す。信長、呼びて之を前め、其面を撫して曰く、「汝が面目、復昔日の藤吉に非ず。明日、我も且に客の禮を以て、汝を饗せん」と。旦日、秀吉、寶刀一、鞍馬百、土物五十を獻ず。布旅して地を蔽ふ。信長、城樓より之を視て、欣然として左右に謂て曰く、「此れ大膽藤吉の獻ずる所の者か」と。饗して之を遣る。

十年

十年正月、直家、病みて卒す。秀吉、爲に請ひて、其子秀家を立つ。宮部繼潤、人をして來りて、吉川元春の鳥取を攻めんと欲するを告げしむ。秀吉曰く、「彼れ之を北より攻む。吾れ將に之を南より救はんとす」と。乃、兵を引きて、淡路に入る。二十日にして之を定む。

淡路に入る

四月、六萬人を率ゐて、備中に入り、宮地を攻めて之を下す。遂に冠山を攻む。加藤清正、先登す。浮田氏の兵、之に繼ぐ。冠山の兵、盡く高松城に走る。秀吉、隨ひて城を圍む。城傍、平田にして池沼多し。而して甲部河その西に在り。秀吉、山に登りて熟視して曰く、「是れ灌ぐ可きなり」と。

備中に入る

五月、自、營を蛙鼻岡に移して、巨防を南城に築き、河水を引きて之を灌ぐ。淺野某をして、舟を以て大砲を載せ、城樓を擊碎せしむ。是に於て、吉川元春、乃、因幡を捨てゝ來り救ひ、小早川隆景と兵を合せて廂山に陣す。郤元其後に在り。秀吉、二萬人を分ちて之を當る。益防を築きて峻からしむ。城兵、寨を結びて坐す。元春、隆景、數々戰を挑む。秀吉、壘を固くして出でず。因りて謀りて曰く、「吾々數國を連取す。今又毛利氏の擧ぐれば、則功大にして身危し。主公を此に請ひて、之が先鋒を爲すに若かず」と。乃使を馳せて信長に白して曰く、「城の陷るは旦夕に在り。而して毛利、大擧して來り援く、請ふ。大旆を出せ。

高松城

信長中國を征せんとす

軍を分ちて二と爲し、一は以て城に當り、一は以て援師を擊たば、一歲を出でずして、中國を擧ぐべし」と。信長、大に喜び、堀秀政をして、先往かしむ。乃、明智光秀、筒井順慶、池田信輝、中川清秀、高山友祥等に命じて、兵三萬五千を率ゐ、秀吉を援けしむ。而して、自百餘人を以て京師に入り、本能寺に館し、將に自之に繼がんとす。

高松城水に浸さる

初め光秀、事を以て怨望す。是に至りて、又往くを欲せず。信長、迫りて之を遣り、丹波に歸り、兵を治めて西せしむ。是の時に當りて、高松城の水に漸されざること數尺、東西の軍、相距ること、百步可り。毛利氏東軍の大擧して且に至ると聞き、遂に使をして和を議せしむ。秀吉、未だ之を許さず。

本能寺の變【城將】清水宗治

六月一人あり、京師の使者なりと稱し、馳せて軍門に入る。秀吉、之を覽る。知る所の宗仁といふ者の變を報ずるなり。曰く「光秀反して、丹波の兵を以て、右府を本能寺に攻めて、之を弑せり」と。右府は信長なり。秀吉、大に驚く。而れども未だ宣言せず。明日數十騎を率ゐて堤防を巡視す。是の日、城陷り、城將自殺す。而れども毛利氏猶軍を張りて去らず。明日、使者を遣し、來りて前議を治めしむ。秀吉、之を卻けて曰く「當に明日を竢ちて之を議すべし」と。明日使者復來る。秀吉、自度るに、事終に泄れん。我より之を發するに若かずと。乃、具に使者に告ぐるに變故を以てし、返り報ぜしめて曰く「事已に此に至る。公等徐に之を計れ」と。使者返り報ず。輝元、大に喜びて諸將に謀る。諸將皆曰く「我れ信長と和す。秀吉と和するに非ず。今、信長死す。彼れ軍情沮廢し、危疑を萌起せん。我れ此の時に乘じて、之を掩撃せば、必ず秀吉を獲ん。是れ天の我が家に幸するなり。失ふ可らず」と。隆景曰く、「吾の見る所は此と異なる。信長の死は、天の我が家に幸するに非ず。乃、秀吉に幸するなり。何となれば、則應仁以來、七道分離し、爭亂相踵ぐ。今日に至りて極れり。天、將に一豪傑を生じ、以て天下を掃蕩せんとす。吾れ秀吉の擧動を視るに、是に非ざるを得んか。其子弟將佐、孰か秀吉の右に出づる者ぞ。夫れ和議、外に發して、變故、內に起る、常人を

隆景の議

して之に處せしめば、必其事を秘して、速に前議を成さん。今、正に告げて隱さず。吾が從違に任す。其量豈測る可けんや。吾れ人をして其陣を候視せしむるに、平日に異ならず。今之と戰ふは、我は曲、彼は直、我を仇とすること必深く、敢死して來り戰はん。能く必之を獲ることを保せんや。苟も之を獲ずして其を脫歸せしめ、異日雲蒸龍變せば、我れ遺類なからん。吾を以て之を計るに、前約に從ふに如くは莫し。彼れ禍難に遭際し、我れの約に違はざること多しとせば、必ず厚く我を遇せん。功名富貴、將に我と共にせんとす。是れ我れ彼と慶幸を同くするなり」と。輝元之を然りとし、乃賓を送りて和を成し、且之を弔ふ。是に於て秀吉、還りて光秀を討たんと欲す。因りて毛利氏に乞ひて、弓銃各々五百、旗三十、騎士一隊を假る。輝元、其言の如くす。秀吉、諸將士を會し、垂泣して之に言て曰く「吾れ右府の恩を受くること、物の比すべきなきは、汝が輩の知る所なり。今日、死を致し仇を復すは、吾に非ずして誰ぞや。天下の事此一舉に在り。汝が輩、其れ我が爲に之を勉めよ」と。乃、兵を引きて途に上り、程を兼ねて疾く行きて、尼崎に至る。是の時に當りて、光秀、收めて西し、京師に屯して、政令を施行す。復、兵を引きて安土に適く。織田氏の公族將帥、皆觀望して相伏し、敢て先發するものなし。秀吉、既に尼崎を發し、髮を斷ち形を毀り、人をして周く諸將に告げしめて曰く「明智光秀、浩恩を蔑棄し、敢て大逆を行ふ。天地の容れざる所、人神の共に憤る所なり、秀吉の孺、光秀と共に天を戴かず。悉く領國の兵を發し、自、將として此に至る。願くは諸公と俱に一戰し、必豎子を梟し、以て先君の靈を弔せん」と。是に於て、諸將帥盡く尼崎に會す。初め光秀の難を發するや、其衆と謀りて曰く「方今、柴田勝家は上杉氏に當り、瀧川一益は北條に當り、羽柴秀吉は毛利氏に當る。而して丹羽長秀、信孝を佐け、將に四國に赴かんとす。我れ空虛の地に出でば、以て大事を爲すを得ん。天下圖るに足らざるなり」と。是に至りて秀吉撫津に在りと聞きて、大に驚き、其從子光春をして安土を守らし光秀光春をして安土を守らしむ【洞嶺】河內光秀淀城に入る

秀吉使を光秀に送て山崎に會戰せんとす

秀吉光秀を擊んとす

尼崎に至り哀を擧ぐ

め、自、洞嶺に至り、十二日、遂に淀城に入る。秀吉使を遣し、光秀に告げて曰く「明日、山崎に會戰せ

ん」と。光秀之を諾し、乃、將士を聚む。其將齋藤利三、洞嶺に在り。諫めて曰く、「秀吉の大衆新に來る。其鋒甚鋭なり。戰、必利なからん。且に之を避け、退きて阪下に入りて、以て後圖を爲すに如かず」と。光秀怒りて曰く、「天下、右府を見ること我に敵せん。汝、速に來り戰へ。何ぞ藤吉を畏れんや」と。利三、已むことを得ずして、來り會す。遂に見兵一萬六千を以て、分ちて六隊と爲し、夜半、雨を冒して、桂川を渡りて山崎に至る。筒井順慶、大和の兵萬人を擧けて、洞嶺に軍して、其後援を爲す。黎明、秀吉、諸將を統べて至る。高山友祥、先鋒たり。中川清秀、池田信輝、丹羽長秀、織田信孝次を以て相屬す。兵各數千。秀吉、自、騎卒二萬を將ゐて、其後に居る。已にして兩軍皆陣す。秀吉、北、天王山を瞻み、指して左右に謂て曰く、「今日の戰、敵をして先此を獲しめば、吾が利に非ざるなり」と。言未だ畢らざるに、賊の旗幟登る。乃、堀尾吉晴に命じて、往きて之を奪はしむ。吉晴、聲に應じて起ち、單騎馳せて之を往けば則賊兵先上る者、已に千餘人なり。吉晴、其兵を顧るに、能く屬する者十五六騎、弓銃手二十人なり。進みて其後を蹂む。賊の弓銃、前に在り。用ゐる可からず。吉晴の全兵、堀秀政と、皆至り、大に呼びて奮擊す。賊兵、遂に山を棄てゝ走る。吉晴代りて之に陣す。友祥、先鋒となり、山崎の南門を闢して、他隊の先進するを聽さず。天王山の軍聲起るを聞き、乃、門を開きて進み、賊の左陣と大に戰ふ。殺傷相當る。清秀、阪を踰えて進む。賊の左陣進む能はず。信輝も亦、川を濟りて、其右陣を衝き、合擊して大に之を破り、其三將を斬る。洞嶺の軍、勝敗を觀望して、戰はずして走る。秀吉、北ぐるを追ひ直に光秀に逼る。光秀怒りて親戰はんと欲す。比田某、其馬を叩へて曰く、「敵鋒犯す可からず。請ふ、且勝龍城に入らん」と。光秀、惶惑して曰く、「勝龍安にか在る」と。比田、騎して前導す。我が兵前後に充塞す。比田等戰ひ且走り、纔に城に達するを得たり。閣に上りて望めば、則我が兵已に城を圍むこと數重なり。城兵稍散亡して、餘る所僅に百人、卽夜、光秀、十餘騎と圍を潰して北に出で、馳せて阪下に向ひ、小栗棲に至る。土兵四に起り、林中より槍を以て、其肋を

山崎
天王山
【勝龍城】山城長岡に在り
光秀土人に刺殺さる

刺す。馬より墜ちて死す。秀吉、旣に光秀の軍を破り、信長の屍を灰燼中に收めて之を殯し、進みて園城寺に陣す。「光秀の子光慶、龜山に在り」と聞き、兵を遣はして之を攻め、光慶を斬る。又從子の光春、安土に在りと聞き、堀秀政をして、萬人に將として之を伐たしむ。光春に大津に會す。擊ちて之を破る。光春、騎して湖水を渡り、阪下に入り、手づから光秀の妻孥を殺し、城を火きて自殺す。

齋藤利三も亦、捕はれて誅に伏す。而して光秀の首至る。秀吉、乃、捷を朝廷に奏し、光秀の首を京師に徇へて本能寺に梟す。信長の薨ぜし日を去る、十有三日なり。遂に留りて山崎の寶寺に幕し、支黨を誅し、降附を納る。是の時に當りて秀吉の威、畿內に震ふ。四方の兵士、山崎に來り聚る者、凡六七萬人、天子、其功、嘉し、詔して、從四位下に叙し、右近衞中將に任ぜらる。秀吉、辭して敢て拜せず。秀吉、信長の繼嗣未だ定らざるを以て、諸將、領と清洲に會す。議す、「信雄は北畠氏を冒し、信孝は神戶氏を冒す　皆信長の庶子なり。宜しく立つべからず」と。乃、會す。議す、「信雄は北畠氏を冒し、信孝は神戶氏を冒す　皆信長の庶子なり。宜しく立つべからず」と。乃、信忠の遺命を以て、其長子秀信を立てゝ嗣と爲し、安土に居らしむ。而して信雄之を攝す。柴田、丹羽、池田氏、羽柴氏と、更、吏を京師に置く。丹波の諸州を略定す。是に至りて、皆其有と爲る。則復、分地を受けず。諸將、乃、浮田秀家、及丹波の國主細川藤孝をして、之に附庸せしむ。長濱は秀吉の舊領たり。勝家、其南出の便地なるを以て、之を奪ふ。勝家の威望、諸將に最たり。號して鬼柴田と曰ふ、「是の日、踞りて酒を飲み、謾言を以て、秀吉に挑む。長秀吉の耳に附きて、語りて曰く、「子、國家を定めんと欲せば、卽勝家を斬れ」と。秀吉洒ひて笑へず。諸將、耳目の是に非ざるを視て、促して其宴を罷む。信雄は近江に歸り、信孝は美濃に歸り、勝家は越前に歸り、一益は伊勢に歸り、長秀は若狹に歸り、秀吉は、池田信輝と攝津に歸る。勝家、秀吉、長濱に在りと聞き、敢て北せず。秀吉　乃、義子秀勝を遣して、質となす　勝家拉して北に行き、尋いで還す。初め秀吉、長濱より姬路に徙り、未だ其家を移さず。本能寺の變に阿閉長之、京極高次、長濱を取りて、光

清洲會議
秀信
鬼柴田

秀に應ぜんと欲す。家皆亡けて、伊吹山に匿れて死す。是に於て、秀吉之を族し、高次を降して、光秀に從ふ。山崎に戰ひ、敗走し十一月、詔して從五位下に叙し、左近衞少將に任ぜらる。秀吉命を拜す。因りて信長の爵位を追贈せんことを請ふ。公族諸將に告げて、大德寺に葬る。來り會する者なし。秀吉、自ら喪主となり。弟秀長をして、卒萬人を帥ゐて之を監護せしむ。既にして三氏、皆其吏を罷め、一に秀吉決す。秀吉、又信雄と心を協せ、以て秀信を佐く。勝家、之を嫉み忌む。信孝も亦、信雄と權を爭ひて、相惡し。是に於し、信孝、遂に勝家一益　乃佐々成政、氏家行廣、稻葉通朝等と共に、秀吉及信雄が圖り、期を約して並び起らんとす。信雄、之を秀吉に謀る　秀吉曰く、「越前は雪多し。彼れ未だ兵を出す能はじ。請ふ、此時に及び、美濃を伐たん」と。乃ち池田、丹波、筒井、細川の諸將と、五萬人を合せて、岐阜を攻む。行廣、通朝、皆降る。信孝、伴りて和を乞ふ。丹羽長秀、之を贊す。和成る。秀吉、乃其質子を取りて、山崎に歸る。勝家、出でゝ之を援けんと欲すれども、雪に阻てられて出づる能はず。氷雪を視て輒憤怒す。乃、人を遣して長秀に說き、兵を連ねて西向せんとす。長秀肯ぜず。一益、書を以て勝家に教へて曰く、「伴りて和し、來歲、雪解くるに及び、其不意に出でゝ、之を夾み攻むるに若かず」と。前田利家等の五輩をして、山崎に來り、憾を釋き心を協せて、俱に幼主を輔けんと請はしむ。秀吉、之を許す。使者迎り報ず。勝家、兵備稍懈る。秀吉已に使者を遣し、左右に謂て曰く、「彼れ我を忘らしめて、來り襲はんと欲するのみ。吾れ且に其膽を破らん」と。十一月、兵を引きて長濱に至る。勝家の義子勝豐之を守る。勝豐、素より勝家と隙あり。秀吉、之を招き降して、復長濱を取る。一益城堡を築き、其糧仗を備へて以て、越前の衝路を扼ぐ。十二月、還り、秀信、及び諸將に獻遺す。勝家親む所の京畿に在る者に遇へば、故に之を仇視す。十一年正月朔、姬路より歸りて、士民を撫循し、賞を頒ち、酺を賜ふ。七日、京師に入朝し、遂に安土に至る。雪未だ解けざるに及びて、一益を取り、雪已に解くるに及びて、勝家に圖らんと議す。乃、内外の將

信長を大德寺に葬る
【三氏】柴田、丹羽、池田
勝家秀吉を圖る
秀吉岐阜を攻む

十一年

士を徵して、草津に會せしめ、兵七萬を部して三隊と爲し、三道より伊勢に入る　一益、長島に在り、分ちて諸城を拒ぐ。秀吉、兵を留めて之に備へ、而して進みて桑名に至る。火を城下に縱ち、退きて營を爲る。其衆、誡めて曰く、「瀧川も亦、兵に老いたる者、今夜必來らん」と。一益、其下に謂て曰く、「我れ已に兵を分つ。在る者は甚少し。寡を以て衆を擊つ、夜襲に如かず」と。卽や、兵を潛めて秀吉の陣に赴き、其備へあるを視て乃去る。閏月、秀吉、攻めて龜山を下して、之を信雄に納る。蒲生氏鄕、關萬鐵をして、嶺城を攻めしむ。嶺城未だ下らず、勝家、之を聞き、兵を發して南に出づ。二月、佐久間盛政をして、步騎二萬を將ゐて、出でゝ柳瀨に陣せしむ。前田利長、先鋒たり。火を關原に縱ちて退き、木本に陣す。秀吉、乃氏鄕以下の七將を留めて、一益に當りて、自諸軍を引きて柳瀨に赴く。自ら、老兵十餘騎と山に上り、北軍を望みて曰く、「是れ速戰を以て勝つべからざるなり」と。乃兵を勒して十三隊となし、湖山の形勢に據りて連珠の砦を築く。而して自長濱に屯す。三月、勝家、悉く兵を引きて柳瀨に至る。我兵、壁を堅くして出でず。丹羽長秀來りて之を助く。四月、信孝、復兵を擧げて、勝家一益に應ず。其十七日、秀吉、其軍を以て南し、信孝を攻めて、大垣に至る。盛政、進みて諸壘を擊たんと欲す。勝家許さず。是の時、柴田勝豐疾を養ひて京師に在り。其部下山路將監といふ者、叛きて北軍に降り、盛政の營に在り。衆中、盛政に謂て曰く、「聞く、神戶君、兵を擧げて我に應ず。而して秀吉、往きて之を擊つ。子、豈赴き援けざるを得んや」と。盛政曰く、「固よりなり　道路阻絕して、敵、其間に充塞す。我れ將に之を如何せん」と。將監、進みて其耳に附し、語げて曰く、「敵の諸壘皆固し、獨、中川清秀の壘、賤岳の麓に在り、我を去る最遠し。而して其備固からず。吾れ兵を潛めて之に趨り、其不意に出でば、必志を得ん。秀吉、大垣に在り、速に來ること能はじ。子急に擊ちて失ふ勿れ」と。盛政大に喜び、十九日、往きて勝家に告ぐ、勝家曰く、「可なり。我れ利家と留りて、諸壘に當らん。汝、則往きて擊て。擊ちて勝たば、速に還れ、愼みて留る勿れ」と。盛政、乃從弟勝政と、萬人を

秀吉伊勢を攻む
【柳瀨、木本】近江
佐久間盛政
信孝勝家一益に應ず
【神戶君】信孝
山路將監
【賤岳】近江

呂久河

【核山】近江

将ゐて、夜に乗じて余吾湖の東に至り、湖に循ひて馳せ、曉に北びて岳麓に至る。中川氏の卒、方に馬に湖を飲ふ。盛政の先鋒執へて之を斬る。其一人逃れ迄りて、急を告ぐ。清秀、高山友祥と、數千人を以つて出でゝ戰ふ。盛政其部將に謂ひ曰く、「長篠の戰に、鴉巢に火して捷ちたり。是れ倣ふ可きなり」と。人を遣はし、其壘下の營を燒かしむ。我が軍顧て敗る。友祥、走りて秀長に依る。秀長等惶急して、敢て援けず。清秀苦戰して終に死す。盛政既に勝ち、因りて留りて還らず。勝家、之を召し還す。盛政答ふるに、日傾き兵疲る。當に明を俟ちて還るべきを以てす。勝家曰く、「直路一里に過ぎず。何ぞ亟に還らざる」と。盛政笑ひて曰く、「老怯の過慮、何ぞ意と爲すに足らん」と。使者五反す。而して日已に暮る。是の時に當りて、秀吉岐阜を攻めんと欲して、大雨に逢ひ、呂久河漲りて未だ濟らず。午の時に報至る。秀吉、方に食す。使者に問ひて曰く、「盛政退くや、未だしや」と。秀吉、乃箸を投げて起ち、刀を抜きて踴躍し曰く、「吾れ大勝を得たり」と。卽ち駛卒五十人に命じて先往き、沿道の民を募りて曰く、「吾れ將に賤岳に赴かんとす。炬火して我を導き、酒食して我に餉せよ」と。遂に堀尾吉晴をして、留りて岐阜に當らしめ、自輕兵一萬五千を提げて、鞭を擧げて疾く馳す。藤川に及びて昏黑なり。山谷皆虛なり。餉者爭ひ至る。兵皆立ながら食ふ。秀吉行旦呼びて曰く、「其里閭を記せよ。吾れ將に凱旋の時、之を賞せん」と。北軍相驚き、曰く、「濃路の諸山、炬火多し、秀吉來れり」と。盛政大に駭き、將に闇に乘じて軍を抜きて北せんとす。適ゝ月已に出づ。我軍之を覩て、進みて其後に躡す。盛政、隊を留めて、之に殿せしめ、兵を引きて岳北に上りて陣す。勝政、麓に在り、之と合せんと欲す。而して金瓢の馬表已に岳南に在り。銃丸亂發す。勝政の兵、立どころに死する者二百餘人。其將稍く卻る。秀吉、左右を顧みて、兵を縱ちて之に乘ず。加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇阪安治、糟屋武則、片桐且元、先を爭ひて奮擊す。斬獲する所多し。諸軍從ひて進み、遂に大に之を破り、勝政を擒にし、進みて盛政に蹙り、又大に之を破る。斬首五千級。遂に進みて勝家に逼る。勝家、核山に在り。賤岳の軍、大に罵しきを聞きて、之を危む。已にして敗卒交

勝家戰死

信孝

賤岳七槍

近畿粗定まる

大阪城を築く

信雄秀吉を嫉む

十二年

【三將】岡田 津川 淺井

至る。勝家曰く。「盛政果して我が事を敗る」と。遂に北に走る。過りて前田利家を府中に見る。其馬を請ひて、馳せて北莊に入る。秀吉走るを追ひ、府中に至り、單騎城門を打つ。利家の俗字を連呼して曰く、「又左ゝ」と。利家、乃、出でゝ之を迎へ、其兵を以て從ふ。諸城、風を望みて解走す。旦日、秀吉北莊に至り、自、其後山に上り、堀秀政をして火を縱ちて城に迫らしむ。或人、盛政、及勝家の養子權六を縛し、麾下に獻ず。秀吉、之を城中に視す。勝家遂に自、燒殺す。秀吉、城中に火起るを見て、則兵を引きて北し、加賀、能登に徇へ、盡く之を下す。信孝、出走して自殺し、一益降る。是に於て秀吉還りて阪下に軍す。

六月、從四位下に叙し、參議に任ぜらる。

七月、大に戰功を賞す。北莊を丹羽長秀に、大垣を池田信輝に、澤山を堀秀政に、金山を森長可に予へ、近臣七人に秩各千石を賜ふ。世呼びて、賤岳の七槍と曰ふ。是に於て、近畿粗定まる。山陽、山陰の將士、來りて去歲の盟を尋ぐ。上杉氏、德川氏、皆使して戰捷を賀せしむ。

秀吉、天下に覇たるの志あり。謂ふに、阪は、北に大河を帶び、西に海水を控へ、地勢宏莊にして、以て七道を管攝すべしと。十一月、遂に十餘州の卒を起し。大阪に城き、成りてこれに徙る。信雄、秀吉の威權、日に隆なるを覩て、心平なる能はず。其私有るかを疑ふ。十二年三月、三將を殺し、秀吉と絕ちて阪下に三隘將あり。秀吉厚く之を遇す。信雄、德川氏に乞ふ。池田信輝、森長可、堀秀政、皆秀吉の爲に信雄を拒ぐ、信雄の將瀧川雄利、初め質を秀吉に送る。秀吉之を脇阪安治に屬す。是に於て、雄利、詐りて之を奪ひ還し、其邑上野に據る。安治怒り、從者二十人を以て伊賀に入り、夜、土兵を募り、上野城を襲ひて之を抜き、雄利を走らす。秀吉、安治を留めて伊賀を定めしむ。信輝、長可も亦犬山を抜きて之を守る。秀吉、尾藤知定を遣し、二人の軍を監せしめて曰く、「彼れ必勇を負みて浪に戰はん。汝往きて之を制せよ」と。遂に自將として東せんと欲す。會

小牧

南海盜起る、乃中村一氏等をして南面に當らしめ、浮田秀家を西面に當らしめ、丹羽長秀、前田利家を北面に當らしむ。而して自、將として東下し、犬山に至る。德川氏、北畠氏、兵を合せて小牧に陣す。壘を對して未だ戰はず。秀吉、書を遣りて戰ばんと請ふ。德川氏、肯ぜず。四月信輝、自、間道より參河を擣んと請ふ。乃之を許す。信輝、二婿秀政、長可を率ゐて以て往く。曰く、「親戚の軍に赴く、他の譏左なし」と。秀吉、乃三好秀次をして之を助けしむ。秀次は、秀吉の妹の子なり。發するに臨みて信輝を誡めて曰く、「宜しく速に篠木柏井に寨し、士兵を募り、火を東三河に縱つべし。敵を侮りて輕しく進み、勝を恃みて備へざる勿れ」と。既に之を遣り、自徒りて樂田に陣す。信輝、長可、進みて岩崎を拔く。或人走りて德川公に告ぐ。公、信雄と懈るを伺ひ、襲ひて長湫に擊ちて之を殺す。其將佐の曰く、「秀吉、軍機に敏し、今必來らん」と。乃、兵を收めて退く。秀吉、敗聞を得て、鈇を奮ひて起ちて曰く、「敵、次を亂して來る。吾れ迎へて疾く擊ちて、以て之を盡にす可し」と。急に精兵二萬を抽で、自、將として長湫に赴く。敵退きて小幡に入るを以てす。乃止む。令を下して曰く、「旦日、攻めて二帥を擒にせよ」と。參河の將士、爭ひて秀吉の陣を襲はんと請ふ。德川公、肯ぜずして曰く、「秀吉の勇略は世出にあらず。其れ狂れて之を輕ず可けんや」と。夜、退きて小牧に還る。秀吉も亦、樂田に還る。

長湫

五月諸將を留めて、兵を引きて、攻めて利井嶺、神戸、松島、竹鼻の諸城を拔く。

【二帥】德川氏、北畠氏

六月竹鼻を以て一柳直末に予ふ。森長可の弟忠政をして、兄の邑を襲がしむ。蒲生氏鄕を松島に封じ、十二萬石を食ましめ、傍近の諸城を統攝せしむ。秀吉、自、大垣に陣し、伊勢尾張の間に往來して、諸城砦を修す。脇阪安治を遣して志摩を徇へしめ、兵を引きて、攻めて利井嶺、神戸、松島、竹鼻の諸城を拔く。ひ、志摩を以て九鬼嘉隆に賜ふ。

大垣

十月羽津に陣す。信雄、桑名に陣す。其君臣、內に相猜疑し、軍中數驚く。秀吉乃富田知信、津田信季に謂て曰く、「我れ先君の爲に仇を復し、務めて國家を鎭定す。而るに諸郎、細說を聽きて、遽に我を誅せんと欲す。我れ己むことを得ずして、起ちて之を較ふ。神戸君既に良死せず。我れ今に至りてこれを悼む。我が爲に北畠君に謝せよ。盍ぞ細故を捐てゝ、富貴を與共にせざる」と。二人往きて之を信雄に告ぐ。信雄之を許す。矢田河原に相見て、和成る。

末森城

秀吉の東するや南海の盜數岸和田を攻む。土佐の國主長曾我部元親、四國を略定し兵を發して之を援けて、大阪を窺ふ。中村一氏、岸和田を守り、擊ちて之を卻く。佐々成政、又越中を以て北畠氏に應じ、兵萬餘を將ゐて末森城を攻む。德川公使をして之を賀せしむ。尋いで其子秀康を送りて質と爲す。城將奧村永富、其妻と、士卒を獎勵して固く守る。利家赴き救ひ、大に成政を破る。成政援を德川公に求む。

十三年

十三年二月、正二位に進み、內大臣に陞る。是に於て、兵を南海北陸に用ゐんと議し、先南海を定めんと欲す。南海の賊根來、雜賀、最强し。羽柴氏の且に來らんとするを聞きて、三寨を千石濠に築き、銳を盡して之を守る。

根來寺を燒く

三月、秀吉、五十萬を將ゐて南伐し、根來寺を指す。寨兵弓銃を以て、秀次をして三寨に備へしめて、直に根來を要す。秀次、騎を縱ちて傍より擊ち、遂に兵を合せて寨を圍む。我が軍、火箭を發し、賊の硝櫃に中つ賊悉く焚死す。諸寨、皆解走す。秀吉、則、生兵六萬を以て、急に根來を襲ひ之を燒き、遂に攻めて雜賀を下す。紀伊川を引きて、大田の壘に灌ぎ其魁首五十人を磔す。進みて熊野高野を下し、諸關寨を撤す。

紀伊和泉近江を定む

紀伊、和泉を以て秀長に加賜し、近江を以て秀次に賜ふ。

四月、大阪に歸る。秀吉遂に書を以て之を賀を下す。

四國を攻む

秀長秀次をして舟師六萬を以て、往きて之を討たしむ。阿波より入る。又浮田秀家を讃岐より、小早川隆景を伊豫よりして、並に元親を攻めしむ。元親、兵を將ゐて羽津に拒ぐ。秀次は和氣を攻め、秀長は

南海定まる

秀吉關白と爲る

豐臣氏と稱す

五人を置きて政令を掌らしむ

【水口】近江

豐臣氏歲入

一宮を攻め、皆之を降し、合して木津を攻め、又之を降す。諸城解走す。仙石秀久、前に封を淡路に受く。七月、其兵を以て屋島を拔く　秀家、隆景も亦、數城を陷る。諸軍、期を刻して、羽津に萃る。元親、乃降を乞ひ、質を送りて、遂に入朝す。秀吉讓めて曰く、「來ること何ぞ晚き」と。乃、其三國を奪ふ。阿波を蜂須賀家政に、讃岐を仙石秀久、十河存保に、伊豫を小早川隆景、來島康親に賜ひ、伊豫の正木を以て加藤嘉明に賜ひ、淡路の洲本を以て脇阪安治に賜ふ。南海盡く定まる。

初め秀吉、微賤より起り、姓氏なし。始に平氏を稱し、中ごろ藤原氏を稱す。是に於て、征夷大將軍たらんと欲す。右大臣藤原晴季、素より秀吉と善し。之が爲に謀りて曰く、「故事に、大將軍は源氏に非ずば不可なり。公は藤原氏を稱す。宜しく關白と爲るべし」と。秀吉曰く、「關白は何物ぞ」と。晴季曰く、「位、天子に亞ぎ、百官を統御す」と。秀吉大に喜ぶ。時に藤原昭實、關白たり。晴季、諷して其官を辭せしめ、秀吉を以て之に代らしむ。朝廷其意に違ふことを重しとして、遂に詔して之を許す。秀吉、馬從を具へ、入朝して恩を謝し、奏請して子弟將士に授くるに官爵を以てす。秀吉、他姓を冒すを羞ぢ、請ひて新姓を賜はり。豐臣と曰ふ。吏五人を置きて、政令を奉行せしむ、淺野長政、石田三成、增田長盛、諸〻の訟獄を掌り、長束正家錢穀を掌り、前田玄以、僧祝を掌る。長政は彈正少弼に任ぜられ、後甲斐に封ぜらる。玄以は德善院と稱し、法印に任ぜらる。嘗て織田氏の吏たり。後篠山に封ぜらる。正家は大藏少輔に任ぜらる。嘗て丹羽氏の吏たり。後水口に封ぜらる。三成は治部少輔に任ぜられ、後澤山に封ぜらる。秀吉、五人を戒めて曰く、「大事は會議して之を決し、小事は必ずしも然らず。留滯あらしむること勿れ。贈賄を納るゝこと勿れ。恩仇を挾むこと勿れ。訟獄の事は、貧富貴賤となく、一切事に從へ」と。是の時に當りて、豐臣氏の歲入二百萬石、府庫之に稱ふ。曰く、「吾れ獨、自封殖すべからず」と。遂に令を下して金五千枚、銀三萬枚を諸將士に分ち、其軍費を償ふ。場を京師の第門に設け、一日に悉く之を散ず。

北伐す

飛罰を略し信濃を降す

【二城】內城外城

八月、自　騎兵十萬に將として北伐す。北畠信雄は尾張、伊勢の兵を以て、前田利家は能登、加賀の兵を以て皆これに會す。佐々成政、富山に據り、三十餘壘を栗穀嶺に築く。秀吉、疑兵を張りて之に當て、而して海に航して直に富山を襲ふ。成政、惶駭し、髮を削り出でゝ降る。乃越中を利家の子利長に加賜す。丹羽氏罪あるを以て、越前を奪ひ、其半を割きて、堀秀政に予ふ。村上、溝口の二氏をして之に屬せしめ、以て北陸を鎭せしむ。而して越後の國主上杉景勝未だ來らず。秀吉既に成政に勝ちて、則石田三成等の十餘騎と險を踰えて直に越後に入り、其彊上の吏に謂て曰く、「吾は秀吉なり。汝が主已に使を我に通ず。我れ故に來り見て、事を面議せんと欲す」と。吏、使を馳せて景勝に告ぐ。景勝大に驚きて遂に盟ふ。秀吉左右を屏けて與に語る。既に畢りて西に還る。金森長近をして飛驒を略せしめ、其國司姉小路賴綱を攻めて之を滅す。因りて長近を封ず。是より先、信濃の豪族眞田昌幸、來りて款を送る。子の幸村を納れて質と爲す。昌幸、父の幸隆より武田氏に屬す。武田氏の亡ぶに及びて、德川氏に屬して、上田を領し、北條氏を攻めて沼田を取る。德川氏、北條氏と婚し、昌幸をして沼田を還致せしむ。答へて曰く、「公の賜ふ所の上田は掌大の地のみ。沼田に至りては、我れ吾が兵力を以て之を取る。焉ぞ他人に予ふるを得んや」と。德川公怒り、步騎七千を率ゐて來り攻む。閏月、上杉景勝、秀吉の旨を以て昌幸を援く、昌幸、之を內城に延きて、自、兵を發して贏卒を出して敵を誘ふ。敵、進みて城に入る。外城に居り、柵を城內に植てゝ、兵を城外に伏せ、而して贏卒を以て之を破る。敵走り出づる時、伏起りて又之を破る。昌幸の子柵內より銃を發す。敵陣亂る。二城夾み擊ちて之を破る。信幸も亦、北條氏の兵を沼田に迎へ擊ちて之を破る。小笠原貞慶も亦、昌幸に因りて款を送り。景勝と、並に豐臣氏に連衡して、以て關東を圖る。德川氏、北畠氏、北條氏、惧れて從を約す。

九月、景勝、自將として來り援く。敵軍退き去る。

十一月、德川氏の將石川數正來奔す。其國大に擾る。秀吉、乃信雄に謂て曰く、「吾れ既に中州を定む。東西未だ服せず。近日將に西伐せんとす。宜しく先德川氏と和して以て北條を拒ぐべきなり。子我が爲に之を

圖れ」と。信雄、乃ち二者を遣して德川公を諭す。公、其變あらんことを恐れて、敢て來らず。是の歲、毛利氏、小早川隆景、吉川元長を遣し大阪に來らしむ。元長は元春の子なり。秀吉、善く之を待す。曰く「天主閣新に成る　當に卿等をして一觀せしむべし」と。乃ち自ら一侍女を從へて。隆景、元長、及び其從者數十人を導きて閣に上り、遠近の山海を指示す。因りて元長に謂て曰く「吾れ乃叔に予ふるに伊豫を以てす。乃翁には未だ予ふる所あらず　吾れ數乃翁と兵を治す。常に相見て往日の戰略を談せざるを恨む。明年吾れ將に九州を伐たんとす。乃翁を煩して先鋒と爲さん。平がば之に筑前を予へん」と。

【乃叔】隆景

【乃翁】元春

十四年聚樂邸成る　方廣寺を建つ

十四年二月、內野の第成る。名を聚樂と命ず。秀吉將に天子の幸を請ひ、諸侯を率ゐて之に朝せんとす。是の歲、又方廣寺を建て木を以て大佛を造る。高さ十六丈。卒數萬人を興し、四方の工人　盡く集る。

四月、其妹を以て德川公に妻す。

五月、上杉、景勝、入りて覲ゆ。是より先、豐後の國主大友義鎭も亦、入りて覲ゆ。始め島津義久、薩摩より起り、薙に九國を食む。義鎭、肥前の國主龍造寺政家と歲々其兵を被る。並に援を秀吉に乞ふ。窟の城主高橋鎭種、立花の城主戸次宗茂、皆來りて款を送る　是に於て、秀吉將に西伐せんとす。敎を列國に下し、並に固守して以て俟たしむ。

西伐せんとす【敎】主將の命令

七月、義久、弟義弘、家久を遣して二筑を略し、秋月氏、筑紫氏を降し、乃ち鎭種を攻む、鎭種、自殺す。宗茂固く守り　使を來らせて急を告ぐ。秀吉、乃ち、黑田孝高を遣し、毛利輝元、吉川元春、小早川隆景を趣す。

書を島津氏に送る

義久怒る

九月、又加藤嘉明、脇阪安治を遣し、長曾我部元親、十河存保を趣す。皆兵を發して西向す。遂に書を義久に遺りて曰く「關白問ふ　何を以て朝貢せざる。何を以て座ながら官爵を取る　何ぞ縱に兵を出して、隣國を攻略するか」と。仙石秀久をして、書を齎して往かしむ。因りて秀久を誡めて曰く「彼れ若し服せずば、且く與に戰ふ勿れ。退きて以て我を俟て」と。秀久至る。義久、書を地に投じて曰く「我が族、此に國するこ

と十四世。朝貢を促すものは、獨近衞氏あり。猴冠者敢て我を屈致せんと欲するか」と。秀久憤恚し、大友氏の兵を以て、進みて家久を擊つ。元親、存保之に從ふ。元親の子、信親、存保と皆敗死す。元親は伊豫に走り、秀久は豐後に走る。嘉明、安治、力戰して退く。義久、遂に大擧して豐後に入り、十六城を下す。大友義鎭、既に死す。其子義統出で戰ひて大に敗る。事聞ゆ。秀吉、怒りて秀久の邑を奪ひ、之を尾藤知定に予ふ。終に西伐を議し、益德川公の入朝を促す。

大廳【女】德川氏夫人

十月、公、萬餘人を從へて發す。秀吉の母を大廳と曰ふ。往きて女を岡崎に問ひ、以て其國人を安ず。德川公京師に至る。秀吉數人を從へ、其館に就きて手を握りて款語す。遂に酒を呼びて其諸將を召し、小牧の戰を談じ、歡を盡して出づ。

後陽成天皇

十一月、德川公、入りて聚樂第に謁し、禮を畢りて去る。是より先、皇太子、猶ほ孫に禪る。皇太孫　位に卽く。是を後陽成天皇と爲す。

秀吉太政大臣となる

十二月、天皇、詔して秀吉を以て太政大臣となす。關白職、故の如し。是に於て、秀吉奏請して曰く「臣島津義久の入朝を徵すに、義久命を奉ぜず。臣請ふ、自ら將として之を伐たん」と。乃ち、越中、尾張以西三十七國に令して兵を發し、明年二月を以て大阪に會せしむ。石田三成、大谷吉隆、長束正家に命じて、糧餉を掌らしめ、小西隆祐、建部壽德をして漕運を掌らしめ、先小倉に赴き、三十萬人の糧　二萬匹の馬芻を具へ、一歲を支ふ可くあらしむ。

西伐準備

十五年

十五年二月、兵の大阪に會する者十五萬人。秀吉、令を下して鹵掠を禁じ、鬪諍を止め、又吏を沿道の驛舍に置き、軍行をして寸滯なからしむ。乃ち秀長を遣し、前軍に將として先發せしむ。

西伐の途につく

三月朔、藤吉、白、諸軍に將として京師を發し、水陸俱に下る。義久、旣に大友義統を逐ひて、豐後の府內に居り、兵を發して四出す。豐臣氏の前軍、豐前に至ると聞きて、乃ち家久をして耳川を守らしめ、兵を引きて退く。秀長、耳川に至る。諸將先濟る。家久、夜、南條、宮部氏の營を襲ふ。南條敗れ、宮部、擊ちて

（秀吉水陸の兵を發して西伐する圖）

【馬岳】豊後

【小熊高良山】筑前

【合子】肥前

守る。秀吉、兵艦を以て之を攻む。忠元等、夜遁を誅す。苟も鏖殺を期せば、勢不可なる所あらん。

之を卻く。明日、秀長乃濟る。敵遂に退きて高城を保つ。既にして又退く。二十五日、秀吉、赤間關に至る。增田長盛を留めて、關戸城を守らしめ、丸尾某、城戸某をして、門司城を守らしめ、國人の質子を徵し、海を濟りて豐前に入る。二十八日、馬岳に陣し、兵を分ちて並び進む。時に秋月種實、島津氏の兵を招き、岩石城に據り。城、豐前、筑前の間に跨り險固を以て聞ゆ。秀吉、義子秀勝を遣して之を攻め、蒲生氏鄕、前田利長をして、之を輔けしめ、自、麾下を以て杉原山に登る。四月、氏鄕、其南を攻め、利長、其北を攻む。城兵能く拒ぐ。氏鄕、先其郛に入る。秀吉、山上より其徽號を望見し、自、其袍を脫し、人をして齎し馳せて之を賜ひて曰く、「此を被て以て內城に登れ」と。氏鄕、感激して、身、士卒に先だつ。風、大に起るに逢ひ、火を縱ちて城を焚く。城卽陷る。秀吉乃進みて、小熊に至る。種實遁れ去る。子種長をして、城を以て降らしむ。秀吉、悉く其地を收め、進みて高良山に軍す。龍造寺政家、肥前の兵を以て來り會す。肥後の諸城、皆解走す。薩摩の曉將新納忠元、伊集院忠棟、合子城を守る。走りて八代を保ち島津征久と兵を合せて堅く守る。秀吉、其城に入りて諸將に謂て曰く「吾れ僻遠の國を征し、且に吾が俠を見さん。宜しく優容に從ひて、速に大功を成すべし」と。乃衢路に榜して曰く、「名門故家の敵に脅從する者、及豪俠の大盜を聚め黨を結ぶ者、一切皆宥し、其自新するを聽す」と。令始めて下る。軍門、市の如し。秀吉、進みて薩摩に入り、島津忠良を降す。五月、進みて千代河に至る。河は海港に接す、先に發せし所の漕船盡く〻に湊る。乃、水軍の將加藤嘉明、脇阪安治、九鬼嘉隆に命じ、浮梁を造りて軍を濟し牙を太平寺に建て、軍營を環布し、池澤を塡め、丘阜を夷ぐること方二里餘、中に門巷を開き。縱橫四達す。遠近、風を望みて潰ゆ。乃水軍の三將を遣して、桂忠昉を平佐に攻めしむ。脇阪安治、先登す。忠昉降る。是に於て、秀長、日向の故主伊東祐丘を以て、先鋒と為し、五萬人を以て日向より入る。前田利家、淺野彈定、龍造寺政家等を以て先鋒とし、五萬人を以て大隅より入る。家久、佐土原を以て降る。義弘、退きて求麑に陣す。諸軍、合して南下して、鹿兒島に臨む。島津の將佐、交義久に請はんと勸む。乃、伊集院忠棟を遣し、秀長に因りて罪を謝す 秀吉曰く「吾れ初め不廷の臣を誅し、遺類無からしめんと欲す。吾れ聞く、島津氏は、源右大將の遠裔なりと。四百歲の名族を、一日にして之を滅すは、吾も亦忍びざるなり。其れ之を宥さん」と。義久、大に喜び、髮を削り、僧衣を被て、近臣五六人を從へ、太平寺に詣りて降る。秀吉、延見し、溫言を以て之を慰藉し、命ずるに義弘を以て嗣と爲さしむ。琉球國、使を馳せて貢獻を修む。

進みて薩摩に入る

忠良降る

千代河

家久降る

【佐土原】日向

鹿兒島に入る

大に將士の功を論ず

六月、凱旋して太宰府に至り、盡く九州の質子を收め、大に功罪を論ず。島津氏をして故士に因りて薩摩、大隅、日向を領せしめ、其侵地を削りて、肥後を佐々成政に、筑前を小早川隆景に、豐前を黑田孝高、森勝信に、筑前を毛利秀包、立花宗茂に賜ふ。而して大友義統、高橋統增、伊東祐丘、龍造寺政家は、皆舊領に復し。差增損あり。政家の族鍋島直茂をして、國事を攝せしむ。政家、夭するに及び、乃直茂を立つ。耳川の事、尾藤知定、秀長をして、卽救はざらしめたり、因りて其讁岐を奪ふ。後以て生駒親正に賜ふ。丹羽長重、軍法を犯せり。因りて其若狹を奪ひ、之を淺野氏に賜ふ。阿蘇大宮司の邑を削り、彦山の僧徒を律す。大村氏、私に西蠻の妖賊を舍せり。因りて其長崎の邑を奪ひ、賊二十餘人を邑中に磔し、鍋島氏をして外國

西海の改令を修む

佐々成政

加藤清正
小西行長

十六年

聚樂行幸

の互市を監せしむ。天主教を禁じ、遂に大に西海の政令を修む。

七月、京師に復命す。天皇、使を遣して之を郊勞す。

八月、德川公、自來りて戰捷を賀す。是の歲、西海の諸侯、皆國に就く。秀吉、成政を誡む、「善く土豪を待し、國民を撫す勿れ」と。成政敎に違ふ。土民叛く。年を踰えて粗定まる　秀吉、之を讓めて死を賜ひ、肥後を以て加藤清正、小西行長に分賜す。清正は主計頭と爲り、行長は攝津守となる。行長は卽ち瀨九郎なり。秀吉、二人に謂て曰く、「他日、將に以て汝を用ゐること有らんとす」と。

十六年六月、秀吉遂に奏して臨幸を乞ふ。時に大亂の後を承け、典籍殘亡せり。乃、前田玄以をして、公卿と雜議せしめ、足利義滿、養敎の故事を用ゐる。

四月十四日、天皇、聚樂の第に幸す。關白秀吉、文武の百官を率ゐて扈從す。扈從は、蓋し新典なり。遠近縱觀す。父老或は流涕するものあり。曰く、「吾が濟行幸の儀ありと聞くこと久し。今親しく覩るを得たり」と。卽日、享禮を行ひ、伶人をして、五常、太平の諸樂を奏せしむ。明日、秀吉、早に盛服して出で、御座の右に侍し、盡く天下の牧伯を召して、前に列せしむ。內大臣信雄、大納言家康、大納言秀長、中納言秀次、左近衞中將秀家、右近衞少將利家、侍從元親、侍從義統、以下次を以て進み、盟ひて曰く、「皇恩を奉戴し、力を王事に竭し、敢て怠ること有る勿し。皇家の邑、敢て侵すこと或る勿し。犯す者あらば、相共に之を誅責し、子孫を戒勵し、敢て渝ること或る勿し。關白の令する所は、事大小となく、敢て奉ぜざること或る勿し。斯盟に違ふ所の者は、六十六州の神祇、大に之を罰殛し、其家國を覆し、能く其祿を享くること莫らしめん」と　明日、諸牧伯を宴す。天皇、歌を賜ふ。關白以下、皆之に繼ぐ。車駕、駐ること五日にして、宮に還り給ふ。秀吉、京師の戶稅を以て供御に奉じ、其戶租を以て上皇の湯沐の邑と爲す。近江の高島郡を以て、廷臣の采田に充つ。凡て金帛珍寶の獻、前後算なし。

九月、毛利氏を謁し、其出雲、伯耆を割きて、族の吉川廣家に予へしむ。廣家は元春の子元長の弟なり。

北野茗燕【茗燕】茶會
十七年

北條氏政を鹽す

聚樂行幸之圖

十月、大に茗燕を北野に張る。

十七年五月、復、金銀各三十六萬五千兩を、文武の百官に分つ。是の時、秀吉の威令、幾ど天下に遍し。東北の豪傑佐竹、里見、結城、那須、岩城、葦名、松前の諸族、爭ひて使幣を修む。秀吉、其私鬪を禁じて、之を朝覲せしむ。而して、獨北條氏政は、關東八州に據り、伊達政宗は、陸奧、出羽に據りて、降るを肯ぜず。天子、聚樂に幸するの次月、秀吉、富田知信、津田信孝を遣し、相模に赴き、氏政を諭さしめて曰く、「吾子、五世の勢に席り、擅に八州を保ちて朝貢を修めず。不義なり。今、天子、新に立つ天下嚮歸せざるものなし。吾子、宜しく速に入りて覲ゆべし」と。氏政の子氏直と議して、敢て堅對せず。

八月、氏政使をして、來り請はしめて曰く、「眞田昌幸、我が沼田を取る。請ふ、昌幸をして之を返さしめよ。然る後に朝せん」と。諸將皆怒りて曰く、「氏政亡狀なり。請ふ。兵を發して之を討たん」と。秀吉曰く、「未だし」と。是の年七月、復信、信季をして、昌幸に就きて之を諭さしむ　昌幸、命を奉じて、沼田を北條氏に致す。是に於て、二使遂に小田原に往き、其入朝を趣して曰く、「朝せざれば罰あり」と。氏政、其親族、將領と議して曰く、「我と彼と相距ること遼遠なり。彼れ何ぞ輒來らん。且彼れ特に能く畿內西國を服するのみ。古稱す。關八州は天

氏政秀吉の命に從はず

下に敵すべしと。且箱根は天險なり。彼れ果して來らんか、我れ八州の勁兵を以て、諸を箱根に要せば、彼れ何ぞ能く爲さん。在昔、平氏大軍を發し、來りて、源氏を攻む。富士川に至りて、鵝鴨の起つを聞きて、遂に恠怦して潰ゆ。闘白も、亦、此の如きのみ」と。乃、使者を禮せず。使者潛に其言を聞き、歸りて秀吉に報ず。秀吉怒りて曰く「氏政、吾を以て平維盛に比するか。吾れ將に吾が技倆を之に示さんとす」と。徳川公、數、氏政に入朝を勸むれど肯ぜず。是の歳、伊達政宗、葦名城を滅して、會津の四郡を併せ、一階堂氏を滅し、仙道の七郡を併す。佐竹、岩城の諸族、これを討ちて、みな敗る。秀吉、使をして政宗を責讓せしめ、其入朝を命ず。政宗亦肯ぜず。

秀吉怒り氏政を伐んとす

伊達政宗

十月、眞田昌幸、來り告げて曰く「沼田に那胡桃城あり。臣が墳墓の地たり。北條氏の將、沼田を守る者、遂に之を取らんと欲す。臣曰く、『殿下命じて沼田を致さしむれども、未だ那胡桃を致すを聞かざるなり』と。彼れ聽かずして遂に之を攻取す。敢て告ぐ」と。秀吉、大に怒り、遂に奏して氏政を討たんと請ふ。氏政の使者石巻康昌、京師に在り。惧れて之を陳謝す。秀吉聽かず。康昌を相摸に押送し、書を氏政に遣りて、之を絶ちて曰く「秀吉、微賤より起り、先右府の爲に拔擢せられ、攻城野戰して、功を弓馬の間に立つ。既に變故に遇ひ、兵を提げて東上し、逆臣を誅夷し、以て右府の恩眷に答ふ。遂に太政の任を忝くす。天子を佐けて、以て亂逆を定む。叛く者は伐ち、服する者は撫づ。七道の豪傑、我が麾する所に從はざる者はなし。汝氏政、險を負み力を恃みて、敢て朝貢を修めず。秀吉、之を恥づ。乃の城地を修め、乃の甲兵を勵ませよ。明年、吾れ將に王節を操りて諸軍を率ゐ、以て汝氏政の罪を正さんとす」と。書、相摸に至る。氏政以て意と爲さずして曰く「彼れ脅聲を以て、我を虚さんと欲すのみ。小擧せば則ち力少からん。是れ與し易きのみ」と。秀吉、遂に駿河、越後、以西の四十五國に令して、兵を發し、明年三月を以て、京師に會せしむ。其京師に遠き者は、便道より直に關東に赴かしむ。長束正家に命じ

氏政に檄す【先右府】信長

氏政意とせず【王節】節刀

秀吉迷信を破る

て粟二十萬石を運びて駿河に至らしむ。又金一萬枚を出して、海道の諸國に糴せしむ。時に海路久しく絶え、民みな風濤の險を憚れて曰く「海龍王、祟を爲さん」と。秀吉笑ひて曰く「吾れ王命を受けて不庭を討つに、何物の龍王ぞ、敢て我を沮むを得んや」と。楫を作りて之を援け、海に投じて進む。水軍の三將をして長曾我部元親と、糧艘を護りて、以て東せしむ。十二月、徳川公、來りて約束を乞ふ。氏直、公に因りて罪を謝し、入朝せんと請ふ。秀吉許さず。是に於て、徳川公以下の將帥を會す。關東の地圖を開きて、指畫部署す。眞田昌幸、素より徳川公と悪し。時に下座に在りて圖を窺ふことを得ず。秀吉呼びて、之を前めて曰く「吾れ家康を以て、海道の先鋒となし、汝を以て山道の先鋒と爲す。」と。昌幸、感喜す。退きて人に謂ひ曰く「殿下の一言を得たるは、百萬の封を得るに多る」と。

十八年

秀忠

秀吉之に姓を羽柴氏、名を秀忠と賜ひ、之を遣歸して、十八年正月、徳川公、其嗣子を送り、質となす。秀吉曰く「卿、其氏直と姻あるを以てせるか。吾れ何ぞ卿を疑はんや」と。徳川公乃海道の諸城を空しくし、道を除して供帳して以て待つ。二月、秀吉、毛利輝元を召して、京師を守らしめ、弟秀長に大阪を守らしめ、徳川、北畠、前田、上杉の諸將をして、其兵を以て先發せしむ。三月朔、自、戎服して、入朝し、節刀を陛下に受け、拜辭して起ち、闕を出で馬に上り、騎卒十七萬を率ゐて東す。部伍清肅し、鎧仗鮮明なり、士民をして之を縱觀せしむ。氏政、盡く八州の城主を召して、小田原に集め、親信の將帥を遣して、箱根の諸城を拒ぎ、兵數萬を以て其後を守らしむ。二十七日、秀吉、沼津に至る。明日、自、山に上り、敵の城寨を候ひ視て、卽夜、令を下して、秀次に五萬を以て山中を攻め、信雄に三萬を以て韮山を攻め、而して徳川公に二萬五千を以て、直に箱根を蹑えしむ。明日、諸將、孽食して並に發す。秀次、中村一氏を以て先鋒となし、陣を徙して城に近づかしむ。城上の銃丸雨の如く注ぐ。一柳直末之に死す。一氏衆を勵まし、攻めて其郛を破り、敵將間宮好高を斬り、進みて內城に薄る。其騎士渡邊了、堞を攀ぢて上る。秀次、乃軍を麾きて、齊しく登り、城將北條氏勝を走らす。信雄も亦韮山の

【陛下】闕の階下京師を發して小田原に向ふ

郭を破る。德川公、三城を陷れ、酒匂に至る。戊兵皆潰ゆ。

四月、秀吉、將軍を率ゐて、小田原に抵り、牙を石垣山に建て、夜、萬竿に令して、城を築かしめ、紙を壁に糊す。之を望むに壘の如し。城兵驚き、以て神となす。秀吉、德川公を携へて城樓に上り、下し視て曰く、「關八州は我が目中に在り、日ならずして取りて、以て卿に予へんのみ」と。德川公、拜して曰く、「幸甚」と。秀吉、其耳に附して語りて曰く、「卿も亦小田原に居るか」と。曰く、「然り」と。秀吉曰く、「不可なり。我れ嘗て地圖を見るに、此より遙に東、二十里可に地あり。江戸と云ふ。河海を襟帶し、地濶く、土肥えたり。卿宜しく此に居るべし」と。德川公曰く、「謹みて教を奉ぜん」と。是に於て、諸軍に令して「城を圍ましむること數重なり。水軍の將士、又沿海の諸城を破りて來り會す。上杉景勝、前田利家、北陸の兵三萬を率ゐ、眞田昌幸を以て先鋒とし、上野に入る。大道寺政繁、松枝を以て降り、導きて武藏に入り、七城を下し、鉢形を攻む。秀吉、淺野彈正少弼、木村常陸介を遣して、之を助けしむ。二將、別に武藏を徇へて岩槻を攻む。清野氏の嗣幸長、左京太夫と稱す。甫めて十五なり、先登して遂に之を拔く。二將、遂に上野を徇へ、二總、安房に至る。一月に六十餘城を下す。而して小田原、固く守りて下らず。流言あり、曰く「德川織田、款を城中に通ず」と。衆情疑懼す。秀吉、卽ち、近臣數人か從へ、信雄と俱に德川氏の營に飲む。明日、德川公と具に、織田氏の營に飲む。衆の疑卽ち釋く。遂に諸軍に令して、戰を休めて、長圍を築き、更番遊息し、海道の妓樂を徵し、酒を置きて高會す。秀吉、德川公以下と、歌詞を造りて之を被ふ。讙呼、晝夜を連ね、以て擾久の意を示す。城兵大に困しむ。德川公初め、大衆久しく屯し、穀價必騰るを度り、私に其吏に命じて多く糧餉を蓄ふ。已にして長東正家、漕轉を掌り米粟狼戾す。乃ち秀吉の善く人を用ゐるに服するなり。是の時に當りて、豐臣氏の軍、城を環りて陣する者、幾二十萬、山陵林麓兵に非る者莫し。關以東風を望みて降り附く。相馬、秋田、南部、津輕の諸族、或は謁を軍門に執り、或は使をして、弊を納れしめ、項背相望む。伊達政宗、人をして形勢を覘はしむ。還り報ず。則大に惧れ、乃背て使弊を修め、

江戸

流言

長圍を築きて城を攻む

德川氏に就きて降を乞ふ。德川公使者を戒めて曰く、「亟かに來り謁せざる可からず」と。六月、政宗、百餘騎と下野に入る、路塞りて通ることを得ず。還りて越後、信濃に由り、「間行して箱根に至り、秀吉に謁せんと之ふ。秀吉、謁者に問ひて曰く、「政宗の狀貌如何」と。曰く、「齡二十歲可、眇にして髮を被り、奇偉なる甚し」と。秀吉、輒く見ゆるを許さず。人をして之を詰責せしめて曰く、「吾れ王命を受け、天下を經略す。遐方絕域の人と雖、來り歸せざる莫し。汝、東北に屈強し、兵數萬を擁し、未だ嘗て一介の使を發せず。而るに汝、擅に之を攻む。是何の故ぞ」と。政宗答へて曰く、「義廣、臣の叛將を納れ、佐竹、岩城に結びて、以て臣を滅さんと圖る。臣、二本松氏を討ちて、以て父の仇を報ぜんと欲するに、又義廣の爲に拒がる。故に臣、日夜攻擊して、終に之に克つことを得たり。臣、敵中に在りて、四方の事を知らず。殿下の東伐に及びて、然して後、天下に歸する所あるを知るなり。是を以て來り謁す」と。秀吉、又之に言はしめて曰く、「汝の陳ずる所、果して僞なくば、則盡く犯したる所の會津、仙道の地を獻ぜよ。不らずば、則亟に汝の國に歸り、徐ろに守備を修めよ。吾れ北條氏を討滅し、然る後、汝を我馬の間に見ん」と。政宗曰く、「臣が生死、唯殿下の命のままなり。況や邑土をや」と。其侵地を致して、乃入りて見ゆ。秀吉、便眼して坐し、之を慰勞して問ひて曰く、「卿、陸奧に在りて、幾戰せしぞ」と。曰く、「三十餘戰」と。秀吉曰く、「是れ村巷の小鬪のみ、意ふに未だ大兵を部勒する法を知らざらん」と。因りて起ちて政宗を引き、出でゝ廣壑を下臨す。秀吉、前に在りて指示して曰く、「彼は畿內の軍なり。彼は阪以西の軍なり。彼は海道の軍なり」と。政宗、唯々、敢て仰ぎ視る莫し。既に罷めて遣歸す。諸將、交之を留めて遣らざるを勸む。曰く、「之を遣るは是れ猶虎を野に縱つが如きのみ」と。秀吉哂ひて曰く、「吾れ兵を用ゐずして、五十四郡を取る。汝が輩の知る所に非ず」と。政宗退き、人に謂て曰く、「關白は天威なり」と。潛に去りて國に往く。石田三成、大谷吉隆、長束正家等、是に於て、館林を攻め降し、遂に忍城を攻む。城將成田長康、小田原に在り。其兵、留守して下らず。秀吉、彈正小弼父子をして、助

政宗來降る

政宗の辯疏

政宗の膽を挫く

關白は天威なり

景勝利家降り來る

將士逃れ降る者相踵ぐ

禍福を以て氏政を說く氏直出でゝ降る

家康信雄諸將を賞す

氏政自盡す

功罪を論ず

蒲生氏鄕

秀吉中邑に入る

東國定まる

け攻めしめて、終に之を降す。景勝、利家、亦鉢形以下の諸城を降す。降附五萬人を並せて來り謁す。秀吉甚だ賞せず。二人頗る嗛らず。秀吉、近臣に謂て曰く、「二人功無きに非ず。然れども降れば輒ち之を受く。勤勞を稱するに足らず。或は降し、或は屠り、恩威並び行はれ、然る後賞す可きのみ」と。二人之を聞きて復發し、八王子の城を屠り、還りて首級を效す。秀吉、乃之を賞す。是に於て、八州の諸城、大半皆破る。然れども其將士、小田原城內に在り。我が兵、其父母妻子を虜して之を視す。將士逃れ降るもの相踵ぐ。我が侍史山中某、成田長康と善し、秀吉、命じて陰に書を以て之を招かしむ。長康、乃款を送る。秀吉、德川公をして、其降書を以て、氏直に遣らしめて曰く、「子の將帥みな貳心あり。事已に危迫なり。子、盍ぞ早く自計を爲さゞる」と。氏直、氏政と議して、長康を召す。至らず。乃、柵を長康の營に環らし、兵を置きて監護す。是より城中、人々相疑ふ。秀吉、黑田孝高、羽柴勝雅を遣し、城に入りて氏政父子を見て、說くに禍福を以てせしむ。氏政肯ぜず。七月、氏直、遂に出でゝ降を乞ふ。德川氏、嫌を避け、敢て通ぜず。之をして勝雅に因らしむ。勝雅以て告ぐ。秀吉、之を許す。氏政をして城を致して出でしむ。因りて諸將に謂て曰く、「吾が此行、不庭の臣を誅せんと欲す。今にして之を釋す。是れ信を天下に失ふなり。吾れ氏政を誅して、其餘を釋さんと欲す」と。諸將曰く、「善し」と。乃使者四輩を遣し、氏政の舍に就きて死を賜ふ。秀吉、其首を覽て罵りて曰く、「汝、王命を輕蔑し、敢て我を笑侮す。今如何ぞ」と。石田三成をして、之を京師に獮しめ一條戻橋に梟す。氏規、小田原、既に下ると聞き、又韮山を以て、降る。乃氏直、氏規等、三十人を高野に縱ち、俸百口を給ひ、尋ぎて萬石を給ふ。乃、北條氏の故地八國を擧けて、以て德川氏に賜ひ、別に十萬石を以て、其湯沐の邑と爲す。德川氏の故地五國を擧けて、以て信雄に賜ふ。信雄肯て受けず。秀吉怒りて曰く、「卿が才、民の上と爲る可らず。吾れ特に先右府の子なるを以て、厚く之を封ぜんと欲す。卿、乃之を薄しとするか」と。乃之を秋田に放ち、駿河を中村一氏に、甲斐を加藤光康に、尾張及び北伊勢の五郡を

秀次に、三河を池田輝政、田中吉政に、遠江を堀尾吉晴、山內一豐、有馬豐氏に、信濃を森忠政、石川數正仙石秀久に賜ふ。關東諸豪の功罪を論じ、之を黜陟す。大道寺政繁を執へ、之を詰めて曰く、「汝北條氏の舊將を以て、首として我に降る。我の功臣は、乃、北條氏の叛臣なり。叛臣は天下の罪人なり。吾れ私に之を釋す能はず」と。乃之を櫻田に誅す。

八月、白河に至る。淺野彈正少弼、大谷吉隆、石田三成に命じて、陸奧、出羽の地を檢せしむ。諸諜臣に問ひて曰く、「吾れ一將を選びて、東北を鎭撫せしめんと欲す。卿等みな見る所を陳べよ」と。衆の對ふる所各異なり。秀吉曰く、「みな非なり。蒲生氏鄕に非ずば可なる者なし」と。氏鄕に賜ふに、會津、仙道十一郡を以てす。葛西、大崎を以て、木村秀俊に賜ふ。政宗は、故士に因りて、米澤、長井を賜ふ。氏鄕に謂て曰く、「我が爲に東門を守れ」と。因りて力略を指授す。德川、前田、上杉氏を戒めて、之が應援を爲さしむ。終に諸軍を整へ凱旋して岡崎に至る。吉川廣家、命を受けて之を守る。則之を迎へて饗す。明日、鞍馬三百餘疋を以て秀吉に送る。秀吉、黑馬を擇びて之に騎り、其徒御を屛く。獨、吉川氏の卒栗棲武格といふ者、之が園と爲り、行きて尾張に入る。秀吉、路傍の聚落を指し、武格に謂て曰く、「此を中邑と名づく。吾が生長せし所なり。吾れ一たび往きて覩んと欲す。汝、能く我に從ふか」と。武格曰く、「謹諾」と。是に於て、秀吉、騎して中邑に入り、武格を閭首に留めて入り、街巷を周馳して出づ。遂に、邑中の父老を召し、笑ひて曰く、「吾は藤吉なり」と。父老みな惶恐俯伏す。秀吉曰く、「吾が少かりし時に比すれば、邑閭甚だ整ひ、戶口も亦滋息するに似たり」と。因りて之に酒及び物を賜ひ、與に舊故を語りて去る。

九月、京師に復命す。是に於て、東國悉く定る。而れども伊達政宗心に缺望を懷き、陰に土兵を誘ひ、亂を作す。少弼豫陸奧の亂るゝを度り、十餘砦を造り、兵を留めて之を守らしめて西す。大谷吉隆、猶留りて田を檢することを甚だ急なり。

土兵起る

十月、土兵四より起る。葛西、大崎も亦、秀俊の政に苦しみ、叛きて其城を攻む。秀俊、走りて佐沼を保ち急を氏郷に告ぐ。氏郷、卽、發す。雪に逢ひ、橇行して、井繩に至り、政宗の異心あるを察し、人を遣して促して師に會せしむ。政宗、已むことを得ずして、出でゝ吉岡に次す。氏郷、身其陣に往きて、事を面議す。政宗、大に驚く。氏郷、賊の二壘を破り、勝に乘じて進む。政宗、疾と稱して從はず。氏郷、行陣を布きて之に備へ、進みて名生の壘を破る。政宗、追躡し、其陣の堅きを視て、敢て擊たず。氏郷、乃、秀俊を迎へ、之を名生に置く。政宗數他無きを謝す。氏郷功を立てゝ自效さしむ。乃攻めて宮崎城を下す。賊黨悉く潰ゆ。少弼、時に駿河に至り。亂を聞きて卽還る。

十九年

十二月、氏郷歸らんと欲す。而して政宗の變あるを慮る。少弼、乃政宗をして、質を納れしむ。

十九年正月、氏郷、其質を取りて會津に還る。秀吉、警報を得て、秀次に遣して赴き討たしめ、石田三成をして、德川公を促して師に會せしむ。氏郷、已に亂を定むと聞き、則途より還る。

閏月、氏郷、京師に來り、狀を上る。秀吉、木村氏の封を奪ひ、之を氏郷に予ふ。氏郷、政宗が賊に通ずる手書を獻ず。秀吉怒り。使を馳せて政宗を召す。政宗卽發す。

政宗を誅せんとす

二月、至る。曰く、「吾れ自誅戮を分とするなり」と。貼金の磔柱を作り、人をして揭げて前行せしむ。詰問するに及びて、陳謝して甚辯ず、乃其手書を示す。政宗佯り愕きて曰く、「其書甚肖たり。特華押微く異なる者あり」と。之を驗するに果して然り。秀吉、卽之を釋す。是より先、南部氏の族九戸政實叛く。氏郷、少弼と攻めて之に下す。是の歲五月、復叛きて、福岡の城に據る。葛西、莊內之に應ず。秀吉、秀次に命じ、赴き討たしむ。曰く、「必これを勦せ。復萠すこと莫らしめよ」と。德川公に命じ、之を肋けしめて曰く、「卿に東北三道の軍務を掌らしむ。其便宜に軍に從へ」と。乃奏して、政宗を以て四位侍從となし、氏郷と俱に先鋒たらしむ。少弼、及び堀尾吉晴をして、其軍を監せしむ。因りて密に氏郷を諭して曰く、「吾、政宗の反計を知れども、顧ふに彼の膽略愛すべし。故に釋して問はず。以て反側を安ず。事平かば則

秀次三迫に陣す

福岡を圍みて政實以下を殺す

秀長卒す

其地を奪ひ、之を汝に予へんのみ」と。

八月、秀次、陸奧に入り、三迫に陣す。氏郷、政宗、攻めて五城を下す。上杉氏、命を奉じて師に會し、擊ちて莊內を平ぐ。諸將、遂に福岡を圍む。政實以下の魁首三十餘人を誘ひ降し、之を三迫に効す。秀次斬りて以て徇へ、其餘黨を焚殺す。秀吉の命を以て、政宗を葛西、大崎に徙し、其地を以て氏郷に加賜し、幷せて百萬石を食ましむ。遂に國內を巡視し、土民を按據せしめ、東邊の諸侯に課して、城を大崎に築きて以て、政宗を置き、然る後歸る。是の歲四月、大納言秀長卒す。秀次の弟秀俊を以て嗣と爲す。其封を襲かしむ。

十一月、秀吉、大に三河に獵す。初め秀吉關西を定め、松下之綱を召し、邑を丹後に賜ひ、關東を定むるに及びて、更に遠江、伊勢の一萬石を賜ふ。曰く、「攘みし金を償ふなり」と。

碧蹄驛　賴山陽

平壞城。碧蹄驛。
明軍乘レ勝如レ捲レ席。
一隊壓レ尾萬刀橫。
斫レ人如レ草刀有レ聲。
據レ鞍海外供二頤指一。
老臂一攘聊復爾。
噫不レ使二此翁執一鼓旗一。
兩度都付乳臭兒。

拝ニ織田右府塑像一引

日出処、日没地、鯨鰐食レ人飛生レ翅、扶桑大樹安在哉、
紫垣縦横為ニ骼骾一祖宗有レ霊生ニ英雄一、手挽ニ狂瀾一扶ニ瑞
穂一、大事垂レ成身顚蹶、遺像空留北郭寺、寺門深厳老
木青、吾来粛謁弔ニ英霊一、粉墨剝落帳龕暗、檐過ニ霰聲一
寒日冥、欲レ歸雲陰忽解駁、面鬚可レ窺稍隠躍、雙眉中
蹙見ニ性急一、両頬下殺知ニ福薄一、唯見隆鼻洞爛ニ巌電一、英
爽襲レ人難ニ仰看一、金閣寺、等持院、曾識ニ奕世将軍面一、豈
有ニ一個堪ニ敵戦一、嗚呼不レ如レ此、何以定ニ禍乱一、想見群雄、
盡膝行、狼顧脅息懼ニ醢烹一、畜狗反噬レ奴復レ仇、威愛之
報両分明、君不レ見後覇匡レ國、誰不レ師レ君者、王國藩屏
皆部下、唯見猴郎侍ニ其左一、願倩ニ塑工一盡ニ貌其餘一、豊頤
大耳森坐、

改版

邦文日本外史 巻之十五

改版

邦文日本外史 巻之十六

徳川氏前記

豊臣氏中

秀吉の大志

秀吉の關東に在るや、鎌倉に遊びて、源頼朝の塑像を観、進みて其背を撫でて曰く、「若は我が友なり。徒手にて天下を取りしは、唯吾と若と有るのみ。然れども若は名族を承藉す。吾が人奴より起れるに如かざるなり。吾れ、遂に地を略して明に至らんと欲す。若以て如何と爲す」と。

韓明と我國との關係

初め秀吉、織田氏の爲に山陽を徇へ、韓及び明を攻めんことを請ふ。後常に其志を成さんことを思ふ。明主、営て足利氏と好を修む。而して韓、其間に両屬し、常に朝貢を我に奉ず。足利氏の衰ふるに及びて、我が西南の海盜、數明の境を侵す。明、韓、みな我と絶つ。而れども海賈の互市は絶えず。我が對馬島は韓を距ること甚邇し。島主宗氏、世〻を韓の釜山浦に置く。豊臣氏の時に至りて、明の民、或は來り投ずる者あり。秀吉、明主朱翊鈞が政を失ひ、武備具らざるを聞き、益〻を窺はんと思ふ。其畿内を定むるに及びて、

秀吉韓明を征せんとす

橘康廣

橘康廣、営て韓事を詳するを以て、擢でゝ使者と爲し、朝貢を韓に徴す。要領を得ずして返る。秀吉、其韓と私あるかを疑ひ、之を族誅す。

宗義智

西海を定むるに及び、宗義智、款を送る。義智と僧玄蘇とを遣して韓に往かしむ會〻琉球入貢す。秀吉、命じて使事を掌らしむ。將に關東を伐たんとして、遂に義明に通ぜんことを求む。曰く、「明

琉球王明に告ぐ

我が言を聽かずば、我れ當に兵を發して之を伐つべし」と。琉球王尚寧、之を明に告ぐ。明、聽かず。義智、韓に至る。韓王李昭、乃其大臣黃允吉、金誠一をして、隨ひて入貢せしむ。秀吉、既に關東を討ち了て後、

秀吉韓國に書を送る

韓の使者を見、乃史に命じて書を作り、以て之に答へしめて曰く、「日本豐臣秀吉、謹みて朝鮮國王足下に答ふ。吾が邦の諸道、久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻梗す。秀吉、之が爲に憤激し、堅を蒙り銳を執り、

書辭

西討東伐、數年の間を以て六十餘國を定む。秀吉は鄙人なり。然れども其胎に在るに當りて、母、日の懷に入るを夢みる。占者の曰く、『日光の臨む所、透徹せざる莫し。壯歳必武を八表に輝さん』と。是が故に、戰へば必勝ち、攻むれば必取る。今海内既に定り、民富み財足る。帝京の盛なる、前古に比なし。夫れ人の世に居ること、古より百歳に滿たず。安ぞ能く鬱々として久しく此に在らんや、吾れ道を貴國に假り、山海を超越し、直に明に入り、其四百州をして、盡く我が俗に化せしめ、以て王政を億萬斯年に施さんと欲す。是れ秀吉の宿志なり。凡海外諸藩の後れ至る者は、皆釋さゞる所なり。貴國、先使幣を修む。帝甚之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其士卒を率ゐ軍營に會し、以て我が爲に前導せよ」と。因りて平調信、僧玄蘇を遣し、與偕にせしむ。韓王、書を得て疑懼す。誠一、以て虛喝と爲す。王、之をして私に二人を饗し、其情實を探らしむ。調信曰く、「我が主、明に通ぜんと欲するに、明、答禮せず。故に伐たんと欲するのみ。貴國何ぞ間に居て之を和解せざる」と。誠一、依違す。玄蘇、聲を勵し、言て曰く、「今日の議、首鼠兩端するを得ず。和を講ぜんと欲せざるは、乃戰はんと欲するのみ」と。因りて辭し訣れて返る。韓、始めて惧れ、稍邊備を修む。明も亦之を聞きて、海防を申嚴にす。天正十九年夏、秀吉、復、義智を遣して昭を責む。釜山に在ること旬餘にして報を得ず。怒りて返る。秀吉の志益決す。

平調信等韓に使す

秀吉、初め子なし。是より先、妾人某氏、男鶴松を生む。秀吉、絕之を愛す。是の歳鶴松夭す。乃、悲哀因りて屢出遊し以て自遣る。一日、清水寺の閣に登りて西望し、從者すること累日、心忽々として樂まず。因りて嘆じて曰く、「大丈夫、當に武を萬里の外に用ゐるべし。何ぞ自悒鬱を爲さん」と。乃、返り、大に諸將師を會

天正十九年

秀吉征韓の意ハ決す

し、之に謂て曰く、「吾れ諸君の力を藉りて海内を平定す。亦以て休ふ可し。特諸醜夷の王化を阻む者あり。吾れ深く之を羞づ。吾が邦治を以て内府に委ねて、自、將として朝鮮に入り、其兵を以て先鋒と爲し、以て明に入らんと欲す。彼れ、我が命を拒まば、則撃ちて之を滅し、遂に遼東より直に北京を襲ひ、其國を奄有して、多く土壤を割きて、諸君に予へ、諸功臣をして皆其望に厭かしめん。亦快ならずや。我れ之を籌ること已に熟す。事甚難きに非ず。諸君、其れ能く我が爲に力を出せよ」と。諸將師、喟咍し相視て、敢て對ふる者なし。浮田秀家進みて曰く、「殿下、此無前の事を擧ぐ。誰か努力せざらんや」と。衆敢て異議する者莫し。内府とは、秀次を謂ふなり。秀次、時に内大臣たり。正二位に叙せらる。是に於て、秀吉、奏請して、諸將を遣して國に之き、各、兵食を具へしむ。丸鬼嘉隆に命じ、大艦數千艘を造らしむ。大廳、秀吉の海外に赴かんとするを聞き、憂恐して寢食を廢するに至る。乃、議して秀家をして代りて往かしむ。而して自出でゝ、肥前に陣し、以て策應を爲す。乃、大に古耶に城き、建てゝ行營と爲す。十二月、朝鮮の地圖を諸將に分ち、其鄕ふ所を部署す。西南四道の兵を分ちて八軍と爲し以て、韓の八道に鄕はしむ。主計頭加藤清正、第一軍に將たり。鍋島直茂、相良賴定は、清正に屬し、宗義智、松浦鎭信、有馬義純は、行長に屬し、兩軍迭に先鋒たり。大友義統、黑田長政、第三軍に將たり。島津義弘、毛利高政、伊東祐兵、第四軍に將たり。福島正則、長曾我部元親、第五軍に將たり。蜂須賀家政、生駒親正、第六軍に將たり。小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂、第七軍に將たり。毛利輝元、第八軍に將たり。別に水軍を置きて、九鬼嘉隆、脇坂安治、加藤嘉明、來島康親を以て之に將とし、秀俊の將藤堂高虎、大和の軍を率ゐてこれに屬す。水陸の九軍、總べて十五萬人なり。織田秀信、中川秀政、石田三成、增田長盛、大谷吉隆、糟谷武則、片桐且元は、淺野左京太夫と、游軍六萬に將として、應援に備ふ。而して秀吉、自、秀俊、及び德川公、前田利家、蒲生氏鄕、上杉景勝、結城秀康、最上義光、佐竹義宣、伊達政宗、南部信直等、畿内、東北三道の將士十萬を以て自衛る。明年三月を以て盡く行營に會せしむ。秀

秀次兵食を具ふ

征韓の部署を定む

水陸十五萬人

秀吉關白職を秀次に讓る

吉、乃、上書して骸骨を乞ひ、關白職を秀次に讓り、自太閤と稱す。是に於て、宗義智は釜山の吏卒を戒め、稍々引き返らしむ。韓人來りて其府を覲ふに、閑然として人なし。乃、驚き惟み、守備を修むること益急なり。

文祿元年【先天府】信長　加藤清正　小西行長

文祿元年正月、秀吉、加藤清正を召して、之に記幟を賜ひて曰く、「吾れ毛利氏を伐つ時、先右府より賜はりし所なり」と。小西行長を召して、之に名馬を賜ひて曰く、「以て髯虜を驅突せよ」と。清正、素より行長を鄙みて相善からず。是に於て之に謂て曰く、「予は賜幟を用ゐて號と爲す、子、號は何を用ゐるや」と。行長、對へて曰く、「我れ藥商より起る。當に藥囊を用ゐるべきのみ」と。是より益相隙す。

秀吉進發

二月二十八日、秀吉、京師を發す。或人曰く、「吾が此行は將に彼をして、我が文を用ゐしめんのみ」と。四月、安藝に至り、嚴島祠に謁し、百錢を投じて祈りて曰く、「吾れ明に勝たば、面する者多かれ」と。乃投ず。皆面す。衆、大に喜ぶ。蓋し豫兩錢を糊合せしなり、遂に那古耶に至る。諸軍の會する者、凡五十萬人。糧食之に稱ふ。

那古耶陣　五十萬人

是に於て、先水陸の九軍を遣し、大砲を發し、闕して帆を揚げ、海を蔽ひて渡る。風本に至り、風に阻てらるゝこと十日、風稍定る。行長と義智、と素より海路を諳ず。潛に其軍を拔き、衆に告げずして先發し、豐崎に至る。平明、諸將、乃、之を覺る。清正、怒りて發す。風益甚しく、進むを得ず。行長、舵師を促して豐崎を發し、濤を冒して進み、十三日、釜山に達す。釜山の守將鄭撥、出でゝ獵す。警を聞きて馳せ返る。行長、隨ひて其城を攻め、立所に之を拔き、鄭撥を生擒し、遂に兵を分ち、慶尙道を徇へ、西生、多大の二浦を陷る。多大の守將尹興信を斬る。其捕虜に問ふに要害の城寨を以てす。曰く、「東北に東萊あり。此を距ること三十里」と。行長、其衆に謂て曰く、「諸君、戰ひ疲る。當に休ふべし。然れども東萊をして、備へを爲さしめば、吾が力下す能はじ。而して諸將隨ひ至らば、則功を人に奪はれん。宜しく急に擊ちて、之を取るべし」と。衆、奮ひて之に從ふ。乃進みて東萊を攻む。半日にして之を拔く。斬首千餘級なり。守將宋象賢、屈せずして死す。行長、收めて之を葬り、進みて梁山を陷れ、鵲院に至る。韓兵、嶮に據りて之を拒ぐ。我が兵、山を攀ぢ廻りて其背に出づ。韓兵、顧て潰ゆ。韓の巡察使金睟、東萊の急を聞き、晋州より來り援へども及ばず。乃、諸郡縣に檄して、我が兵を避けしむ。

東萊を拔く

清正釜山に至る　慶州

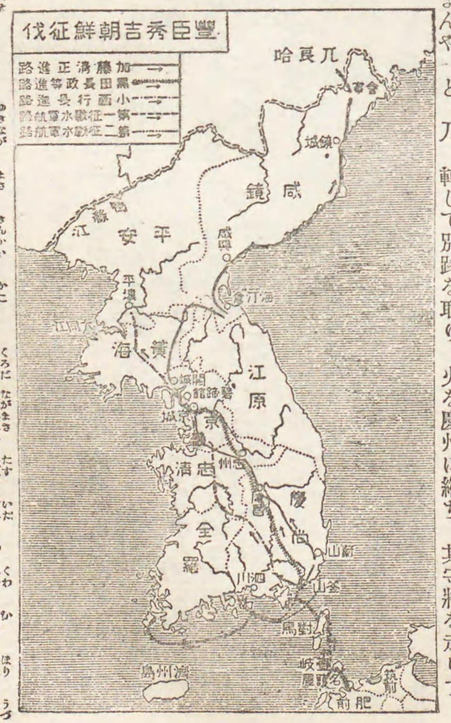
清正、釜山に至る。行長、已に前進すと聞き、切齒して曰く、「悔ゆらくは、我が家より身を起す。吾れ功を爭ひて援けずして、彼をして敵に死せしめば、獨太閤寄任の意を負かざらんや」と。乃、次を踰えて船を發す。八軍相繼ぎて陸に上る。

我軍釜山に達す

韓の諸道、競ひて警を國都に報ず。韓王、季鑑、申砬に命じて、大將と爲し、金誠一をして慶尙の右道を距ぎ、金玏をして慶尙の左道を距がしむ。行長、方に金海を圍む。黑田長政、援け至る。禾を刈り塹を塡め、以て之を陷れ、兵を引きて左右の間に出でゝ、其應援を絕ち、進みて、尙州を陷る。鎰、已に州城の北に至り、城中火起るを覩て、騎を遣し來り候はしむ。行長、之を望み視て曰く、「我れ且に其艦を奪はんと。潛に銃卒をして橋下に伏せしめ、之を銃して馬より墮す。鎰の軍動く。行長、大衆を以て、出でゝ二奇

全軍上陸

（朝鮮征伐地圖）



忠州に行長清正と會す

兵を張りて、之を劫す。鎰、駭き去り、申硅、忠州に歸す。硅、忠清道の兵八千を收め、鳥領を守らんと欲す。尙州、陷ると聞きて、敢て進まず。行長、進みて鳥嶺に至り、其險阨を覩、輕卒をして先行き、周く山谷を踐ましむるに敵なし。笑ひて曰く、「朝鮮の兵、我を此に要せず。吾れ其能く爲す莫きを知るなり」と。乃、嶺を踰えて丹月驛に至り、兵を分ちて二と爲し、申硅を彈琴臺下に擊ちて之を斬り、遂に忠州を取り、城外に相見て、進みて其京畿を取らんことを議す。清正曰く、「攝津守功多し。國都を攻むるに至りては、先鋒は當に僕に屬せらるべし」と。行長曰く、「吾れ子と並に約束を受く。子何ぞ擅に之を更ふるや」と。對へて曰く、「大敵前に在り。何ぞ私に鬪ふを爲す」と。鍋島直茂曰く、「大閤、忿りて鬪はんと欲す。諸將之を解きて曰く、「今盍ぞ道を分ちて往かざる。聞く、『道二あり。南よりする者は遠く、東よりする者は近し』と。近き者は漢江の險あり。唯二公の撰ぶ所のまゝ」と。清正曰く、「攝津守二公をして迭に先鋒を爲さしむ。今盍ぞ道を分ちて往かざる。聞く、『道二あり。南よりする者は遠く、東よりする者は近し』と。近き者は漢江の險あり。唯二公の撰ぶ所のまゝ」と。清正曰く、「攝津守者を取らん」と。議、乃、定る。行長、間に人をして先馳せて漢江に之き、其南岸の船を奪はしむ。清正、遂に發す。韓使李應舜に途に遇ひて之を捕ふ。

清正、行長中惡し

韓王都城を去る

韓使李應舜に途に遇ひて之を捕ふ。

初め行長、蔚山の守將李彦誠を獲たり。書を韓王に送りて之を招き降さんとして彦誠をして齎し去らしむ。彦誠、敢て白さず。尙州を取るに及びて、乃、應舜を獲たり。之に太閤の咨書を予へ、返りて彦誠の報を責めしめ、且、李德馨を召す。德馨は嘗て我が使人に接せし者なり。韓王、乃、德馨を遣し降を乞ふ。途に忠州陷ると聞き、應舜をして先往きて之を詗はしむ。乃、清正に捕へられ、遂に誅せらる。德馨、走り去る。韓、已に李鎰の敗を聞き、大に怖る。而れども猶、申硅を屬望す。晦日、騎あり。馳せて都門に入る。民、迎へ問ふ。對へて曰く、「申の總兵死せり。關白の軍、將に來らんとす」と。都城大に擾る。王、世子と夜、駕して平壤に奔り、急を明に告げ、王子を遣して兵を諸道に徵す。都元帥金命元、副元帥申恪を留め、舟師を以て漢江を扼す。命元、清正至ると聞き、疑兵を措きて遁る。清正、江に抵る。船の渡る可きなし。立ちて北岸を望み、之を久しくして、笑ひて曰く、「敵船に鬼あり。是れ兵なきなり」と。善く泅ぐ者をして往きて其船を取らしめ、以て渡る。

行長清正都城に入る

五月四日、都城の南大門に至る。兵ありて門を守る。其の旗幟を視るに皆小西氏の號なり。蓋し行長は驪川を渡り、敵將の元豪を走らせ、先だつこと一日、東大門より入る。王已に遁れたり。清正、益怒る。居ること十餘日、諸將皆至る。

浮田秀家

秀家、自國都に居り、諸將をして各進取を圖らしむ。金命元、退きて臨津を守り、申恪を呼ぶ。恪、從はず。獨、楊州に屯す。命元、恪の節度に違ふを怒り、王に之を訴せんと請ふ。會咸鏡南道の兵使李愼、來りて恪を助く。浮田氏の兵と戰ひて大に之を破る。而れども命元、遂に恪を斬る。王、捷を聞きて、遽に之を赦せども及ばず。乃、申硅及び韓應寅を遣し、命元を助けて津北を守らしむ。我が兩先鋒は、長政と兵を合せて、津南に軍す。相持すること十餘日。精兵を伏せて佯り卻く。碏、之を追はんと欲す。其裨將劉克良、之を止む。聽かずして渡る。應寅も亦濟る。伏に遇ひて驚き走る。三將返り擊ちて、大に之を破り、碏及び克良を擒にす。其兵の死傷若しくは溺るゝ者萬人なり。命元、應寅、走りて平壤に歸る。我が軍、乃、濟り、安城驛に至る。乃、闥を探り、軍の向ふ所を定む。行長は平安道を得、清正は咸鏡道を得、而して長政は黃海道を得、而して韓將李洸、尹國馨、金睟は、全羅、忠清、慶尙三道の兵五萬騎を以て、入りて王城を援ひ、龍仁に至る。我が兵の山上に壘するに見て、戰を挑む。我が兵出でず。已にして其懈るを瞰ひ、出でて擊ちて、大に之を破る。

我軍津を濟る

我兵大勝

是の時に當りて、國府より釜山に至るまで數十城烽火相應じ、皆我が兵の守る所と爲る。以て行營と聲息を通ず。秀吉、乃、石田三成、增田長盛、大谷吉隆を遣し、游軍六萬を引きて赴き援けしむ。伊達正宗も亦、請ひて往く。三奉行、韓に入り、令を宣べ功を褒む。行長、既に平安を徇へ、大同江に至りて、書を平壤に遣り、復、李德馨を召し、平調信、僧玄蘇をして、江中に相見して之を招降せしむ。議諧はず。二人曰

遊軍を發す

く、「若が主、第我を導き明を伐て。不らずば則併せて之を夷滅せん」と。乃還る。

行長進軍せんとす

六月、韓王、左相尹斗壽、元帥金命元を留め、平壤を守らしめて、自寧邊に走り咸鏡に入らんと欲す。清正在りと聞き、乃、義州に走る。右相柳成龍をして、兵を發して命元に益さしめ、固守して明の援兵を俟つ。命元、行長等と江を夾みて相持す。我が兵の稍怠るを伺ひ、夜、精兵を遣はし、濟りて之を襲ふ。行長、衆を叱して起ち、義智をして其後を絕たしめ、擊ちて韓兵を破る。韓兵淺きを亂りて走る。行長曰く、「是れ亂るべきなり」と。軍を擧げて之に從ふ。斗壽、命元、守を棄て走る。行長、城に入り韓の積粟十餘萬石を得たり。使をして還りて國都の諸將を趣さしめ、以て志を得べし」と。秀家、三奉行と答今已に平壤を取る。平壤以西、復、支ふる者なし。鴨綠江より明の北京に至るまで、百餘里に過ぎず。吾が全軍、甲を卷きて之に趨き、彼をして備ふるに及ばざらしめば、

諸將城を守る

へて曰く、「全羅、江原の二道、未だ定らず。我れ未だ深く入るべからず。我が水軍、將に全羅に循ひて北黃海に會せんとす。然る後、水陸並び進まん。是れ萬全の策なり」と。乃、諸將を分ち國都、平壤の間の諸城を守らしむ。大友義統は鳳山を守り、黑田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守り、以て應援に備ふ。

水軍

行長、日水軍の至るを望む。水軍の諸將既に釜山を發し、慶尙の右水使元均と戰ひて、之を破り、遂に全羅に出づ。藤堂高虎、韓の候船の唐島に在るを聞き、飛船を以て之に赴き、其百餘艘を奪ひ、島により營を焚く。全羅の水軍節度使李舜臣、艨艟鬪艦數千艘を以て亘濟洋に在り。諸將、毛利勝信の營に集飮し、進戰を議す

脇阪安治曰く、「大船巨砲を以て戰を挑み、然る後其船を奪はん」と。加藤嘉明曰く、「是れ劫して之を去らしめ、挑みて之を奪ふに非ず。此れ決戰すべし。不らざれば則太閤、水軍の敗れば、則陸軍も亦振ふ能はじ。子、胡ぞ猖狂、乃、爾る」と。嘉明怒る。高虎、間に居て和解す。勝信曰く、「諸公、命を千里の海外に受け、忠に告けて隱さず。務めて公事を利す。太閤良臣多きこと此の如し。

諸將の議

九鬼嘉隆【三鼓】子の刻夜十二時

李舜臣

明の援軍

秀吉の母薨す

明軍韓に入る

何ぞ戰に憂へん」と。因りて酒を侑む。酒數行、九鬼嘉隆曰く、「今夜三鼓に纜を解き、旦日、進み戰はん。船の大小は宜しきに隨はんのみ」と。嘉明、潛に起ちて厠に如き、其軍吏を招き、期に先だちて進む。曉く る比、走舸三艘を以て、直に敵の列艦を衝き、其二十艘を奪ふ。諸將繼ぎて進む。舜臣卻く。我が軍、之を追ひて洋中に入る。舜臣、乃、左右の翼を縱ち、巨熕を以て我が船を擊碎す。來島康親、之に死す。安治、苦戰して其衆を亡ひて退く。舜臣、因りて閑山に屯して、我が水軍を拒ぐ。我が水軍、之を以て陸軍と合すること能はず。陸軍も亦、未だ遂に進む能はず。

明主翊鈞、秀吉の兵の韓に入りしを聞きて則ち恐る。會其國の西北邊に亂あり。大將李如松、諸軍を率ゐて寧夏に屯す。國都兵寡し。明主、其大臣を召して、韓の當に援ふべきや否やを問ふ。大臣曰く、「和の明を窺ふこと久し。而して明の屛は韓に在り。韓、先和兵を被りて、明援けずば、韓、且に折れて和に入らん。和、韓、一と爲り、利を明に分ち、兵を合せ力を斃せて、遼東に出でなば、則勢、瓠水を屋に建つが如し、顧ふに韓の民は、和の兵を畏る。而れども心これに服せず。我れ一將を遣し、韓王を助けて之を招聚せば、其力に因りて東北を捍禦せん。是れ名は明を以て韓を援け、而して其實は韓を以て明を援けしむるなり。明、何ぞ和を患へんや」と。明主、之に從ふ。其將祖承訓、史儒算を遣し、將に韓を援けんとして、書を琉球、遲羅に下し、和を侵すの勢を爲して、秀吉を縻ぎ、其れをして海に航して西北に嚮ふ勿らしむ。而して大廳、疾あり。秀吉、已に海に航すと謂ひ、憂疑して疾篤し。秀吉、之を聞き、馳せ歸りて之に覲ゆ。至れば則已に薨ぜり。是の時に當りて承訓、儒算、既に韓に入る。二將は皆遼東の勇將にして、數胡と戰ひて功あり。甚和人を輕ず。和人の、前に明の疆を掠めし者、皆海盜にして、甲伏敝惡なり。明人、之を見狂れて、豐臣氏の兵も亦、此の如しと爲す。是に於て、嘉山に至り、韓人に問ひて曰く、「平壤の和兵は、乃、走る無からんや」と。曰く、「否」と。承訓、酒を擧げ、祝して曰く、「天、我をして大功を爲さしむ」と。進みて順安に舍す。未だ定らず、行長、偵ひ知り、夜、輕卒を遣して其營を劫す。營亂る。乃、笑ひて

曰く、「此虜も亦與し易きのみ」と。明日、自往きて明軍と安定に戰ふ。旗幟偉麗にして、人馬皆鬼頭、獅面を被る。明の馬駭く。行長、兵を麾きて之を蹂む。儒算、馬を下りて鬪ひ、丸に中りて斃る。時に霖雨なり。我が兵明人に淖に迫り、擊ちて之を盡にす。承訓、身を挺でゝ走る。行長、因りて書を韓王に投じて曰く、「王、盍ぞ我を導きて明を伐たざる。明の我が兵に當る、猶羊群に一虎を放つが如きは王の知る所なり。今遼東、既に明の隻騎なし。而して我が舟師十餘萬、又西海より來る。未だ大駕將に復、何に逃れんとするかを知らざるなり」と。是の時に當りて、韓の猛將精兵、多く咸鏡道に在り。而して清正の爲に阻てられ、來りて韓王を援ふ能はず。

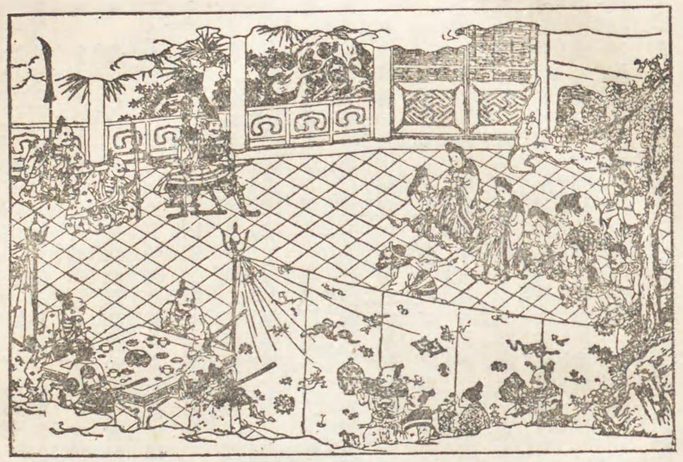
行長明軍を破る

清正咸鏡道に進軍す

清正韓軍を破る

清正の咸鏡道に入るや、安城の民三人を虜にして、先導せしむ。二人辭す。清正、立所に之を斬る。其一人惧れて之に從ふ。永興に至り、二王子の咸鏡北道に遁れしを聞き、則大に喜び、直茂・輝定を留めて、氷興を守らしめ、而して其輕兵を以て日に行くこと數百里、鐵嶺に至り、蹤えて北す。北道の兵使韓克誠、六鎭の彍騎を以て、清正を海汀倉に逆ふ。北兵善く射、平地に憑りて馳突す。我が軍歩兵多し。利あらずして卻く。日暮に會ひ、收めて倉内に入る。韓兵、沓至して之を圍む。矢、下ること雨の如し。清正、倉粟を排して城と爲し、銃を發して之を距ぐ。手に應じ千餘人を斃す。韓兵、退き鐵嶺に上りて陣し、旦を待ちて戰はんと欲す。清正、夜、兵數千を分ち敵を環りて伏す。旦、大霧なり。克誠、將に嶺を下らんとす。而して我が兵、四面より齊しく起りて大に之を破り、北ぐるを追ひて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に克誠を擒にし、火を縱ちて城を焚く。二王子の會寧府に在りと聞くや、馳せて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと十五日にして至る。府使鞠景仁、惧れて二王子を拘へ、人をして來りて降を乞はしむ。且曰く「府内、食盡き、王子食はざること三日なり。願くは之に食を賜へ」と。清正、之を許し、自城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く、「吾れ府内を窺ふに、虜人塡咽す。我寡兵を以て入らば、恐らくは變あらん」と。清正曰く、「虜何ぞ能く爲さん。吾れ已に王を失ふ。又王子を失ふ可らず。卽變あらば、吾れ王子と死を決せん。憾毋き

清正韓の二王子を生擒す（加藤清正兩王子生擒之圖）



なり」と。乃、十餘騎と城に入る。饋者數十人をして、人ごとに一器を執り、隨ひて入らしむ。韓人危疑し弓を張りて清正を環る。清正、之を叱し、其他無きを辨ず。韓人、解する能はず。清正、自襟を開き箭に當て、印を懷に取り、紙に印して之を示す。韓人弓を捨てゝ拜す。是に於て、清正、王子及び其大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしむ。乃、景仁に問ひて曰く、「朝鮮の北境、此は盡くるか」と。對へて曰く、「然り」と。曰く、「北隣は何の國か」と。曰く、「兀良哈」と。清正、乃、八千人を以て進み、其境に入り一城を攻めて之を拔く。旣に夜なり。令を下して曰く、「甲を釋く勿れ」と。夜半、胡騎大に至る。我が兵力戰して之を走らす。清正曰く、「虜、我が至るを意らず。我一捷、以て太閤に報ずるに足れり」と。乃、其貨寶を收め、兵を引きて南に還る。胡騎之を蹂す。清正、自殿して退く。終に海濱に至り、西南に臨みて高山を得たり。韓の捕虜曰く、「富士岳なり」と。清正、馬を下り冑を免ぎて拜し、其騎に謂て曰く、「吾れ太閤を辭してより、日に西北に行くと謂へり。今岳を西南に望む。吾が行の遼遠なるを覺ゆ」と。乃歸り、一十日にして鏡城に至る。八月、韓王、義州より李嬪、李元翼を遣し、來りて平壤を攻めしむること再す。行長、輒擊ちて之を卻く。王、亦、清正、已に咸鏡を略定すと聞き、其行長と力を并せて來り襲はんこと恐るゝや、益急を明に告ぐ。

石星
沈惟敬

明和を講ぜんとす

筑紫廣門

清正成鏡より還る

明旣に承訓の敗聞を得て、擧朝震驚す。大司馬石星、明主に說きて曰く、「秀吉の兵、勝に乘じて遠く鬪ふ。未だ與に鋒を爭ふ可からず。且寧夏未だ平ならず。復遼東に事あり。且に和を議し、以て禍を紓くに若かざるなり」と。因りて沈惟敬を薦む。惟敬は越人、慧黠にして辯口あり。燕に遊び、燕の倡家の僕鄭四と善し。鄭四嘗て對馬に在り。惟敬故を以て、略和事を知り、富貴を微幸す。其友袁茂、嘗て女を星に納る。星、因りて惟敬を知る。召して與に語り大に悅び、遂に之を薦む。是に於て、明主、惟敬を以て遊擊將軍と爲し、多く金帛を資し、往きて我が軍に說かしむ。書を平壤に投じ、辭を卑くして和を乞ふ。行長と宗義智と、惟敬とを城北に見て曰く、「明卽し和せんと欲せば、宜しく使をして海を濟らしむべし」と。因りて數條を徵す。盡く其意に順ひて、曰く、「歸りて報を取り、五十日にして復來らん」と。乃、平壤の西北十里を界とし、和、韓、俱に相踰えざるを請ふ。行長、許して遣歸し狀を秀家に告ぐ。是に於て、我兵の平壤に在る者、復西下せず。都城を復せんことを計る。秀家、攻めて之を破る。鄭湛、邊應井も亦、兵を全州に聚む。筑紫廣門、慶尙より全羅に入り、湛、應井と、熊嶽に戰ひて、之を斬る。而れども全州未だ下らず。九月、應井の弟應星、石田三成を馬灘に敗り、遂に毛利高政を春川に攻む。高政、兵を伏せて豪を擒にし、遂に江原を定む。鍋島直茂、相良賴定、永興に在り。德原、咸興等の七城を取り、移りて咸興を守る。清正、咸鏡より諸俘虜を以て、還りて蓮下に至る。會韓兵二萬、梁養山を扼す。時已に十月なり。清正、軍を安邊に返し、乃、全山、橋州の諸城を修め、相與に心を協せ、韓人を按據す。す。是の時に當りて、諸將、事を秀吉に稟す。秀吉、殊に兵を退くるを使舸、海中に交ふ。是の日、秀吉、復奏請して、行營に赴く。天子詔して曰く、「征戎の事は一に將佐に任じ、輕しく海を濟ること勿れ」と。秀吉、拜謝して行く。十一月、直茂、三千人を以て韓將李希得の兵三萬

清正進擊せんとす

【大司馬】石星
李如松

明の策略

二年
【沈遊擊】沈惟敬

大受の暴動

小西如安

と咸興の北に戰ひて、之を走らす。斬首千餘級なり。清正、盡く咸鏡二十二營を收め、遂に北道より長驅して遼東に入らんことを議す。未だ果さず。行長も亦、惟敬の期を過ぎて至らざるを以て、乃、怒り、令を軍中に下して曰く、「皆行具を修めよ。吾れ將に馬に鴨綠江に飮ばんとするなり」と。義州之を聞きて荷擔して立つ。韓王、書を飛ばせて明に告ぐ。明の群臣、議して曰く、「惟敬の說、信ず可らず。秀吉、殊に兵を退くる意なし。曩者には暑濕を以て敗を取る。今、天寒く馬肥ゆ。宜しく兵を出すべきなり」と。翊鈞、猶豫して未だ決せず。令を懸くるやう、「能く奇計を獻じ、東藩を復する者あらば、萬金に購ひ、伯爵に封じ、之を子孫に襲がしめん」と。敢て應ずる者なし。衆、少司馬宗應昌を推して曰く、「應昌は、去歲上書して秀吉、必ず來ると言ふ。是れ兵を知るなり」と。翊鈞、遂に應昌を拜して都御史と爲し、東北を經略せしむ。劉黃裳、袁黃を贊畫と爲す。而して兵に將たる者を選ぶ。李如松の材武、天下無雙と稱す。其寧夏を平げて旋るに會ふ。則拜して大將と爲し、六將軍を率ゐて、東、秀吉を拒がしめ、期するに十一月を以て北京を發せしむ。獨大司馬、猶前議を持し、復惟敬を遣し、平壤に至りて秀吉の意を伺はしむ。惟敬、平壤の城中に留り、行長と密に義を定めて去る。而るに如松等の大兵、已に遼東に至る。惟敬、之を路に要して曰く、「嬙、將に成らんとす。和人、平壤を棄てゝ大同江を界として、退くを約す」と。如松方に功を立つるに銳意にして惟敬の言を懌ばず。執へて之を斬らんと欲す。應昌等、說きて曰く、「宜しく此を舍し、因りて敵を怠らしめて之が襲ふべし」と。如松、之に從ひ、遂に鴨綠を渡る。會降虜の我が耳目を爲す者、韓相の爲に摘發せられ皆拘繫に就く。故を以て明軍の至るを知らず。二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將査大受をして、先つ順安に往かしむ。大受、人をして來りて告げしめて曰く、「沈遊擊至り、和議成る」と。行長、喜び、亦一將をして二十人を以て順安に會せしむ。大受誘ひて與に酒を飮む。伏起る。二十人搏戰し、其三人を亡し、走りて平壤に還る。行長、大に驚く。丹波の人內藤如安、行長の侍史たり。小西氏を冒して飛驒守と稱す。是に於て、行長、如安に命じて往きて如松を詰らしむ。如松、慰解して遣還す。而して六日、諸軍を以て平壤

（平壤合戰之圖）

行長平壤より退く

に至る。江水方に合ふ。蹈みて渡り、鳳山に至る。敗を聞き、兵を引きて行長を迎へ、代りて殿して鳳山に薄る。行長、宗義智等と、急に守備を修め、使を馳せて急を告ぐ。使者未だ歸らず。如松、已に先鋒を以て含毬門を攻む。我が兵、擊ちて之を卻く。其夜、出でゝ李如柏の營を襲ふ。利あらず。其明、明軍大に至る。如松は小西門を攻め、如柏は大西門を攻め、吳惟忠、駱尙志は北門を攻め、祖承訓は南門を攻む。承訓、奇功を立て、前敗を償はんと欲し、我か韓人を易るを知るや、其兵に皆韓裝を倘へ、故に踏囲して進まざらしむ。行長、以て韓人と爲す。專西北を距ぎ、銃手を率ゐ、擔ちて如松を卻く。如松、益大礮、火箭を用ゐ、毒烟、城を蔽ふ。我が兵、殊死して戰ふ。承訓、乃、韓裝を脫し、明の甲を露し鼓譟して登る。行長、驚き急に兵を分ちて之を拒ぐ。而れども西北卽陷る。行長、退きて牡丹臺を保つ。明軍、四面より堞を攀づ。我が兵力めて拒ぎ、刀鎗攢り垂れ、蝶蝟の如し。明兵、死傷數千人、拔く能はず。退きて城外に營す。行長の將木戸某、說きて曰く「鳳山の兵來り援けず。吾れ孤城を以て大敵に抗す。終に支ふ可らず。蓋ぞ退きて諸將に合して、以て再擧を圖らざる」と。行長之を然りとす。卽夜、潛に衆を率ゐて、城を出でゝ江を

聞き所在並び起ちて、明軍に應ず。

宋應昌等、謀りて曰く、「秀吉の將帥、皆王城に萃る。通ぜじ。虛喝して取る可きなり」と。辯士馮仲纓をして、譯を以て淸正に說かしめて曰く、「和、故なくして韓を攻む。韓、急を明に告ぐ。明の皇帝、大に怒り、大兵を遣して韓を救ふ。平壤を復し、開城を復し、遂に國都を復し、浮田、小西を擒にし、盡く其兵を逐ひ、琉球、遐羅の諸國をして和の境を壓せしむ。而るに猶韓を守る。誰が爲にせんと欲するか。皇帝、足下の高義を聞き、使臣をして爲に之を報告せしむ。足下の計を爲すに、速に韓の王子を返し、軍を收めて、和に歸るに若くは莫し。否らずば、則明軍四十萬、韓兵を驅りて東し、直に安澳萃らん。足下、明に服せんと欲すと雖、得んや」と。淸正、侍史をして之に答へしめて曰く、「淸正、國命を奉じて戰ふを知る。明の令を聽きて和するを知らざるなり。歸りて明主に語れ、我に敝甲凋兵あり。近ごろ事無きに苦しむ。貴國の來り伐つとは、已に命を聞けり。而れども咸鏡の途は險阨にして、騎は比行すべからず。卒は列を成すを得ず。兵の來ること日に一二萬のみ、吾れ迎へて之を擊ち、日に一萬を殺さば四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば、二十日にして之を殲さん。既に殲して西を指し、遼を渡り燕を破り、大駕を海東に奉じ、淸正、以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。是の時に當りて、明軍、勝に乘じて敝行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤して來り會せしむ。諸城皆命を聽く。獨、小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂と、肯ぜずして曰く、「吾が士、力を竭して國に報ずること、固に今日に在り。且明軍勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行之を促すこと甚急なり。乃、退く。未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍進みて開城に入り、遂に臨津を渡る。查大受其先鋒たり。宗茂に礪石嶺に値ふ。宗茂、擊ちて之を卻く。宗茂、擊ち至る。隆景、三萬人を以て碧蹄館に邀擊し、大戰良久しくす。宗茂、秀包、を以て平壤を襲ひ、一戰して志を得、和兵、復、畏るゝに足らずと謂ひ、乃、輕しく進みて銃礮を具へ

淸正明使に答ふ

【大駕】明王

小早川隆景碧蹄館の戰

明軍を破る

援軍

光泰

清正糧を奪ふ

沈惟敬和を計る

す。短兵を以て接戰す。我が軍、兵銳にして双利し。縱橫に揮ひ擊つ。人馬皆倒る。敢て其鋒に當る莫し。我が兵の呼聲天を動かす。遂に大に明軍を破り、斬首一萬許り、殆ど如松を獲へんとす。北ぐるを追ひて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲に流れず。如松、痛哭して夜を徹し、敗軍を聚め、退きて坡州に入る。韓の將相、其再進を請へども肯ぜず。時に天雨ふり氷釋く。如松、託言すらく「坡州は泥多く、營を爲す可からず」と。遂に退きて東坡に入る。二月、猶雨ふる。明の馬多く病みて斃る。我が兵、火を縱つて進む。如松、退きて、開城に入り、人を遣して明に還し、病と稱して代を請ふ。而れども韓人の我に寇する者衰へず。我兵の幸州に在る者、亦韓將權慄の爲に敗らる。秀家等、乃ち使をして清正を召さしむ。清正、橘中の寇を平ぐ。斬首虜三千餘級。直茂、賴定、と皆都城に之く。明兵相驚きて曰く「清正、北道より繞りて平壤を襲ひ、我が歸路を扼す」と。如松、大に惧れ、諸將を留めて臨津を守らしめ、自退きて平壤に入る。秀吉、毛利秀元、加藤光泰、紐川忠興等の七將をして赴き援けしむ。三月、晋州を攻む。晋州城、險なり。韓王の奔るや、其重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將、皆大に敗れ、退きて、都城に入る。都城の傍に龍山倉あり。我が兵、食を仰ぐ。沓大受、李如梅、兵を潜めて倉を火く。而して金命元等臨津の南に軍して、我が糧道を絶つ。已にして我と明軍と、皆大に疫す。三奉行、清正も亦、之を爭ひて曰く「吾れ孤軍を以て强胡數萬を破る。明、韓の兵、何ぞ意と爲すに足らん。何ぞ其糧を奪はざる」と。三成曰く、「公、宜しく往きて奪ふべし。助けを人に取るを得ざれ」と。清正曰く、「諾」と。即夜、半兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪ひて還る。時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に赴き、報じて曰く、「秀吉は日本國王に封ぜらるること足利氏の故事の如きを欲するのみ」と。因りて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賂ひて曰く、「太閤、韓俘を歸さば、則慶尙、全羅、忠淸の三道を割きて封じて王と爲さん」と。行長等、素より不學、封王の故事を諳ぜず。以て明に王たるの謂なりとなし、之を許

秀吉和を許す

【龜甲車】其形、龜の如し、牛革にて外をつつめる堅きつ板の箱車に輪して、内に輸あり、兵、箱中にあり、棒にて進退を操る

黒田孝高の評

さんと欲す。已にして其非を知る。惟敬、巧に之を彌縫す。清正、其議を可かず。行長、三奉行と、皆歸らんことを懼ひ、乃、秀吉に報じて曰く、「明人、殿下を尊びて皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉、乃、和を許す。惟敬、都城の兵を解かんことを請ふ。諸將、乃、城を焚き、更、殿して東す。如松、乃、肯て進まず。韓相柳成龍、之を尾擊せんと請ふ。乃、李如柏等の萬餘人を遣す。我が陣の整へるを覩て、敢て逼らず。諸將、慶尙に至り、蔚山、東萊、金海、巨濟等の十八屯を起して、秀吉の令を俟つ。明主、孫鑛を以て宋應昌に代へ、劉綎、吳惟忠等を遣し、分ちて星州、居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓、沈一貫、沈惟敬をして、來りて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を饗して之を還し、小西如安を遣し、與偕に淸正の俘へし所の二王子、大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其封を奪ふ。遂に在韓の諸將をして、兵を合せて晋州を圍む。城兵、益〻〻懼なり。我が軍、濠を塡め、竹楯を蒙りて仰ぎ攻む。城上の矢石注ぐか如し。淸正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。淸正、黒田長政と先登す。諸將、之に繼ぐ。城將、徐禮元、金千鎰等を斬り、六萬餘人を鏖にし、城地を夷けて返る。禮元の首を醢し、之を行營に獻じ、仍故地に屯す。韓王、大に懼き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來りて行長に見えしめて曰く、「公等、和を許し、未だ十日ならざるに、晋州の事あるは何ぞや」と。行長、怒りて曰く「汝、和を請ひて、明兵の韓に入る者益〻衆きは何ぞや」と。惟敬、語塞がる。去りて北京に至り、石星に請ひて、如松以下を召し還さしむ。獨、劉綎、吳惟忠等萬人を留む。明主、如安を疑ひて、敢て納れず。之を邊東に舍せしむ。秀吉も亦、如安の久しく還らざるを以て、惟敬、己を欺くと意ひ、日夜軍事を謀議す。黒田孝高、私に同僚に語りて曰く、「吾れ聞く、『外征の諸將、威ありて恩なし。過ぐる所殘滅せざる無く、夷民逃れ匿れて、野に靑草なし』と。是れ其地を得るも、果して何ぞ益せんや。且聞く、兩先鋒、功を爭ひて相鬪ぎ、法令牴牾し、衆、從ふ所を知る莫し。而して浮田宰相、之を制する能は

秀吉自ら韓地に進まんとす

淺野長政秀吉を諫む

秀吉怒りて長政を斬らんとす

ず』と。夫れ浮田は、統御の才に非ざるなり。能く此任に堪ふる者は、德川に非ざれば則前田、若しくは孝高のみ」と。秀吉、側に聽きて之を首肯す。已にして大に諸將を召し、行臺に會議して曰く、「朝鮮の事、今日の狀の如くば、則何れの時にか定まらん。乃公、自往かずばある可からず。吾れ家康を留めて、吾が邦を守らしめば、復顧慮する所なし。今國内の兵を擧ぐれば、少しと雖、猶三十萬を得べし」と。因りて諸將を顧みて曰く、「利家、汝は五萬に將たれ」曰く、「氏鄕、汝も亦五萬に將たれ。吾れ親十五萬に將として、中軍と爲り、汝二人を左右にして、朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ。吾が意決せり」と。德川公愕然たり。利家、氏鄕に謂て曰く、「二公、群中に擢でらる。榮孰かこれより大ならん。僕、少小より弓馬を事とす。今老いたりと雖、猶以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さんや。二公、幸に之を推輓せよ」と。彈正少弼、進みて曰く、「德川公、復言ふ勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼れ野狐に憑らるか」と。秀吉、怫然として刀を控へて跪きて曰く、「吾を狐憑と爲す、說あるか。說なくば則死せよ」と。少弼、對へて曰く、「說有り。儻說無くとも、臣固より死を辭せず。且臣等の頭の如きは、千百を刎ぬと雖、何ぞ惜しむに足らんや。顧ふに天下纔に定り、瘡痍未だ癒えず。人々、休息無爲を希ふ。而るに殿下、乃、故なき軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして骸骨を海外に暴さしむ。哭泣の聲、四に聞ゆ。之に加ふるに、漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野と爲る。是の時に當りて、殿下一たび趾を擧げば、則六十州の寇賊、雷動風起せん。德川公ありと雖、安ぞ之を鎭定するを得んや。是れ其外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師、未だ釜山に達せざるに而も根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢の最も親易き者、殿下をして平昔の心有らしめば、豈此を察せざること有らんや。此を察せざる故に之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く、『鼈は人を啖はんと欲して、反りて人に啖はる』と。殿下の謂なり」と。秀吉、益怒りて曰く、「狐か鼈か、吾れ且くこれを舍てん。臣を以て君を罵る、舍つ可からず」と。將に刀を拔きて之を斬らんとす。利家、氏鄕進みて之を擁して曰く、「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲

肥後の賊起る

韓王都城に歸る

虎獵

秀賴生る

三年伏見城加藤光泰卒す

和議如安明主を見る

せば、必しも親手を勞せじ」と。因りて少弼を斜睨して曰く、「去る可し」と。少弼、乃、徐に起ちて舍に還り、罪を待つこと數日、變事を上る者あり、「肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取る」と。秀吉、方に驚き、急に少弼を召し、謝して曰く、「吾れ甚汝に慚づ、汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往きて肥後を定めしめん」と。因りて德川公に命じ、其將本田忠勝を以て、之を助けしむ。未だ發せざるに、肥後の人、梅北を斬りて來り獻ず。少弼に命じて、其國を按定せしめ、韓の戍卒を減ず。八月、淺井氏、復、男を生む。秀吉、大に喜び、前田利家をして軍事を攝せしめ、自大阪に歸る。生める所の男、幼字を棄丸と命ず。長じて秀賴と曰ふ。

韓王、乃、敢て都城に歸る。淸正、其俘を喪ひ、心甚慚ぢず、又和議の必成らざるを知る。十一月、進みて安康を攻め、大に之を破る。虜、尤淸正を畏れ、呼びて鬼上官と曰ふ。時に韓の野に尸多く、虎豹群り至る。我が將士留り戍る者、因りて大に之を獵し殺獲無數なり。其尤大なる者を檻して之を獻ず。

三年正月、伏見に城き、卒二十五萬人を興す。將帥の萬石以上は皆役を助く。三月、秀吉、秀次及び德川、前田の諸將と吉野に遊ぶ。四月、有馬の溫泉に浴す。是の年、加藤光泰、卒す。初め石田三成・韓都の議合はざるを以て、光泰と隙すること甚深く、遂に之を毒せしなり。嗣子貞泰、猶幼なり。邑を美濃に徙し、甲斐を以て淺野氏に賜ふ。

是の時に當りて、韓の戍未だ撤せず、韓王、數〻明を促して和を定めんとす。十月、明主、如安を召す。石星、沿道に命じて供帳せしむ。十二月、燕に至る。星、就きて其館に拜し、待するに王公の禮を以てし、厚く之に賂ひ、曲げて其媾を成さしむ。如定、之を延見す。如安、騎して入り、闕に至る。衞士、呵して之を下す。如定、昂然として下らず。入りて明主に見ゆ。明主諸〻の將相大臣をして左闕に會せしめ、秀吉の意を悉問す。如安、答ふる所、勉めて星の意に副ふ。明、乃封王の

四年蒲生氏鄕卒す

明使淀君秀次

殺生關白

黑田孝高秀次を諫む

議を定め、正使李宗誠、副使楊方亨を遣し、沈惟敬を以て導と爲す。惟敬、缺望す。且、星を難じて曰く、「前に七事を約す、今止封册のみ。事必成らじ」と。星、聽かず。如安、三使と皆發す。

四年二月、蒲生氏鄕、卒す。幼子秀行嗣ぐ。尋ぎて之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝に封ず。

三月、伏見城成る。秀吉、徙り居て、明の使者を俟つ。淺井氏を淀に置く。世、淀君と呼ぶ。淀君、既に秀頼を生む。而して秀次、位を避くるの意なし。故に以て秀吉、伏見に城きて、秀次に讓り、秀頼に予ふるに大阪を以てせんと欲するなり。秀次、人と爲り頑放、其聚樂を留守するや、淫虐、日に甚し。色を漁するに貴賤を論ぜず。右大臣晴季の女、新に寡となりて孤女あり。秀次、母子を併せ取りて、之を嬖す。上皇崩じて數日なるに、出でゝ獵し、手づから近臣を刄す。夜出でゝ行人を戕ひ、櫓上より人を銃して戲と爲し、孕婦を剖かんと欲するに至る。世、呼びて殺生關白と曰ふ。殺生と攝政と音相近きを以てなり。田中吉政、其傅たり。數之を諫む。乃、事に託して吉政を遠ざく。秀吉の再行營に赴くや、外議以て秀次、當に代り行くべしと爲す。而れども殊に行く意なし。黑田孝高、之に說きて曰く、「殿下の威靈甚しと謂ふべし。文武の轂、門に相擊ち、天下の士民、其喜怒を視て、慶弔を爲す。殿下其故を知るか」と。秀次曰く、「吾れ關白たるの故のみ」と。曰く、「否、殿下、太閤を以て叔父と爲さずば、則能く關白と爲るを得んや。太閤、年已に六十、猶甲を枕して眠る。而るに殿下は恬然として獨嗜慾を縱にす。何ぞ自省ざるや。夫れ位大臣を極め、而して望み天下に厭かず。怨の萃る所、姦の乘ずる所なり。臣、竊に殿下の爲に之を危む。殿下の計を爲すには、宜しく那古耶に赴き、代りて軍事を統ぶべし。太閤已に兵事に倦めり。心喜びて之を許さん。功を立てゝ自固くせば、誰か之を動すことを得ん。願くは殿下、之を熟思せよ」と。蒲生氏鄕も亦、其海を濟るを勸め、自其先鋒爲らんと請ふ。秀次、皆納れず。流言あり、「關白反を謀る」と。秀吉、問はず。秀頼、生るゝに及びて、秀次、自廢せられんかを疑ひ、益聊頼せず。石田三成、增田長盛、之と郤あり。秀吉の旨を希ひ、數之を惡す。初め常陸介木村重玆、秀吉に寵あり。而して三成、其寵を奪はんと爲し、乃、

秀次誓書を秀吉に呈す

秀次高野山に入る

秀次自殺

聚樂を毀つ

秀俊卒す

秀次に結ぶ。秀次、自、怨を取ること多きを知るや、出遊する每に輙鎧仗を具へ、又厚く諸侯伯に贈りて之と誓ふ。三成、長盛、因りて其を反形ありと證す。

七月、秀吉、三成、長盛、及び前田玄以をして、就きて之を詰問せしむ。秀次、大に駭き、誓書七通を獻ず。秀吉、意稍解く。翌夜重玆、婦人の車に乘りて聚樂に入り、漏を盡して出づ。三成、偵知して告ぐ。曉に比びて、秀次、德川氏の嗣子を促し、朝參せしめ、因りて劫して質と爲さんと欲す。嗣子、走りて伏見に歸る。毛利氏も亦、秀次の擬する所の誓書を獻ず。秀吉、大に怒り、使をして、秀次を召さしむ。秀次の愛將吉田修理、萬人を假りて、夜、伏見を襲はんと請ふ。聽さず。遂に赴き謁す。見ゆるを許さず。命じて之を高野に放ち、僧興山に附して監守せしむ。興山は、南征の時、首として款を納れし者なり。是に於て、奏請して、秀次の在身の官爵を削り、廢して庶人と爲す。三成、遂に之を殺さんことを勸め、潛に興山に諷して、其自裁を促さしむ。秀吉、遂に福島正則を遣し、就きて死を賜ふ。然れども興山、其命を乞ふを冀ふ。聽さず。正則還りて秀次の首を獻ず。秀吉、愕然として曰く、「山僧無情なり」と。三成、請ひて之を京師に梟し、其妻兒姬妾三十餘人を併せて、皆之を斬り、之を一坎に瘞め、名づけて畜生塚と曰ふ。聚樂を毀ち、諸邸第を伏見に徙し、召して吉政を賞し、秀次の地を分ちて、福島正則に予ふるに淸洲を以てす。木村重玆、以下を誅夷す。重玆、遺腹の子あり。重成と曰ふ。其母、嘗て秀頼を乳養す。故を以て、秀吉、召して重成に祿し、長門守に任じ。以て秀頼に隷す。三成、既に重玆を誅し、遂に伊達、最上氏も秀次に黨せりと誣ふ。匿名書あり。曰く、「伊達、最上は、豐臣を分ちて覇たらんと欲す」と。秀吉、笑ひて曰く、「是れ怨家の爲す所のみ」と。乃、皆之を釋す。淺野左京大夫の書記芹川藤助といふ者、亡命して三成に歸す。三成、僞りて舊主、聚樂に通ずる書を作らしめて、之を上る。因りて兵を發して淺野氏を圍む。前田利家、爲に其寃を白す。秀吉、藤助を捕鞫して實を得たり。乃、淺野氏に還して之を磔す。

是より先、大納言秀俊卒す。秀俊も亦昏暴なり。嘗て蜻蜓瀑を觀、左右に命じて自湫に投ぜしむ。左右之

明の三使

慶長元年【蟒服】大蛇の章ある服

明使

凱旋

地震

清正

と倶に渡す。嗣なくして國除かれ、郡山を以て増田長盛に予へ、藤堂高虎を以て今治の城主と爲す。

是の時に當りて、明の三使已に韓の境に入り、疑懼して敢て進まず。我に兵を撤せんことを請ふ。諸將、已むを得ず。戊を釜山に約し、未だ海を濟りて歸るを肯ぜず。李宗誠は貴族の子なり。日夜歸らんことを思ふ。惟敬、因りて逐ひて之に代らんと欲す。

慶長元年正月、小西行長、歸りて和の成るを告ぐ。惟敬私に之に從ひ、地圖、兵書、蟒服、及び燕代の良馬三百匹を以て、秀吉に獻じて去る。宗誠を怖れしめて曰く、「和敗れたり。秀吉の兵、將に來りて我輩を執へんとす。」と。四月、宗誠、遁れ去る。楊方亨、計を惟敬に問ふ。敬惟曰く、「兩語あり。汝愼みて之を記せよ。我が大明を擧けて日本に奉承するのみ」と。明主、遂に方亨を以て正使と爲し。惟敬を之が副とし、多く金帛を出して惟敬に資し、封冊を齎して促し行かしめ、因りて韓をして使を發せしむ。韓、和議未だ固からざるを以て、依違として從はず。獨黄愼、朴弘長をして之に從はしめ、日を刻して發す。

五月、秀吉、秀賴を以て朝見す。詔して、秀賴を從二位に叙し、右近衞中將に任ぜらる。

六月、明、韓の使者、海を濟る。我が諸將、乃、兵を釜山に留めて凱旋す。行長、清正を嫉む。清正、二成を悪む。而し、行長之と善し。興に俱に之を譖る。清正、見ゆるを許さず。乃、增田長盛に就きて申救を請ふ。長盛曰く、「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く、「吾れ死すとも能はず」と。乃、第に歸りて命を俟つ。七月、京畿大に風靈し、地大に震ふ。伏見城壞れ、壓死せし者、數百人。清正曰く、「吾れ寧罪を犯すとも、坐ながら視る可からず」と。乃、卒二百を從へ入りて、秀吉を省る。秀吉、夫人と地に席して坐す。清正を目し、其幼字を呼びて曰く、「阿虎、若來る何ぞ速き」と。清正、由りて前みて寃を訴へ、地に書きて語り、其軍勢を陳ぶ。秀吉、顧て夫人に謂て曰く、「彼、肥皙の丈夫、今朝鮮より至る。何ぞ黠く且悍るゝか」と。乃、命じて其門を守らしむ。三成以下踵ぎ至る。入るを得ず。命を傳ふる者あり。「特に三成を納れよ」と。清正、大聲、其辛に命じく曰く、「短小の佞竪をして入れしめよ」と。旦日、秀吉、

（地震清正登城之圖）

大佛

明韓使至る

清正を召見して、海外の戰狀を推問し、泣を下して曰く「阿虎、襁褓より我に育はる。乃、我に類する也」と。遂に愛遇すること故の如し。

時に震仍止まず。德川公、夜兵を率ゐて、入りて衞る。秀吉曰く、「皇宮の何如を知らず。吾れ當に卿と省るべし」と。乃、遽に出づ。從者未だ屬せず。德川公、其兵を以て之を擁して行く。道路昏黑なり。德川公の從者、其袖を撃く者あり。公、敢て顧ず。秀吉、談笑して行き、刀を脫して之を授けて曰く、「吾れ老いたり。刀の重きを覺ゆ。以て卿を煩すなり」と。公、敢て執らず。乃、井伊直政に授く。已にして秀吉の從兵踵ぎ至る。遂に入朝す。還に方廣寺の前を過る。大佛の倒裂したるを見て、罵りて曰く、「我れ若が爲に勞費を憚らず。將に若をして衆生を濟度せしめんとす。今已が身すら且保つこと能はず。何ぞ我に負くや」と。因りて弓を呼びて之を射て還る。乃、伏見城を修め、更に牙城を木幡山に作る。

八月、明、韓の使者、共に界浦に至り、二十九日、伏見に造る。秀吉、柳川調信をして韓の使者を責めしめて曰く、「吾れ兵を收む。而るに汝が國未だ三道を獻ぜず。を遣して我を辱しむ。我れ汝の入見を許さず」と。二使、行長に因りて謝せども聽さず。

明使謁見

爾を封じて日本國王とす

明韓の使者を逐ふ

再征【三道】慶尙全羅忠淸、

小早川秀秋

九月一日、毛利氏をして兵伏を列ね、明の使者を延きて城に入らしむ。諸將帥、皆坐す。頃して秀吉幄を開きて出づ。侍衞、叱と呼ぶ。二使、慴伏して敢て仰ぎ視る莫し。金印、冕服を捧げ、膝行して進む。行長、之を助けて禮を畢る。三日、使者を饗す。既にして、各、其章服を被らしめ、僧承兌を召して、冊書を讀ましむ。行長、私に之に囑して曰く「冊文は、惟敬の說く所と、或は齟齬する者あらん。子且に之を諱めよ」と。承兌、敢て聽かず。乃、入りて冊を秀吉の傍に讀む。「爾を封じて日本國王と爲す」と。曰ふに至りて秀吉色を變じ、立ちて冕服を脫し、之を地に拋ちて、冊取を書りて之を扯裂し、罵りて曰く「吾れ日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たらん。何ぞ髯虜の封を待たんや。且吾をして王たらしめば、天朝を如何せん」と。乃、行長を召し、誚讓して曰く「汝敢て我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲す。吾れ將に汝と明の使者とを倂せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長、股栗し、罪を三奉行に謝し、書牘數通を出して、謹と爲す。承兌も亦、之を救解して事纔に止むを得たり。而れども秀吉の怒り未だ釋けず。卽夜、加藤淸正、大谷吉隆、石田三成、增田長盛に命じて、明、韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣歸し、之に謂はしめて曰く「若亟に去り、而の君に告げよ。我れ將に再兵を遣し、而の國を屠らんとす」と。遂に命を西南四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以て悉く故の行臺に會せしむ。柳川調信、私に黃愼に囑して曰く「太閤の意已に決せり。速に三道を獻じ、王子をして來り謝せしめよ。不らずば則ち貴國復禍を被らん」と。愼、則ち大に驚き奔り去る。

秀吉、初め夫人の姪秀秋を養ひて子と爲し、出でゝ小早川氏を嗣がしむ。是に於て、大將と爲し、浮田秀家、毛利秀元を以て之に副たらしめ、黑田孝高を以て其參謀に充て、淸正、行長を以て其先鋒に充つ。行長をして功を立てて自贖はしむ。諸將、皆前役に遣す所、已に海外の事宜を諳ず。故を以て秀吉、復出でず。自伏見に居り、遙に方略を授け、吏を那古耶に置き、以て諸道の糧運を司らしむ。

慶長二年明使歸着す

明の兵備

我軍韓地に入る

明の政策

我戰略

二年正月、明の使者、明に至り、伴り報ず「秀吉、封を受けて拜舞して和議全く成れり」と。因りて私に海外の珍寶を貢り、號して日本の貺物と爲す。已にして吳越の將吏、變を上る。告げて曰く「秀吉の先鋒加藤淸正、已に二百艘を擁して機張に上れり」と。明主、因りて方亨を詰りて實を得。乃、惟敬を誚む。惟敬、愧謝す。因りて曰く「秀吉、韓を責むるのみ。久しからずして將に去らんとす」と。明、信ぜず。乃、東北の守備を戒め、復大に兵を募り、邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉綎、董一元等を遣し、率ゐて東下せしむ。諸將、皆智勇を以て其國に聞ゆる者なり。我が兩先鋒、已に海を濟り、其戍兵を倂す。行長は、釜山に軍し、淸正は、機張より梁山を攻めて、之を陷れ、榜して之を諭して曰く「太閤、吏に命じて、朝鮮王を責問し、兵を東邊に屯し、以て其報を俟つ。汝民各其居に安じ、敢て擾亂することなかれ」と。

二月、孝高、秀秋を奉じて釜山に至り、山海の勢に因りて壘寨を列ね、舟艦を聯ねて、以て根據の地と爲し、令を出し暴掠を禁ず。而れども諸道、風を望みて潰奔す。時に韓地、荒廢して糧の因る可きなし。我が海運、亦未だ達せず。諸將、故を以て輒く進まず。聲言すらく、「朝鮮三道を獻じて約の如くせば、乃ち止りて復深く入らじ」と。

韓王、李元翼をして鳥嶺を守らしめて、自海州に奔り、急を明に告ぐ。明の君臣、罪を石星に歸して、其官を奪ひ、且議して曰く「地を割くの議は、惟敬の託言より出づ。忠淸は韓の府藏、全羅、慶尙は韓の門戶、皆其重地にして、明の海路も亦恃みてこれを藩屛と爲す。彼が舟帆、晨に發して夕に至り、天津、登萊は、明の有に非ざるなり」と。因りて惟敬を宥し、往きて更に爲に說きて和の兵を弭めしむ。

淸正、行長、人をして、返りて、韓の地を獻ぜざるを告げしむ。秀吉、報じて曰く「當に韓の穀の熟するを俟ち、進みて全羅に入り、以て諸城を攻むべし。必攻め破りて後已めよ」と。且行長等を戒めて曰く「前に

我をして志を得ざらしめしは、全羅の水軍なり。此行必之に報いよ」と。

惟敬書を清正に遣る

惟敬、南原に在り。明主、數其効を責む。韓人も亦、之を指目して曰く、「是れ左右に國を賣る反覆の臣なり。明を罔し和を欺き、而して韓をして其弊を受けしむ」と。惟敬、大に窘し、又石星已に獄に下ると聞きて則恐る。因りて度りて以爲らく、「行長は和を主とし、清正は戰を主とす。先清正を退けんに若かず」と。因りて書を清正に遣りて曰く、「三國和を媾じ、將に無爲に歸せんとす。而るに足下は太閤に勸めて之を敗る。明主、邢總督に命じ、精銳七十萬を以て、將に首として足下を擊たんとす。足下、速に和を請ひ兵を弭めよ。然らずんば、禍踵を旋さじ」と。

清正終書

清正、答書して曰く、「吾れ每に朝鮮の兵の羸弱にして、與に較ぶるに足らざるを病ふ。今、明軍と當に一快戰を作すは、吾が願ふ所のみ」と。惟敬、書を得て爲す所を知らず。乃、行長に因りて、我に投歸せんと欲す。行長、之を許す。邢玠、遼東に在り。之を聞きて曰く、「彼れ日本に入らば、必我が腹心の害を爲す者ならん」と。乃楊元をして三千人を伏せ、其走路を要して之を捕へしむ。尋いで誅せらる。而して我れ明と遂に絕つ。

明と絕つ

明軍、已に全羅に至る。楊元は南原に在り、陳愚衷は全州に在り、韓將元鈞は閑山、唐島に在り、水陸相援けて、全羅を守る。

水軍

七月、我が水軍の諸將議して唐島を攻む。藤堂高虎、脇阪安治、先發す。韓、數百艘を以て逆へ擊つ。高虎、安治、親鎗を揮ひて力戰す。加藤嘉明、後れて至り、敵の一大艦に遇ふ。艦上に卒を列ね。弓を張り滿を持して之を擬す。嘉明、刀を拔き、躍りて其艦に入る。敵敢て發せず。嘉明、立所に數人を斬り、遂に其艦を奪ふ。諸將、因りて奮擊して、大に之を破る。元鈞、兵を收めて閑山を守る。而して明將楊鎬、麻貴等、繼ぎ至る。韓、鈞をして進みて釜山を擣かしむ。初め鈞、李舜臣と、並に水軍に將たり。行長、間に人をして韓に告げしめて曰く、「清正、首として媾を敗る。吾れ深く之を嫉む。今孤軍にして先に渡る。宜しく襲ひ之を執ふべし」と。韓王、乃、鈞、舜臣に命ず。舜臣、肯ぜず。鈞、其逗留を劾す。王、舜臣を召して之を獄に下す。鈞、是に於て、獨將たり。此命を受くるに及び、自進まざるを得ず。乃、水路の諸軍を合せて釜山に起く。行長、之を聞き、八月、兵を加德に伏せ、舟兵を以て絕影島に逆へ擊つ。會日暮れ風濤大に起る。我が軍、伴り退く。鈞、兵を縱ち濤を冒して進む。加德に至るに比びて、飢渴し、舟を下りて飮を取る。伏兵起る。行長之に返り、夾み擊ちて、大に鈞の軍を敗る。鈞、逃れて亘濟に至る。行長、復夜、之を襲ひ、遂に鈞を斬り、勝に乘じて西向し、連に南海、順天を陷れ、豆恥津より陸に上る。而して清正の兵は、西生浦より、慶州を歷て全羅に入る。諸城、其旗を望みて曰く、「鬼上官至る」と。戰はずして潰ゆ。清正、進みて行長と合し、黃石城を攻めて、之を陷る。守將郭趁、趙宗道等、みな死す。我が軍、乃、二道より並び進む。清正は雲峯よりし、浮田秀家、之に繼ぎ、行長は密陽よりし、毛利秀元、之に繼ぐ。兵各五萬、南原に會す。韓の元帥權慄、雲峯に軍す。清正の軍を望み、守を棄て、逃る。我が諸將、島津義弘、加藤嘉明をして、全州の援路を絕たしめ、軍を合して南原に入り、書を楊元に投じて戰期を約す。元、壘を高くし塹を深くし、衆を盡して捍禦す。諸將、疾く攻むること兩晝夜、已にして兵を退け、城兵の倦み且息ふを窺ひ、則復進み卒を一面に伏せて、三面は塹を塡め、踏藉して登る。元、帳中に在り、裸跣して走る。其率ゐる所の遼東の突騎數千、門を爭ひて馳せ出つ。伏兵之を要し、刀を奮ひて馬足を斫る。適ま月明なり。明の騎、睨するを得る者なし。韓將李福男等、みな死す。我が軍進みて、全州に向ふ。州民素より陳愚衷の徵求に苦しむ。南原陷ると聞くに及びて、皆逼走す。明兵、之を阻みて、多く韓人に傷けらる。愚衷、遂に城を棄てて走る。會麻貴、牛伯英等を遣し、南原を援けんとして及ばず。愚衷と兵を合せて、公州に軍す。

清正の兵

南原の攻圍

韓の水陸軍

兵を引きて徑に忠清を出でゝ、我が諸將、糧を全州に因り、終に國都に入らんことを議す。

益なしと謂ふや、李元翼をして、

韓王、水陸の軍、敗れしと聞き、鳥嶺の守、我か軍鋒を阻せしめ、復李舜臣を起して、三道の水軍を統べしむ。舜臣は錦島に至り、我が將菅正陰と、碧波亭下に遇ふ。大礮を以て潮に乘じて來り攻む。正陰、敗死す。舜臣、因りて明の水軍の將陳璘と古今島

明軍を破る

我守備

明の戰略

蔚山を攻撃せんとす

に軍し、以て我が水軍を扼す。

而して我が水軍の一隊は、秀元を以て將と爲し、黑田長政を先鋒となし、進みて國都に迫る。九月、全義館に軍し、明將解生を稷山に擊つ。明將楊登山、牛伯英、來りて我が軍を衝く。長政の將後藤基次、栗山利安、鎗を揮ひて之を拒ぐ。殺傷相當る。登山、伯英、退きて生と合し、川を濟りて橋を斷つ。我が兵、流を絕ちて渡り、擊ちて之を走らす。明軍、復大に至る。長政の將母里友信、原種良等、力戰す。秀元も亦至り、擊ちて明軍を卻く。

是に於て、明軍、國都に在る者、敢て出でず。我が軍も亦、持重して進まず。天漸く寒し。十月、清正、退きて蔚山を守り、行長、退きて順天を守る。諸將、營を連ねて釜山と聲援を相爲す。明乃、李如梅を遣し、來りて谷城を取らしむ。遂に毛利秀包を星州に攻む。取る能はず。秀包も亦、兵少きを以て退きて求禮を守る。

十一月、邢玠、韓に入り、都城に聚議して、以爲らく「和兵の持重するは、秀吉の親濟るを待つ者の若し。其志、小に在らず。宜しく今に及びて、之を擊つべし」と。會明の諸道の募兵皆至る。乃、分ちて三と爲し、李如梅は左軍に將とし、高策は中軍に將とし、明の三十三將と韓の七將とを分ちて三軍に屬し、楊鎬、麾貴を以て之を統べしむ。糧餉、火器、皆豐備を極む。十二月を以て邁み攻めんと期す。我が諸將、之を聞きて、釜城壘を修む。清正、西生の營寨を巡視して、裨將加藤清兵衞を留めて、毛利氏の援卒と俱に蔚山を修む。明の諸將、議して曰く「秀吉の諸將、清正、最勇悍なり。先清正に克たば、則餘は風に從ひて解けん」と。乃、高策を彥陽に留めて、以て釜山の援路を絕ち、而して李如梅、解生等は皆蔚山に萃る。蔚山の土木未だ竣らず。其役卒、明軍の至るに駭き、入りて清兵衞に告ぐ。清兵衞、出でて戰ひ、伏に陷りて大に敗れ、城に入りて嬰り守る。淺野左京大夫、毛利氏の將太田政信、宍戶元繼等を率ゐて、將に蔚山に往きて役を監せんとす。

彥陽の戰

海野幸長の軍奮擊す

島山

蔚山の籠城

淸正の援軍

行きて彥陽に至り、高策と嶺を夾みて舍し、未だ相知らざるなり。曉に比びて、我が斥兵、嶺に上り、明の先鋒の爲に獲へらる。我が軍、乃ち、覺る。政信、元繼、說きて曰く「衆寡懸絕す。疾く走りて蔚山に入るに若かざるなり」と。大夫曰く「幸長、兵を提げて此に至り、未だ明人の旗を覩ずして逃れなば、何の面目ありてか太閤に見えん。公等、走らんと欲せば卽ち走れ。吾れ當に此に死すべし」と。乃、其將の太田、岡野、龜田、森島、四人を遣し、銃隊を率ゐて進み、明の先鋒を逆へ擊ちて、之を卻く。大夫、高皐に在りて、策の軍の嶺を踰ゆるを望見するや、其戰沒を恐れ、人をして之を召し還さしむ。肯かず。奮擊して數百人を斃し、獲る所の甲首を獻じ、且曰く「明兵の衆き、之を望むに際無し。請ふ、君、速に退け」と。大夫、怒りて曰く「吾れ豈衆を聞きて退かんや」と。自徽號を揚げ、衆を麾きて進む。將士之を親て、爭ひて明軍に赴く。大夫、身に十餘創、被れども、猶進みて已まず。龜田、力諫し、一從士をして其轡を回さしめて、刀鞘を以て馬を鞭つ。馬、蔚山に奔る。策の兵、追躡す。岡田某、福永某、返り戰ひて死す。淸兵衞、望み見て、城を出でゝ迎へ入る。元繼、明軍に隔てらる。間路より島山に入る。島山は蔚山の別堡なり。時に楊鎬、李如梅等、已に蔚山の外郭を破る。大夫、淸正に代りて將士を率ゐ屬し、壁に嬰りて之を守る。明兵、大夫を以て淸正と爲し、必之を獲んと欲して、攻擊すること甚急なり。大夫、自ら銃を放つ。命中せざる無し。時に門を開きて突戰す。殺傷過當なり。二城の間に川あり。李芳春、解生、兵艦を泛べて之を絕つ。城兵、銃して其五艘を破り、數千人を溺らす。而れども敵勢衰へず。麾貴、茅國器、衆を鼓して壁を攀づ。前なる者墜つれば後なる者登り、晝夜歇まず。城兵、急を淸正に告げんと欲す。淸正、時に機張に在り。相去ること三日程、敵衆、道路に充塞す。大夫曰く「誰か往く可き者ぞ」と。近臣木村某、奮ひて往かんことを請ふ。大夫、之を壯なりとし、予ふるに善馬を以てす。已に門を出づれば、明兵麇集す。木村、一騎にて萬衆の中を馳突して、一日一夜にして機張に達り、淸正を見て急を告ぐ。淸正、大に驚き、袂を投じて起つ。左右或は之を止めて曰く「蔚山、孤城を以て大敵の衝に當る。而して我が寡兵、之を援ふも、

終に保つ能はじ。之を弃つるに若かざるなり」と。清正曰く、「彈正、我に囑して曰く、『緩急、幸に我が兒を援けよ』と。今之を敵に餒せば、何を以て天下に立たん」と。乃、見兵五百人を率ゐ、人ごとに糧食を負はしめ、舟に登りて赴き援く。明の候船と江中に戰ひて、之を走らす。清正、自ら銀兜鎧を蒙り、薙刀を杖つき、船首に立ちて、士卒を指麾す。明・韓の諸軍、指目して敢て近づく者なし。遂に蔚山に入る。鎬、貴、將士に謂て曰く、「清正、定めて城に入らん。猶虎を檻して之を刺すが如きなり」と。明日、諸軍を合せて、蟻附して上る。清正、士卒に令して、大石、巨材を投じ、擊ちて之を卻く。卽夜、數百騎と明軍を襲ひ、大に獲て還る。敵、更に飛樓を起て、火筒佛郎機を以て、百道並び攻む。城壘震ひ裂く。清正、大夫と堅守して屈せず。鎬、貴、其力取す可からざるを知り、乃、令を下して戰を休め、合圍すること十晝夜、我が汲道を斷つ。城兵飢渴し、皆紙を嚙み、壁土を煎り、馬を刺して其血を飲む。馬盡く。乃、溺を飲む。夜、城外に出でゝ、明人の尸を拽り、其佩ぶる所の粮糧、牛炙を取りて之を食ふ。天、大に雪ふり、士卒凍餒して指を墜す者あり。而れども清正、意氣自若、益守具を修め、銃及び紙礮を用ゐて、日々明兵數千人を斃す。鎬、貴、夜、伏を設けて、曉に營を焚きて退き走ること數里、以て城兵を誘ふ。城兵、追はんと欲す。清正、許さず。曰く、「彼れ火を擧げて退く。退きて殿を設けず。夜を以てせずして、曉を以てす。是れ將に我を誘ひて、之を殲さんとするなり」と。之を久しくして、明の伏、稍出でて終に復之を圍む。浮田氏の卒、亡けて明軍に在る者あり。呼びて城上の人に語りて曰く、「楊經理、媾和を願ふ。加藤公と之を面議せんと欲す。城外百步を期して相見ん」と。清正、往かんと欲す。大夫曰く、「敵情測る可からず。公、太閤の命を受けて一方の重寄たり。輕しく出でゝ、笑を外國に貽すこと勿れ。然りと雖、出でざれば之に怯を示すなり。度るに彼れ未だ公の面を識らず。僕請ふ。公の爲に代り行かん」と。衆、遂に兩ながら之を止む。故に會期に後るゝ者あらむ。後る可らず」と。長政、卽馳せて明軍を蹂躙す。藤堂高良等、槍を揮ひて之に繼ぐ。清正、大夫と乃ち門を開きて合擊す。敵衆、崩れ駭く。獨、其將吳惟忠、茅國器、殿して回り戰ふ。吉川廣家、奮擊して、之を走らす。明軍大に走り、糧仗を遺弃して野を蔽ふ。諸將の蔚山を救ふや、明、我が空虛を候ひ、一軍は梁山を襲ふ。浮田秀家、立花宗茂をして般丹に邀へしめ、燒きて之を走らす。

明主、蔚山の敗聞を得て、其下と議して曰く、「是の役や、之を謀ること年を經て海內の力を傾け、加ふるに朝鮮の兵を以てして、必ず克を期せり。今、乃、此の如し。罪當に

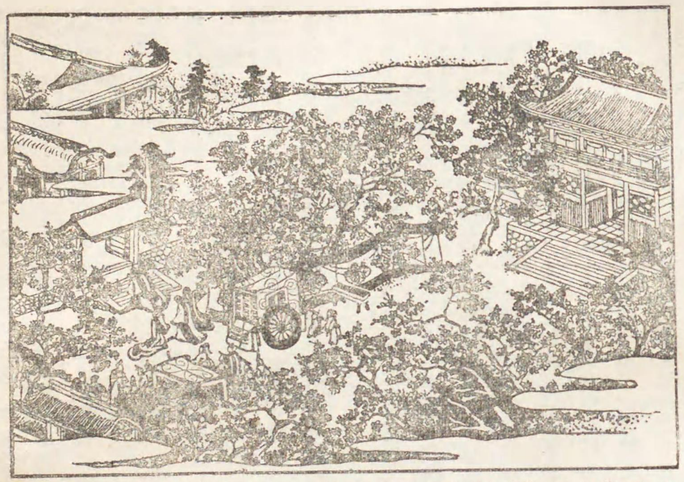
清正蔚山に入る

籠城の苦心

蔚山を援けんとす

慶長三年

（秀吉醍醐花見之圖）



き援はすばある可からず」と。諸將、之を然りとす。豐臣秀秋、毛利秀元、黑田長政、加藤嘉明、森忠政、蜂須賀家政、藤堂高虎、其子高良、脇阪安治等、騎卒五萬を將ゐ、彦陽、昌原より、道を分ちて赴き援はんとす。而して行長は海上より之に會す。

三年正月、秀秋等、彦陽に至り、擊ちて高策を破る。昌原の軍と、皆蔚山に赴く。行長、益窄艦を裝ひ海を蔽ひて至る。楊鎬、我が軍の三面より至るを聞き、身を挺でゝ先遁る。麻貴、解生等も、夜に乘じて圍を解く。長政、後藤基次をして晨に出でゝ軍を候はしむ。一の馬鞍を水涯に得て、返り報じて曰く「是れ日本制なり。我が兵已に騎渡せし者あらむ。後る可らず」と。長政、卽馳せて明軍を蹂躙す。藤堂高良等、槍を揮ひて之に繼ぐ。清正、大夫と乃ち門を開きて合擊す。敵衆、崩れ駭く。獨、其將吳惟忠、茅國器、殿して回り戰ふ。吉川廣家、奮擊して、之を走らす。明軍大に走り、糧仗を遺弃して野を蔽ふ。諸將の蔚山を救ふや、明、我が空虛を候ひ、一軍は梁山を襲ふ。浮田秀家、立花宗茂をして般丹に邀へしめ、燒きて之を走らす。

明主、蔚山の敗聞を得て、其下と議して曰く、「是の役や、之を謀ること年を經て海內の力を傾け、加ふるに朝鮮の兵を以てして、必ず克を期せり。今、乃、此の如し。罪當に

秀吉醍醐に遊ぶ

征韓兵を召還す

秀吉病む

秀吉遺言

大老

經理に歸すべし」と。乃ち楊鎬を罷め、萬世德を以て之に代へ、鄧子龍、張芳監、藍芳威等と、楚兵を率ゐ、住きて邢玠を助けしむ。秀吉、蔚山の持三月、秀吉、秀頼及び夫人以下を携へて醍醐に遊ぶ。前田玄以に命じて、供帳を掌り、務めて豐盛ならしめて、遺憾ある勿らしむ。

四月、使を遣し、諸將に諭して、秀秋、行長、清正、及び島津義弘、黒田長政、左京大夫等十餘將を留め、其餘は盡く罷して歸らしむ。其留まる者は分ちて四屯と爲し、秀秋は釜山を守る。而して蔚山は其右に在り。行長、之を守る。泗川は其前に在り。義弘、之を守る。四城の兵凡十萬、明兵も亦十萬可りにして清正に當て、陳璘をして水軍を以て相持して未だ戰はず。

是の月、秀頼、從二位に進み。權中納言と爲る。五月、秀吉疾あり。六月、外師罷むる者至る。乃ち召見して慰勞し、其賞罰を論ず。七月、秀吉、疾篤し。德川公を召し、之に諭して曰く「外國未だ服せず。而して吾れ此疾に罹る。吾れ死なば、則ち難作らん。卿に非ずば、以て之を定むる莫し。吾れ今日天下を以て卿に託す。卽ち我が爲に努力せよ。秀頼、幼弱、亦卿が保護を煩はす。其成長に至り、當に立つべきと立つべからざるとは、一に卿の心に在り」と。德川公、歔欷して曰く「殿下、百歲の後、孰か嗣君を奉ぜざる者ぞ。然りと雖、人心測られず。殿下宜しく其神算を運らし、以て萬世の安きを建つべし。家康、不才、敢て重任に當らず」と。曰く「吾れ之を熟思するに、卿に若く者なし。卿、避くる勿れ」と。德川公、固く辭して退く。秀吉、遂に石田三成、增田長盛を召して之を告ぐ。二人諫めて曰く「殿下、百戰して天下を取る。而して一日之を他人に予ふ。是れ胡爲るものぞ。今や天下の猛將、謀臣、殿下の恩を被らざる者なし。其嗣君を輔くるに於て何か有らん」と。是に於て、大老、奉行を定む。奉行五人、故置く所の如し。德川公、及び前田

奉行中老

秀頼の傅

親兵

在韓の兵を召還す

秀吉薨ず

利家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝を五大老と爲す。中村一氏、生駒親正、堀尾吉晴を以て、三中老と爲す。小事は奉行に決し、大事は大老に決す。大老、奉行、或は協はざること有らば、則中老間に居て、之を和解す。片桐且元、小出秀正をして、秀頼に傅たらしめ、密に二人に囑して曰く「吾れ人奴より起り、關白と爲るに至る。孰か國恩に非ざらんや。吾れ明と兵を構へ、禍結びて解けず。吾れ深く之を悔ゆ。彼れ吾が死を聞かば、或は大擧して來り報ぜん。國朝、古より未だ曾て外國の侵辱を受けず。我が時に及びてこれを受く。吾れ深く之を恥づ。是れ吾國を家康に託する所以、我が家の存亡に至りては未だ恤ふるに暇あらざるなり。然りと雖、家康、必しも我に負かざらんや。汝が輩、謹みて秀頼を保護し、これと釁隙を生ぜしむる莫れ」と。又木村重成、薄田兼相、渡部尙をして、二人に副たらしむ。親兵を分ちて七隊と爲し、速水守久、伊東長次、青木一重、眞野宗信、中島氏種、野野村吉安、堀田正高を以て隊長と爲し、馬標旌旗は盡く之を秀頼に傳へ、母衣騎郡良列、卒將津川左近をして、之を掌らしむ。

八月、盡く大老、奉行以下を會して誓を爲さしむ。誓に曰く「心を虛にし謀を協へ、務めて嗣子を輔け、私貸を樹つる勿れ。公義を忘る、勿れ。變更する勿れ。漏泄する勿れ。告げずして婚を結ぶ勿れ。告げずして質を交ふる勿れ。嗣子六歲未だ政を親する能はず。前田は之を大阪に保し、而して德川は事を伏見に視、邑を封じ罰を行ふこと、皆嗣子の長を俟て」と。淺野彈正、石田三成に命じて曰く「汝、朝鮮に赴き我が兵を收めよ。收むる能はずば、則ち家康を遣れ。家康、往く可からざること有らば、則、利家を遣れ。二人のうち一を遣らば、百萬の敵ありと雖、尾すること能はざるなり」と。十三日、疾大に篤し。將に瞑せんとす。已にして目を張りて曰く「我が十萬の兵をして海外の鬼と爲らしむる勿れ」と。言畢りて薨ず。年六十三。群臣喪を秘し、前田玄以をして、密に之を阿彌陀峰に葬らしむ。

九月三日、德川公、諸侯と嗣君に貳無きを盟ひ、遂に淺野、石田をして、遺命を以て肥前に赴き、密に在韓の諸將を召さしむ。

（豊臣秀吉肖像）

（豊臣秀吉筆蹟）

諸將の明軍と相持するや、明兵を促して進み攻む。劉綎、順天の山海を帶びて、近づく可からざるを患へ、則、沈惟敬が爲す所を思ひて、誘ひて之を取らんと欲し、間使を遣し、來りて行長に告げしめて曰く、「先鋒、嚮に我が國と盟ふ。清正、關白を註惑するに因りて、復今日あるを致す。今兩國兵老す。吾れ親ら之を信じ、將に出でゝ會に赴んとす。而して我が兵の降りて綎の部に在る者、爲に其謀を泄らす。行長、驚き還る。綎、恚りて來り攻む。行長、擊ち人一戰を思ふ。

九月、麻貴、溫井に至り、前敗に懲りて壁を堅くし、敢て出でず。清正、屢々出で戰ひ、擊ちて貴が兵を走らす。立花宗茂、釜山に在り。自請ひ五百人を以て、往きて清正を救ふ。明の五千人に元濆に値ふ。曉霧に乘じ、薄り擊ちて之に克ち、遂に北ぐるを追ふ。或人、衆寡敵せざるを以て之を止む。宗茂曰く、「敵の馬足

明軍を破る

島津氏の軍

新築の戰

明軍大敗

亂る。追ふ可し。追はざれば、我が寡を視すなり」と。追擊して復之に克ち、既に舍す。明の囚を逸し、五伏を設けて待つ。曰く、「吾れ、乃、寡を視して之を誘ふなり」と。夜半、明の兵來り襲ふ。伏起りて復之に克つ。明日、未だ蔚山に至らざること數十里にして、清正と夾みて、麻貴を擊ち、大に之に克つ。是の時、義弘及び子忠恒、新寨に在り。萱一元と、晉江を夾みて軍す。茅國器、島津氏の豐臣氏と宿仇たるを聞き、以て間す可しと爲し、乃、檄を作り、秀吉の罪を數む。辯士を遣し、以て義弘を搖す。義弘、叱し て乘じ、薄り擊ちて之に克ち、遂に北ぐるを追ふ。國器、又一元に說きて曰く、「義弘、望津、東陽、泗川、永春、昆陽、金海、固城、新寨の八壘を棄き、勢、長蛇の如し。望津は其首を擊たば、餘は制し易きのみ」と。一元、之を然りとす。會明の捕虜郭國安、望津に在り、款を一元に送り、約して內應を爲し、火を擧ぐるを信と爲す。期に至り て國器、兵を引きて江に臨む。我が兵亦、寨を出でゝ江に臨む。已にして寨中、火起る。吾が兵、顧て之を救ふ。明兵、乃、渡りて望津を陷る。忠恒、新寨に在り、赴き援はんと欲す。義弘曰く「未だ可ならず」と。望津の兵、退きて泗川を守る。而して一元、已に兵を分ちて、永春、昆陽を襲ふ。其積聚を燒き、軍を悉して新寨に走る。忠恒、後赴き援はんと請ふ。義弘曰く「未だ可ならず」と。一元、已に數城を取る。而る に島津氏出でず。意甚之を輕じ、進みて東陽の倉を燒く。火、晝夜、滅せず、遂に新寨に向ふ。國器、之を止む。先金海、固城を攻めて其羽翼を奪はんと勸む。聽かず。

十月朔、一元、兵を合せて、國器及び葉邦榮、彭信古を以て先鋒と爲し、藍芳威を以て後軍と爲して、新寨を攻め、卯より巳に至る。木砲を以て大門及び城墻を摧き、壑に薄り柵を拔く。城兵、殊死して戰ふ。會砲炸の烟焰四に迸しる。明の陣亂る。義弘、忠恒に目して曰く、「以て出づ可し」と。忠恒、唯して起ち、數千騎と門を闢きて、直に明の陣を衝く。明の陣皆披靡す。而れども國器、邦榮、萬人を以て、橫さまに城に入る。義弘、豫五千人を勸し、迎へ擊ちて之を走らす。芳威、望み見て、先走る。明軍、遂に大に潰ゆ。

義弘、忠恒、奔るを追ひ、北ぐるを逐ひ、首を斬ること三萬餘級なり。明兵、爭ひて走りて相擠す。伏尸二百餘里。我か軍、糧を亡ふを以て復窮追せず。追ひて望津に至り、乃、還る。

清正義弘還る

而して秀吉の訃、適至る。諸將潛に相告げ言ひて、稍歸裝を治む。而して明の都御史の吳に在る者、諜して秀吉の歿したるを知り、明主に報告す。明主、大に喜び、擧朝相賀す。是に於て、邢玠等を趣し、我が軍ゝ躡す。郭國安も亦走りて、之を明の群帥に告ぐ。群帥、新寨の敗に創りて敢て進まず。

加德島の戰

是の時に當りて、我が邦訛言あり、「明、大擧して我が兵の歸路を扼す」と。德川、前田の二老、皆親往かんと欲す。衆議して之を止め、藤堂高虎をして之に代らしむ。來きて行臺に至る。新寨の捷書を得て、乃止む。而して釜山の軍、已に秀秋に從ひ、對馬に還る。清正、義弘、次ぎて兵を收めて還る。行長も亦還らんと欲す。而るに劉綎、復來りて之を圍む。清正、義弘と返り擊ちて、行長を拔き、皆舟に上る。陳璘、鄧子龍、李舜臣、陳蠻、馬文煥、陶明宰等、兵艦數千艘を以て之を海中に要す。清正、已に去る。義弘、鬪ひ且卻け、加德島に至る。明兵、行長に四集す。行長、士卒を屬して止り戰ふ。會明人、火器を失し、其船に反中す。我か兵因りて奮擊して、其兵を鏖にし、子龍を斬る。舜臣來り救ふ。亦之を射殺し、進みて璘を圍み、幾之を獲んとす。而して蠻、文煥、繼ぎ至り、銃炮交發し、盡く我か船を焚く。行長、一島に上り、敵寨を奪ひて之に據る。明の兵艦これを環守す。行長、夜に乘じて獨遁れ、義弘に歸す。義弘、返りて、其餘衆を載せ、蠻、明宰と戰ひ、明宰を擒にして還り、皆加德に至る。劉綎、生兵を以て來り攻む。義弘、行長、擊ちてこれを卻く。明軍、敢て復追蹤せず。我が軍、盡く對馬に達す。

十一月、諸將、軍を整へて那古耶に至る。兩奉行之を迎へて秀吉の遺命を宣ぶ。諸將、皆泣く。三成曰く、「公等、伏見に詣り、當に各國に之くべし。水みて茗讌を爲せ。我れ孤城を守ること七年、勞悴して纔に存す。茗毋く酒毋し。當に稗粥を炊きて之に答ふべきのみ」と。三成、これを噉む。

諸軍還る

清正、三成と相釁す

是より先、行長、清正が順天を救ふを德とするや、これと憾を釋かんと欲す。清正曰く、「吾も亦これを欲すと雖も、子が治部と善きを如何せん」と。是より相釁ること益深し。是に於て、諸將、相率ゐて伏見に詣り、秀賴に謁す。諸老之を慰勞し、罷めて國に之かしむ。明年大老、奉行、征韓の功を論じ、義弘に賜ふに公田の薩摩に在る者四萬石を以てす。清正、行長以下賞を得ること差あり。

征韓諸將伏見に詣る

征韓軍の行賞

裂封冊

賴山陽

史官讀到日本王。
欲王則王吾自了。
吾國有王誰覬覦。
鴨綠之流鞭可絕。
地下空唾恭獻面。

相公怒裂冊書。
朱家小兒敢爵余。
叱咤再蹀八道血。
地上阿鈞不相見。

重謁ニ加藤肥州廟ニ引

腥風吹裂蜻蜓ノ羽。誰能五指爲綴補。
金烏跳入老婆ノ腹。
聯翩雄傑皆肺腑。中有ニ阿虎一猛レ於レ虎。
食レ牛氣呑萬貔貅一。
軍中喧傳鐵槍ノ名。何知將材任ニ旗鼓一。
雞林軍鋒如ニ風雨一。
可レ恨同レ事是賈豎。段凝結レ黨排ニ彥章一。
畫レ地自訴ニ幸霽レ怒。
後來蔚山更勤苦。城壘未レ成敵蟻聚。
捍禦幾旬軍無レ糧。
食レ馬盡乃嚙レ土。大雪壓レ城城欲レ俯。
凍鎧黏レ膚煇且剖。
將軍一呼勞ニ諸軍一。士如レ挾レ纊起張レ弩。
蘇武歸レ國哭ニ孝武一。
六尺ノ遺孤誰相輔。唯覩白鬚存頰頤一。
誰知赤心滿ニ腹肚一。
猶幸泉路見ニ舊主一。不レ論ニ堂構愧乃父一。
猛似ニ夜叉一怖ニ兒童一。
慈如ニ菩薩一感ニ俘虜一。祠廟翼翼倚ニ郊塢一。
吾曾兩度拜ニ廊廡一。
祠樹鞠處見ニ熊城一。想見君親督ニ百堵一。

改版 邦文日本外史 卷之十七

德川氏前記 下

豐臣氏下

慶長四年

大老奉行連署して家康を詰る

三家を詰る

慶長四年正月十日、前田利家、秀頼を奉じて大阪に徙り、抱きて正廳に坐す。德川公以下の牧伯將吏、來りて之に謁す。德川公、還りて伏見の第に居りて、事を視る。五奉行更兵を遣して、城を守る。皆秀吉の遺命の如くす。然れども德川氏の威權、獨、熾なり。利家、其已を侮るを謂ひ、乃忿恚して、罷めて國に就かんと欲す。細川忠興は、利家の戚屬たり。遺命を引き、諫めて之を止む。是の月、二十一日、大老、奉行、連署して、德川公を詰めて曰く、「足下の行事、疑ふ可き者多し。太閤の遺命に背き、伊達・福島、蜂須賀の三家と、私に婚姻を結ぶ。是れ何を爲さんと欲するか。宜しく政を解き、國に就くべし」と。又三家を詰る。三家服せず。三家、黒田、淺野、池田、藤堂、細川、京極、有馬、金森、山岡の諸將と、皆石田三成を嫉み、爭ひて德川氏に附きて、他の侯伯を仇視す。三中老、議して曰く「遺命に所謂間に居りて和解する者は此に在り」と。

二月、乃、大老、奉行に請ひ、盟を伏見に尋ぬ。利家、疾あり。加藤清正、細川忠興、淺野左京大夫、利家に勸め、疾を輿して、伏見に赴かしむ。

三月、德川公も亦、大阪に往く。利家、病甚し。扶けられて起き、泣きて之に囑して曰く、「吾れ將に旦夕

利政

前田玄以

細川忠興

大谷吉隆

增田長盛

（前田利家肖像）

文祿の役

加藤清正等三成を誅せんとす

利家卒す

三成澤山に歸る

豐國明神

西城

五年

家康東下す

地に入らんとす。願くは公、心を盡して以て嗣君を輔けよ」と。德川公曰く、「諾」と。利家の次子利政、德川公を刺さんと欲して、其兄の利長に止められる。三成等、小西行長の宅に會議して曰く、「內府、專橫にして嗣君を蔑視す。諸老の共に憤る所なり。速に之を除かずばあるべからず」と。行長、因りて襲擊の策を建つ。前田玄以、素より款を德川氏に通ず。故に異議を發して之を沮む。三成、又火器を以て之を伏見の第に襲はんと欲し、細川忠興を延きて謀を告ぐ。忠興、復之を沮止し、走りて德川氏に告ぐ。之に教へて徙りて向島に居らしむ。行長曰く、「諸公、文墨に明にして兵機に瞽し。乃、豎子に誑さる」と。大谷吉隆、謀泰行の謀を聞き、益田長盛に謂て曰く、「吾れ諸公の爲す所を視るに嗣君に利することを務めずして、專內府を害せんとす。內府、苟も嗣君に貳あらば、宜しく其罪を著るを俟ちて之を討つべし。天下誰か此を弃てゝ彼に歸する者あらんや。今我より釁を開かば、彼れ則、辭あらん。是れ獨、自、禍せずして、乃、嗣君に禍するなり」と。長盛、以て三成に告ぐ。三成、肯ぜず。文祿の役に三成、長盛、吉隆、朝鮮に在り。淺野、黑田の來るを聞きて、就きて軍事を議す。兩人、方に碁を圍み、三成等を顧ず。三成等、怒りて出づ。兩人、局を收め、侍者に問ひて曰く、「三奉行、何ぞ來らざる」と。侍者、故を告ぐ。乃、人をして呼びて之を返さしむ。三成等、肯ぜず。惡言して走り、終に兩人を秀吉に惡せり。兩人の子深く之を銜む。是に於て、加藤清正、加藤嘉明、福島正則、池田輝政、細川忠興と、連署して、三成を罪狀し、之を誅せんと請ふ。德川公許さず。乃大阪に如き、利家に請ふ。利家、疾篤し。三成、方に之を視る。七將、達するを得ず。乃、各自兵を治めて、之を擊殺せんと欲して、未だ發せず。閏月三日、利家、疾革る。奮ひ呼びて曰く、「天下恟々たり。吾れ嗣君の成立を目ずして死す。死すとも瞑せず」と。遂に卒す。衆、其長子利長を推して、之に代らしむ。四大老の下に列す。之を要擊せんと欲す。或人走りて三成に告ぐ。毛利、浮田、島津、佐竹の五家、皆三成に善し。佐竹義宣、伏見より馳せ至り、前田氏を弔す。因りて三成を浮田氏に見て曰く「寧ろ自內府に歸せよ」と。携へて德川公に詣る。德川公、之を納る。七將之を聞きて憤惋し、追ひて伏見に至る。或人德川公に說く、「三成を除く勿れ」と。德川公、大に悟り、遂に七將に諭して兵を弭めしむ。七將、已むことを得ずして、之を聽く。又三成に諭して、政權を解き、封、澤山に就かしむ。七將之を要擊せんと欲す。德川氏の兵の護送するを見て、乃、止む。上杉景勝、三成と謀を通じ、明歲を俟ちて東西より兵を擧げ、以て德川氏を討たんと約す。

四月、太閤の廟成る、詔して、號を豐國明神と賜ふ。

秀賴、大阪に徙りてより、伏見に城主なし。五月、黑田長政、堀尾吉晴等、德川公に請ひて城に入り、太閤の故事の如くせしむ。六月、毛利、浮田、上杉、佐竹の三家も、亦國に之く。德川氏、久しく秀賴に覲せざるを以下外征の諸將、皆謁して歸る。七月、前田、上杉、佐竹の三家てす。八月、乃往き、遂に留りて西城に居る。西城は時に秀賴の嫡母淺野氏の居る所たり。是に於て、淺野氏、京師に遜る。流言あり、「淺野彈正、大野治長を下野に、勝久を常陸に放ち、彈正を武藏の府中に竄き、令を下して北前田氏を伐つ。細川忠興、爲に之を謝す。德川氏、前田利長の母を徵して質と爲し、十一月、之を江戶に徙す。增田長盛、長束正家、之を爭ひて曰く、「遺令に告げずして質に交ふる勿れと。是の歲、德川公、細川忠興、堀尾吉晴に、各五萬石を加封す。

五年春、德川公、上杉景勝に西上を戒む。答へて曰く、「我れ太閤の遺旨を受け、東陲を鎭守す。何ぞ內府の令を受けん」と。乃其盟に背ける十罪を數ふ。德川公、大に怒り、東して上杉氏を伐たんと議す。夏、其義女を以て、黑田長政に妻し、兵を伏見に留め、而して自諸軍を將ゐて東下す。三成、兵を起して其後に乘ぜんと欲す。大谷吉隆、其邑敦賀より師に會するに會ふ。三成、人をして之を要せしめ、告ぐるに其謀を